

**IBM Business Process Manager**  
バージョン7 リリース5

**IBM Business Process  
Manager Standard**  
インストール・ガイド

**IBM**



---

## PDF ブックおよびインフォメーション・センター

PDF ブックは、印刷およびオフラインでの参照用に提供されています。最新情報は、オンラインのインフォメーション・センターを参照してください。

セットとして、PDF ブックには、インフォメーション・センターと同一の内容が含まれます。PDF ブック内のリンクの中には、インフォメーション・センターで使用するよう調整されていて、正常に機能しないものがあります。

PDF 資料は、バージョン 7.0 またはバージョン 7.5 など、インフォメーション・センターのメジャー・リリースの後の四半期以内にご利用いただけます。

PDF 資料の更新頻度は、インフォメーション・センターより低いですが、Redbooks® よりも頻繁に更新されます。通常、PDF ブックはブックに十分な変更が累積されたときに更新されます。



# 目次

PDF ブックおよびインフォメーション・センター . . . . .	iii
<b>第 1 章 ロードマップ: IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 . . . . .</b>	<b>1</b>
<b>第 2 章 インストール・タイプおよびプロファイル . . . . .</b>	<b>11</b>
<b>第 3 章 データベースとインストールおよび構成のシナリオ . . . . .</b>	<b>13</b>
<b>第 4 章 ソフトウェアのインストールおよび構成の準備 . . . . .</b>	<b>15</b>
<b>第 5 章 IBM Business Process Manager の計画 . . . . .</b>	<b>17</b>
要件の評価 . . . . .	17
プロセスおよび Process Application に関する考慮事項 . . . . .	17
リソースに関する考慮事項 . . . . .	18
開発およびデプロイメントのバージョン・レベル . . . . .	19
プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項 . . . . .	20
必要なセキュリティ許可の準備 . . . . .	25
製品およびプロファイルのインストール・ディレクトリー . . . . .	26
スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択 . . . . .	29
インストール・タイプおよびプロファイル . . . . .	32
Network Deployment 環境の計画 . . . . .	34
概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン . . . . .	35
ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー . . . . .	40
単一クラスター・トポロジー・パターン . . . . .	40
リモート・メッセージング・トポロジー・パターン . . . . .	42
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン . . . . .	44
リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン . . . . .	47
カスタマイズされたトポロジー . . . . .	49
トポロジーを選択するための考慮事項 . . . . .	50
トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー . . . . .	52
標準化された Network Deployment 環境とカスタマイズされた Network Deployment 環境のどちらを作成するか判断 . . . . .	55

IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー . . . . .	56
データベース構成の計画 . . . . .	57
データベースと IBM Business Process Manager トポロジー . . . . .	57
データベース・タイム・ゾーンおよび文字セットに関する考慮事項 . . . . .	58
共通データベースを構成する方法とタイミングの選択 . . . . .	59
サポートされているデータベース・タイプ . . . . .	59
データベース命名の制約事項 . . . . .	62
IBM Business Process Manager のデータ・ソース . . . . .	63
JDBC ドライバーおよびロケーション . . . . .	64
必須のデータベース管理者タスクの識別 . . . . .	65
非管理ユーザーの考慮事項 . . . . .	66
データベース特権 . . . . .	66
ユーザー ID またはスキーマ名特権 . . . . .	73
コンポーネントに固有のデータベース構成の計画 . . . . .	77
テーブルおよびスキーマの作成 . . . . .	80
共通データベース構成の計画 . . . . .	80
Common Event Infrastructure データベース構成の計画 . . . . .	86
メッセージング・エンジン・データベース構成の計画 . . . . .	86
WebSphere Enterprise Service Bus のロガー・メディエーション・データベース表を構成する計画 . . . . .	89
エラー防止およびリカバリーの計画 . . . . .	92
エラー防止とリカバリーの概要 . . . . .	92
エラー防止の計画 . . . . .	93
アプリケーション設計の一部としてのエラー防止 . . . . .	93
接続グループ . . . . .	93
例外および障害に対するアプリケーション設計上の考慮事項 . . . . .	95

<b>第 6 章 IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 . . . . .</b>	<b>99</b>
ソフトウェアのインストールおよび構成の準備 . . . . .	99
製品インストール用のオペレーティング・システムの準備 . . . . .	100
AIX システムのインストール準備 . . . . .	101
Linux システムのインストール準備 . . . . .	102
Solaris システムのインストール準備 . . . . .	105
Windows システムのインストール準備 . . . . .	106
データベースとインストールおよび構成のシナリオ . . . . .	107
IBM Business Process Manager Standard のインストール . . . . .	108

IBM Business Process Manager Standardのインストール . . . . .	108	Network Deployment プロファイルの作成 . . . . .	183
ロードマップ: IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 . . . . .	108	プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 . . . . .	183
標準インストール: IBM Business Process Manager Standard . . . . .	118	プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成 . . . . .	194
標準インストール時の既存データベースの構成 . . . . .	122	プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 . . . . .	202
カスタム・インストール: 標準 . . . . .	125	プロファイル管理ツールを使用した Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成 . . . . .	211
IBM Business Process Manager Standard のサイレント・インストール . . . . .	129	manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの削除 . . . . .	220
コマンド行を使用した IBM Business Process Manager Standard のサイレント・インストール . . . . .	129	manageprofiles および wsadmin を使用した環境の構成 . . . . .	220
応答ファイルを使用した IBM Business Process Manager Standard のサイレント・インストール . . . . .	133	manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの作成 . . . . .	220
構成のアップグレード . . . . .	135	カスタム・インストール後の manageprofiles を使用したスタンドアロン・プロファイルの作成 . . . . .	225
IBM Business Process Manager Standard の構成 . . . . .	137	カスタム・インストールの後の manageprofiles を使用したデプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成 . . . . .	386
configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成 . . . . .	137	<b>manageprofiles</b> の例 . . . . .	538
configureNode コマンドを使用したデプロイメント環境の作成 . . . . .	137	プロファイルの拡張 . . . . .	554
configureNode コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張 . . . . .	140	プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張 . . . . .	554
<b>configureNode</b> の例 . . . . .	141	manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの拡張 . . . . .	592
例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PC, DB2 . . . . .	141	プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド . . . . .	598
例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PC, Oracle . . . . .	142	データベースの構成 . . . . .	604
例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PC, SQL Server . . . . .	144	提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成 . . . . .	604
例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard, PS, DB2 . . . . .	145	手動でのデータベースの作成 . . . . .	605
例: デプロイメント・マネージャーおよび 3 つのノードをホストする複数のマシン: Advanced, PS, DB2 . . . . .	147	Process Center または Process Server のデータベース表の作成 . . . . .	607
プロファイルの作成および拡張 . . . . .	149	Performance Data Warehouse データベース表の作成 . . . . .	608
プロファイルに関する前提条件および考慮事項 . . . . .	150	Microsoft SQL Server データベースの構成 . . . . .	609
プロファイルの作成または拡張に関する前提条件 . . . . .	150	XA トランザクションの構成 . . . . .	610
プロファイルの作成または拡張に関するデータベースの前提条件 . . . . .	154	Microsoft SQL Server で使用するスタンドアロン・プロファイルの作成 . . . . .	611
プロファイル管理ツールの開始 . . . . .	156	Microsoft SQL Server と共に使用する Network Deployment 環境の作成 . . . . .	619
カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成 . . . . .	157	データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成 . . . . .	621
プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成 . . . . .	157	データベース設計ツールを使用したスタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成 . . . . .	621
プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成 . . . . .	169		

データベース設計ツールを使用した特定の コンポーネントのためのデータベース設計 ファイルの作成 . . . . .	629	サーバー上またはクラスター上の Business Performance Data Warehouse コンポーネント の構成 . . . . .	684
データベース設計ツールの例 . . . . .	633	Common Event Infrastructure の構成 . . . . .	685
データベース設計ツールのトラブルシュー ティング . . . . .	636	Common Event Infrastructure コンポーネン ト . . . . .	685
データベースへのシステム情報のロード . . . . .	636	Common Event Infrastructure サーバーの構 成 . . . . .	687
DB2 for z/OS データベースの作成および構成	639	イベント・メッセージングの構成 . . . . .	688
SPUFI、DSNTEP2、または DBUtility.sh を 使用した DB2 for z/OS データベースおよ びストレージ・グループの作成 . . . . .	639	イベント・データベースの構成 . . . . .	690
JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の 付与 . . . . .	642	SMTP サーバーの構成 . . . . .	705
SIB の正しいスキーマ名の設定 . . . . .	642	拡張構成: 環境のカスタマイズ . . . . .	706
DB2 for z/OS を使用したインストールの 検査 . . . . .	643	Process Center への接続で Process Server が 使用する設定のカスタマイズ . . . . .	706
Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パ スワードとユーザー ID の変更 . . . . .	643	Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイ ズ . . . . .	709
データ・ソース認証別名の更新 . . . . .	644	IBM Business Process Manager 用の Oracle Real Application Cluster (RAC) の構成 . . . . .	713
メッセージ・エンジンのデータ・ストア認 証別名の更新 . . . . .	644	LDAP セキュリティー・プロバイダーの構成	714
構成ファイル内のパスワードおよびユーザ ー名の更新 . . . . .	645	スタンドアロン構成用のユーザー・アカウン トのセットアップ . . . . .	715
DB2 データベースのトランザクション・ロ グ・オプションの変更 . . . . .	648	インストール後のパスワード変更 . . . . .	716
Network Deployment 環境の構成 . . . . .	649	スタンドアロン環境での <b>tw_admin</b> パスワ ードの変更 . . . . .	717
Network Deployment 環境の作成 . . . . .	649	スタンドアロン環境での <b>tw_user</b> パスワ ードの変更 . . . . .	718
デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成 . . . . .	649	ND クラスター環境での <b>tw_admin</b> パスワ ードの変更 . . . . .	719
管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成 . . . . .	666	ND クラスター環境での <b>tw_user</b> パスワー ードの変更 . . . . .	720
コマンド行を使用したデプロイメント環境 の作成 . . . . .	671	Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パ スワードとユーザー ID の変更 . . . . .	721
データベース構成の完了 . . . . .	677	データ・ソース認証別名の更新 . . . . .	722
Process Center または Process Server のデ ータベース表の作成 . . . . .	677	メッセージ・エンジンのデータ・ストア認 証別名の更新 . . . . .	722
Performance Data Warehouse データベース 表の作成 . . . . .	678	構成ファイル内のパスワードおよびユーザ ー名の更新 . . . . .	723
データベースへのシステム情報のロード . . . . .	679	パスワードの暗号化 . . . . .	726
コンポーネントの構成 . . . . .	681	サンプルの手動インストール . . . . .	727
Process Center の構成 . . . . .	682	ファースト・ステップ・コンソールの開始 . . . . .	728
Process Server の構成 . . . . .	683		



---

## 第 1 章 ロードマップ: IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

IBM® Business Process Manager インストーラーおよび構成プログラムは、さまざまな開発シナリオおよび実動シナリオに対応します。このロードマップでは、スタンドアロン環境または Network Deployment 環境で IBM Business Process Manager Standard をインストールし構成するために最も広く使用されている方法について説明します。

このロードマップでは、一般的なインストールおよび構成の各シナリオをそれぞれ 1 つのセクションで説明しています。各セクションには、実行するアクティビティー、説明へのリンク、および各アクティビティーの完了後の結果についての注を示す表が含まれています。

このロードマップの各セクションでは、以下のシナリオについて説明します。

- 標準インストール。

「標準インストール」オプションでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを構成します。標準インストールでは、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** ユーティリティーを使用してプロファイルを別個に作成する必要はありません。

「標準インストール」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。また、(Express、Standard、または Advanced 構成の) すべての Business Process Manager フィーチャーおよび機能を単一のマシンに取り込むための理想的な方法でもあります。標準インストールは電子インストール・イメージからのみ使用でき、DVD からは使用できません。

『「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール』を参照してください。

- スタンドアロン環境のカスタム・インストール。

「カスタム・インストール」オプションでは、ご使用のシステムにソフトウェアをインストールし、次にプロファイル管理ツールを実行して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。標準インストール・パスでは使用できない構成フィーチャーを必要とするスタンドアロンの Process Center 環境または Process Server 環境を作成する場合は、製品バイナリーをインストールした後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを作成します。

『「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成』を参照してください。

- Network Deployment 環境のカスタム・インストールおよび構成。

このインストールおよび構成のシナリオでは、一般に大規模な実稼働環境に要求されるキャパシティー、スケーラビリティ、および頑強性が提供されます。Network Deployment 構成は、コラボレーションを通じてワークロード・バランシングおよびフェイルオーバーを提供する複数のサーバーから成るグループ (クラスターと呼ばれます) で構成されています。各サーバーは、デプロイメント・マネージャーと呼ばれる単一の管理コンソールを使用して一元管理されます。

カスタム・インストールの後に、いくつかの構成オプションを選択できます。

- 単純な Network Deployment 構成用の **configureNode** コマンド行ユーティリティを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、**configureNode** コマンドを使用して、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成し、パターン・ベースの Network Deployment 構成を作成します。『configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールと Network Deployment 環境の構成』を参照してください。

- プロファイル構成およびデプロイメント環境ウィザードを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、プロファイル構成プログラム (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ) を使用して、1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成します。さらに、デプロイメント環境ウィザードを使用して、パターン・ベースの Network Deployment 構成を作成します。『IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用』を参照してください。

- プロファイル構成および管理コンソールまたは **wsadmin** コマンドを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、プロファイル構成プログラム (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ) を使用して、1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成します。さらに、管理コンソールまたは **wsadmin** コマンドを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 構成を作成します。『IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは **wsadmin** コマンドの使用』を参照してください。

Network Deployment に関する概念情報については、『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』および『デプロイメント環境の計画』を参照してください。

ソフトウェアと一緒にパッケージされ、デプロイメント環境ウィザードによってサポートされるトポロジー・パターンについては、『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』を参照してください。

## 「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール

電子イメージからインストールする場合は、インストールで「標準インストール」オプションを使用して、ソフトウェアのインストールとスタンドアロン・プロファイルの構成を自動的に行うことができます。標準インストールでは、インストール後にプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** を実行する必要はありません。

「標準」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も迅速な方法です。このインストール・オプションでは大半の設定にデフォルトが使用されますが、インストール・パスとデータベース・タイプは指定できます。

標準インストールでは、Process Center と Process Server を別個にインストールします。まず Process Center の標準インストールを最後まで実行してから、Process Server の標準インストールを最後まで実行します。

「標準」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールについては、『標準インストール: IBM Business Process Manager Standard』を参照してください。

## 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルを構成することができます。

表 1. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Standard』を参照してください。	カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center、IBM Process Designer、および Process Server の製品バイナリーをインストールします。  カスタム・インストールでは、インストール中にプロファイルを作成しません。
プロファイル管理ツールの起動	インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。 <b>制約事項:</b> Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで <b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリティーを使用します。	プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。  Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。
1 つ以上の Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成	Process Center スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成</li><li><b>manageprofiles</b> ユーティリティーを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成</li></ul>	Process Center スタンドアロン・プロファイルが作成されます。このプロファイルは、スタンドアロン・サーバー環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。  プロファイル作成プロセスは、(共通およびコンポーネント固有の) データベースを構成し、スタンドアロン・サーバー環境をサポートするために必要なデータベース表を生成します。  これで、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成したり、Process Designer をインストールしたりできるようになります。

表1. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Designer のインストール	ソフトウェアのビジネス・プロセス設計機能の使用を開始する場合は、Process Designer をダウンロードおよびインストールします。『Process Designer のインストール』を参照してください。	Process Designer がインストールされます。 Process Designer の使用方法については、以下のトピックを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Process Designer の雇用サンプル・チュートリアル</li> <li>• Authoring environments</li> <li>• Process Center によるプロセス開発</li> </ul>
1 つ以上の Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成	ランタイム環境も含めてソフトウェアを完全に構成することが目的である場合は、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。Process Server スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロファイル管理ツールを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成</li> <li>• manageprofiles ユーティリティーを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成</li> </ul>	スタンドアロン・サーバー環境が構成され、いつでも使用できます。
プロファイル作成時に「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスをクリアした場合は、データベース・スクリプトを手動で実行し、その後ブートストラップ・ユーティリティーを実行してデータベースにシステム情報をロードする	ブートストラップ・ユーティリティーの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。 <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 5px;"> <div style="background-color: #808080; color: white; padding: 2px 5px; margin-right: 5px;">Windows</div> <div style="margin-right: 10px;">bootstrapProcessServerData.bat</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 5px;"> <div style="background-color: #808080; color: white; padding: 2px 5px; margin-right: 5px;">Linux</div> <div style="background-color: #808080; color: white; padding: 2px 5px; margin-right: 5px;">UNIX</div> <div style="margin-right: 10px;">bootstrapProcessServerData.sh</div> </div> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティーを実行する必要があります。</p>	Process Server/Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

## configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールと Network Deployment 環境の構成

インストーラーの「標準インストール」または「カスタム・インストール」オプションを使用してソフトウェアをインストールし、次に **configureNode** コマンドを使用して 1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを構成し、さらにパターン・ベースの Network Deployment 環境を作成することができます。また、後から **configureNode** を使用して既存の環境にノードを追加することもできます。

**configureNode** コマンドは、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンを使用して単一セル環境を作成します。このトポロジー・パターンには、以下の 3 つのクラスターが含まれます。

- メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
- サポート・インフラストラクチャー・クラスター
- アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター

表 2. *configureNode* コマンドを使用した *IBM Business Process Manager Standard* のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ソフトウェアをインストールする	標準インストール・オプションを使用した <i>IBM Business Process Manager</i> のインストールについては、『標準インストール: <i>IBM Business Process Manager Standard</i> 』を参照してください。  「カスタム・インストール」オプションを使用した <i>IBM Business Process Manager</i> のインストールについては、『カスタム・インストール: <i>IBM Business Process Manager Standard</i> 』を参照してください。	<i>IBM Business Process Manager Standard</i> のインストールでは、ご使用のシステムに <i>Process Center</i> および <i>Process Designer</i> の製品バイナリーをインストールします。  <i>Process Center</i> には <i>Process Server</i> 機能が含まれていますが、 <i>Advanced Process Server</i> 機能は含まれていません。例えば、 <i>Business Process Choreographer</i> 、ビジネス・ルール、および <i>Business Space</i> のコンポーネントは、 <i>IBM Business Process Manager Standard</i> の一部ではありません。
<i>configureNode</i> コマンドを使用したデプロイメント・マネージャー、1 つ以上のカスタム・ノード、およびデプロイメント環境の作成	『 <i>configureNode</i> コマンドを使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。	<i>Process Center</i> または <i>Process Server</i> の <i>Network Deployment</i> 環境が作成されます。

## IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを構成することができます。プロファイル作成後に、デプロイメント環境ウィザードを使用して、パターン・ベースの *Network Deployment* 構成を生成できます。

デプロイメント環境ウィザードからどのパターンを選択するかは、ご使用の環境の計画された使用法 (PoC (概念検証)、テスト、実動) およびご使用のエンタープライズで必要な処理能力 (高可用性やフェイルオーバー処理など) を基準にすることができます。

このインストールおよび構成のシナリオでは、ソフトウェアに含まれるトポロジー・パターンの 1 つによってビジネス・ニーズおよび要件を満たすことができると想定しています。ソフトウェアに含まれるパターンでは対応できない要件がある場合は、管理コンソールを使用して、カスタマイズされた *Network Deployment* 環境を作成することができます。9 ページの『*IBM Business Process Manager Standard* のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは *wsadmin* コマンドの使用』を参照してください。

表 3. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Standard』を参照してください。	<p>カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center、Process Designer、および WebSphere ESB の製品バイナリーをインストールします。Process Center には Process Server 機能が含まれていますが、Advanced Process Server 機能は含まれていません。例えば、Business Process Choreographer、ビジネス・ルール、および Business Space のコンポーネントは、IBM Business Process Manager Standard の一部ではありません。</p> <p>これでプロファイル作成プロセスを開始できます。IBM Business Process Manager Standard のプロファイル管理ツールは、データベース設計文書のインポートをサポートしません。</p>
プロファイル管理ツールの起動	<p>インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。</p> <p><b>制約事項:</b> Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで <b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリティを使用します。</p>	<p>プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。</p> <p>Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。</p>
Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成	<p>プロファイルを作成する方法に応じて、以下のトピックのいずれかを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成</li> <li>manageprofiles を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャー・プロファイルがあること。</p> <p>このプロファイルは、環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。</p> <p>デプロイメント・マネージャーとは、他のサーバーの論理グループ (セル) の操作を管理するサーバーです。デプロイメント・マネージャーは、サーバーおよびクラスターを管理するための中央の場所になっています。</p>
デプロイメント・マネージャーを開始し、開始操作が成功したことを検証します。	デプロイメント・マネージャーの開始方法に関する詳細については、『デプロイメント・マネージャーの開始』を参照してください。	デプロイメント・マネージャー・サーバーが開始します。

表 3. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Center カスタム (管理対象ノード) プロファイル (複数の場合もある) の作成	<p>このタスクでは、プロファイル作成プロセスの一部としてノードを統合しないと想定しています。(カスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成してから) ノードを後で統合するためのパラメーターをプロファイル管理ツールまたは <b>manageprofiles</b> コマンドで設定すると想定しています。</p> <p>プロファイルを作成する方法に応じて、以下のトピックのいずれかを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成</li> <li><b>manageprofiles</b> を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成</li> </ul> <p>管理対象ノードごとにこのタスクを繰り返します。</p>	<p>カスタム (管理対象ノード) プロファイルが作成されます。これらのノードは、デプロイメント・マネージャーによって管理され、運営されます。</p> <p>これで、ノードを Process Center デプロイメント・マネージャー・セルに統合できるようになります。管理対象ノードには、ノード・エージェントが含まれ、さらに管理対象サーバーを含めることができます。管理対象ノードでは、管理対象サーバーを構成して実行できます。</p>
カスタム (管理対象) ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合	<p><b>addNode</b> コマンドを使用して Process Center カスタム・ノードを Process Center デプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法の説明については、『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。</p>	<p>カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。</p>
デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 構成の作成	<p>デプロイメント環境ウィザードの使用方法については、『パターンを使用した Process Center デプロイメント環境の作成』を参照してください。</p>	<p>このタスクの一部として、すべての据え置かれた構成アイテムを処理し、Process Center デプロイメント環境を生成する必要があります。</p> <p>Process Center Network Deployment 環境が作成されます。</p>

表3. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Server のセルの作成	<p>Process Server を実行するには、別個のセルを作成する必要があります。</p> <p>そのためには、同じ一連のステップを実行します。ただし、以下のトピックで説明するように、Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび Process Server カスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成し、次にデプロイメント環境ウィザードを使用して Process Server デプロイメント環境を作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成</li> <li>• プロファイル管理ツールを使用した Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成</li> <li>• manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成 <ul style="list-style-type: none"> <li>- カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合</li> </ul> </li> <li>• パターンを使用した Process Server デプロイメント環境の作成</li> </ul> <p>このタスクの一部として、すべての据え置かれた構成アイテムを処理し、Process Server デプロイメント環境を生成する必要があります。</p>	Process Server Network Deployment 環境が作成されます。
手動によるデータベース構成ステップの実行	構成ステップを据え置いた場合は、デプロイメント環境でクラスターを開始する前に、追加のデータベース構成を実行する必要があります。『Network Deployment 環境のデータベース構成の完了』を参照してください。	これで、Network Deployment 環境に必要な手動のデータベース構成アクティビティは完了です。
データベースへのシステム情報のロード	<p>ブートストラップ・ユーティリティの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。</p> <pre> Windows bootstrapProcessServerData.bat Linux UNIX bootstrapProcessServerData.sh </pre> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティを実行する必要があります。</p>	Process Server / Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

## IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは wsadmin コマンドの使用

ソフトウェアにパッケージされ、デプロイメント環境ウィザードを使用して実装されるトポロジー・パターンは、広範囲にわたるビジネス・プロセス要件に対応できるように設計されています。ただし、これらのトポロジー・パターンでは十分に対応できないシナリオがある場合は、管理コンソールを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成できます。

注: このシナリオは、管理コンソールを使用して製品コンポーネントおよび機能を構成する方法を十分に理解しているユーザーを対象としています。このセクションで説明するインストールおよび構成のシナリオを開始する前に、デプロイメント環境ウィザードを使用して Network Deployment 環境を作成することを検討してください。

管理コンソール・アクションのサブセットで、コマンド・アシスタンスを使用することができます。コマンド・アシスタンスを使用できる場合は、最後に実行したコンソール・アクションに対応する wsadmin スクリプト・コマンドが表示されます。このデータを使用して、特定の管理タスクを自動化する wsadmin スクリプトを作成できます。コマンド・アシスタンスに関する詳細については、『コマンド・アシスタンスを使用した管理コンソールのアクション』を参照してください。

表 4. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ソフトウェアをインストールし、必要なプロファイルを作成します。	5 ページの『IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用』に記載されている、『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 構成の作成』の前のタスクまでを完了します。  デプロイメント環境ウィザードを使用する代わりに、管理コンソールを使用して、カスタマイズされたデプロイメント環境を手動で作成します。	IBM Business Process Manager Standard のカスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center および Process Designer の製品バイナリーをインストールします。 Process Center には Process Server 機能が含まれていますが、Advanced Process Server 機能は含まれていません。例えば、Business Process Choreographer、ビジネス・ルール、および Business Space のコンポーネントは、IBM Business Process Manager Standard の一部ではありません。  デプロイメント・マネージャー・ノードおよびカスタム管理対象ノードが作成され、ノードがデプロイメント・マネージャー・セルに統合されます。  これで、管理コンソールを使用して、Network Deployment 環境を構成するサーバー、サーバー・クラスター、およびコンポーネントを作成できるようになります。
管理コンソールを使用したサーバーおよびクラスターの作成と構成	『管理コンソールを使用したサーバーおよびクラスターの作成と構成』を参照してください。	使用環境のサーバーおよびサーバー・クラスターが作成されました。

表 4. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Server としてのサーバーまたはクラスターの構成	<p>管理コンソールを使用してご使用のサーバーまたはサーバー・クラスターを Process Server として構成するための情報については、『サーバーまたはクラスターの Process Server としての構成』を参照してください。</p> <p>wsadmin を使用して、サーバーまたはクラスターを Process Server として構成することもできます。『configureProcessServer コマンド』を参照してください。</p>	サーバーまたはサーバー・クラスターが Process Server として構成されます。
サーバー上またはクラスター上の Performance Data Warehouse コンポーネントの構成	<p>管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse を構成することに関する情報については、『サーバーまたはクラスター上での Performance Data Warehouse コンポーネントの構成』を参照してください。</p> <p>サーバーまたはクラスター上で wsadmin を使用して Performance Data Warehouse を構成することもできます。『configurePerfDW コマンド』を参照してください。</p>	Process Server 上で Performance Data Warehouse が構成されます。
メッセージング・サービスのセットアップ	管理コンソールを使用してメッセージング・サービスを構成することに関する情報については、『メッセージング・サーバー環境のセットアップ』を参照してください。	メッセージング・サーバー環境がセットアップされます。
JNDILookup Web サービスの構成	管理コンソールを使用して JNDILookup Web サービスを構成することに関する情報については、『JNDILookup Web サービスの構成』を参照してください。	JNDILookup Web サービスが構成されました
データベースへのシステム情報のロード	<p>ブートストラップ・ユーティリティの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p><b>Windows</b>    bootstrapProcessServerData.bat</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p><b>Linux</b>        <b>UNIX</b></p> <p>bootstrapProcessServerData.sh</p> </div> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティを実行する必要があります。</p>	Process Server / Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

## 第 2 章 インストール・タイプおよびプロファイル

実行するインストールのタイプ（「標準的」または「カスタム」）と、そのインストール・タイプに関連付けられたプロファイルを各 IBM BPM 構成 (Express、Standard、および Advanced) に対して作成する方法の間には、一定の関係が存在します。

以下の表は、その関係を示しています。

表 5. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	はい

表 6. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced: Process Server

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	Process Server のみ	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	オプション 単体テスト環境 (UTE) 専用の Process Server プロファイルまたは WebSphere ESB プロファイル (あるいはその両方) を作成できるフィーチャーがあります	はい	いいえ	はい

表7. インストールの一部としてのプロファイル構成: *IBM Business Process Manager Standard*

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

表8. インストールの一部としてのプロファイル構成: *IBM Business Process Manager Express*

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

---

## 第 3 章 データベースとインストールおよび構成のシナリオ

ソフトウェアと連携するようにデータベースを構成する方法は、インストールするソフトウェアおよび達成しようとするシナリオに関連します。

「標準インストール」オプションを使用するインストール・シナリオでは、データベースがローカル側 (IBM Business Process Manager のインストール先と同じシステム上) にあってもリモート側 (別のシステム上) にあっても、データベースを事前に作成しておく必要があります。データベースを事前に作成する必要のないシナリオは、IBM Business Process Manager に組み込まれている DB2 Express データベースをインストールする場合のみです。DB2 Express は、Windows および Linux for Intel の IBM Business Process Manager に組み込まれています。DB2 Express がまだインストールされていない場合は、IBM Business Process Manager インストーラーを実行するとオプションとしてインストールできます。また、このインストーラーによって DB2 Express に共通データベースおよびコンポーネント固有データベースも作成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。

「標準」インストール用の DB2 Express を使用しないシナリオはすべて、既存のデータベースを使用する「標準」インストールと見なされます。つまり、既にインストール済みのデータベースがあり、インストーラーの「既存データベース」パネルを使用して構成プロパティを指定することになります。詳細については、『標準インストール時の既存データベースの構成』を参照してください。このオプションを使用するには、ご使用のデータベースが既に作成されていることを確かめる必要があります。

ユーザーとデータベース管理者は、ソフトウェアをインストールおよび構成する前に、インフォメーション・センター内のデータベースの構成に関する情報を確認する必要があります。



## 第 4 章 ソフトウェアのインストールおよび構成の準備

ソフトウェアのインストールおよび構成を準備する前に、作成するデプロイメント環境の計画を作成します。

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の準備を行う場合は、以下の表に記載された情報を使用してください。

表 9. インストールおよび構成の準備

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ハードウェアおよびソフトウェア要件を確認する	IBM BPM の構成に応じて、以下を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>IBM Business Process Manager Advanced system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Standard system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Express system requirements</li></ul>	ご使用の IBM Business Process Manager インストールをサポートするために必要なシステム要件について理解します。
オペレーティング・システムを準備する	<ul style="list-style-type: none"><li><b>AIX</b> AIX システムのインストール準備</li><li><b>Linux</b> Linux システムのインストール準備</li><li><b>Solaris</b> インストールに向けた Solaris システムの準備</li><li><b>Windows</b> Windows システムのインストール準備</li></ul>	使用する各ワークステーションのオペレーティング・システムが準備されます。

表9. インストールおよび構成の準備 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベース管理システムがインストールされているか確認する	使用するデータベース管理システムのインストールおよび管理の詳細については、データベースの資料を参照してください。	<p>データベース管理システムがインストールされます。</p> <p>IBM Business Process Manager によって DB2 Express データベースが組み込まれます。データベースとして DB2 Express を使用する場合は、インストーラーからデータベース機能として DB2 Express を選択すると、DB2 Express が自動的にインストールおよび構成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。</p> <p><b>注:</b> 既に DB2 の特定のバージョンがインストールされていて DB2 Express をインストールする場合は、DB2 をアンインストールしてから IBM Business Process Manager インストーラーを実行する必要があります。インストーラーから DB2 Express をインストールするように選択した場合に、インストーラーが特定のバージョンの DB2 がインストールされていることを検出すると、警告メッセージが表示され、DB2 Express をインストールすることができなくなります。</p> <p><b>重要:</b> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Linux</span> DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、<b>ipcs -l</b> コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。</p>

---

## 第 5 章 IBM Business Process Manager の計画

実装するシステムがユーザーのニーズを満たすことを確実にするために、該当のソフトウェアをご使用のエンタープライズ情報システムに導入する前に、ご使用の IBM Business Process Manager の計画を立てます。

---

### 要件の評価

再作業および障害を最小限にするために、インストールおよび構成の決定を行う前に、現行の環境の検討に時間をかけてください。現在のビジネス要件と設計、既にインストールされているハードウェアとソフトウェア、および現在の長所と短所を検討してください。また、この計画は、財政投資を最小化するのにも役立つ場合があります。

いくつかの要因がご使用のソフトウェアの要件を決定します。それらの要因は、以下のカテゴリーにまとめることができます。

- 製品のハードウェア要件およびソフトウェア要件、ユーザー自身のシステム・リソースの制約、およびご使用のシステムを管理し維持するためのリソースの可用性
- ランタイム環境にデプロイするアプリケーション、および構成済み環境の所期の使用方法
- 要件を満たすためにインストールする製品および製品のバージョン

これらすべての要因について賢明な選択をするには、以下の概念を理解する必要があります。

- 環境の構成に適用される用語
- インストール、構成、管理、保守を行う製品の管理アーキテクチャー。
- (提供されるパターンを介して) 使用可能な構成オプション、およびパターンが製品の使用目的に対処するかどうかを判別する方法。
- サポート対象の実装メソッド。製品をインストールし環境を構成する各種タスク・フローの理解も含まれる。

このセクションの情報を使用して、現在および将来の要件を評価および分析し、これらの要件に合致する環境を開発します。

**重要:** プラットフォーム固有のディスク・スペース要件、サポート対象のオペレーティング・システム、およびサポート対象のデータベースのバージョンに関する最新情報については、以下のリンクの 1 つをクリックします。オペレーティング・システムを要件に準拠させるためにインストールする必要がある、オペレーティング・システムのフィックスとパッチを検索することもできます。

- IBM Business Process Manager Advanced system requirements
- IBM Business Process Manager Standard system requirements
- IBM Business Process Manager Express system requirements
- IBM Business Process Manager Tooling Requirements

### プロセスおよび Process Application に関する考慮事項

ビジネス・コンポーネントの統合を合理化する計画のベースラインになるのは、現在の要件です。ビジネスの拡大に伴う意思決定に役立つガイドラインを作成するには、ビジネスの将来を視野に入れた構想が必要になります。

製品の製造および出荷、サービスの提供がどのように行われているかを把握する必要があります。IBM Business Process Manager には、実稼働環境とテスト環境の両方の要件に合うように設計されたデプロイメント環境パターンが用意されています。

以下を検討します。

- Process Application が既存のサービスやバックエンド・システムとどう対話するかを検討します。
- 特定のビジネス・ニーズに対処するために、プロセス・アプリケーションでデータをどう処理するか、およびシステム内にデータをどう流すかを検討します。

ソリューションを開発してその環境を構成する際には、複数の検索、セッション、プロセス、およびその他の境界にわたって、データがどのように存続するかを理解する必要があります。

環境にデプロイするプロセス・アプリケーションに関する以下の項目を検討してください。

#### – Process Application の呼び出しパターン

非同期呼び出しがランタイム環境でどのように処理されるか、また、非同期呼び出しを実装するために、基盤となるメッセージ・システムが SCA ランタイム環境でどのように利用されるかを理解する必要があります。

アプリケーションが異なれば要件が異なります。こうした要件の決定要因としては、例えば、エクスポート・タイプ、コンポーネント間の対話、インポート・タイプ、データベースや JMS リソースなどの必要なリソース、ビジネス・イベントの必要性、ビジネス・イベントの伝送機構などがあります。

#### – 実装予定のビジネス・プロセスのタイプ (トランザクション・ビジネス・プロセス、割り込み可能なビジネス・プロセス、割り込み不可能なビジネス・プロセス)

割り込み不可能なビジネス・プロセス、つまり microflow は、1 つのトランザクションで実行されるかトランザクションなしで実行される、実行時間の短いビジネス・プロセスです。割り込み不可能なビジネス・プロセスは、パフォーマンスのオーバーヘッドがほとんどなく、高速です。このプロセス内のすべてのアクティビティが単一スレッド内で処理されます。

割り込み可能なビジネス・プロセス、つまり macroflow は、一連のアクティビティが含まれている、実行時間の長いビジネス・プロセスです。このプロセス内のアクティビティは、それぞれ固有のトランザクションで実行されます。割り込み可能なビジネス・プロセスには、人の介入またはリモート・システムの呼び出し、あるいはその両方が必要なアクティビティを組み込むことができます。非同期アクティビティは完了するために数分、数時間、あるいは数日の時間がかかる可能性があるため、それらのアクティビティを組み込むビジネス・プロセスは割り込み可能にする必要があります。

## リソースに関する考慮事項

資産を明確化し、既に使用可能なソフトウェアおよびハードウェアのリソースを最大限に利用するとともに、十分な情報に基づいて実装の決定を下します。現在のエンタープライズ情報システムを評価し、ビジネス上のニーズを満たすためにハードウェアまたはソフトウェアを追加する必要があるかを判別します。

次の要因を検討します。

- 現在のハードウェアおよびソフトウェアをよく理解します。以下のようにして使用可能な資産のリストを準備します。
- 使用する物理コンピューター・システムの数と判別し、各物理ハードウェアを項目別に分けます。以下の情報を記録します。

- 実装済みメモリーの量
- 実装済みマイクロプロセッサの数およびタイプ
- 外部メディア
- 特定の装置がアップグレード可能かどうか
- すべてのサーバーが、製品とデータベースのどちらに関与するかを問わず、同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用し、同じ時刻に設定されているようにします。
- 現在インストールされているソフトウェアおよびデータベース・アプリケーションを列挙します。以下の情報を記録します。
  - 機能
  - 企業内での使用範囲
  - セキュリティー要件
- 現在の IT 要員のリストを作成します。ご使用のデータベースを管理するのに必要な専門的知識と共に、IBM Business Process Manager をインストールし維持するために必要な専門的知識を備えているかどうか判断します。適切なユーザーが、すべての製品およびファイルを正しくインストールする権限のあるユーザー ID を持っていることを確認します。

## 開発およびデプロイメントのバージョン・レベル

ご使用の環境に必要な IBM Business Process Manager のバージョン・レベルの決定は、アプリケーションの開発で使用されたバージョン・レベルに依存します。一般に、前のバージョンの IBM Business Process Manager にデプロイされたアプリケーションは、次に入手可能なバージョンの IBM Business Process Manager 上でも実行できます。

次の表は、IBM Integration Designer V7.5.1 (以前の WebSphere® Integration Developer) および IBM Process Designer V7.5.1 を含む IBM Business Process Manager V7.5.1 と、それ以前のリリースとの互換性を説明しています。

タスク	サポートされているか
WebSphere Integration Developer バージョン 6.1.0、6.1.2、6.2.0、または 7.0.0 または IBM Integration Designer 7.5 から IBM Business Process Manager V7.5.1 へのデプロイメント。	はい。 <b>重要:</b> WebSphere Adapters V6.1.0、V6.1.2、および V6.2.0 の場合は、「 <i>Mandatory adapter fix for running 6.1 and 6.2 Adapters on WPS v7.0</i> 」というタイトルの暫定修正をインストールする必要があります。WebSphere Adapter をバージョン 7.0 レベルにアップデートせず、アプリケーションを WebSphere Adapter バージョン 6.1.0、V6.1.2、または V6.2.0 で使用し続ける計画の場合は、この暫定修正をソース環境に適用する必要があります。 <b>重要:</b> Websphere Adapter for SAP V6.0.2、V6.1.0、V6.1.2、および V6.2.0 は、IBM Business Process Manager V7.5.1 ではサポートされません。Websphere Adapter for SAP を使用するアプリケーションを IBM Business Process Manager V7.5.1 にデプロイするには、まず Websphere Adapter for SAP を V7.0 に更新する必要があります。

タスク	サポートされているか
IBM Business Process Manager V7.5.1 成果物の WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 での実行。	いいえ。  IBM Integration Designer V7.5.1 で作成したアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 (前のすべてのリリース) のサーバーにパブリッシュまたはインストールできません。  WebSphere Integration Developer 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Integration Designer 7.5 で作成され、IBM Integration Designer V7.5.1 で生成されたアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 のサーバーにパブリッシュまたはインストールできません。  <b>serviceDeploy</b> を使用して IBM Business Process Manager V7.5.1 サーバーで生成されたアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 のサーバーにインストールできません。

## プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項

このトピックでは、プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセル (該当する場合) を命名する際に考慮しなければならない予約語および問題について説明します。このトピックは分散プラットフォームに適用されます。

### プロファイルの命名の考慮事項

プロファイル名には、固有の名前を付けることができますが、以下の制限があります。プロファイルの名前を付ける際には、以下の文字を使用しないでください。

- スペース
- ご使用のオペレーティング・システムのディレクトリー名に使用できない特殊文字 (\*、&、または ? など)
- スラッシュ (/) または円記号 (¥)

全角文字は許可されています。

**Windows** ディレクトリー・パスについての考慮事項: インストール・ディレクトリーのパスは、60 文字以下でなければなりません。 `profiles_directory_path¥profile_name` ディレクトリーの文字数は、80 文字以下でなければなりません。

### ノード、サーバー、ホスト、セルの命名の考慮事項

**予約名:** フィールド値として予約済みの名前を使用しないでください。予約済みの名前を使用すると、予測不能な結果が起こる可能性があります。以下のワードは、予約されています。

- cells

- nodes
- servers
- クラスター
- アプリケーション
- deployments

「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」パネルのフィールドの説明: 表 10 では、プロファイル管理ツールの「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」ページにあるフィールドについて説明します。この表には、フィールド名、デフォルト値、および制約が示されています。プロファイルの作成時には、この情報をガイドとして使用してください。

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
スタンドアロン・サーバー・プロファイル			
ノード名	<div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 5px;"> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Linux</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">UNIX</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Windows</div> </div> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	予約名を使用しないでください。	希望の名前を選択してください。システムに複数のサーバーを作成する予定がある場合、インストールを編成するには、固有の名前を使用します。
サーバー名	<div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 5px;"> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Linux</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">UNIX</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Windows</div> </div> <p>server1</p>	サーバーの固有の名前を使用します。	サーバーの論理名です。
ホスト名	<div style="display: flex; flex-direction: column; gap: 5px;"> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Linux</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">UNIX</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px 5px; text-align: center;">Windows</div> </div> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。  Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。	ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> Cell ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	<p>セルの固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要のあるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。さらに、名前空間がフェデレートされる場合にも、セル名を固有にする必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。</p>
<b>Deployment manager プロファイル</b>			
ノード名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Cell ManagerNode Number ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャーの固有の名前を使用します。予約名を使用しないでください。</p>	<p>この名前は、デプロイメント・マネージャー・セル内での管理に使用されます。</p>

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ホスト名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。予約名を使用しないでください。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>
セル名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Cell <i>CellNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>CellNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティ間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要のあるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。名前空間が統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」ページで指定します。</p>
カスタム・プロファイル			

表 10. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	<p>予約名を使用しないでください。</p> <p>デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>	<p>この名前は、カスタム・プロファイルが追加されるデプロイメント・マネージャー・セル内で管理のために使用されます。デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>
ホスト名	<p>Linux</p> <p>UNIX</p> <p>Windows</p> <p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

### ホスト名の考慮事項:

ホスト名は、ノードがインストールされている物理ワークステーションのネットワーク名です。ホスト名は、サーバー上の物理ネットワーク・ノードに解決する必要があります。サーバーが複数のネットワーク・カードを備えている場合は、ホスト名または IP アドレスは、そのネットワーク・カードのいずれか 1 つに解決されなければなりません。リモート・ノードは、ホスト名を使用して、このノードに接続および通信します。

IBM Business Process Manager は、インターネット・プロトコル・バージョン 4 (IPv4) およびバージョン 6 (IPv6) の両方に対応しています。管理コンソールなどで IP アドレスを入力できる場所では、どちらの形式で入力しても構いません。ご使用のシステムに IPv6 が実装されている場合は、IP アドレスを IPv6 形式で入力する必要があります。反対に、IPv6 を使用できない環境では、IP アドレスを IPv4 形式で入力してください。IPv6 について詳しくは、IPv6 の公式 Web サイトを参照してください。

以下のガイドラインが、ご使用のワークステーションに適切なホスト名を付ける場合に役立ちます。

- その他のワークステーションがネットワーク内でアクセスできるホスト名を選択します。
- この値に汎用 ID、localhost を使用しないでください。
- 2 バイト文字セット (DBCS) の文字を使用しているホスト名を持つサーバーには、IBM Business Process Manager 製品をインストールしないでください。DBCS 文字は、ホスト名に使用する場合はサポートされていません。
- サーバー名には下線文字 ( \_ ) を使用しないようにしてください。インターネット標準では、ドメイン・ネームが Internet Official Protocol Standards の RFC 952 および RFC 1123 に記述されているホスト名

の要件に適合するよう定めています。ドメイン・ネームには、文字 (大文字または小文字) および数字のみを使用する必要があります。ただし、名前の先頭または末尾にならない限り、ドメイン・ネームにダッシュ文字 ( - ) を使用してもかまいません。ホスト名では、下線文字 ( \_ ) はサポートされていません。サーバー名に下線文字を使用しているサーバーにすでに IBM Business Process Manager をインストールした場合、このサーバーにアクセスするには、その名前を変更するまで IP アドレスを使用してください。

同一コンピューター上に共存している複数のノードを固有の IP アドレスで定義する場合は、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) のルックアップ・テーブルで、個々の IP アドレスを定義してください。サーバーの構成ファイルでは、ネットワーク・アドレスが 1 つしかないワークステーションでの複数 IP アドレスのドメイン・ネーム解決が提供されません。

ホスト名に指定する値は、構成文書で `hostName` プロパティの値として使用されます。次のいずれかの形式で、ホスト名の値を指定してください。

- 完全修飾のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) ホスト名ストリング。例えば `xmachine.manhattan.ibm.com` など。
- デフォルトの DNS 短縮ホスト名ストリング。例えば `xmachine` など。
- 数値 IP アドレス。例えば `127.1.255.3` など。

完全修飾 DNS ホスト名には、あいまいなところがなく、柔軟性に富むという利点があります。この柔軟性により、ユーザーは、ホスト・システムの実際の IP アドレスを変更しても、サーバー構成を変更する必要がありません。ホスト名のこの値は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して IP アドレスを割り当てる際に頻繁に IP アドレスを変更することが予定されている場合には、特に有用です。この形式の欠点は、DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

短縮ホスト名も、動的に解決可能です。ショート・ネーム形式には、ネットワークから切断されたときでもシステムがサーバーを実行できるように、ローカルの `hosts` ファイルで再定義されるという機能もあります。`hosts` ファイルの `127.0.0.1` (ローカル・ループバック) に対するショート・ネームを、切断した状態でも実行されるように定義します。ショート・ネーム形式の欠点は、リモート・アクセスでは DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

数値 IP アドレスには、DNS によって名前を解決する必要がないという利点があります。リモート・ノードは、DNS が使用できなくても、数値 IP アドレスを使用して名付けられたノードに接続できます。この形式の欠点は、数値 IP アドレスを使用するとアドレスが固定化されるということです。ワークステーションの IP アドレスを変更したら、構成文書の `hostName` プロパティの設定も必ず変更しなければなりません。したがって、DHCP を使用するか、あるいは IP アドレスを定期的に変更する場合は、数値 IP アドレスを使用しないでください。もう一方の形式の欠点としては、ホストがネットワークから切断されるとノードを使用できないということがあります。

## 必要なセキュリティ許可の準備

セキュリティ・ポリシーによっては、ファイルおよびフォルダーの作成やデータベースへのアクセスなどのタスクを完了するためにユーザー ID とパスワードが必要な場合があります。サーバーが保護データにアクセスしようとしたときの問題を防ぐために、セキュア・ユーザー ID を準備してください。

- データベースの設計を完了します。
- 使用する認証システム (例えば Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)) を決定します。
- IBM Business Process Manager のインストールに必要な権限に影響する制御として、存在している制御を判別します。
- 製品をインストールするシステムを識別します。

サイトのセキュリティー・ポリシーではグローバル・セキュリティーが有効になっており、ソフトウェアのインストール、データベースまたはテーブルの作成、およびデータベースへのアクセスを行うために所定の権限が必要になっています。正常に製品をインストールして運用するためには、ここに示すステップを行う必要があります。

IBM Business Process Manager データベースのセキュリティー許可を準備するには、以下のステップを実行します。

- システムにソフトウェアをインストールする権限を持つユーザー ID とパスワードのリストを作成します。ファイルおよびフォルダーを作成する権限を持つ IBM Business Process Manager ユーザー ID 用に、インストール・ウィザードを実行する必要があります。
- システムの日常の運用に必要なユーザー ID、パスワード、およびロールのリストを作成します。
  - 管理コンソールのユーザー ID と能力を制限するロール。ロールの構成、管理、またはモニター用のユーザー ID を所有することができます。
  - システム通信を認証する各システム・バスのユーザー ID。
- システムが操作中に使用するデータベース表にアクセスするために使用するユーザー ID とパスワードのリストを作成します。
- オプション: システムがインストール中にデータベースまたはデータベース表の作成に使用するユーザー ID とパスワードのリストを作成します。サイト・ポリシーによっては、この権限がデータベース管理者に制限されている場合があります。その場合は、生成されたスクリプトを管理者に提供して、データベースまたはデータベース表を作成してもらう必要があります。

サーバーをセキュアな環境にインストールして運用できます。

## 製品およびプロファイルのインストール・ディレクトリー

IBM Business Process Manager のインストール・ディレクトリーは、いくつかの変数で表されます。それらの変数の意味は、さまざまな要因で異なる可能性があります。

### この資料で使用されている変数

この資料では、特定のデフォルト・ディレクトリーを表すいくつかの変数を使用されています。これらのファイル・パスは、デフォルトのロケーションです。書き込み権限を所有しているディレクトリーであればどのディレクトリーにも、製品およびその他のコンポーネントをインストールし、プロファイルを作成できます。IBM Business Process Manager 製品またはコンポーネントを複数インストールする場合は、複数のロケーションが必要です。

以下に、この資料で使用されている主な変数を示します。

Linux UNIX Windows `install_root`

IBM Business Process Manager のインストール・ロケーション。IBM Business Process Manager は常に、関連付けられた WebSphere Application Server Network Deployment と同じ場所にインストールされます。

`profile_root`

IBM Business Process Manager プロファイルの場所。

### 変数の意味の違いについて

インストール・ディレクトリーを表すのに使用する変数の意味は、製品をクリーン・ワークステーションにインストールするか、あるいは WebSphere Application Server または WebSphere Application Server

Network Deployment が既にインストールされているワークステーションにインストールするかに基づいて異なることがあります。またそのような変数は、インストールを root ユーザー (Windows システムでは Administrator) として実行しているか、あるいは非 root ユーザーとして実行しているかによっても異なる場合があります。

Linux UNIX Windows

## 非 root ユーザーがインストールする場合の制限

root、Administrator、および非 root ユーザーが製品をインストールできます。インストール・プログラムが用意するデフォルト・ディレクトリーは、ユーザーが root (管理者) 特権を所有しているかどうかにより異なります。root および Administrator ユーザーは共用製品を登録でき、システム所有のディレクトリー (すべてのユーザーが使用可能なグローバル共用リソース) にインストールできますが、非 root ユーザーはこれできません。非 root ユーザーは、そのユーザーが所有しているディレクトリーにしかインストールできません。

## 標準インストールの場合のデフォルト・ディレクトリー

以下の表は、標準インストールの場合の IBM Business Process Manager の基本インストールとそのプロファイルのデフォルトのインストール・ロケーションを示します。

表 11 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、インストール・プログラムが IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server Network Deployment の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 11. *install\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
<b>AIX</b> /opt/IBM/BPM/v7.5	<b>AIX</b> <i>user_home</i> /IBM/BPM/v7.5
<b>Linux</b> /opt/ibm/BPM/v7.5	<b>Linux</b> <i>user_home</i> /ibm/BPM/v7.5C:¥IBM¥BPM¥v7.5
<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v7.5	<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v7.5

表 12 は、root (Administrator) ユーザーと非 root ユーザーの両方について、*profile\_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 12. *profile\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
<b>AIX</b> /opt/IBM/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>	<b>AIX</b> <i>user_home</i> IBM/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>
<b>Linux</b> /opt/ibm/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>	<b>Linux</b> <i>user_home</i> /ibm/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>
<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v7.5¥profiles¥ <i>profile_name</i>	<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v7.5¥profiles¥ <i>profile_name</i>

28 ページの表 13 は、DB2 Express のインストール・ロケーションを示します。DB2 Express は IBM Business Process Manager と同じディレクトリーの下にインストールされます。

表 13. DB2 Express デフォルト・ディレクトリー

DB2 Express バイナリーのデフォルト・ロケーション	データベース・インスタンスのロケーション
Linux /opt/ibm/BPM/v7.5/DB2	Linux データベース・インスタンスは bpminst ユーザーの下で作成されます。例: user_home/bpminst
Windows C:\IBM\BPM\v7.5\DB2	Windows BPMINST データベース・インスタンスは、IBM Business Process Manager がインストールされているドライブのルート (¥) に作成されます。例えば、IBM Business Process Manager が C:\IBM\BPM\v7.5¥ にインストールされている場合は、C:\BPMINST となります。

## カスタム・インストールまたは WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

以下の表は、製品とそのプロファイルのデフォルト・インストール・ロケーションを示します。サポートされる既存のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の上に IBM Business Process Manager をインストールする選択をした場合、IBM Business Process Manager は同じロケーションにインストールされます。表 14 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 14. インストール・プログラムが root (管理者) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方に IBM Business Process Manager と WebSphere Application Server の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの install_root	非 root ユーザーのデフォルトの install_root
AIX /usr/IBM/WebSphere/AppServer	AIX user_home/IBM/WebSphere/AppServer
Linux Solaris /opt/IBM/WebSphere/AppServer	Linux Solaris user_home/IBM/WebSphere/AppServer
Windows C:\Program Files\IBM \WebSphere\AppServer	Windows user_home\IBM \WebSphere\AppServer

表 15. root (Administrator) および root 以外のユーザーの両方における、profile\_name という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示します。

root または Administrator ユーザーのデフォルトの profile_root	非 root ユーザーのデフォルトの profile_root
AIX /usr/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/profile_name	AIX user_home/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/profile_name
Linux Solaris /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/profile_name	Linux Solaris user_home/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/profile_name
Windows C:\Program Files\IBM\ WebSphere\AppServer\profiles\ profile_name	Windows user_home\IBM\ WebSphere\AppServer\profiles\ profile_name

## Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

表 16 は、Installation Manager ツールに関連する 2 つのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

インストール・ディレクトリー内のディレクトリーは、Launchpad アプリケーションによって Installation Manager が格納される (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー内のディレクトリーは、Installation Manager に関連するデータ (Installation Manager によって実行された操作の状態や履歴など) 用の (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

root (Administrator) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方の値が提供されます。

エージェント・データのロケーションについては、Installation Manager 資料の『エージェント・データのロケーション』を参照してください。Installation Manager のその他のデフォルト設定については詳しくは、Installation Manager 資料の『管理者または非管理者としてのインストール』を参照してください。

表 16. Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルト	非 root ユーザーのデフォルト
インストール・ディレクトリー:	インストール・ディレクトリー:
<b>Linux</b> /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	<b>Linux</b> user_home/IBM/InstallationManager/eclipse
<b>UNIX</b> /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	<b>UNIX</b> user_home/IBM/InstallationManager/eclipse
<b>Windows</b> C:¥Program Files¥IBM¥ Installation Manager¥eclipse	<b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥ userID¥IBM¥Installation Manager¥eclipse <b>Vista</b> <b>Windows 7</b> C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager
エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:	エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:
<b>Linux</b> /var/ibm/InstallationManager	<b>Linux</b> user_home/var/ibm/InstallationManager
<b>UNIX</b> /var/ibm/InstallationManager	<b>UNIX</b> user_home/var/ibm/InstallationManager
<b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Installation Manager <b>Vista</b> <b>Windows 7</b> C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager	<b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥userID¥Application Data¥IBM¥Installation Manager <b>Vista</b> <b>Windows 7</b> C:¥Users¥userID¥AppData¥Roaming¥IBM¥ Installation Manager

## スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティー、アベイラビリティ、スケーラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

スタンドアロン環境はインストール および構成が最も容易であり、計画はほとんど必要ありません。Network Deployment 環境では、多数のロールを含む、より詳細なインストールおよび構成のタスクが必要です。

Network Deployment 環境の場合、ビジネス・アプリケーションおよびサービスがその環境で実行する作業の要件を満たすことを目的として、慎重に特性を計画する必要があります。考慮すべき点はいくつかあります。以下に例を示します。

- 必要とする物理ワークステーションおよびハードウェア・リソースの数
- ビジネスをサポートするために必要なクラスターおよびクラスター・メンバーの数
- 必要なデータベースの数
- 認証の役割およびセキュリティー上の考慮事項
- デプロイメント環境の実装に使用する方式
- ユーザー・レジストリー (セキュリティー用)、1 台以上の HTTP サーバー (Web コンテンツ用)、必要なファイアウォール、ロード・バランサーなど、その他のサポート・リソース。

## スタンドアロン環境

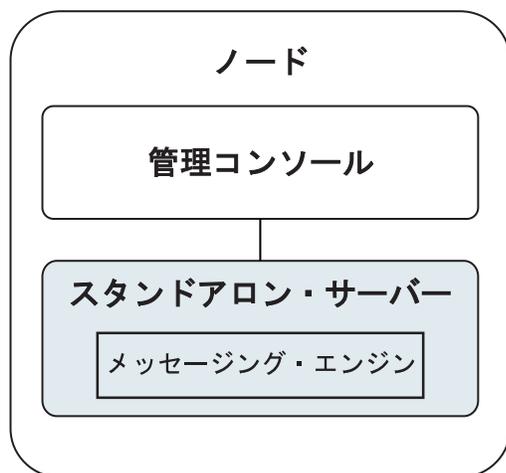


図1. スタンドアロン環境

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするために、サンプルをインストールして、スタンドアロン・サーバーにサンプル・ソリューションをデプロイできます。このサンプルに使用されているリソースは、管理コンソールで探索できます。

まずスタンドアロン環境から始めて、後でそれを Network Deployment 環境に組み込むには、スタンドアロン環境をデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。これは、そのセルに他のノードが統合されていない場合にのみ可能です。

製品ソフトウェアをインストールするときに、スタンドアロン開発環境 (qesb) 用のプロファイルの作成を選択できます。作成されたプロファイルは、テスト・シナリオでの使用またはアプリケーション開発のサポートにのみ適します。実動目的でスタンドアロン・サーバー環境を使用するシナリオの場合、製品ソフトウェアをインストールしてください。次に、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・プロファイルを構成します。

## ネットワーク・デプロイメント環境

Network Deployment 環境には、サービス要求元およびプロバイダーのエンタープライズ・アプリケーション、およびそれらのメディエーション・モジュールを実行するために相互接続されたサーバーとクラスターのコレクションが含まれます。この環境には、WebSphere Application Server のアプリケーション・サーバーも組み込むことができます。

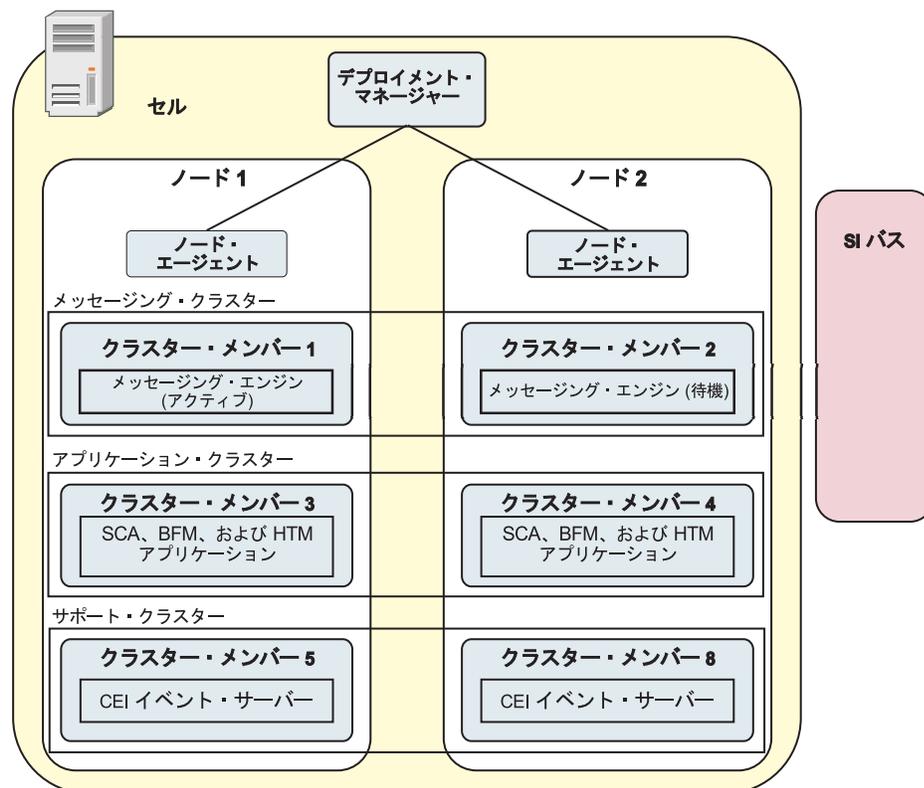


図 2. Network Deployment 環境

サーバーおよびクラスターは、1 つ以上の管理対象ノードで実行されます。それらの管理対象ノードは、それぞれ 1 つの論理コンピューター・システムまたは物理コンピューター・システムに対応しています。

複数のサーバーを、ロード・バランシングとフェイルオーバーをサポートするためにクラスターにグループ化することができます。

相互接続サーバーまたはクラスターのデプロイメント環境は、スタンドアロン・サーバーでは提供できないパフォーマンス、アベイラビリティ、スケーラビリティ、分離機能、セキュリティ、および安定度の特性を提供します。さらに、集中化されたデプロイメント・マネージャーからすべてのサーバーまたはクラスターを管理することができます。

デプロイメント・マネージャーによって管理されるサーバーとクラスターの集合全体は、デプロイメント環境として構成および管理されます。

Network Deployment 環境をインストールするには、製品ソフトウェアをインストールしてから、デプロイメント・マネージャーおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象) ノード用のプロファイルを構成します。管理対象のデプロイメント環境は後で作成できます。提供されているトポロジー・パターンから標準のデプロイメント環境を作成するか、あるいはクラスターおよびサーバーを構成して、カスタマイズされたデプロイメント環境を作成することができます。

## 使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択

IBM Business Process Manager の使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択内容と、それに関連する計画について、以下の表に記載しています。

表 17. IBM Business Process Manager の使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択

使用目的	構成パスおよび計画アクティビティ
単一サーバーの単体テスト環境 (UTE)	スタンドアロン・プロファイル構成パス。計画はほとんど必要ない。
クラスター化されたテスト環境	Network Deployment 環境の標準の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターン。計画はほとんど必要ない。
柔軟性の高い実稼働環境	Network Deployment 環境の標準の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターン。計画はほとんど必要ない。
高度に最適化された実稼働環境	固有の処理要件やビジネス要件に対応したカスタマイズ・トポロジー。必須の詳細計画 (資料の本セクションで説明しているもの)。

適切なクラスター・トポロジー・パターンの選択については、関連概念のリンクを参照してください。

### 関連概念:

40 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

50 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

## インストール・タイプおよびプロファイル

実行するインストールのタイプ (「標準的」または「カスタム」と、そのインストール・タイプに関連付けられたプロファイルを各 IBM BPM 構成 (Express、Standard、および Advanced) に対して作成する方法の間には、一定の関係が存在します。

以下の表は、その関係を示しています。

表 18. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	はい

表 19. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced: Process Server

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチャパッドを使用)	電子イメージのみ	Process Server のみ	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	オプション 単体テスト環境 (UTE) 専用の Process Server プロファイルまたは WebSphere ESB プロファイル (あるいはその両方) を作成できるフィーチャーがあります	はい	いいえ	はい

表 20. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Standard

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチャパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

表 21. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Express

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチャパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

---

## Network Deployment 環境の計画

Network Deployment 環境のセットアップには、物理ワークステーションの数および選択するパターンのタイプなど、多くの決定が関係しています。それぞれの決定はデプロイメント環境をセットアップする方法に影響を与えます。

デプロイメント環境を計画する前に、以下の作業を実行します。

- データベース・タイプの選択
- 使用可能なリソースの識別
- 必要なセキュリティ権限の明確化

相互接続サーバーのレイアウトを計画する際には、いくつかの決定を下す必要があります。こうした決定は、使用可能なハードウェアと物理接続の間で行われるトレードオフ、管理および構成の複雑さ、およびパフォーマンス、アベイラビリティ、スケーラビリティ、分離機能、セキュリティ、安定度などの要件に影響を与えます。

1. デプロイメント環境の機能要件を明確化します。

- a. デプロイメント環境のフィーチャーおよびランタイム機能を明確化します。

デプロイメント環境で、IBM Business Process Manager に加えてその他の IBM Business Process Manager 製品および BPM 以外の製品をサポートするかどうか検討します。

- b. デプロイするコンポーネントのタイプを確認します。

コンポーネント・タイプとコンポーネント間の対話を要件の一部として検討します。

- c. インポートおよびエクスポートの実装タイプとトランスポートを決定します。

データベースに必要なリソースまたは Java™ Message Service (JMS) リソース、およびビジネス・イベントとそれらの伝送手段に必要な事柄について考慮します。

- d. アプリケーションに関連しない機能要件を確認します。

セキュリティ・サーバー、ルーター、およびビジネス・イベントを処理するための他のすべてのハードウェア要件またはソフトウェア要件を検討します。

2. ご使用の環境に対する容量とパフォーマンスの要件を明確化します。

3. 各機能に必要な物理サーバーの数を決定します。

4. デプロイメント環境を設計します。

パターンを決定します。IBM Business Process Manager では、次の 4 つの確立されたトポロジー・パターンのいずれかを選択できます。

- 単一クラスター
- リモート・メッセージング
- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
- リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

これらのパターンがいずれもニーズを満たさない場合は、管理コンソールを使用してカスタム・デプロイメント環境を作成できます。

**注:** 構成が、IBM Business Process Manager に加えて、およびこれと互換性のある、複数の IBM Business Process Manager および BPM 以外の製品をサポートする場合、デプロイメント環境を作成するときにこれらの製品のパターンを使用できます。

各パターンとその相違点について詳しくは、『40 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』』を参照してください。

## 5. デプロイメント環境の構成に使用できる方法を理解します。

以下のタイプの IBM Business Process Manager のデプロイメント環境を構成できます。

### • 標準化された Network Deployment 環境

標準化された Network Deployment 環境は、ソフトウェアに組み込まれているトポロジー・パターン・テンプレートに基づいており、「デプロイメント環境構成」ウィザードまたは `wsadmin` コマンドを使用して実装されます。

「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、単一クラスター、リモート・メッセージング、リモート・メッセージングとリモート・サポート、および (該当する場合) リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web クラスターのトポロジー・パターンを持つクラスターを作成できます。

### • カスタマイズされた Network Deployment 環境

カスタマイズされた Network Deployment 環境は、管理コンソールから作成する構成であり、デプロイメント環境ウィザードを使用して作成される「テンプレート・ベース」の構成とは異なります。

カスタマイズされた Network Deployment 環境は、ソフトウェアに組み込まれているトポロジー・パターンが構成要件を満たさない場合にのみ作成してください。

標準化された環境の場合と同様に、カスタマイズされた Network Deployment 環境は `wsadmin` を使用して作成できます。

## 概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

### トポロジーの概要

トポロジーとは、キャパシティー、可用性、およびスケーラビリティに対するビジネス・ニーズを満たすために必要なデプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。

IBM Business Process Manager の Process Center コンポーネントと Process Server コンポーネントの両方のトポロジーをセットアップすることができます。

さまざまな要因がトポロジーの設計方法および実装方法に影響を与えます。例えば、ビジネスおよびアプリケーションの要件、リソースの要件および制約、環境の本来の目的、オペレーティング・システムなどを考慮する必要があります。

IBM Business Process Manager には、以下のトポロジーのパターンが組み込まれています。これらのパターンを使用すると、PoC (概念検証) から完全な機能を備えた実稼働環境に至るさまざまなビジネス・シナリオに対処できます。

- 単一クラスター
- リモート・メッセージング
- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
- リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

各トポロジー・パターンには、特定のビジネス・ニーズに対応する設計特性があります。例えば、分散システムの場合、単一クラスター・トポロジー・パターンは、通常、テストまたは PoC のシナリオに使用します。z/OS® システムの場合、このトポロジー・パターンはデフォルト・パターンであり、実稼働環境で使用できます。

各トポロジーの設計特性は、トポロジー・パターンとして取り込まれ、構成テンプレートとして製品とともに提供されます。

標準化された (IBM 提供の) トポロジー・パターンを必ず使用する必要はありません。どのトポロジー・パターンも特定のニーズに対応しない場合は、カスタム・トポロジー・パターンを作成できます。

## デプロイメント環境パターンの目的

デプロイメント環境トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境に関するコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。トポロジー・レイアウトごとに IBM 提供のパターンが用意されています。これらのトポロジー・パターンは、最もよく使用される BPM トポロジー・パターンの特性である、コンポーネント対話のルールおよびガイドラインを提供します。IBM 提供のトポロジー・パターンは、テスト済みの既知の構成シナリオに基づいています。これらのパターンにはデプロイメント環境を作成するための反復可能な自動化方式が含まれています。各トポロジー・パターンは、関連付けられているトポロジーの構成要件およびビジネス・ニーズを満たすように設計されています。トポロジー・パターンを使用すると、デプロイメント環境を最も単純な方法で作成できます。

デプロイメント環境トポロジー・パターンは、連携して動作するコンポーネント構成を含む推奨トポロジーを表します。そのため、完全に機能するデプロイメント環境を確実に構築できます。デプロイメント環境トポロジー・パターンの構成ルールを使用して、ファースト・パス構成を生成できます。これが可能な理由は、多数の設計上の決定 (例えば、どのコンポーネントを構成するか、どのデフォルト・パラメーターおよびリソースが必要か) がトポロジー・パターンに実装されているためです。

提供されているデプロイメント環境トポロジー・パターンは、それぞれ特定の要件のセットに対応しています。これらのトポロジー・パターンのいずれかを使用すると、ほとんどの要件セットに対処できます。トポロジー・パターンを選択するには、以下のステップをすべて実行します。

- 作成するビジネス・ソリューションの要件を理解します。
- IBM 提供のトポロジー・パターンの機能および特性を検討し、理解します。
- 使用するトポロジー・パターンを決定します。

IBM Business Process Manager トポロジー・パターンがいずれもニーズを満たさない場合は、管理コンソールまたはスクリプティング (wsadmin コマンド) を使用して、カスタマイズ・トポロジー・パターンを作成できます。

## データベースおよびデプロイメント環境

Network Deployment 環境を作成して構成する前に、データベースを構成し、必要なデータベース表を作成する必要があります。IBM Business Process Manager を使用するには、少なくとも、データベース管理システムで以下のデータベースを構成する必要があります。

- 共通データベース (CMNDB)
- Process Server データベース (BPMDB)
- Performance Data Warehouse データベース (PDWDB)

スタンドアロン・サーバー構成の場合、「標準」インストール・オプションを使用すると、これらのデータベースが構成され、必要なデータベース表が自動的に作成されます。

Network Deployment 環境 (カスタマイズされたデプロイメント環境または標準化されたデプロイメント環境) の場合は、担当者またはデータベース管理者がインストーラーの外部で各データベースを構成する必要があります。追加機能をサポートするには、追加データベースが必要です。例えば、IBM Business Process Manager 構成に Business Process Choreographer、Business Space、または Common Base Event のモニタリングが含まれている場合は、担当者またはデータベース管理者がこれらのデータベースを構成し、用意されているユーティリティまたはスクリプトを使用して、必要なデータベース表を作成する必要があります。この構成は、Network Deployment 環境を作成する前に行う必要があります。

詳しくは、『データベース構成の計画』を参照してください。

## IBM 提供のデプロイメント環境トポロジー・パターンの機能

どの IBM Business Process Manager デプロイメント環境にも、基本的な一連の機能が含まれており、それらの機能が組み合わさることで完全な実稼働環境を形成しています。

堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが IBM 提供のトポロジー・パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。特定のタイプの機能 (例えば、サポート・インフラストラクチャー機能) を特定のクラスターに割り振ることができます。これらの機能を理解しておくこと、ニーズに最も合ったデプロイメント環境トポロジー・パターンを選択するのに役立ちます。

ネットワーク・デプロイメントの場合、複数のクラスターが共同でその環境に固有の機能を提供できます。お客様の要件に合わせて、デプロイメント環境内の各クラスターに特定の機能を割り当てて、パフォーマンス、フェイルオーバー、および容量を提供します。

デプロイメント環境で構成されたクラスターは、以下の機能を提供します。

これらの機能は、単一のクラスター内に存在している場合もあれば、複数のクラスターにまたがって分散している場合もあります。標準化された (IBM 提供の) トポロジー・パターンでは、これらの機能をサポートするために、それぞれ異なる数のクラスターが作成されます。デプロイメント環境内でのクラスターの数は、使用するトポロジー・パターンにより異なります。

### アプリケーション・デプロイメント・ターゲット

アプリケーション・デプロイメント・ターゲットとは、アプリケーション (ヒューマン・タスク、ビジネス・プロセス、メディエーションなど) のインストール先となる一連のサーバー (クラスター) です。選択したデプロイメント環境トポロジー・パターンによっては、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットがメッセージング・インフラストラクチャーおよびサポート・インフラストラクチャーの機能を提供する場合があります。デプロイするアプリケーションのタイプに基づいて適切な製品を選択します。

- アプリケーションにヒューマン・タスクまたはビジネス・プロセスの成果物が含まれる場合、Process Server をインストールします。
- アプリケーションにメディエーション・モジュールのみが含まれる場合、WebSphere Enterprise Service Bus をインストールします。

単一クラスター・トポロジー・パターンでは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットはデプロイメント環境のすべての機能を提供します。

### サポート・インフラストラクチャー

サポート・インフラストラクチャーには、環境をサポートしてシステムを管理するために使用される Common Event Infrastructure (CEI) サーバーやその他のインフラストラクチャー・サービスが含まれます。各種インフラストラクチャー・サービスには、以下のものがあります。

- ビジネス・ルール
- セレクター
- ヒューマン・タスク
- ビジネス・プロセス

**重要:** このノードに対して、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターに対して使用した製品機能と同じ製品機能のカスタム・プロファイルを使用する必要があります。

ビジネス・ルールは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターには結合されません。実際、ビジネス・ルールは、セル内のすべての場所で存在し、機能することができます。ビジネス・ルール管理機能 (Business Rules Manager から実行される) は、サポート・インフラストラクチャー・クラスター (3 クラスター構成の場合) または Web アプリケーション・インフラストラクチャー・クラスター (4 クラスター構成の場合) にデプロイできます。同じ原理がヒューマン・タスクとビジネス・プロセスに適用されます。ヒューマン・タスクとビジネス・プロセスは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターで実行されます。これは、このクラスターでヒューマン・タスク・コンテナとビジネス・プロセス・コンテナが構成されるためです。ただし、プロセスとタスクは、Business Process Choreographer Explorer から管理します。Business Process Choreographer Explorer は、3 クラスター構成の場合はサポート・インフラストラクチャー・クラスター上、4 クラスター構成の場合は Web アプリケーション・インフラストラクチャー・クラスター上に配置できます。

#### メッセージング・エンジン・インフラストラクチャー

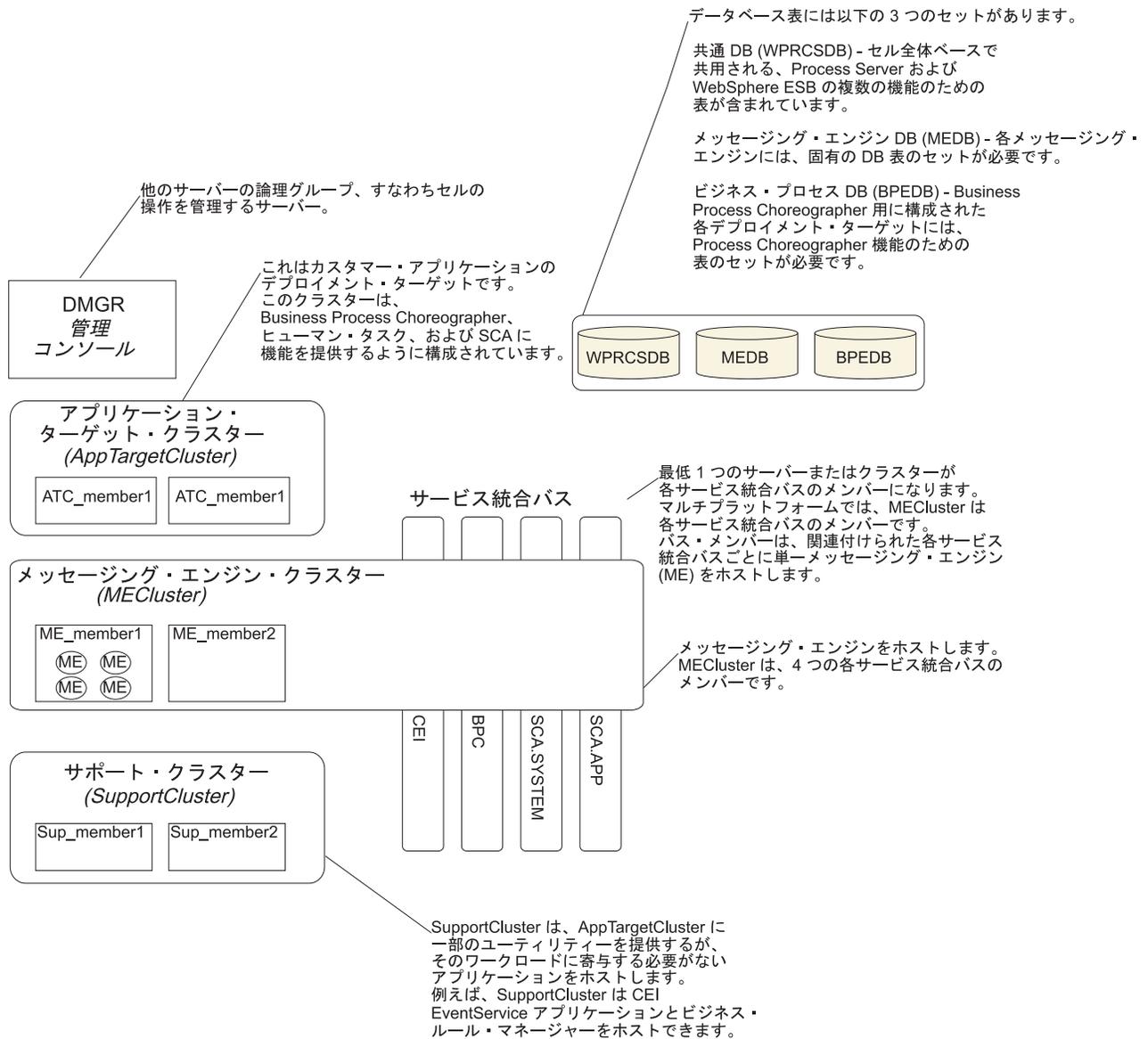
メッセージング・インフラストラクチャーは、メッセージング・エンジンが配置されている一連のサーバー (クラスター) です。メッセージング・インフラストラクチャーは、ご使用のアプリケーションおよび IBM Business Process Manager コンポーネントの内部メッセージング・ニーズに非同期メッセージング・サポートを提供するために使用されます。メッセージング・エンジンによって、デプロイメント環境内のノード間の通信が可能になります。クラスターがメッセージング機能のみを提供する場合は、このクラスターは IBM Business Process Manager ではなく WebSphere Application Server で作成されたノード上のメンバーでも構成することができます。

#### Web アプリケーション・インフラストラクチャー

Web ベース・コンポーネントの Business Process Choreographer Explorer、Business Space および Business Rules Manager が配置されている 1 つのクラスターで構成されます。

すべての環境内にあるトポロジーに対して、IBM Process Server および WebSphere ESB の基本的な部分は、常にほぼ同等です。どの IBM Process Server セルおよび WebSphere ESB セルでも、デプロイメント・マネージャーが、そのセルの管理の中心点になります。

次の図に、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンを使用して構成した、IBM Process Server デプロイメント環境の注目点を示します。Process Center デプロイメント環境ではアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターに Process Center コンソールが含まれていますが、この点を除けば、このトポロジー・パターンは Process Center デプロイメント環境と同じです。Process Server の Network Deployment 環境には、Process Center コンソールは含まれません。



この図には、以下のものが含まれています。

- **デプロイメント・マネージャー (DMGR):** 論理グループまたは他のサーバーのセルの操作を管理するサーバー。
- **アプリケーション・ターゲット・クラスター:** カスタマー・アプリケーションのデプロイメント・ターゲット。このクラスターは、BPEL プロセス、ヒューマン・タスク、プロセス・アプリケーション、および SCA に機能を提供するように構成されています。Process Center デプロイメントの場合、このクラスターには Process Center コンソールも含まれます。
- **データベース:**
  - 共通データベース (CMNDB) - 必須。複数の IBM BPM Advanced Process Server および WebSphere ESB 機能のためにセル全体ベースで共用される表が含まれます。
  - Process Server データベース (BPMDB) - 必須。IBM BPM Advanced Process Server 機能のための表が含まれます。
  - Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) - 必須。Performance Data Warehouse 機能のための表が含まれます。

- メッセージング・エンジン・データベース (MEDB) - 各メッセージング・エンジンには、固有のデータベース表のセットが必要です。
- Business Process データベース (BPEDB) - Business Process Choreographer 用に構成された各デプロイメント・ターゲットには、Business Process Choreographer 機能のための表のセットが必要です。
- **サービス統合バス (SIBus):** 少なくとも 1 つのサーバーまたはクラスターが各 SIBus のメンバーです。マルチプラットフォームでは、メッセージング・エンジン・クラスターは各 SIBus のメンバーです。バス・メンバーは、関連付けられた各 SIBus ごとに 1 つのメッセージング・エンジン (ME) をホストします。
- **メッセージング・エンジン (ME) クラスター:** メッセージング・エンジンをホストします。ME クラスターは、4 つのサービス統合バスのそれぞれのメンバーです。
- **サポート・クラスター:** サポート・クラスターは、アプリケーション・ターゲット・クラスターに一部のユーティリティを提供するアプリケーション (ただし、そのクラスターのワークロードの一部にはならない) をホストします。例えば、サポート・クラスターはビジネス・ルール・マネージャーをホストする場合があります。

## ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

### 関連概念:

50 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

52 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

29 ページの『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティー、アベイラビリティ、スケーラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

## 単一クラスター・トポロジー・パターン

「単一クラスター」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンの 1 つです。単一クラスター・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境のすべての機能が 1 つのクラスターにまとめられています。

これは、IBM Business Process Manager for z/OS のデフォルト・パターンです。

単一クラスター・トポロジー・パターンは、ハードウェアが限られている場合に理想的です。すべてのコンポーネントが同じクラスターにインストールされるため、必要な物理マシンの数が少なく済みます。ただし、サポート・アプリケーションおよび統合アプリケーションを各サーバー・インスタンスで実行する必要があるため、個々の Java 仮想マシン (JVM) のメモリー所要量が多くなります。さらに、クラスターの 1 つ以上のメンバーで、非同期対話に必要なメッセージング・エンジンも実行する必要があります。そのため、単一クラスター・トポロジー・パターンは、通常、PoC (概念検証) 環境、開発環境、およびテスト環境で使用されます。

IBM Business Process Manager 環境のすべての側面を単一クラスターに結合する場合には、メモリー所要量が増加する点に加えて、いくつかの点を考慮する必要があります。

- 非同期対話 (JMS および MQ/JMS バインディングを含む)、ヒューマン・タスク、ステート・マシン、および長期実行ビジネス・プロセスは、メッセージング・インフラストラクチャーを頻繁に使用することがあるため、これらのコンポーネントを使用するアプリケーションには、単一クラスター環境は適していません。
- このトポロジー・パターンでは、メッセージング要件は最小に抑える必要があります (z/OS の場合は除く)。
- Service Component Architecture (SCA) の内部非同期呼び出し、Java Message Service (JMS) と MQ のメッセージングのバインディングは、同じクラスターで複数のメッセージング・エンジンをサポートしません。

必要な場合は、他のいずれかのトポロジー・パターン (メッセージング・インフラストラクチャーがアプリケーション・デプロイメント・ターゲットとは別のクラスターに存在する) を選択してください。

単一クラスター・トポロジー・パターンは、アプリケーションの実行および同期呼び出しに焦点を当てたシナリオに適しています。このトポロジー・パターンは、Common Event Infrastructure (CEI) を頻繁に使用することを計画している場合にも適していません。CEI 関連のメッセージング・トラフィックとイベントを生成すると、クラスター・メンバーに対する負荷が増加します。

管理上の観点とスケーラビリティの観点からは、単一クラスター・トポロジー・パターンが優れています。単一クラスターでは、各メンバーがすべての IBM Business Process Manager コンポーネントを実行するため、管理が容易になります。複数のクラスター内にいくつかのサーバー・インスタンスがある代わりに、少数のメンバーが単一のクラスターにまとめられています。環境のニーズが増大した場合でも、ノードおよびクラスター・メンバーを追加するだけで、インフラストラクチャーを拡張できます。このため、簡単に機能を追加できますが、その場合はすべてのコンポーネントが同じ比率で拡張されます。例えば、クラスター・メンバーを追加するたびに、CEI 処理が必要かどうかに関係なく、CEI 処理が追加されます。複数のサーバー・メンバーにわたって分散するメッセージング・エンジンがポリシーを使用する場合は、ポリシーの作成および保守のために、管理上の作業が増える可能性があります。

単一クラスター・トポロジー・パターンでは、以下に示すすべてのデプロイメント環境機能およびコンポーネントが単一クラスター上で実行されます。

- アプリケーション:
  - Process Server
  - Process Portal
- メッセージング・バス・メンバー:
  - Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
  - Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
  - Process Server バス・メンバー
  - Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
  - SCA システム・バス・メンバー
- サポート・インフラストラクチャー・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - ビジネス・ルール・マネージャー

## - REST API サービス

次に示す単一クラスター・トポロジー・パターンのグラフィカル表現を参照してください。

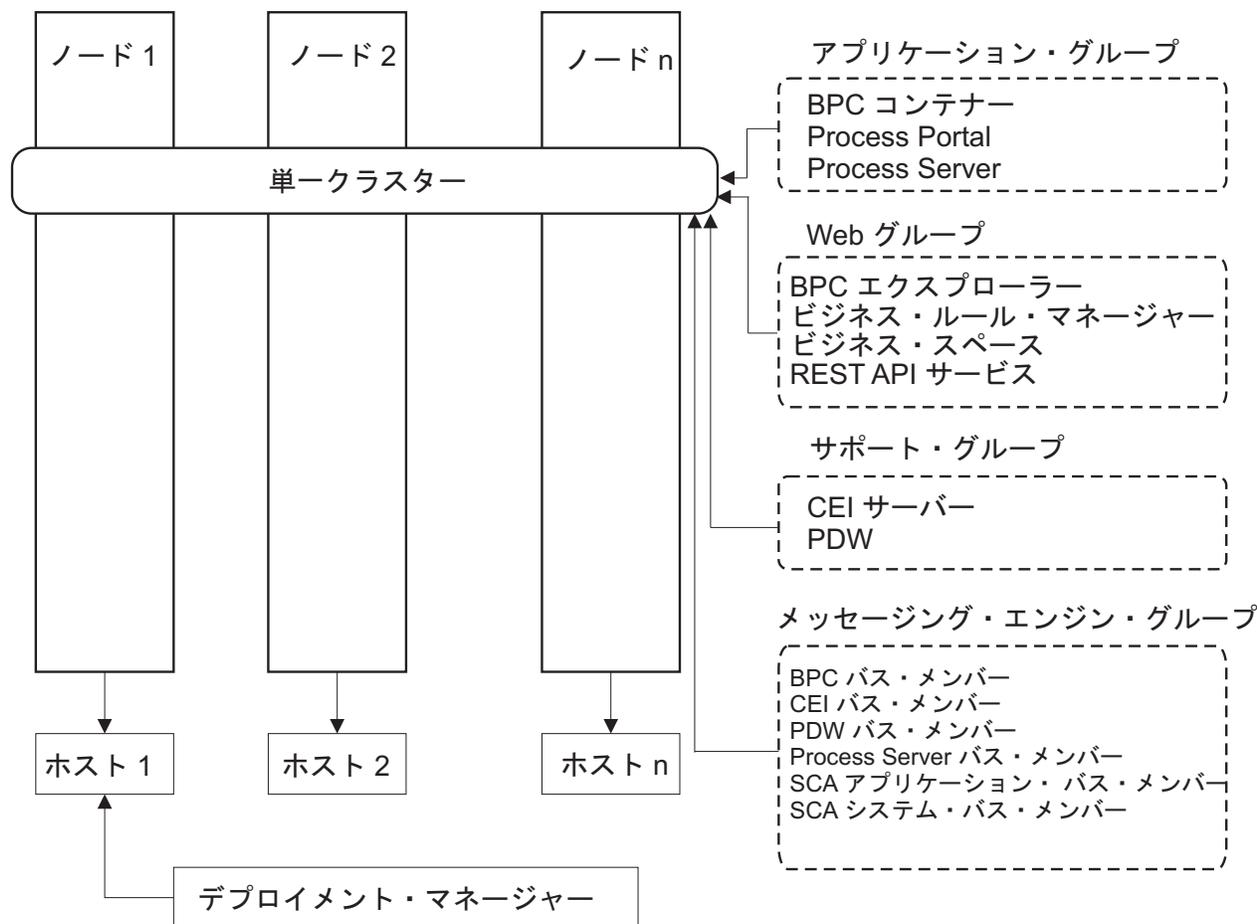


図3. 単一クラスター・トポロジー・パターン

## リモート・メッセージング・トポロジー・パターン

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能は 2 つの別個のクラスターに分割されています。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、メッセージング機能用に独立したクラスターを使用します。このトポロジー・パターンは、負荷に対してクラスターを拡張できるため、非同期呼び出しを必要とするシナリオに適しています。各コンポーネントは、2 つのクラスター間で分割されます。

多数のヒューマン・タスク、長期実行ビジネス・プロセス、ステート・マシン、および非同期対話をサポートする必要がある環境では、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの方が単一クラスター・トポロジー・パターンよりも有利です。

独立したクラスターにメッセージング・インフラストラクチャーを分離することで、メッセージングのオーバーヘッドがアプリケーション・ターゲット・クラスターから取り除かれます。分離されたメッセージング・インフラストラクチャーを持っている場合には、アプリケーション・ターゲット・クラスター・メンバーに必要なメモリーは少なくなります。このトポロジー・パターンは、また、必要なハードウェアに関して、単一クラスター・トポロジー・パターンとは異なっています。複数のクラスター・メンバーを持つ 2 つのクラスターがあるので、分散環境を構築するためにハードウェア要件が増えています。

管理上の観点からは、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの要件は、単一クラスター・トポロジー・パターンの要件よりも増えています。クラスターやクラスター・メンバーを追加すると、必要な管理上の手間が増えます。さらに、メッセージング・クラスターのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させているので、ポリシーを作成し、維持する必要があります。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、サポート・アプリケーションおよび Common Event Interface (CEI) コンポーネントはやはりアプリケーション・ターゲット・クラスターの一部です。したがって、CEI を頻繁に使用する環境には、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンも理想的ではないことがあります。小規模から中規模のビジネスの場合、または頻繁なモニター要件または監査要件がないビジネスの場合は、通常、このトポロジー・パターンが適しています。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンのスケラビリティ・オプションは、単一クラスター・トポロジー・パターンのオプションと同程度に単純なものです。メッセージング・エンジンが従うのは  $n$  個のポリシーのうちのいずれか 1 つである (各メッセージング・エンジンは 1 つのサーバー上でのみアクティブになる) ため、メッセージング・クラスターにメンバーを追加しても、影響はほとんどありません。ポリシーを使用してサーバーのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させる場合、メッセージングの負担を最大で 3 つのサーバーに分割できます。(SCA.SYSTEM および SCA.APPLICATION のエンジンは、同じサーバー上でアクティブです。) このため、3 つより多くのクラスター・メンバーをメッセージング・クラスターに追加しても、メッセージング・インフラストラクチャーの処理能力は増強されません。アプリケーション・ターゲット・クラスターの拡張は、比較的容易です。ご使用のアプリケーションまたはサポート・インフラストラクチャーのために追加の処理能力が必要な場合は、追加のノードおよびメンバーをアプリケーション・ターゲット・クラスターに追加することができます。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- アプリケーション:
  - Process Server
  - Process Portal
- サポート・インフラストラクチャー・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - ビジネス・ルール・マネージャー
  - REST API サービス

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー

• SCA システム・バス・メンバー

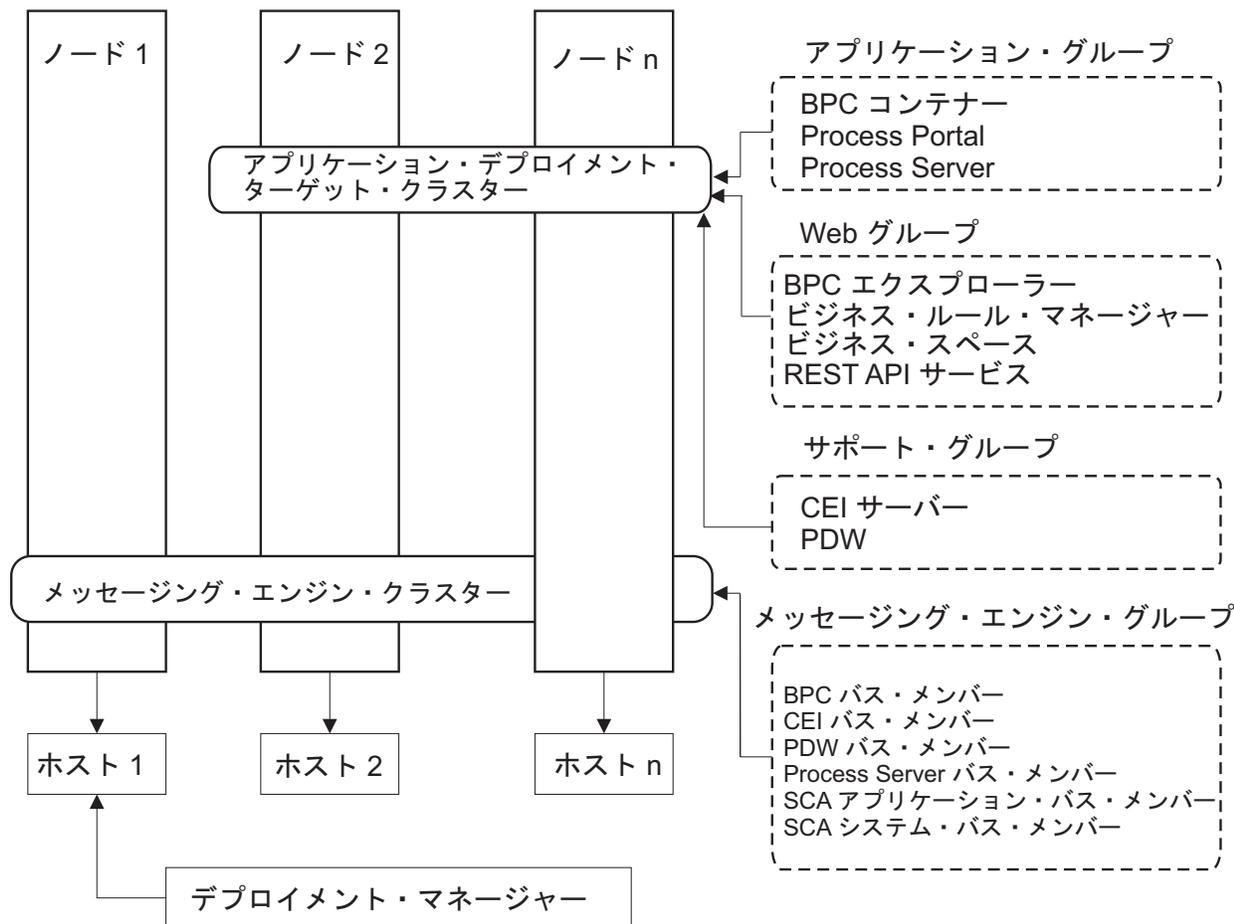


図4. リモート・メッセージング・トポロジー・パターン

## リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン

「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境機能は 3 つの分離したクラスターに分割されます。

この 3 つのクラスターのトポロジー・パターンを使用して、最も高い負荷を処理するクラスターにリソースが割り振られます。このトポロジー・パターンは、最も柔軟性が高く、用途が広いため、ほとんどのユーザー (z/OS を除く) に推奨されます。コンポーネントは 3 つのクラスター間で分割されます。

大規模なコンピューティング・インフラストラクチャーを保有されている多くのお客様には、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンが推奨される環境です。分散プラットフォームのハードウェア要件はより強いものです。ただし、複数のメンバーが特定の機能を実行している 3 つ以上のクラスターを持っている場合に、Java 仮想マシン (JVM) のメモリーの使用を調整しチューニングするのに、より大きい柔軟性があります。

それぞれが自身の機能およびアプリケーションを持つ 3 つのクラスターを作成すると、管理上の余分の負担が追加されます。クラスターやクラスター・メンバーを追加するにつれて、パフォーマンス・チューニング計画の規模が大幅に拡大し、トラブルシューティングの負担が大幅に増すことがあります。メッセージング・クラスターのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させると、ポリシーの作成および保守に関連する管理上の負担も増します。

スケーラビリティの観点からは、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンが最も高い柔軟性を提供します。IBM Business Process Manager 内の個別の機能のそれぞれが 3 つのクラスター間で分割されるため、パフォーマンス上のボトルネックを正確に特定でき、クラスター・サイズもかなり容易に調整できます。追加の Common Event Interface (CEI) 処理が必要な場合は、単純にノードおよびクラスター・メンバーをサポート・クラスターに追加することができます。同様に、ビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスクの処理能力を増強する必要がある場合は、ノードおよびメンバーをアプリケーション・ターゲット・クラスターに追加することができます。3 つより多くのクラスター・メンバーを追加してメッセージング・インフラストラクチャーを拡張しても処理能力には効果はないので、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンのスケーラビリティの制限事項は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンにも適用されます。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの場合と同様に、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンは長期実行ビジネス・プロセス、ステート・マシン、ヒューマン・タスク、および非同期対話 (JMS および MQ/JMS バインディングを含む) のための理想的な環境を提供します。

アプリケーション・ターゲット・クラスターはビジネス・インテグレーション・アプリケーションのみを実行するので、パフォーマンスのチューニングおよび診断は、アプリケーション・ターゲット・クラスターが追加の役割を持っているトポロジー・パターンの場合よりもはるかに単純です。リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンは、モニターおよび監査のために CEI を頻繁に使用する環境 (IBM Business Monitor を使用する環境を含む) でも理想的です。サポート・インフラストラクチャーをそれ自身のクラスターに分割すると、CEI 用およびサポートを行うアプリケーション用の専用のクラスター・メンバーのセットを持つこととなります。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- Process Server
- Process Portal

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

サポート・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- サポート・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - ビジネス・ルール・マネージャー

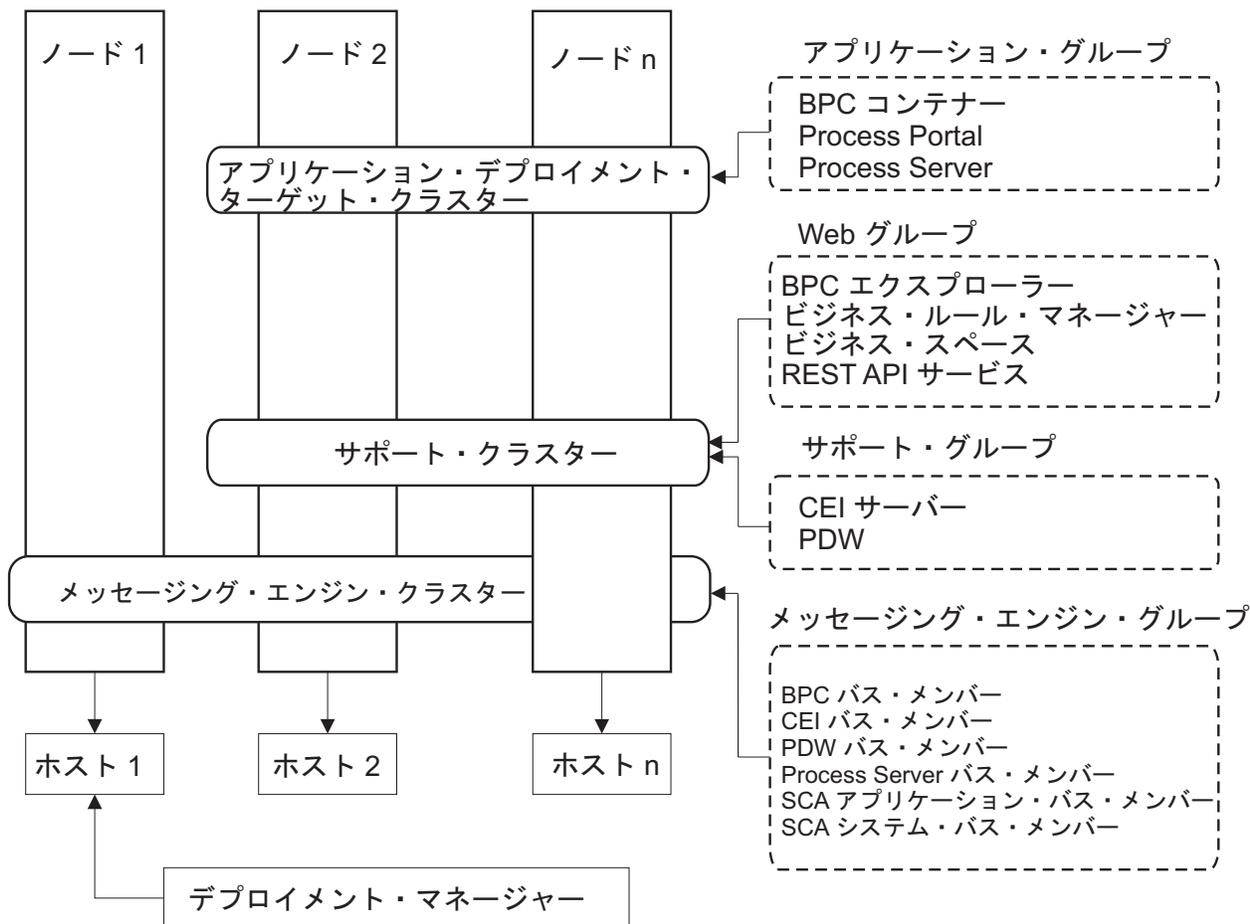


図 5. リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン

### リソース割り振りの例

以下の図は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンを使用してリソースを割り振る 1 つの方法を示しています。この図は、3 つのホストを示しています。ホスト A にはサーバー 1 およびサーバー 3 があります。ホスト B にはサーバー 2、サーバー 4、およびサーバー 5 があります。またホスト C にはサーバー 6 およびサーバー 7 があります。このインストール済み環境に対する最も重い負荷はアプリケーションの使用によって発生するので、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスター (クラスター 3) には、サーバー 1、サーバー 2、およびサーバー 6 のために他の機能のためよりも多くのリソースが割り振られています。

**重要:** ロード・バランシングは、デフォルトの構成であるリモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンでは使用できません。このデフォルト構成で使用されるメッセージング・エンジン・バスは 1 つだけですが、ロード・バランシング機能を使用する場合、2 つ以上のメッセージング・エンジン・バスが必要になります。

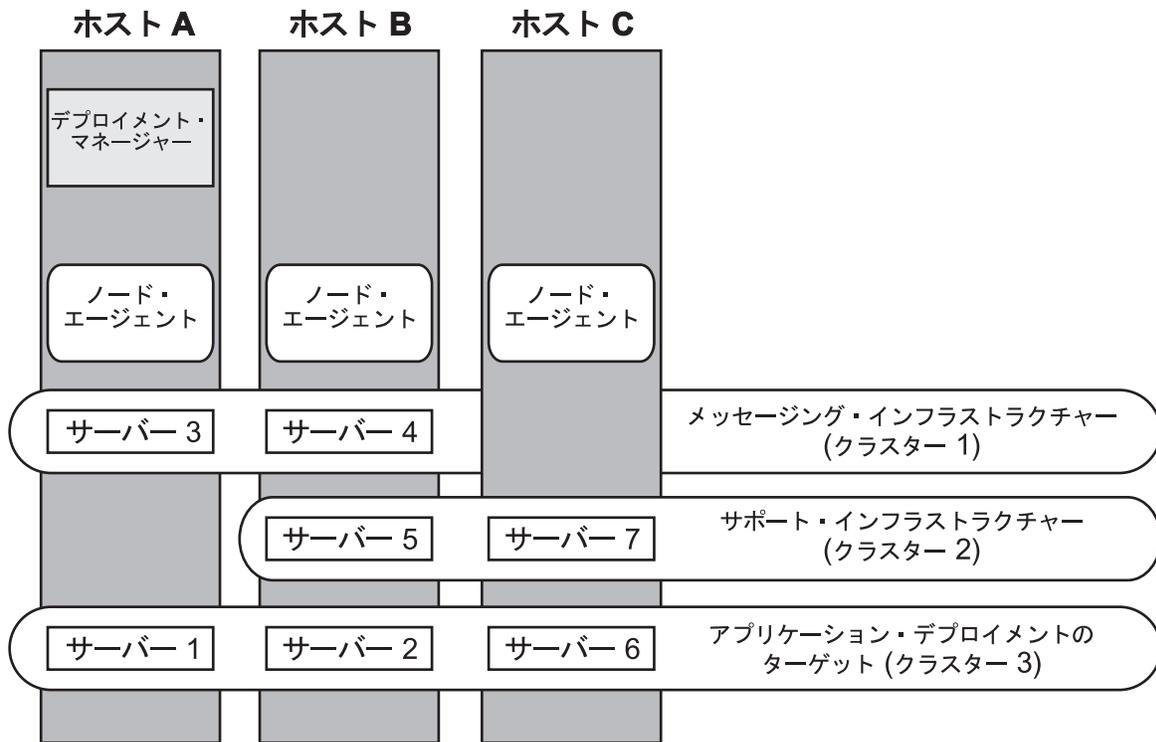


図6. リソース割り振りの例

## リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンの 1 つです。「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能が 4 つの独立したクラスターに分割されます。

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager Advanced で推奨される開始トポロジー・パターンです。

注: このパターンは、IBM Business Monitor が組み込まれていない限り標準構成では使用しないでください。

この 4 つのクラスターからなるトポロジー・パターンは、サポートする Web アプリケーションが独自のクラスターに常駐するという点を除き、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンによく似ています。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- Process Server
- Process Portal

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー

- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

サポート・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- CEI サーバー・アプリケーション
- パフォーマンス・データウェアハウス

Web アプリケーション・クラスターは、以下をホスティングします。

- ビジネス・ルール・マネージャー
- REST API サービス

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能が 4 つの独立したクラスターに分割されます。メッセージング機能に 1 つのクラスター、サポート機能に 1 つのクラスター、アプリケーションに 1 つのクラスター、Web ベースの機能に 1 つのクラスターが使用されます。

環境内の個々のコンポーネントを詳細に制御できる能力に加え、このトポロジー・パターンの利点は、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンの利点に似ています。

リモート・メッセージング、サポート、および Web トポロジーのグラフィカル表現を参照してください。

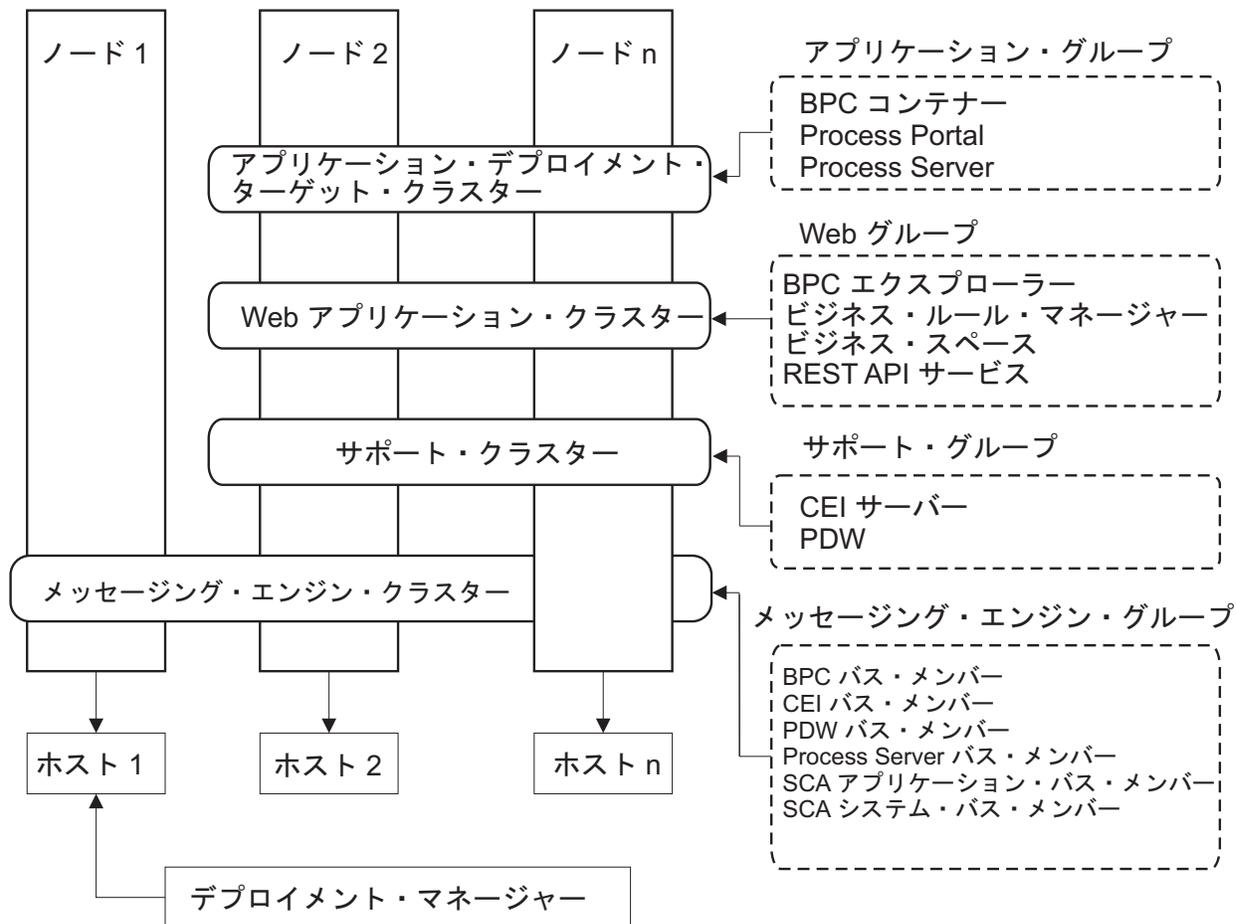


図7. 「リモート・メッセージング、サポート、および Web」 トポロジー・パターン

## カスタマイズされたトポロジー

カスタマイズされたトポロジーは、お客様の状態に固有の処理要件およびビジネス要件に対処します。これは IBM 提供のトポロジー・パターンではなく、ユーザーが作成し、次に固有のニーズに合うように調整するトポロジーです。

ユーザー自身のデプロイメント環境トポロジーを定義する必要がある場合には、カスタマイズされたトポロジーが抜群に柔軟性の高いものです。IBM 提供のトポロジー (単一クラスター、リモート・メッセージング、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート、および リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web) は、すべての IBM Business Process Manager コンポーネントを、それぞれのデフォルトの場所にデプロイします。これらのコンポーネントに関連する追加のオーバーヘッドは、必要な場合とそうでない場合があります。例えば、組織が Common Event Interface (CEI) を必要としない場合は、CEI サポートを使用環境から取り除いたカスタム・トポロジーを作成できます。同様に、ビジネス・ルール・マネージャーの利用を許可しないガバナンス・ルールが組織に存在する場合は、デプロイメント環境からビジネス・ルール・マネージャーを取り除くことができます。

使用環境にデプロイされているコンポーネントを制御できる能力を除けば、カスタム・トポロジーの利点は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジーの利点と同様です。また、欠点も同様です。

**重要:** カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成するには、IBM 提供のトポロジー・パターンを使用する場合よりも多くの労力が必要です。IBM 提供のトポロジー・パターンは、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して作成できます。カスタマイズされた Network Deployment 環境の作成を試行する前に、IBM 提供のトポロジーの中に、ニーズに対処するものがないかを確認してください。管理コンソールのフィーチャーと機能を確かに理解している場合に限り、カスタマイズされた Network Deployment 環境の作成を試行すべきです。

## トポロジーを選択するための考慮事項

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

トポロジー・パターンを選択する場合には、以下の要因を考慮します。

- 使用可能なハードウェア・リソース
- アプリケーションの呼び出しパターン
- 実装を計画しているビジネス・プロセスのタイプ (割り込み可能か割り込み不可能か)
- Common Event Infrastructure (CEI) をどの程度頻繁に使用する予定であるか
- 個別のスケラビリティ要件
- 必要になる管理作業

IBM 提供のトポロジーは、Process Server および Process Center トポロジーの両方に適用することができます。したがって、ご使用の Process Center および Process Server Network Deployment 環境は、同様な方法で編成することができます。

IBM 提供のトポロジーに基づいて Process Server および Process Center 用の環境を作成する手順も、やはり同様なものです。IBM 提供のパターンに関連する唯一の相違点は、実稼働環境用に推奨されるパターンと、それらのパターンを形成するクラスター上で構成されるコンポーネントです。

IBM Business Process Manager の各構成で使用可能なコンポーネント、フィーチャーおよび機能に関する情報については、『IBM Business Process Manager V7.5.1 構成の機能』を参照してください。

IBM 提供のトポロジーに関するヒントに従ってください。

- IBM Process Server デプロイメント環境の場合、最適なトポロジーは以下のとおりです。
  - リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web: 4 クラスター・トポロジー・パターン

**注:** このパターンは、IBM Business Monitor が組み込まれていない限り標準構成では使用しないでください。

- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート: 3 クラスター・トポロジー・パターン
- IBM Process Center デプロイメント環境の場合、最適なトポロジーは以下のとおりです。
  - 単一クラスター・トポロジー・パターン
  - リモート・メッセージング: 2 クラスター・トポロジー・パターン

ご使用の Process Server または Process Center Network Deployment 環境用に選択するパターンは、ユーザーの固有の要件に基づいている必要があります。

ご使用の実稼働環境の計画を立てるときに、共通の各トポロジー・パターンの利点および欠点を綿密に考慮してください。

## 圧縮されたトポロジー・パターンの選択基準

以下の表に記載されている情報を考慮してください。これは、使用する実動トポロジーを選択する場合の簡単な手引きです。この表には、各トポロジー・パターンの利点と欠点の要約リストを示します。

提供トポロジー・パターンをサポートする BPM 製品については、『トポロジー・パターンおよびサポート対象の BPM 製品フィーチャー』を参照してください。

表 22. デプロイメント環境に合わせてトポロジーを選択するための考慮事項

考慮事項	トポロジー・パターン			
	単一クラスター	リモート・メッセージング	リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
保守するクラスターの数	すべてのコンポーネントに対して 1 クラスター	アプリケーションおよびサポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター  メッセージングに対して 1 クラスター	アプリケーションに対して 1 クラスター  サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター  サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター	アプリケーションに対して 1 クラスター  Web インターフェースに対して 1 クラスター  サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター  メッセージングに対して 1 クラスター
ハードウェア要件	限られた数のハードウェアで実装できる	分散環境ではより多くのハードウェアが必要	分散環境ではより多くのハードウェアが必要	必要なハードウェアが最も多い
非同期対話	最低限の使用頻度に抑えることが望ましい	使用頻度はリソースの可用性とのバランスをとる必要がある	非同期対話に理想的な環境	非同期対話に理想的な環境
長期実行プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスク	最低限の使用頻度に抑えることが望ましい	使用頻度はリソースの可用性とのバランスをとる必要がある	割り込み可能プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスクに理想的な環境	割り込み可能プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスクに理想的な環境
非常に高い CEI 活動の頻度	非推奨 (CEI の使用頻度を低くしてリソース使用量とのバランスをとることが望ましい)	非推奨 (CEI の使用頻度を低くしてリソース使用量とのバランスをとることが望ましい)	CEI 使用頻度が高い場合に理想的な環境	CEI 使用頻度が高い場合に理想的な環境
管理上の負担	比較的少ない	手間が増す	管理の手間が増す	管理に最も多くの手間がかかる

表 22. デプロイメント環境に合わせてトポロジーを選択するための考慮事項 (続き)

考慮事項	トポロジー・パターン			
	単一クラスター	リモート・メッセージング	リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
スケーラビリティ	すべてのコンポーネントは同じ比率で拡張される	メッセージング・クラスターのスケーラビリティは制限されている (サーバーの数を 3 つより多くしてもメリットがない)  それ以外のすべてのコンポーネントは同じ比率で拡張される	拡張が容易  すべての機能が独立している  メッセージング・クラスターのスケーラビリティは引き続き制限されている (サーバーの数を 3 つより多くしてもメリットがない)	スケールの変更が最も容易  すべての機能が独立している  メッセージング・クラスターのスケーラビリティは引き続き制限されている (他の BPM 製品を導入するとメリットが出てくる)

#### 関連概念:

『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

40 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

29 ページの『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティ、アベイラビリティ、スケーラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

### トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

管理コンソールで「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する場合、デプロイメント環境のベースにするトポロジー・パターンの可用性は、以下の条件および構成上の決定事項によって異なります。

- IBM Business Process Manager をインストールしたプラットフォーム
- 1 次デプロイメント環境フィーチャーおよび補足フィーチャー

53 ページの表 23 に、トポロジー・パターンと製品フィーチャーとの間の関係を示します。

表 23. 使用可能な提供パターンおよびそれらのパターンと製品フィーチャーとの関係

トポロジー・パターン	クラスター数	説明	サポートされる BPM 製品とフィーチャー	デフォルト状況
単一クラスター	1	<p>メッセージング、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、およびアプリケーション・サポート機能を単一のクラスターに含めます。このトポロジー・パターンは、同期メッセージング環境、PoC (概念検証) 環境、またはアプリケーション・テスト環境に役立ちます。</p> <p>単一クラスター・トポロジー・パターンは、ハードウェアが限られている場合に理想的です。すべてのコンポーネントが同じクラスターにインストールされるため、必要な物理マシンの数が少なく済みます。</p>	<p>以下の製品、またはこれらの製品の組み合わせでサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Process Manager</li> </ul> <p>Advanced 構成および Standard 構成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Monitor</li> </ul>	
リモート・メッセージング	2	<p>このトポロジー・パターンでは、メッセージング環境をアプリケーション・デプロイメント・ターゲットおよびアプリケーション・サポート機能から分離します。このトポロジー・パターンは、日常の運用でメッセージのスループットが重要な要件となる場合に使用します。このトポロジー・パターンは、非同期メッセージング・システムおよびトランザクション・システムの場合に強くお勧めします。</p> <p>Process Center Network Deployment 環境では、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンが処理要件を満たすのに十分である場合がよくあります。</p>	<p>以下の単一の製品インストールによってサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Process Manager</li> </ul> <p>Advanced 構成および Standard 構成</p>	

表 23. 使用可能な提供パターンおよびそれらのパターンと製品フィーチャーとの関係 (続き)

トポロジー・パターン	クラスター数	説明	サポートされる BPM 製品とフィーチャー	デフォルト状況
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	3	このトポロジー・パターンでは、メッセージング、Common Event Infrastructure (CEI)、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、およびアプリケーション・サポート機能を別個のクラスターに分離します。ほとんどのビジネスでは、このトポロジー・パターンを使用してデプロイメント環境をサポートできます。このトポロジー・パターンはパフォーマンスを主眼にして設計され、トランザクション処理をメッセージングおよびその他のサポート機能から分離するように設計されているためです。	以下の単一の製品インストールによってサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager</li> </ul> Advanced 構成および Standard 構成	このトポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager 実稼働環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 このトポロジー・パターンは、以下のインストール済み環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager Advanced (デプロイメント環境も含む)</li> <li>IBM Business Process Manager Standard</li> </ul>
リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web	4	このトポロジー・パターンは、アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、サポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスター、および Web アプリケーション・デプロイメント (Business Process Choreographer Explorer、ビジネス・スペース、および Business Rules Manager) 用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。	以下の製品、またはこれらの製品の組み合わせでサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager</li> </ul> Advanced 構成および Standard 構成 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Monitor</li> </ul>	このトポロジー・パターンは、IBM Business Monitor インストール済み環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 標準構成の場合、ご使用のトポロジーに IBM Business Monitor が含まれている場合に限り、このパターンを選択します。

## 各構成の構成可能コンポーネント

IBM Business Process Manager のさまざまな構成をインストールする場合、インストールおよび構成プロセス時に特定のコンポーネントがユーザーに表示されます。Network Deployment の場合、これらのコンポーネントは 1 つのクラスター内か、複数のクラスター内にあることが可能です。

55 ページの表 24 に、各種構成それぞれのコンポーネントを示します。

表 24. IBM Business Process Manager コンポーネント

コンポーネント	Advan- -ced	WebSphere ESB	Stan- dard	Express
Process Server	X		X	X
Process Server メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X		X	X
パフォーマンス・データウェアハウス	X		X	X
Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X		X	X
共通データベース	X	X		
Common Event Infrastructure (CEI) メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X	X		
サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) (Service Component Architecture)	X	X		
SCA アプリケーション・メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X	X		
Business Space	X	X		
Business Process Choreographer	X			
Business Process Choreographer メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X			
Business Process Choreographer Explorer	X			

#### 関連概念:

50 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

40 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

## 標準化された Network Deployment 環境とカスタマイズされた Network Deployment 環境のどちらを作成するかの判断

プロファイルの作成後に、Network Deployment 環境を形成するサーバー、サーバー・クラスターおよび製品コンポーネントを構成するには 2 つの方法があります。IBM 提供のトポロジー・パターンに基づいて、標準化された Network Deployment 環境を作成できます。または、ユーザーのビジネス・プロセス要件に応じてカスタマイズされた方法で、サーバー、サーバー・クラスターおよび製品コンポーネントをセットアップして、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成することもできます。

### 標準化された Network Deployment 環境を作成する理由

IBM 提供のトポロジー・パターン (IBM Business Process Manager にテンプレートとしてパッケージ化) が、ユーザーのビジネス・プロセス要件のすべてまたは大部分を満たしている場合、デプロイメント環境ウィザードを使用して、標準化された Network Deployment 環境を作成します。デプロイメント環境ウィザードを使用すると、いくつかの事前定義トポロジーに従ってクラスターとサーバーを生成し、それらのクラスターとサーバー全体に複数のコンポーネントをすべて同時に構成することができます。

カスタマイズされた Network Deployment 環境ではなく、標準化された Network Deployment 環境を作成するその他の理由は、以下のとおりです。

- サーバー、サーバー・クラスターおよび IBM Business Process Manager コンポーネントの作成と構成に必要な管理コンソールのフィーチャーおよび機能の使用経験が豊富なユーザーがいません。
- 管理アプリケーションで単一のウィザードを実行して、複数のコンポーネントを構成します。
- データベース設計ファイルをインポートして、データベース関連リソース定義の値を指定します。データベース設計ファイルの作成については、621 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- 現在の環境にインポートして、必要に応じてカスタマイズできる、事前定義デプロイメント環境が提供されています。

## カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成する理由

ユーザーのビジネス・プロセス要件が複雑で、IBM 提供のトポロジー・パターンでは十分に対応できない場合、管理コンソールのフィーチャーおよび機能を使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成します。

標準化された Network Deployment 環境ではなく、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成するその他の理由は、以下のとおりです。

- 管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成するために必要な経験と知識がユーザーに豊富にあります。
- マルチクラスター環境に必要な概念およびコンポーネント・アーキテクチャーを理解しています。
- IBM Business Process Manager コンポーネント自体を構成する前に、そのコンポーネントをデプロイするクラスターまたはサーバーを構成したいと考えています。

## IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー

Network Deployment 環境では、ワークロード・バランシングとフェイルオーバーの目的で、IBM HTTP Server をプロキシ・サーバーとして構成できます。着信 HTTP 要求は、アプリケーション・サーバーに直接送信されるのではなく、プロキシ・サーバーに送信されます。このプロキシ・サーバーにより、処理を実行する複数のアプリケーション・サーバーの間で要求が分散されます。

具体的な構成ステップは環境によって異なりますが、IBM HTTP Server を使用したワークロード・バランシングとフェイルオーバーの計画と実装には、以下の一般的なタスクが役立ちます。

1. 『WebSphere Application Server トポロジーのフロントエンドの選択』を参照して、プロキシ・サーバー・フロントエンドの使用方法を詳しく確認します。
2. Web サーバー・プラグインを実装します。このプラグインを、ローカルのデプロイメント・マネージャー・プロファイルの一部としてインストールし、構成します。詳しくは、WebSphere Application Server に関する以下のトピックを参照してください。
  - Web サーバー・プラグインの実装
  - Web サーバー・プラグインのインストールと構成 (このトピックのシナリオ 5 を参照)
3. WebSphere Application Server の Deployment Manager と IBM HTTP Server 管理サーバーの間に Secure Sockets Layer (SSL) を構成します。SSL 接続を受け入れてトランザクションを実行できるように、IBM HTTP Server からの自己署名証明書を受け付けるように Application Server を構成する必要があります。詳しくは、IBM HTTP Server 管理サーバーと Deployment Manager の間の SSL の構成を参照してください。
4. 構成ファイルが Web サーバーを指し、Process Server がオンライン・モードとなり、通信が HTTP over SSL または HTTP Secure (HTTPS) に対応するように、Process Server クラスターまたは Process

Center クラスターをカスタマイズします。709 ページの『Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ』を参照してください。

---

## データベース構成の計画

データベース構成の計画を立てるには、該当ソフトウェアを使用するためにどのデータベースが所定の位置になければならないか、また構成する必要があるか、IBM Business Process Manager のどのコンポーネントを使用するのか、およびそれらに関連するデータベース、データベースを管理するのに必要なタスク、および使用するデータベース・システムのセキュリティ特権を知っている必要があります。

## データベースと IBM Business Process Manager トポロジー

データベース構成は、IBM Business Process Manager トポロジー全体の一部です。構成アクティビティについては、Process Center と Process Server のデータベースがトポロジーおよびランタイム処理に関係する場合の相違を理解する必要があります。

Process Center は同じデータベース・スキーマを共有しますが、保管されるインスタンス・データには具体的な違いがあります。Process Center および Process Server のインスタンスごとに、共有スキーマの別個のインスタンスがなければなりません。

「標準プロファイル作成」オプションを使用する場合、データベース設計ツールは、デフォルトのデータベースの構成のために自動的に SQL スクリプトを生成します。

インストール中にスタンドアロン開発プロファイル (qesb) を作成する場合には、必須のデータベースは自動的に構成されます。ユーザーはデータベース要件を設計する必要はありません。

データベース表を手動で作成する場合は、データベース設計ツールを使用して SQL スクリプトを作成します。このツールを使用すると、生成される SQL スクリプトは必ず固有になるからです。

**制約事項:** Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

ユーザーは、データベースの構成情報を、以下のいずれかの方法でプロファイル作成プロセスに取り込むことができます。

- データベース設計ファイルを参照する
- プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデータベース構成パラメーターの設定

データベース構成を実装するために選択する方法に関係なく、プロファイル作成プロセスの一環として SQL スクリプトを生成する必要があります。Process Server 間または Process Server のクラスター間で SQL スクリプトを再使用することはできません。

データベースを構成する前に、ソリューション・アーキテクトとデータベース管理者は、データベース・トポロジーに関して共同作業を行って、データベース表を保管する最善の方法を理解する必要があります。例えば、表は共通データベースと同じデータベースに保管されるのかどうか。あるいは、表は別個のデータベースにスタンドアロン・プロファイルとして保管されるのかどうか。別個のデータベースは、データベース構成を単純化するので、役に立つ可能性があります。別個のデータベースを使用して、スタンドアロン・サーバー環境で、共通データベースとは別個にコンポーネント・データベースを調整し管理することが可能な場合もあります。

データベース設計ツールに関する詳細については、『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

## Process Center データベースおよび Process Server データベース

IBM Business Process Manager Express および IBM Business Process Manager Standard にはデータベース構成パターンが含まれており、したがって各ランタイム環境用にデータベース設計を作成することができます。いずれかのパターンを使用して、Process Server および Performance Data Warehouse Server コンポーネント用のデータベース構成を作成することができます。

IBM Business Process Manager Advanced には、同じデータベース構成パターンに加えて、**bpm.advanced.standalone.dbDesign** と呼ばれる追加パターンが含まれています。

**bpm.advanced.standalone.dbDesign** パターンを、共通データベース内の Process Server および Performance Data Warehouse サーバー・コンポーネント用のデータベース・スキーマとして使用することができます。Process Server と Performance Data Warehouse ランタイム環境を結合するスタンドアロン・プロファイルを作成する場合、このパターンを使用します。このパターンを共通データベース用に使用する場合、カスタム・スキーマ値は指定されません。

デプロイメント環境ウィザードによる procsry および pctrsry データベース設計も使用することができます。標準 (standard) 構成または拡張 (advanced) 構成内の Network Deployment 環境については、これらのパターンは、デプロイメント・ホスト上の Process Server または Process Center のセットアップの一部です。

## データベース・タイム・ゾーンおよび文字セットに関する考慮事項

IBM Business Process Manager に使用するデータベース・サーバーのタイム・ゾーンは変更しないでください。IBM BPM に必要な国別文字セットは、Oracle のデフォルト値とは異なります。

### タイム・ゾーンに関する考慮事項

データベースに保管されているタイム・スタンプは、データベース・サーバーに対して構成されているタイム・ゾーンに基づいています。このデータベース・タイム・ゾーンへの依存関係のため、既にタイマーがスケジュールされている場合は、既存のセットアップのデータベース・サーバーのタイム・ゾーン構成を変更しないでください。データベース・サーバーのタイム・ゾーン構成を変更すると、予期しない時刻に既存のタイマーがトリガーされる可能性があります。

フェイルオーバーまたは災害復旧の理由で 2 番目のデータベース・サーバーが存在する場合は、両方のデータベース・サーバーを、それらの物理的な位置に関係なく、同じタイム・ゾーンに構成してください。

### Oracle データベース用の文字セットに関する考慮事項

IBM BPM では、Oracle データベースが Unicode 対応であることが必要です。Oracle には、データベースでの CHAR 型および NCHAR 型の格納方法に影響する文字セット・パラメーターが 2 つあります。

1. データベース文字セット (CHAR 型) の場合、IBM BPM では AL32UTF8 が必要です。
2. 国別文字セット (NCHAR 型) の場合、IBM BPM では UTF8 が必要です。

IBM BPM に必要な国別文字セットは、Oracle のデフォルト値とは異なることに注意してください。

文字セット・パラメーターについての詳しい説明は、関連する Oracle 情報を参照してください。

#### 関連情報:

Oracle Database Migration Assistant for Unicode

## 共通データベースを構成する方法とタイミングの選択

必須のデータベース表は、IBM Business Process Manager の構成前または構成後に作成することができます。いずれの場合も、IBM Business Process Manager のサーバーがデータベースを使用しようとする前に、データベース (テーブルやスキーマなども含む) が既に存在している必要があることに注意してください。

共通データベースは、IBM Business Process Manager プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- IBM Business Process Manager を構成する前:
  - IBM Business Process Manager に用意されているデフォルトのスクリプトを編集して実行します。デフォルトのスクリプトは、共通データベースおよび Business Process Choreographer テーブルの作成のみに使用できます。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- IBM Business Process Manager を構成した後:
  - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように IBM Business Process Manager を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時に行うことができます。また、プロファイルの作成後までデータベース表の作成と構成を遅らせることができます。プロファイル管理ツールを使用してデータベース・スクリプトを生成し、そのスクリプトをデータベース表の作成と構成に使用することができます。生成されるこれらのスクリプトは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

## サポートされているデータベース・タイプ

データベースの選択は、IBM Business Process Manager と共に使用するオペレーティング・システムおよびフィーチャーによって異なります。

IBM Business Process Manager でサポートされるデータベースのリストについては、60 ページの表 25を参照してください。

IBM Business Process Manager には、DB2、Oracle、および SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージ化されています。JDBC ドライバーについて (バージョンおよびレベル情報を含む) は、「Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager」の Web ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager でパッケージ化されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルの提供は、お客様の責任において行ってください。

DB2 Express データベースは IBM Business Process Manager ソフトウェアに組み込まれており、IBM Business Process Manager のインストール時に自動的にインストールおよび構成することができます。

**重要:** Linux DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

注: 現在、DB2 Express インストーラーには、IBM Business Process Manager インストーラーから渡されるプロパティーでの各国語 (NL) スtringの取り込み関する、既知の制約事項があります。DB2 Express のインストール時に DB2 Express に渡される以下の値に、NL Stringを組み込むことはできません。

Linux Windows

- Linux インスタンス・ユーザー名およびパスワード: bpminst および bpminst1
- Linux 隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: bpmfenc および bpmfenc1
- Linux 管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: bpmadmin および bpmadmin1
- Windows 管理ユーザー名およびパスワード: bpmadmin および bpmadmin1

各データベースは、文字Stringのパラメーター *dbType* で表されています。*dbType* パラメーターは、**manageprofile** コマンド行ユーティリティーのパラメーターとして使用されます。サポートされているデータベースの *dbType* の値を表 25 にまとめます。

表 25. サポートされているデータベース・タイプ、その関連 *dbType* の値および制約事項

サポートされているデータベース	dbType の値	制約事項および注意事項
DB2 Express	DB2_UNIVERSAL	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 <sup>®</sup> Universal	DB2_UNIVERSAL	
DB2 データ・サーバー	DB2_DATASERVER	ダウンロード元: 9.7 GA レベル フィックスパック
DB2 for z/OS	DB2UDBOS390	DB2 for z/OS をデータベース管理システムとして使用する場合は、 <b>createDB.sh</b> スクリプトを使用してデータベースおよびデータベース・オブジェクトを構成する必要があります。インストーラー・ウィザードは、このタイプのデータベースを作成できません。

表 25. サポートされているデータベース・タイプ、その関連 dbType の値および制約事項 (続き)

サポートされているデータベース	dbType の値	制約事項および注意事項
Microsoft SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC 1.2 および 2.0 = MSSQLSERVER_MICROSOFT	Microsoft SQL Server JDBC 3.0 もサポートされていますが、Profile Management Tool には個別のデータベース・タイプとしてリストされません。Microsoft SQL Server JDBC 3.0 をデータベース管理システムとして使用する場合は、Microsoft SQL Server JDBC 2.0 のデータベース・タイプを選択すると、バージョン 3.0 がサポートされます。 <b>注:</b> Process Server および Performance Data Warehouse データベースを、CommonDB で共用することはできません。 <b>注:</b> Latin 以外のロケールを指定する必要がある場合、 <b>createDatabase.sql</b> スクリプトは使用できません。大小文字が区別されない別のロケールを指定する必要があります。 <b>重要:</b> データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。XA トランザクションを構成しないと、サーバーの始動時にエラーが発生することがあります。610 ページの『XA トランザクションの構成』を参照してください。
Oracle	ORACLE	インストール・ウィザードは、Oracle 用のこのタイプのデータベースを作成できません。

ファイル・パスとファイルの命名規則で使用する 2 番目のパラメーターは、*feature* です。このパラメーターでは、対象になっているデータベースを指定します。表 26 は、各データベースとそれぞれに関連付けられている *feature* パラメーターをまとめたものです。

表 26. 各データベースとそれぞれに関連付けられている *feature* 名

データベース	フィーチャー
Process Server	ProcessServer
パフォーマンス・データウェアハウス	PerformanceDW
共通データベース	CommonDB
エンタープライズ・サービス・パスのロガー・メディエーション・データベース	EsbLoggerMediation

IBM Business Process Manager をインストールすると、データベース・スクリプトが以下の場所に作成されます。

`INSTALL_ROOT/dbscripts/feature/dbType`

*feature* は以下のいずれかです。

- CommonDB
- EsbLoggerMediation
- ProcessServer

- PerformanceDW

ほとんどの JDBC プロバイダーの作成は、指定されたデータベース・パラメーターに基づいて、プロファイルの作成中に実行されます。ただし、Business Process Choreographer JDBC プロバイダーは、スクリプトまたは管理コンソールを使用して、後で作成されます。適切な JDBC プロバイダーがサーバーまたはクラスターに存在していれば、その既存の JDBC プロバイダーが使用され、新しいプロバイダーの作成は省略されます。

#### 関連概念:

64 ページの『JDBC ドライバーおよびロケーション』

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

#### 関連情報:

 DB2 データベースを使用したカスタム・ユーザー・レジストリー・データの保持

## データベース命名の制約事項

データベースは、IBM Business Process Manager の複数のインストール済み環境にわたって再使用することはできません。IBM Business Process Manager の各インストール済み環境は、関連するデータベースを排他使用する必要があります。データベースは、一意的に識別できるように構成される必要があります。

選択するインストール・パスに応じて、インストールに関連するデータベースはデフォルト名を使用して構成されることがあります。例えば、IBM DB2 上の IBM Business Process Manager Advanced に関連付けられたデータベースは、以下のデフォルト名を持ちます。

- Process Server - BPMDB
- Performance Data Warehouse - PDWDB

DB2 を使用する 2 つの IBM Business Process Manager のインストール済み環境がある場合には、インストール済み環境のうちの 1 つに対して、デフォルト値を受け入れるのではなく名前を指定するインストール・パスを選択する必要があります。

データベース名の固有性を確実にするために、データベース名を求めるプロンプトを出すインストール・パスを選択します。

例えば、「標準」インストール・パスを使用するときに、データベース名を求めるプロンプトが出されません。デフォルトの DB2 Express ではなく既存のデータベース・サーバーを使用するオプションを選択します。

注: インストール後にプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するときに、プロファイル管理ツールのどのパス（「標準」または「拡張」）を選択しても、データベース名を求めるプロンプトが出されません。唯一の例外は、ご使用のデータベース構成用のデータベース設計ファイルを使用する場合です。データベース設計ファイルには、データベース名、ユーザー名、およびパスワード情報が含まれています。したがって、プロファイル管理ツールはこの情報を求めるプロンプトは出しません。

以下のケースでは、対照的に、ユーザーに対してデータベース名を求めるプロンプトは出されません。

- Installation Manager はプロファイルを作成するオプションを提供しますが、データベース名にはデフォルト値を割り当てます。

- 「標準」インストール・パスを使用しており、インストール・イメージと一緒にパッケージされている DB2 Express をインストールするよう選択しています。データベース名にはデフォルト値が割り当てられます。

追加の制約事項がデータベース名の命名に適用されます。これらの制約事項は、使用しているデータベース・サーバーによって決まります。

## IBM Business Process Manager Standard のインストール

IBM DB2 および Microsoft SQL Server データベースの場合、以下の制約事項が適用されます。

- Process Server および Performance Data Warehouse のコンポーネントは別個のデータベースになければなりません。
- Process Server および Performance Data Warehouse のコンポーネントは、大/小文字の区別のあるデータベースはサポートしません。これらのデータベースは大/小文字を区別しないものでなければなりません。

Oracle データベースの場合、Process Server および Performance Data Warehouse のコンポーネントは別個のスキーマ/ユーザーを使用しなければなりません。これらは同じインスタンスを使用することができます。

## IBM Business Process Manager のデータ・ソース

データ・ソースは、アプリケーションとリレーショナル・データベースの間のリンクを提供します。使用するデータ・ソースは、スタンドアロン環境あるいは Network Deployment 環境のいずれをセットアップするかによって影響されます。

アプリケーションは、データ・ソースを使用して、リレーショナル・データベースへの接続を取得します。データ・ソースは、他の種類のエンタープライズ情報システム (EIS) に接続するための Java EE コネクタ・アーキテクチャ (JCA) 接続ファクトリーに類似しています。

データ・ソースは、固有のタイプのデータベースに接続するドライバー実装クラスを提供する Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーに関連しています。アプリケーション・コンポーネントはデータ・ソースと直接対話して、ご使用のデータベースへの接続インスタンスを取得します。各データ・ソースに対応する接続プールによって、接続を管理できます。

さまざまな設定で複数のデータ・ソースを作成し、それらを同じ JDBC プロバイダーに関連付けることも可能です。例えば、同じデータベース・アプリケーション内でさまざまなデータベースにアクセスするために複数のデータ・ソースを使用する、といった状況が考えられます。IBM Business Process Manager において、JDBC プロバイダーは以下のデータ・ソース・インターフェースの 1 つまたは両方を実装する必要があります。これらのインターフェースを使用して、アプリケーションを単一フェーズまたは 2 フェーズのトランザクション・プロトコルで実行します。

### ConnectionPoolDataSource

2 フェーズ・コミット・トランザクション以外のローカル・トランザクションとグローバル・トランザクションにアプリケーションが参加することを可能にするデータ・ソース。接続プールのデータ・ソースがグローバル・トランザクションに関わる場合は、トランザクション・マネージャーがトランザクションのリカバリーを実施することはありません。複数のリソース・マネージャーが関わっている場合は、バックアップ・リカバリー・プロセスをアプリケーション側で用意する必要があります。

以下の表には、標準的なスタンドアロン環境のセットアップと標準的なデプロイメント環境のセットアップの例を示します。

表 27. 標準的なスタンドアロン環境のセットアップ

データ・ソース	コンポーネント	Scope	JNDI 名
WBI データ・ソース	CommonDB	ノード	jdbc/WPSDB
SCA アプリケーション・バス ME データ・ソース	SCA ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-SCA.APPLICATION.localhostNode01Cell.Bus
イベント	CEI	サーバー	jdbc/cei
CEI ME データ・ソース	CEI ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-CEI.cellName.BUS

表 28. 標準的なデプロイメント環境のセットアップ

データ・ソース	コンポーネント	Scope	JNDI 名
WBI データ・ソース	CommonDB	セル	jdbc/WPSDB
SCA アプリケーション・バス ME データ・ソース	SCA ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-SCA.APPLICATION.enduranceTestCell01.Bus
イベント	CEI	クラスター	jdbc/cei
CEI ME データ・ソース	CEI ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-CEI.cellName.BUS

## JDBC ドライバーおよびロケーション

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

以下のサポートされている JDBC ドライバーは、製品のインストール・ファイルに含まれています。

表 29. 製品に付属しているサポート対象の JDBC ドライバーとそのロケーション

サーバー	ドライバーの説明	ドライバーのロケーション	コメント
DB2	IBM DB2 Universal JDBC Driver 3.61.65	WAS_HOME/jdbcdrivers/DB2	IBM DB2 Universal JDBC Driver は、分散プラットフォームおよび z/OS プラットフォームでのデフォルトの DB2 ドライバーです。
	IBM Data Server Driver for JDBC and SQLJ 4.11.69		
Oracle	Oracle JDBC Driver 11g 11.2.0.1.0	WAS_HOME/jdbcdrivers/Oracle	
SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC Driver 2.0	WAS_HOME/jdbcdrivers/SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC Driver 2.0 は、SQL Server 1.2、2.0、および 3.0 をサポートしています。

以下のサポートされている JDBC ドライバーは、製品のインストール・ファイルに含まれていません。

表 30. 製品に付属していないサポート対象の JDBC ドライバー

サーバー	ドライバーの説明
Oracle	Oracle JDBC Driver 11g 11.1.0.6
SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC ドライバー 1.2
	Microsoft SQL Server JDBC ドライバー 3.0

#### 関連概念:

59 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』

データベースの選択は、IBM Business Process Manager と共に使用するオペレーティング・システムおよびフィーチャーによって異なります。

#### 関連情報:



IBM Business Process Manager Advanced のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細

## 必須のデータベース管理者タスクの識別

IBM Business Process Manager での何らかのタイプのデータベース作成および構成タスクを実行したい場合には、データベース管理者 (DBA) である必要があります。

### データベースの選択

データベースの構成方法の選択

### データベース特権およびセキュリティ上の考慮事項

- 66 ページの『データベース特権』
- 必要なセキュリティ権限の明確化

### プロファイルの作成

- プロファイルの作成および拡張に対する前提条件
- スタンドアロン環境の作成
- カスタム・インストール後に 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成するためのソフトウェアの構成
- 

**ヒント:** デプロイメント環境フィーチャーを使用する場合には、デフォルトのデータベース・サーバー以外のデータベースを、ご使用のデータベース製品として使用することができます。データベース構成パネル上の「データベースで認証するユーザー名」フィールドに提供するユーザー ID は、DBA 特権を備えている必要があります。

### データベースの構成

- プロファイルを作成または拡張する前のデータベースおよびテーブルの作成
  - データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成
- プロファイルを作成または拡張した後のデータベースおよびテーブルの作成
  - プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成
  - データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成

- 86 ページの『メッセージング・エンジン・データベース構成の計画』

## 関連リンク

- Business Space の構成

## 非管理ユーザーの考慮事項

インストール中には、入力できるように、データベースの詳細を覚えておいてください。

このトピックで説明する考慮事項は、「標準 (Typical)」インストール・オプションを使用してインストールすることを選択したインストール・シナリオに適用されます。「標準 (Typical)」インストール・オプションを使用してインストールを行うと、プロファイルが自動的に作成されます。

注: テスト・プロファイルは、IBM BPM 拡張構成で使用する場合にのみ該当します。

非管理ユーザーとしてインストールを行う場合は、以下の選択肢があります。

注: 製品に組み込まれている (オプションでインストールした) DB2 Express データベースを使用する場合は、以下の基準を満たしている必要があります。

- 他のバージョンの DB2 をすべてシステムからアンインストールする
- 非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして IBM Business Process Manager をインストールする

## データベース特権

サポートされるデータベース管理システムごとに、データ・ストア・テーブルの作成またはアクセスに必要な権限を決めるために、データベース特権を設定します。

インストーラー、プロファイル管理ツール、データベース設計ツール、またはスクリプトを使用してスキーマを作成する場合、テーブルを作成する権限のあるユーザー ID が必要です。テーブルが作成された後は、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行う権限が必要です。

次の表では、データ・ストアにアクセスするために必要なデータベース特権について説明します。

表 31. データベース特権

ヘッダー	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
DB2	ユーザー ID には、データベースに関する CREATETAB 権限と、テーブル・スペースを作成するための CREATETS 権限が必要です。また、ユーザー ID には、スキーマに関する CREATEIN 特権と DROPIN 特権も必要です。ユーザー ID にはシステム特権 CREATEDBA および CREATEDBC が必要です。また、ユーザー ID には、作成されたテーブルに関する ALTER、DELETE、INDEX、INSERT、REFERENCES、SELECT、および UPDATE 特権も必要です。	ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。また、ユーザー ID には、ストアード・プロシージャーに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権も必要です。  IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する DB2 データベース特権について詳しくは、『68 ページの表 32』を参照してください。

表 31. データベース特権 (続き)

ヘッダー	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
DB2 for z/OS	<p>ユーザー ID には、データベースに関する CREATETAB 権限と、テーブル・スペースを作成するための CREATETS 権限が必要です。また、ユーザー ID には、スキーマに関する CREATEIN 特権と DROPIN 特権も必要です。データベースのストレージ・グループを作成するには、ユーザー ID には CREATESG、CREATEDBA、および CREATEDBC システム特権が必要です。また、ユーザー ID には、作成されたテーブルに関する ALTER、DELETE、INDEX、INSERT、REFERENCES、SELECT、および UPDATE 特権も必要です。</p>	<p>ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。また、ユーザー ID には、ストアド・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権も必要です。</p> <p>IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する DB2 for z/OS データベース特権について詳しくは、69 ページの表 33 を参照してください。</p>
Oracle	<p>ユーザー ID には、データ・ストア・スキーマ内にリレーショナル・テーブルおよび索引を作成するための十分な特権が必要です。またデータベースには、スキーマの所有者のデフォルト・テーブル・スペースにおけるスペース割り当て量も必要です。</p>	<p>ユーザー ID には、データベースに接続するための SESSION 特権が必要です。データ・ストア・スキーマと、データベースに接続するコンポーネントの両方を同じユーザー ID が所有している場合、このユーザー ID にはテーブルを処理するのに十分な特権が設定されています。そうでない場合、ユーザー ID には、データ・ストアを構成するテーブルに関する SELECT、INSERT、UPDATE、ALTER、および DELETE オブジェクト特権と、TRUNCATE TABLE ステートメントの使用を可能にする DROP ANY TABLE システム特権が必要です。ユーザー ID には CREATE INDEX 特権も必要です。</p> <p>Oracle データベースの作成には UTF-8 文字セットを使用してください。この文字セットは、IBM Business Process Manager でサポートされるその他のカスタム文字セットをサポートしています。</p> <p>IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する Oracle データベース特権について詳しくは、『71 ページの表 34』を参照してください。</p>

表 31. データベース特権 (続き)

ヘッダー	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
SQL Server	理想的な場合、ユーザー ID には IBM Business Process Manager に使用されるデータ・ストアに関する DB OWNER 特権が必要です。	SQL Server および Windows の認証が SQL Server ログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルの所有者か、または TRUNCATE TABLE ステートメントを実行する十分な権限を持つグループのメンバーでなければなりません。  IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する SQL Server データベース特権については詳しくは、『72 ページの表 35』を参照してください。

表 32 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の DB2 データベース特権について説明しています。

表 32. DB2 データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE
Business Space	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。

表 32. DB2 データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Process Server パフォーマンス・データウェアハウス	<p>データベースの作成に必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATEDBA</li> <li>• CREATEDBC</li> </ul> <p>データベースにスキーマおよびストアド・プロシージャを取り込むために必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATETAB</li> <li>• CREATEIN</li> <li>• DROPIN</li> </ul> <p>作成されたテーブルに関するその他の必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALTER</li> <li>• DELETE</li> <li>• INDEX</li> <li>• INSERT</li> <li>• REFERENCES</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul>	<p>Process Server および Performance Data Warehouse データベース内のテーブルに関する必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• DELETE</li> <li>• INSERT</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul> <p>実行時ユーザーには、<code>createProcedure_ProcessServer.sql</code> スクリプト内の 6 つのストアド・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権が必要です。</p> <p>実行時ユーザーには、Performance Tracking Server データベースについても、上記の特権のすべてが必要です。さらに、ユーザーは Performance Tracking データベース内に新しいテーブルを作成できるように、CREATETAB 特権も必要です。</p> <p>システム・メタデータ・テーブルを読み取るには、<code>syscat.tables</code>、<code>syscat.views</code>、<code>syscat.columns</code>、<code>syscat.tabconst</code>、および <code>sysibm.sysdummy1</code> に関する SELECT 権限が必要です。</p>

データベースを作成し、DB2 ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
create database database_name; automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to database_name;
grant dbadm on database to user user_name;
UPDATE DB CFG FOR database_name USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR database_name USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

表 33 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに関する追加の DB2 for z/OS データベース特権について説明します。

表 33. DB2 for z/OS データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE
Business Space	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE

表 33. DB2 for z/OS データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE TABLESPACE、CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server パフォーマンス・データウェアハウス	データベースの作成に必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATESG</li> <li>• CREATEDBA</li> <li>• CREATEDBC</li> </ul> データベースにスキーマおよびストアード・プロシージャを取り込むために必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATETS</li> <li>• CREATETAB</li> <li>• CREATEIN</li> <li>• DROPIN</li> </ul> 作成されたテーブルに関するその他の必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALTER</li> <li>• DELETE</li> <li>• INDEX</li> <li>• INSERT</li> <li>• REFERENCES</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul>	Process Server および Performance Data Warehouse データベース内のテーブルに関する必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• DELETE</li> <li>• INSERT</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul> 実行時ユーザーには、createProcedure_ProcessServer.sql スクリプト内の 6 つのストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権が必要です。  実行時ユーザーには、Performance Tracking Server データベースについても、上記の特権のすべてが必要です。さらに、ユーザーは Performance Tracking データベース内に新しいテーブルを作成できるように、CREATETS および CREATETAB 特権も必要です。  システム・メタデータ・テーブルを読み取るには、sysibm.systables、sysibm.sysviews、sysibm.syscolumns、sysibm.syschecks、sysibm.sysrels、sysibm.systabconst、sysibm.systablespace、および sysibm.sysdummy1 に関する SELECT 特権も必要です。

71 ページの表 34 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の Oracle データベース特権について説明しています。

**重要:** 以下のすべてのコンポーネントを 1 つの Oracle データベースに対して構成する場合は、コンポーネントごとに指定されているすべての特権のスーパーセットを作成することができます。以下の 4 つのコンポーネントを多数のデータベースに対して構成する場合は、データベースごとに異なる特権を設定できません。

表 34. Oracle データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE, ALTER TABLE, INSERT, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE
Business Space	CREATE TABLE, ALTER TABLE, INSERT, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE, ALTER TABLE, CREATE VIEW, CREATE TABLESPACE, CREATE USER, CREATE PROCEDURE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE, ALTER TABLE, CREATE VIEW, CREATE TABLESPACE, CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT、および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
Common Event Infrastructure (CEI)	CREATE TABLE, CREATE INDEXTYPE, ALTER TABLE, CREATE VIEW, ALTER SESSION, SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE TABLESPACE, CREATE PROFILE, CREATE ROLE, CREATE PROCEDURE, CREATE TEMPORARY TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE PROCEDURE
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server	CREATE TABLE, SELECT, INSERT, UPDATE, ALTER LOCK TABLE, DELETE TABLE, DROP TABLE, CREATE INDEX, CREATE VIEW, DROP VIEW, CREATE PROCEDURE, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE, DROP TABLE, DROP VIEW, CREATE SEQUENCE

表 34. Oracle データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
パフォーマンス・データウェアハウス	CREATE TABLE, SELECT, INSERT, UPDATE, ALTER LOCK TABLE, DELETE TABLE, DROP TABLE, CREATE INDEX, CREATE VIEW, DROP VIEW, CREATE PROCEDURE, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	<p>SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE, DROP TABLE, DROP VIEW, CREATE SEQUENCE</p> <p>IBM BPM プロファイルを作成またはマイグレーションするすべてのスキーマまたはユーザーは、<b>DBMS_LOCK</b> パッケージへのアクセス権限を持っている必要があります。次の例に示すように、パフォーマンス・データベースを使用する Oracle ユーザーまたはスキーマに対して <b>DBMS_LOCK</b> パッケージの <b>Execute</b> 権限を設定します。</p> <pre>GRANT execute ON DBMS_LOCK TO &lt;schema_name&gt;</pre> <p>この例で、<i>schema_name</i> はパフォーマンス・データベースに使用されるユーザー ID です。</p>

Oracle ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
CREATE USER user_name; IDENTIFIED BY user_password;
grant connect, resource, unlimited tablespace to user_name;
grant create view to user_name;
grant javauserpriv to user_name;
grant execute on dbms_lock to user_name;
```

表 35 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の SQL Server データベース特権について説明します。

IBM Business Process Manager データベース・ユーザーに対して、以下の 3 つのロールを割り当てる必要があります。

注: データベースは、データベース管理者が作成する必要があります。作成後、データベース管理者は、IBM Business Process Manager のデータベース・ユーザーにこれらのロールを割り当てることができます。

- db\_ddladmin
- db\_datawriter
- db\_datareader

これらのロールに設定されている権限については、Microsoft 固有の資料を参照してください。

以下の表は、インストール・アクティビティと実行時アクティビティの両方について、各コンポーネントの必要な権限を示しています。

表 35. SQL Server データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE, ALTER TABLE, INSERT, CREATE USER, ALTER USER	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE

表 35. SQL Server データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Business Space	CREATE TABLE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server	CREATE TABLE、SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE TABLE、DROP TABLE、CREATE INDEX、CREATE VIEW、DROP VIEW、CREATE PROCEDURE、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、DROP TABLE、DROP VIEW
パフォーマンス・データウェアハウス	CREATE TABLE、SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE TABLE、DROP TABLE、CREATE INDEX、CREATE VIEW、DROP VIEW、CREATE PROCEDURE、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、DROP TABLE、DROP VIEW

SQL Server では、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能はサポートされません。

SQL ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
USE database_name
GO
CREATE USER user_name FOR LOGIN user_name WITH DEFAULT_SCHEMA=user_name
GO
CREATE SCHEMA user_name AUTHORIZATION user_name
GO
EXEC sp_addrolemember 'db_ddladmin', 'user_name';
EXEC sp_addrolemember 'db_datareader', 'user_name';
EXEC sp_addrolemember 'db_datawriter', 'user_name';</p>
```

詳しくは、関連参照の WebSphere Application Server のページを参照してください。

関連資料:



WebSphere Application Server でのデータベース特権

## ユーザー ID またはスキーマ名特権

IBM Business Process Manager のインストール時には、デフォルトのスキーマ名およびユーザー ID 特権を使用してデータベースをインストールできます。ただし、データベース設計によっては、別のユーザー ID またはスキーマ名特権が必要になる場合があります。

提供されているシナリオを検討して、IBM Business Process Manager のインストール時に別のスキーマ名およびユーザー ID 特権を構成するタイミングと方法を決定してください。

### 単一のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ

データベースのデフォルト・インストールを選択した場合、IBM Business Process Manager では、テーブルを作成する機能と、作成したテーブルの行の選択、挿入、更新、および削除を行う機能を備えたユーザー ID またはスキーマ名が最小限 1 つ必要です。データベースを作成するには、プロファイル管理ツールまたはインストーラーが使用できます。

次の表は、データベースとして DB2 を使用する際のデフォルトのデータベース構成プロパティを示しています。他のデータベースでは、データベース構成用に、これとは異なるデフォルト構成プロパティがあります。

表 36. シナリオ: 単一のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデフォルト・データベース名	ユーザー ID またはスキーマ名
共通データベース表	CMNDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にユーザー ID を提供します
メッセージング・テーブル	MEDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にスキーマ名を提供します

データベース設計のプロパティが異なる場合、複数のユーザー ID およびスキーマ名特権が必要となる場合があります。以下のシナリオは、構成を適用して希望の設計を実現する方法を示しています。提供されているシナリオに希望する特定の設計が含まれていない場合でも、アイデアの一部を修正して、特定の設計を実装することができます。

### 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 1

このシナリオでは、ユーザー ID 特権と同じスキーマ名を使用しますが、デフォルトのスキーマ名またはデフォルトのユーザー ID 特権は使用しません。この単一ユーザー ID は、すべてのデータベースにアクセスことができ、必要なすべてのテーブルを作成することもできます。以下にシナリオ 1 の特権の例を示します。

- スキーマ名: dog
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: dogSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: dogAPP
- Event ME のスキーマ名: dogEvent
- スキーマを作成するためのユーザー ID: dog
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: dog

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 37. シナリオ 1: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>Profile Management Tool</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>Profile Management Tool</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>

## 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 2

このシナリオでは、同じスキーマ名とユーザー ID を使用して、スキーマの選択、挿入、更新、削除を行います。ただし、スキーマの作成には別のユーザー ID を使用します。以下にシナリオ 2 の特権の例を示します。

- スキーマ名 : snow
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: snowSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: snowAPP
- Event ME のスキーマ名: snowEvent
- スキーマを作成するためのユーザー ID: rock
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: snow

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 38. シナリオ 2: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	<p>この値は、以下で 2 回指定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. テーブル作成スクリプト</li> <li>2. 次のいずれかを使用した IBM Business Process Manager 構成時: <ul style="list-style-type: none"> <li>• 管理コンソール</li> <li>• インストール・ウィザード</li> <li>• Profile Management Tool</li> <li>• サイレント・インストーラ</li> <li>• サイレント・プロファイル作成</li> </ul> </li> </ol> <p><b>制約事項:</b> 最初にインストーラーを実行する場合は、生成されるスクリプトに既に正しいスキーマ名およびユーザー ID の値が含まれているため、値を指定する回数は 1 回です。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、行の読み取りおよび書き込みが可能なスキーマ名を使用して変更する必要があります。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、テーブルの作成が可能なユーザー ID を使用して変更する必要があります。</p>	<p>ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• インストール・ウィザード</li> <li>• Profile Management Tool</li> <li>• サイレント・インストーラ</li> <li>• サイレント・プロファイル作成</li> </ul>

### 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 3

このシナリオでは、同じユーザー ID を使用してすべてのスキーマを作成します。ただし、各スキーマには、行を選択、挿入、更新、および削除するための別々のユーザー ID があります。次のリストは、シナリオ 3 の特権の例を示しています。

- スキーマ名: waterCom
- 共通テーブルのスキーマ名 : waterCom
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: waterSYSME
- SCA.APP ME のスキーマ名: waterAPPME
- Event ME のスキーマ名: waterEventME
- ESBMessaging テーブルのスキーマ名: waterESB
- スキーマを作成するためのユーザー ID: milk
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID:

スキーマ名	スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID
waterCom	waterCom
waterSYSME	waterSYSME
waterAPPME	waterAPPME
waterEventME	waterEventME
waterESB	waterESB

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 39. シナリオ 3: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>Profile Management Tool</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>Profile Management Tool</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>
メッセージング・テーブル	この値は、各メッセージング・エンジンの定義を使用して指定します。	テーブル作成スクリプトは、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるスキーマ名を含める必要があります。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、メッセージング・エンジンの作成中に指定します。メッセージング・エンジンの構成中に「 <b>テーブル作成</b> 」オプションを使用します。

## コンポーネントに固有のデータベース構成の計画

IBM Business Process Manager には、データベース表を必要とするコンポーネントと、表が保管されるデータベースの固有の名前が含まれています。

このセクションの情報を使用して、該当のデータベース管理者が管理し、構成し、運営する必要のある IBM Business Process Manager コンポーネントに精通してください。

データベースの構成を計画するには、使用するコンポーネントを明確にする必要があります。データベース表を必要とする IBM Business Process Manager のコンポーネントと、それぞれのコンポーネントに関連付けられている表が保管されているデータベースのデフォルト名を、78 ページの表 40 にまとめます。

**重要:** これらの名前は必要に応じて変更できますが、後の構成手順でも一貫してその名前を使用する必要がありますのでご注意ください。

表 40. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
Process Server	BPMDB	Process Server のテーブルは、Process App リポジトリのデータの保持、格納、および追跡を行うために使用されます。
パフォーマンス・データウェアハウス	PDWDB	
Application Scheduler	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
Business Space	CMNDB (共通データベース)	スタンドアロン・プロファイルの場合、IBM Business Process Manager の開始前に共通データベースを作成する必要があります。その他のプロファイルについては、管理コンソールを使用して Business Space を構成する必要があります。Business Space データベースの構成は、Business Space powered by WebSphere を使用する場合には必須の作業です。これは、アプリケーション・ユーザーが、特定の範囲の IBM 製品で Web インターフェースを作成、管理、および統合するための共通のインターフェースです。
Common Event Infrastructure (CEI)	EVENT (イベントの格納)	CEI データベースの構成は、プロファイル管理ツールまたは <b>manageprofile</b> コマンド行ユーティリティではサポートされていません。  永続イベントのパフォーマンスに影響を与える可能性があるため、実稼働環境の場合はこのデータベースを作成しないでください。  Common Base Event ブラウザーは CEI データベースを利用します。ご使用のビジネス・エンタープライズ・アプリケーションでのログイン、トレース、管理、およびビジネスの各イベントの取得および表示に Common Base Event ブラウザーを使用する場合は、CEI データベースを手動で作成する必要があります。

表 40. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
エンタープライズ・サービス・バス	CMNDB (共通データベース)	これらのテーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、あるいはデプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
メディエーション	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
リカバリー	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
関係	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前、またはそれらの始動時に構成する必要があります。
セレクターおよびビジネス・ルール	CMNDB (共通データベース)/リポジトリ DB	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前、またはそれらの始動時に構成する必要があります。
SIBus	ユーザー作成	これらのテーブルは、メッセージング・エンジンの始動時、またはメッセージング・エンジンを始動する前に構成する必要があります。プロファイルの作成時には、スタンドアロン環境で SIBus によるファイル・ストアを使用できます。ただし、Network Deployment 環境では、SIBus によるファイル・ストアを使用することはできません。

## テーブルおよびスキーマの作成

データベース・プロバイダーによっては、IBM Business Process Manager 内のデータベース用に異なるデータベース表およびスキーマが必要な場合があります。

管理コンソールで「リソース」 > 「JDBC」 > 「ビジネス・インテグレーション・データ・ソース」を選択してデータ・ソースをクリックするときに、「テーブルの作成」のチェック・ボックスを選択して、データ・ソースからテーブルを作成できます。データベース表の作成がデータベース管理者に限られている場合は、このチェック・ボックスを選択解除し、メッセージ・ボックスでスクリプトを見つけ、そのスクリプトをデータベース管理者に提供して実行を依頼します。「テーブルの作成」を使用可能にすると、以下の表に示すように、各データベース・プロバイダーの各種のデプロイメント環境機能を使用できます。「X」は、テーブルまたはスキーマが作成されたことを示します。

**ヒント:** 共通データベースはプロファイル作成時に構成します。

表 41. データベース・プロバイダーごとのテーブルの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2	X	X	X	X	X
Oracle	X	X	X	X	X
Microsoft SQL	X	X		X	X

表 42. データベース・プロバイダーごとのスキーマの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2	X	X	X	X	
DB2 for z/OS	X	X	X	X	X
Oracle	X	X	X	X	

Common Event Infrastructure データベースは手動でのみ構成できます。詳しくは、『*Common Event Infrastructure データベースの構成*』を参照してください。

## 共通データベース構成の計画

共通データベース構成には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトの名前およびスクリプトの場所、プロファイル作成の構成アクション、インストール・パラメーター、作成されるテーブルのタイプ、およびユーザー ID の特権に関する情報が含まれます。

IBM Business Process Manager 共通データベースは、以下の製品コンポーネントで使用します。

- リカバリー
- リレーシオンシップ・サービス
- Enterprise Service Bus (ESB) ロガー・メディエーション・プリミティブ

共通データベースは、IBM Business Process Manager プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- IBM Business Process Manager を構成する前:

- IBM Business Process Manager に用意されているデフォルトのスクリプトを編集して実行します。デフォルトのスクリプトは、共通データベースおよび Business Process Choreographer テーブルの作成のみに使用できます。
- データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- IBM Business Process Manager を構成した後:
  - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように IBM Business Process Manager を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時に行うことができます。また、プロファイルの作成後までデータベース表の作成と構成を遅らせることができます。プロファイル管理ツールを使用してデータベース・スクリプトを生成し、そのスクリプトをデータベース表の作成と構成に使用することができます。生成されるこれらのスクリプトは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

## サポートされているデータベース・タイプ

共通データベースは、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 43. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express®	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	<b>重要:</b> DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

## ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている

る場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細については、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

## データベース管理サービス・インスタンス

Network Deployment 環境の場合、セルあたりに共通データベース表のセットが 1 つあります。

### プロファイル作成時の構成操作

共通データベースをインストールするのに、以下のオプションの中の 1 つを使用することができます。

- インストーラー
- Profile Management Tool
- サイレント・インストール
- スクリプト

これらのオプションのそれぞれに、さらにいくつかの選択項目があります。

#### インストーラー

ソフトウェアのインストール時にプロファイルを作成する場合は、「インストーラー」を使用します。インストール時に、ご使用のデータベース製品をインストールすることができますが、インストールできるデータベース製品のタイプは制限されています。表 44 にはない、サポート対象のデータベース製品を使用するには、プロファイル管理ツールを使用して、ユーザーのデプロイメント・マネージャーを作成する必要があります。

表 44. インストーラー・オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	DB2 Express
標準: その他のすべてのプロファイル	DB2 Express
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none"><li>• DB2 Universal</li><li>• DB2 データ・サーバー</li><li>• Oracle</li></ul>
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none"><li>• DB2 Universal</li><li>• DB2 データ・サーバー</li><li>• Oracle</li></ul>

標準インストールでは、構成パラメーターのデフォルト値を使用します。これらのデフォルト値は変更できません。カスタマイズ・インストールを選択する場合は、ユーザーの固有の要件に合わせてデフォルトを変更することができます。

#### Profile Management Tool

プロファイル管理ツールを使用して、ソフトウェアのインストール後にプロファイルを作成します。プロファイル管理ツールを使用すると、プロファイルの作成前、作成中、または作成後にデータベースをインストールすることができます。

83 ページの表 45 では、標準 (デフォルト) プロファイルおよびカスタマイズ・プロファイルでサポートされるデータベースをリストします。

表 45. 「プロファイル管理ツール」 オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 DataServer</li> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 for z/OS</li> <li>• Microsoft SQL Server</li> <li>• Oracle</li> </ul> <p>DB2 for z/OS、Oracle、および Microsoft SQL データベースが存在しなければなりません。プロファイル管理ツールがそれらを構成できるようにするためです。</p>
標準: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 DataServer</li> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 for z/OS</li> <li>• Microsoft SQL Server</li> <li>• Oracle</li> </ul> <p>DB2 for z/OS、Oracle、および Microsoft SQL データベースが存在しなければなりません。プロファイル管理ツールがそれらを構成できるようにするためです。</p>
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	81 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	81 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか

### サイレント・インストール

製品をサイレント・インストールするとき、テンプレート応答ファイルを編集して共通データベース構成を指定することができます。

### スクリプト

IBM Business Process Manager をインストールする前、またはプロファイルの作成中に、スクリプトを使用して、ご使用の共通データベースを作成することができます。

プロファイルの作成後にデータベースを手動で構成するように選択した場合は、まず IBM Business Process Manager をインストールして、プロファイル管理ツール内で、プロファイル作成の一環としてスクリプトを実行したくないことを示す必要があります。プロファイル管理ツールは、ユーザーが指定したデータベース・パラメーターを使用してデフォルト・スクリプトを更新し、更新されたスクリプトを `profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` ディレクトリーに書き込みます。

**ヒント:** プロファイル管理ツールを使用して、更新されたスクリプトが書き込まれるディレクトリーを変更することができます。

スクリプトは、そのままでも実行できますが、編集して特定の要件を組み込むことも可能です。これらのスクリプトを、共通データベースを作成する担当者に渡すことができます。データベースを作成する前に IBM Business Process Manager を開始しようとする、エラー・メッセージを受け取ります。

スクリプトを実行するときに、以下のタスクも実行します。

- 適切な場合 (ローカル・データベースの場合にのみ有効)、プロファイル管理ツール内の「データベース構成」パネルでの選択に応じて、データベースを作成します。

**重要:** データベースの作成をプロファイル作成の完了後に先送りすることもできますが、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルに有効な情報を入力する必要があります。その情報に基づいて、IBM Business Process Manager のデータ・ソースが作成されます。

- JDBC プロバイダーでデータ・ソースを作成します。

**重要:** プロファイルの作成と同時にデータベースも作成する場合に、データベース・パラメーターに誤りがあると、プロファイルにエラーが発生します。データベースの作成を先送りすれば、プロファイルはエラーなしで作成されますが、生成されたデータベース・スクリプトにはエラーが含まれているため、データベースを作成できるようにするには、そのスクリプトを訂正する必要があります。セルのカスタム (管理対象) ノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

**注:** セルのカスタム (管理対象) ノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

## SQL スクリプト

SQL スクリプトを使用して、プロファイル作成の前後にご使用のデータベースを構成します。テーブルは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを使用して作成されるため、管理対象ノードの作成時に SQL スクリプトが実行されることはありません。

各共通データベース・クライアントの SQL スクリプトは、以下の場所にあります。

- IBM Business Process Manager のインストール後の `install_root/dbscripts/CommonDB/dbType`

データベースの作成をプロファイルの作成後に先送りするよう選択した場合は、更新されたスクリプトは `profile_root/dbscripts/feature/dbType/dbName` ディレクトリーで見つけることができます。

### SQL スクリプト命名規則

- コンポーネント固有のスクリプトの場合: `createTable_componentName.sql`、例えば `createTable_Recovery.sql`。
- コンポーネントに依存しないスクリプトの場合: `createTable.sql`。

以下の表は、スクリプトの命名規則を示しています。

表 46. 共通データベース・スクリプトの命名規則

スクリプトのタイプ	スクリプト名
コンポーネント固有のスクリプト	<code>scriptName_componentName.sql</code>
コンポーネントに依存しないスクリプト	<code>scriptName.sql</code>

## JDBC プロバイダー

新しい Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーは、データベース・タイプに応じて作成されます。プロバイダーは、スタンドアロン・プロファイルのノード・スコープ内に、Network Deployment 環境のセル・レベルで作成されます。JDBC プロバイダーは、`JDBC_DRIVER_PATH` 変数を参照して、ローカル JDBC ドライバーを見つけます。その変数は、セル・レベルで指定され、各ノード・レベルは、正しいローカル・パスを指します。

データ・ソース名:

- **WPS DataSource**

データ・ソース JNDI 名:

- **jdbc/WPSDB**

## 制約事項

プロファイルの作成中に使用可能なデータベース・コマンドには、いくつかの制約事項があります。

以下のデータベース・タイプでは、「新規データベースの作成」が使用不可になります。

- DB2 for z/OS
- Oracle
- Microsoft SQL Server

## テーブル

共通データベース・スクリプトは、プロファイルの作成時に静的テーブルのみを作成します。以下の表には、さまざまなコンポーネントによって作成されるすべてのテーブルのリストが含まれています。

表 47. IBM Business Process Manager の各コンポーネントによって作成されるテーブル

コンポーネント	テーブル名	スクリプト
リレーションシップ	実行時に作成される動的テーブル	<b>createTable_Relationship MetadataTable.sql</b>
共通データベース	SchemaVersionInfo	<b>createTable_CommonDB.sql</b>
ESB ロガー・メディエーション	MSGLOG	<b>createTable_ESBLogger Mediation.sql</b>

前出のテーブル中のすべての SQL スクリプトは、**configRecovery > commonDBUtility > execute createTable\_Recovery.sql** といった各コンポーネント・スクリプトからの `commonDBUtility.ant` ファイルによって実行されます。値 `delayConfig=true` が応答ファイル内にあるとき、SQL ファイルは作成されますが、これらのファイルは実行はされません。この場合、構成後に SQL を手動で実行する必要があります。

WebSphere Enterprise Bus ロガー・メディエーション・コンポーネントでは、各メッセージ・ロガー・プリミティブを構成して、さまざまなデータ・ソースおよびさまざまなデータベースを使用できるようにすることができます。

## スクリプトのエクスポート

スクリプトは、共通データベースを構成するためにプロファイル管理ツール・パネルで選択されたすべてのオプション用に作成されます。これらのスクリプトには、データベース、テーブル、および索引の基本的な作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、これらのスクリプトを実行するために、データベースのネイティブ・コマンドを使用する必要があります。詳細については、『プロファイル管理ツールによる共通データベースの構成』を参照してください。

スクリプトの名前は、Windows の場合は `configCommonDB.bat`、UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合は `configCommonDB.sh` です。

データベース・スクリプトは、以下の場所にエクスポートされます:

`profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` ディレクトリー。

## Common Event Infrastructure データベース構成の計画

Common Event Infrastructure (CEI) データベース仕様には、サポートされるデータベースのタイプ、スクリプトの場所、プロファイル構成タイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされます。オプションで、CEI データベースを使用して、それが IBM Business Process Manager をモニターしているときに取り込まれるイベントを保管することができます。

CEI データベースは内部のデバイスであり、ユーザーと直接対話することはありません。CEI データベースとの間のすべての対話に対して、サポート対象の CEI プログラミング・インターフェースを使用する必要があります。

プロファイル管理ツールを実行するときに、自動的に CEI データベースを作成することはありません。CEI イベントを保管したい場合には、スタンドアロン・プロファイルに対して、および Network Deployment 環境内の CEI サーバーの各インスタンスに対して、データベースを手動で作成する必要があります。

## メッセージング・エンジン・データベース構成の計画

このメッセージング・エンジン・データベースの仕様には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトとそれらの場所、プロファイル作成のタイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされています。

メッセージング・エンジン・データベースは、運用情報を格納するために使用します。障害が発生した場合のリカバリーのためにメッセージング・エンジンが必要とする重要なオブジェクトも保管されます。

SCA メッセージング・エンジンのデフォルトのデータベース名は SCADB です。他のメッセージング・エンジンの場合、デフォルトのデータベース名は MEDB です。デフォルトのスキーマ名は、IBMWSSIB です。

**重要:** すべてのデータベース・タイプで複数のスキーマがサポートされているとは限りません。詳細については、ご使用のデータベースの資料を参照してください。

スタンドアロン環境では、管理コンソールを使用して、SCA メッセージング・エンジンを構成できます。パターン化された Network Deployment 環境では、メッセージング・エンジンは、デプロイメント環境の作成時に構成されます。カスタム Network Deployment 環境の場合、メッセージング・エンジンを手動で構成する必要があります。

ユーザーは、メッセージング・エンジン・データベースに対して制御を行います。例えば、各メッセージング・エンジン用のデータベースを作成することができ、また、すべてのメッセージング・エンジンに対して単一のデータベースを使用することができます。各メッセージング・エンジンは、独自のデータベースまたはスキーマのいずれかを持つ必要があります。

## サポートされているデータベース・タイプ

メッセージング・エンジン・データベースには、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 48. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。

表 48. サポートされるデータベース製品 (続き)

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	<b>重要:</b> DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

## ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細については、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

Network Deployment 環境では、構成時に管理コンソールで指定したユーザー特権に関して必要な許可すべてを持っている必要があります。

**重要:** DB2 V9.7 の場合、新しく作成されたユーザーに、適切な権限を付与します。これは、ユーザー作成プロセスはユーザーに対して自動的に必要な権限を付与することがないためです。

## データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

各メッセージング・エンジンには、以下に示す独自のデータベースまたはスキーマがあります。

- Service Component Architecture システム・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Service Component Architecture アプリケーション・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Common Event Infrastructure バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。

以下のリストには、メッセージング・エンジンがデータベースと対話するのに使用する JDBC データ・ソースの命名規則が含まれています。

- システム・バス: <node><server><cluster>-SCA.SYSTEM.<cell>.Bus
- アプリケーション・バス: <node><server><cluster>-SCA.APPLICATION.<cell>.Bus

- CEI バス: <node><server><cluster>-CEI.cellName.BUS

## プロファイル作成時の構成操作

### Network Deployment

メッセージング・エンジン・データベースは自動的に作成されません。プロファイルが作成された後、「Network Deployment 環境の構成」というガイド付きアクティビティを使用して、SCA用のサーバーまたはクラスターを構成することができます。デプロイメント・マネージャーの管理コンソールからこのガイド付きアクティビティにアクセスするには、「ガイド付きアクティビティ」を展開して、「Network Deployment 環境の構成」をクリックします。

管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「servername」 > 「Service Component Architecture」パネルで、サーバーの SCA 構成を表示できます。

プロファイルの作成時に、以下の管理用タスクが実行されます。

- リモート宛先の場所:
  - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer (remoteMELocation は true)
  - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster (remoteMELocation は true)
- ローカル宛先の場所:
  - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer
  - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster

これらのタスクに関する詳細については、『configSCAAsyncForCluster コマンド』および『configSCAAsyncForServer コマンド』を参照してください。

サーバーまたはクラスターに非同期の SCA 構成を実行すると、SCA システム・バス用にメッセージング・エンジンが作成されます。サーバーまたはクラスターに SCA 構成の JMS エlementを実行すると、SCA アプリケーション・バス用にメッセージング・エンジンが作成されます。両方のメッセージング・エンジンに対して、データベースまたはスキーマを作成する必要があります。

Common Event Infrastructure メッセージング・エンジンを構成するためには、deployEventService 管理用タスクを使用して、イベント・サーバーおよび Common Event Infrastructure バスを構成します。

## SQL スクリプト

製品の一部として SQL スクリプトが作成されることはありません。必要な場合は、既存の基本 WebSphere Application Server のスクリプトを使用して、データベースとテーブルを作成することができます。構成される前に MEDB を手動で作成するには、管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「servername」 > 「Service Component Architecture」パネルを使用します。

## JDBC プロバイダー

### Service Component Architecture

JDBC プロバイダーの実装クラスが、拡張構成で選択されている実装クラスと一致しなければならない場合は、その JDBC プロバイダーが再利用されます。同じデータベース・タイプを使用する場合には、通常、実装クラスは一致します。resource.xml ファイル内に一致する JDBC プロバイダーが見つからない場合、templates/system ディレクトリー (プロファイル構成) 内にある jdbc-resource-provider-templates.xml ファイルで、一致する JDBC プロバイダーが検索されます。プロバイダーの突き合わせは、実装クラスについても行われます。

## Common Event Infrastructure

メッセージング・エンジン・データベースの JDBC プロバイダーの作成手順は、CEIDB データベースの場合の作成手順とよく似ています。

### データ・ソース名

- システム・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cel/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `_(node.server| cluster-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`

### データ・ソース JNDI 名

- システム・バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `Jdbc/ com.ibm.ws.sib /(node.server|cluster)-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`

## 制約事項

既知の制約事項はありません。

## テーブル

テーブルについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『データ・ストア』のトピックを参照してください。

## スクリプトのエクスポート

**WAS\_INSTALL\_ROOT/bin** 内の **sibDDLGenerator** スクリプトを使用して、メッセージング・エンジン・データベース用の SQL スクリプトを作成することができます。実稼働環境、特に DB2 for z/OS プラットフォームで使用される SQL スクリプトを作成するために、**sibDDLGenerator** スクリプトを使用します。詳細については、「sibDDLGenerator コマンド」を参照してください。

これらのスクリプトには、基本的な **database/tablespace/table** 作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、データベースのニーズを満たすために、特に DB2 for z/OS において、これらのスクリプトを調整する必要がさらに生じることがあります。

### 関連情報:

 データ・ストア接続が失われた場合のメッセージング・エンジンとサーバーの動作の構成

## WebSphere Enterprise Service Bus のロガー・メディエーション・データベース表を構成する計画

WebSphere ESB のロガー・メディエーション・データベース表の仕様を検索することができます。仕様には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトの名前およびスクリプトの場所、プロファイル作成の構成アクション、スキーマのアップグレード、およびユーザー ID の特権に関する情報が含まれています。

ロガー・メディエーション・データベース表は、WebSphere ESB 内のメッセージ・ロガー・メディエーション・プリミティブが使用します。メッセージ・ロガー・プリミティブは、メッセージ情報を共通データベ

ースに保管します。共通データベースは、WebSphere ESB ロガー・メディエーション・データベース用のデフォルトですが、外部データベースを使用することもできます。プロファイルの拡張フェーズ時に、システムは `ESB_MESSAGE_LOGGER_QUALIFIER` 変数を作成し、その変数は選択された共通データベースのスキーマ修飾子の値に設定されます。

データベースがスタンドアロン構成に対して自動的に作成されます。データ定義言語 (DDL) ファイルを使用することにより、スタンドアロン・サーバー構成用または Network Deployment 環境用に追加のデータベースを使用できます。

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成の場合、または Network Deployment 構成内の管理対象ノードまたはデプロイメント・マネージャーの場合には、まず WebSphere ESB データベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。次に、IBM Business Process Manager for z/OS 用の構成スクリプトを実行することができます。

## サポートされているデータベース・タイプ

WebSphere ESB ロガー・メディエーション・データベースは、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 49. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	<b>重要:</b> DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

## ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細について

は、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

## データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

共通データベースは、スタンドアロン環境および Network Deployment 環境の両方に、セル・スコープで使用されます。ただし、他のインスタンスを、必要な数だけ手動で作成することができます。各メッセージ・ロガー・メディエーション・プリミティブは、さまざまなデータ・ソース、したがってさまざまなデータベースを使用するために構成することができます。

## プロファイル作成時の構成操作

スタンドアロン・プロファイルとデプロイメント・マネージャー・プロファイルの場合、WebSphere ESB のロガー・プロファイルは、共通データベース内の **createTable** 共通データベース・スクリプトを実行します。

### スタンドアロン・プロファイル

デフォルトのスタンドアロン環境では、EsbLogMedDB という名前の DB2 データベースが自動的に作成されます。

### ネットワーク・デプロイメント環境

デフォルトの WebSphere ESB データベースは、Network Deployment プロファイルの作成中に自動的に選択されることはありません。デフォルトのデータベースを選択するか、またはサポート対象のデータベースの 1 つを選択する必要があります。

## SQL スクリプト

**createTable\_ESB.sql** SQL スクリプトは、*install\_root/dbscripts/CommonDB/DBTYPE* ディレクトリーにあります。

**createMessageLoggerResource.jacl** および **removeMessageLoggerResource.jacl** スクリプトは、*install\_root/bin* ディレクトリーにあり、要求されたデータベース・タイプのテーブルを作成または削除するのに使用することができます。

## JDBC プロバイダー

以下の 共通データベースの JDBC プロバイダーとデータ・ソースがデフォルトで使用されます。

データ・ソース名:

- **WPS DataSource**

データ・ソース JNDI 名:

- **jdbc/WPSDB**

メッセージ・ロガー・メディエーションを構成して、異なるデータ・ソースを使用することができます。

## 制約事項

既知の制約事項はありません。

## テーブル

WebSphere ESB ロガー・メデイエーション・データベースは、共通データベース内の MSGLOG テーブルを使用します。ただし、共通データベースを使用しないことを選択でき、代わりに外部データベースを使用することもできます。

## スクリプトのエクスポート

データベース・スクリプトは、`install_root/dbscripts/CommonDB/DBTYPE/dbName` ディレクトリーにエクスポートされます。

## スキーマのアップグレード・スクリプト

スキーマのアップグレードは、MSGLOG テーブルには含まれていません。IBM Business Process Manager V6.1 にマイグレーションするときに、IBM Business Process Manager は、前のリリースで使用された MessageLogger データベースを継続して使用します。このデータを IBM Business Process Manager 共通データベースにマイグレーションするためのサポートはありません。

メッセージ情報用に単一の場所を維持したい場合には、以下のタスクの中の 1 つを実行することができます。

- データを古いデータベースから新しいデータベースへ手動で移動する
- 古いデータベースを引き続き使用する
- `createMessageLoggerResource.jacl` スクリプトを使用して、データを移動します。

---

## エラー防止およびリカバリーの計画

システムおよびアプリケーションのエラーの影響を最小化するために、エラー防止およびリカバリーの方法を作成することができます。

『エラー防止およびリカバリーの計画』の各トピックには、インフォメーション・センター・トピック、技術記事および IBM Redbooks などのさまざまなリソースへのリンクが含まれています。これらには WebSphere のシステム・リカバリー機能を活用するように設計された開発プロセスおよびシステム構成パターンに関する詳細な情報が提供されています。

## エラー防止とリカバリーの概要

エラー防止とリカバリーの情報では、システム障害を引き起こす問題を回避する方法について説明し、通常の状態と異常な状態の両方で発生する可能性があるシステム障害からリカバリーする方法について、情報を提供しています。

IBM Business Process Manager は、ビジネス・プロセス管理 (BPM) ソリューションとサービス指向アーキテクチャー (SOA) ソリューションの実行および管理を可能にするために最適化されたミドルウェア・サーバーです。IBM Business Process Manager は WebSphere Application Server の基盤となる機能に基づいて構築されています。

ミドルウェア・システムはさまざまな条件下で実行されますが、従来、それらのすべてが『良好なパス (good path)』条件になっているわけではありません。IBM Business Process Manager の主要な機能の多くは、普通に見える動作から発生する可能性がある、不確実さに対処するためのものです。

## 想定および予期

『エラー防止およびリカバリーの計画』セクションの記載に従ってシステム障害およびリカバリーの情報を使用する前に、以下の想定リストを読んでください。

- IBM Business Process Manager およびその構築に使用されている基本のアーキテクチャー原則、ならびにそれが実行する基本的な種類のアプリケーションについて熟知している。
- 統合プロジェクトの計画および実施方法などの、統合プロジェクトについての基礎知識がある。
- 特に指定しない限り、システム障害およびリカバリーについての情報は、IBM Business Process Manager のバージョン 6.1.0 以降に関するものである。

注：『エラー防止およびリカバリーの計画』セクションに含まれている情報は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポートのパターンを想定しており、IBM Business Process Manager 用に 1 つ、メッセージング・エンジンおよび CEI イベント・サーバー用にそれぞれ 1 つずつの 3 つの別個のクラスターで構成されています。

## エラー防止の計画

あらゆる IT 処理の場合と同様、極端なシチュエーションに対して計画を行って実行すれば、正常にリカバリーする確率は高くなります。

システムおよびアプリケーションのリカバリーを準備することに関しては、必須の考慮事項が数多くあります。これらの考慮事項は、次の 2 つのカテゴリーに分類できます。

- アプリケーション設計の一部としてのエラー防止手段
- 開発プロセスの一部としてのエラー防止手段

### アプリケーション設計の一部としてのエラー防止

アプリケーション設計の一部としてエラー防止手段を組み込むことは、特定の設計技法を実装し、製品の機能を使用して、システムおよびアプリケーションのエラーを防止することを意味します。

アプリケーションを正しく構築するためには、アーキテクチャーおよび設計のガイドラインと適切な標準と、その組み合わせとなるレビューおよびチェックポイントが完備された強力なシステム・ガバナンスが不可欠です。

アプリケーション設計の一部としてのエラー防止手段には、以下の要素が含まれています。

- 例外および障害に対する設計上の考慮事項の実装
- 既存の IBM Business Process Manager エラー処理機能とツールを使用するエラー処理方針の実装
- 接続グループの作成とモジュール・アプリケーション設計技法の使用

#### 接続グループ:

接続グループは、SCA モジュール内に見られる特定の動作パターンを表します。

システムで考えられる要求ソースを表す接続グループを作成します。

接続グループでは以下を行います。

- インバウンド・データを取得するためのすべてのロジックを 1 つのモジュールに配置します。

これはアウトバウンド・データが、外部システムまたはレガシー・システムに送信される場合にも該当します。

- データを接続および変換するためのすべてのロジックを 1 つのモジュールに配置します。

他のすべてのモジュールもインターフェースの標準セットを使用できるようになったため、さらなる変換を考慮する必要はありません。

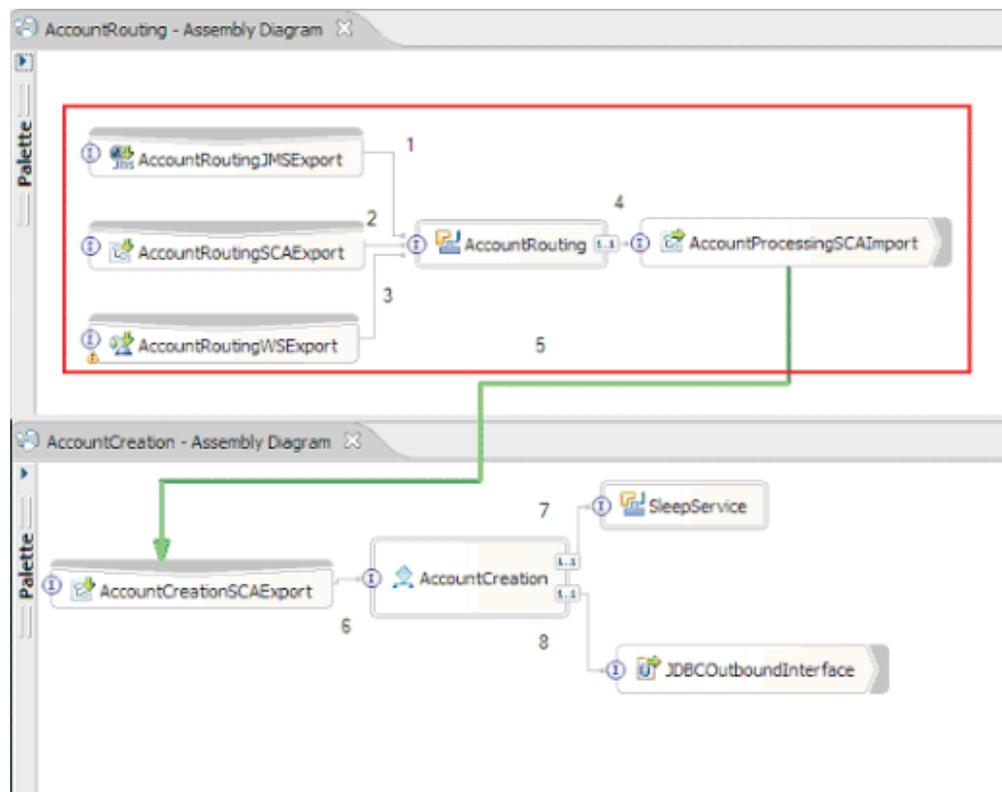
接続グループには、長期実行ビジネス・プロセスやビジネス・ステート・マシンのようなステートフル・コンポーネント・タイプが含まれません。これらの接続グループにより、特定のエンドポイントの統合要件をカプセル化して分離できます。一般に、WebSphere ESB メディエーション・モジュールがこの目的のために使用されるのは、「インフラストラクチャー」関連タスクを実装する便利な方法だからです。

接続グループの概念は、リカバリーの必要がある場合に、システムを休止状態にするための便利な方法として使用することもできます。接続グループ・モジュールはステートレスであるため、モジュールを一時的に停止して、システムが保持するイベントの処理を完了させる間、新規イベントのインバウンド・フローを遮断することができます。

注: インバウンド・イベントのフローを停止する場合、接続モジュールはインバウンドおよびアウトバウンドを同じモジュール内でサポートしてはいけません (同じ EIS システムがインバウンドとアウトバウンドの両方を持っている場合でも該当します)。インバウンドおよびアウトバウンドが同じモジュールでサポートされている場合、アウトバウンドはインバウンドと一緒にオフになります。このため、内部処理の実行が停止することがあります。このケースでは、インバウンドとアウトバウンドを分離することを検討してください。

システムがリカバリーされ、新規の作業を処理できるようになったら、これらのモジュールを再開できます。

以下の画面取りに外観が示されているモジュールは、接続グループの一部と見なされます。



接続グループは、SAP または CICS® などの外部ソースまたは既存システムからの入力用に使用できます。または、Web ブラウザー・ベースのクライアントからの新規作業のためにも使用できます。

#### 例外および障害に対するアプリケーション設計上の考慮事項:

アプリケーション設計では、IBM Business Process Manager のエラー処理機能と障害処理機能の利点を活用することを考慮する必要があります。

包括的なエラー処理方法を作成するには、ソリューション設計者は、WebSphere Process Server および WebSphere ESB が宣言済みまたは宣言済みでない例外をどのように表すかを理解する必要があります。

SCA プログラミング・モデルには以下の 2 つのタイプの例外が提供されています。

- サービス・ビジネス例外

サービス・ビジネス例外は、ビジネス・メソッドの機能シグニチャー (WSDL 障害または Java スロー) で宣言されるチェック例外です。サービス・ビジネス例外では、アプリケーションまたはサービスによって予期されるエラー状態を識別します。これらの例外は、「チェック例外」と呼ばれることもあります。

例えば、株価サービスでの **InvalidSymbolException** があります。そのような例外は **ServiceBusinessException** によってラップされ、クライアントに戻されます。

- サービス・ランタイム例外

「システム例外」としても知られています。サービス・ランタイム例外は、メソッド・シグニチャーでは宣言されません。一般にこの例外は、Java コンポーネントでの **NullPointerException** などのように、アプリケーションによって予期されていないエラー状態を表します。

これらの例外は、**ServiceRuntimeException** によってラップされ、クライアントに戻されます。クライアントは **ServiceRuntimeException** について問い合わせる原因を判別できます。

注: SCA レベルで動作するとき、これらの例外は障害と呼ばれることもあります。ただし、Java コードを使用するときは、これらはたいてい例外と呼ばれます。

コンポーネントから **ServiceRuntimeException** が throw されると、現在のトランザクションがロールバックされます。

#### サービス・ビジネス例外の処理:

サービス・ビジネス例外は、アプリケーションまたはサービスによって予期される既知および宣言済みの例外を表します。

サービス・ビジネス例外は、サービス・インターフェースで定義されます。

コンポーネント開発者は、スローされる可能性がある例外を宣言することに注意を払い、消費側のサービスでそれらの例外を処理できるようにしてください。例えば、銀行用アプリケーションのビジネス障害には、「無効な口座番号」または「資金不足」がビジネス例外として含まれる場合があります。したがって、サービスを呼び出すアプリケーションには、無効な口座番号が渡された場合や、\$100 を振り替えようとして口座に \$50 しかなかった場合などの状況処理するロジックを組み込んでおく必要があります。これらは、呼び出し側のアプリケーションが処理するように設計されたタイプのビジネス・エラーです。IBM Business Process Manager のビジネス例外は、catch して適切に処理するクライアントに戻されます。

ビジネス・サービス例外を処理する場合、サービス・コンシューマーは、宣言済みのビジネス例外の場合に以下のアクションのいずれかを実行するようにクライアントを実装します。

1. 例外を catch して、呼び出し側のアプリケーションに適したサービス・ビジネス例外を作成します。

これは、元の例外を新規例外に含める (ラッピングする) ことを意味する場合があります。これが最も頻繁に行われるのは、呼び出し側のモジュールが、呼び出し先のサービスと同じビジネス例外を持たない場合です。例外を catch して、呼び出し側のアプリケーションのためにサービス・ビジネス例外を作成するフローの例を以下に示します。

- a. モジュール A は SBE 「MoneyTransferFailed」を持つ
- b. モジュール B は SBE 「InsufficientFunds」を持つ
- c. モジュール A はモジュール B を呼び出し、「InsufficientFunds」例外を取得する
- d. モジュール A は、資金の不足という元のエラーを定義するストリングを格納できる場所を持つ、新規例外「MoneyTransferFailed」を作成する必要がある。

2. 例外を catch して代替ロジックを実行します。

### サービス・ランタイム例外の処理:

サービス・ランタイム例外は、未宣言の例外です。一般にこの例外は、アプリケーションによって予期されていないエラー状態を表します。

サービス・ランタイム例外を使用して、実行時の予期せぬ状態を知らせます。

コンポーネント開発者は、次の方法でサービス・ランタイム例外を処理できます。

1. それらの例外を catch し、何らかの代替ロジックを実行します。

例えば、あるパートナーが要求を処理できなくても、別のパートナーでは処理できることもあります。

2. 例外を catch し、クライアントに「再スロー」します。

3. その例外をビジネス例外に再マップします。

例えば、パートナーがタイムアウトになると、ビジネス例外が生成される可能性があります。その例外では、ほとんどの要求が処理されたものの、完了していない 1 つの要求が残されており、その要求を後で再試行するか、異なるパラメーターを指定して試行すべきことが示されます。

例外が catch されない場合、例外は現行コンポーネントを呼び出したコンポーネントに渡されます。この呼び出しチェーンは、チェーンの最初の呼び出し元に戻るまで続きます。例えば、**Module A** が **Module B** を呼び出し、**Module B** が **Module C** を呼び出して、**Module C** が例外をスローすると、**Module B** は例外を catch する場合も、またはしない場合もあります。**Module B** が例外を catch しない場合、例外は **Module A** まで戻されます。

コンポーネントから **ServiceRuntimeException** が throw されると、現在のトランザクションがロールバックされます。このタイプの例外処理は、チェーン内のすべてのコンポーネントに対して繰り返されます。例えば、**Module C** から **ServiceRuntimeException** がスローされた場合は、そのトランザクションに、ロールバック対象としてのマークが付けられます。次にその例外は **Module B** にスローされ、**Module B** で例外が catch されず、別のトランザクションが存在する場合は、そのトランザクションもロールバックされます。コンポーネント開発者は、呼び出しが現行トランザクションと新規トランザクションのどちらで行われるかを制御するサービス品質 (QoS) 修飾子を使用できます。例えば、**Module A** が **Module B** を呼び出し、**Module B** が新しいトランザクションの一部である場合、**Module A** は **Module B** からの **ServiceRuntimeException** を "catch" することで、**Module A** のトランザクションをロールバックすることなく、処理を続行できます。

注: ランタイム例外はインターフェースの一部として宣言されていないため、コンポーネント開発者は、例外の解決を試みて、クライアントがユーザー・インターフェースである場合にランタイム例外がクライアントまで不意に伝搬されるのを防止してください。

ロールバックされるトランザクションの内容は、トランザクションの性質によって異なることに注意してください。例えば、長期実行の BPEL プロセスは、多数の小規模なトランザクションにセグメント化することができます。非同期要求および応答の呼び出しは、自動的にトランザクションから切り離されます (そうしないと、呼び出し側のアプリケーションが長時間にわたって応答を待たなければならなくなります)。

1 つのトランザクションが、(1 つの大きなトランザクションとして扱われるのではなく) 複数の非同期呼び出しに分割される場合、トランザクションの最初の作業は `ServiceRuntimeException` の発生時にロールバックします。ただし、非同期呼び出しの応答が別のトランザクションから送信された場合、その非同期呼び出しの応答の行き先がなくなるため、`Failed Event Manager (FEM)` でイベントが作成されます。

以下に、`ServiceRuntimeException` の現行サブクラス 4 つを示します。

#### 1. `ServiceExpirationRuntimeException`

この例外を使用して、非同期 SCA メッセージの有効期限が切れたことを示します。有効期限は、サービス参照で `RequestExpiration` 修飾子を使用して設定できます。

#### 2. `ServiceTimeoutRuntimeException`

この例外を使用して、非同期要求への応答を構成された期間内に受信しなかったことを示します。有効期限は、サービス参照で `ResponseExpiration` 修飾子を使用して設定できます。

#### 3. `ServiceUnavailableException`

この例外を使用して、インポートを介して外部サービスを呼び出し中にスローされた例外が存在することを示します。

#### 4. `ServiceUnwiredReferenceRuntimeException`

この例外を使用して、コンポーネントでのサービス参照が正しくワイヤーされていないことを示します。



## 第 6 章 IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager Standard を単一サーバー上にインストールおよび構成すること（スタンドアロン構成と呼ばれます）も、そのコンポーネントを複数のシステムに分散させること（Network Deployment 構成と呼ばれます）もできます。

### ソフトウェアのインストールおよび構成の準備

ソフトウェアのインストールおよび構成を準備する前に、作成するデプロイメント環境の計画を作成します。

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の準備を行う場合は、以下の表に記載された情報を使用してください。

表 50. インストールおよび構成の準備

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ハードウェアおよびソフトウェア要件を確認する	IBM BPM の構成に応じて、以下を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>IBM Business Process Manager Advanced system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Standard system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Express system requirements</li></ul>	ご使用の IBM Business Process Manager インストールをサポートするために必要なシステム要件について理解します。
オペレーティング・システムを準備する	<b>AIX</b> AIX システムのインストール準備 <b>Linux</b> Linux システムのインストール準備 <b>Solaris</b> インストールに向けた Solaris システムの準備 <b>Windows</b> Windows システムのインストール準備	使用する各ワークステーションのオペレーティング・システムが準備されます。

表 50. インストールおよび構成の準備 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベース管理システムがインストールされているか確認する	使用するデータベース管理システムのインストールおよび管理の詳細については、データベースの資料を参照してください。	<p>データベース管理システムがインストールされます。</p> <p>IBM Business Process Manager によって DB2 Express データベースが組み込まれます。データベースとして DB2 Express を使用する場合は、インストーラーからデータベース機能として DB2 Express を選択すると、DB2 Express が自動的にインストールおよび構成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。</p> <p><b>注:</b> 既に DB2 の特定のバージョンがインストールされていて DB2 Express をインストールする場合は、DB2 をアンインストールしてから IBM Business Process Manager インストーラーを実行する必要があります。インストーラーから DB2 Express をインストールするように選択した場合に、インストーラーが特定のバージョンの DB2 がインストールされていることを検出すると、警告メッセージが表示され、DB2 Express をインストールすることができなくなります。</p> <p><b>重要:</b> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Linux</span> DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、<b>ipcs -l</b> コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。</p>

## 製品インストール用のオペレーティング・システムの準備

IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、オペレーティング・システムを準備する必要があります。構成は、ご使用のオペレーティング・システムのタイプによって異なります。

インストール環境を準備する前に、以下の作業を実行してください。

- IBM Business Process Manager Standard をインストールするシステム上でファイアウォールが実行されている場合は、ファイアウォールを無効にします。
- ご自分のユーザー・ログインが、DB2 または Oracle データベースのコマンドにアクセスできることを確認します。
- ご使用のオペレーティング・システムに固有の追加作業を実行します。

**重要:** IBM Business Process Manager 7.5.0 を **Windows Server 2003** または **Windows 7 (英語版)** でインストールし、IBM Process Portal の「設定」->「インターフェース言語」でロケールをチェコ語に切り替えると、IBM Process Designer のいくつかのパネルでテキストが文字化けして表示されます。IBM Process Designer をチェコ語のロケールで開始しても、テキストは文字化けして表示されます。

**ヒント:** この問題を解決するには、システム設定を以下のように変更します。

- **Windows Server 2003** の場合: 「地域と言語のオプション」->「詳細設定」->「Unicode 対応でないプログラムの言語」->「チェコ語」に設定
- **Windows 7** の場合: 「地域と言語」オプション->「管理」タブ->「システム ロケールの変更...」(「Unicode 対応でないプログラムの現在の言語」の下)->「チェコ語」を選択

## AIX システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、AIX® オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』というトピックの、必要な準備手順をすべて実行する必要があります。

**注:** ただし、WebSphere Application Server のインストールに関連する以下の点に注意してください。

- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、インストールに IBM Installation Manager を使用しますが、InstallShield Multiplatform (ISMP) は使用しません。ISMP の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。
- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、フィックスパックおよびインテリム・フィックスをインストールするのに IBM Installation Manager を使用しますが、WebSphere Update Installer は使用しません。WebSphere Update Installer の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。

64 ビット AIX システムで稼働するように Installation Manager を構成するための追加の準備情報については、技術情報『Installation Manager graphical environment issues』を参照してください。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、AIX システム上で以下の手順を実行します。

1. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。
2. オープン・ファイルの最大数を増やしてください。通常デフォルト設定では十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n** を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。ulimit 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。

インストール前に、以下のコマンドを実行します。

## **ulimit -n 8800**

または、以下の手順でリソースしきい値ファイルを編集します。

- a. /etc/security/limits を開きます。
- b. **default** セクションを編集または追加し、次の行を組み込みます。

```
nofiles = 8800
```

- c. ファイルを保存して閉じます。
  - d. オペレーティング・システムからログオフしてから、再度ログインします。
3. 以下のコマンドを使用して、**umask** 値を **077** に設定します。

## **umask 077**

値 **077** は、製品が許容する最も制限的な値です。以下のアクセス・レベルの場合は、オプションで、より制限の弱い **umask** 値を設定することを選択できます。

- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り専用アクセス権限の場合は **037**
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り/書き込みアクセス権限の場合は **027**
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取りアクセス権限、書き込みアクセス権限、および実行アクセス権限の場合は **007**

4. バージョン 3.5.x.x 以上の Mozilla Firefox がインストールされていることを確認してください。
5. データ移動サービスを開始する前に、接続リセット・エラーを回避するために、AIX オペレーティング・システムで構成されているプロセスの数を増加します。プロセスの数を増加するには、コマンドを使用するか、AIX インターフェースを使用してください。
  - 次のコマンドを実行します。

```
chgdev -l sys0 -a maxuproc='256'
```
  - AIX インターフェースで、**smitty** と入力し、「システム環境 (System Environments)」>「オペレーティング・システムの特性的変更/表示 (Change / Show Characteristics of Operating System)」>「許可されるユーザーあたりのプロセス数 (Number of processes allowed per user(Num.))」を選択します。
6. AIX システムの調整を行うための手順を実行します。
7. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

## **Linux システムのインストール準備**

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』というトピックの、必要な準備手順をすべて実行する必要があります。

注: ただし、WebSphere Application Server のインストールに関連する以下の点に注意してください。

- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、インストールに IBM Installation Manager を使用しますが、InstallShield Multiplatform (ISMP) は使用しません。ISMP の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。
- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、フィックスパックおよびインテリム・フィックスをインストールするのに IBM Installation Manager を使用しますが、WebSphere Update Installer は使用しません。WebSphere Update Installer の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。

バージョン 3.5.x.x 以上の Mozilla Firefox がインストールされていることを確認してください。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。Red Hat Enterprise Linux 6.0 (64 ビット) 上にインストール・マネージャーをインストールするには、『Unable to install Installation Manager on RHEL 6.0 (64-bit)』を参照してください。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

値を変更するには、以下の処理を行います。

1. 次の行を、次に示す順序で /etc/sysctl.conf ファイルに追加します。

```
kernel.shmni=4096
kernel.shmmax=4294967296
kernel.shmall=8388608
#kernel.sem=<SEMMS><SEMMNS><SEMOPM><SEMMNI>
kernel.sem=250 256000 32 4096
kernel.msgmni=16384
kernel.msgmax=65536
kernel.msgmnb=65536
```

2. 次の行を /etc/security/limits.conf の末尾に追加します。

```
# - stack - max stack size (KB)
* soft stack 32768
* hard stack 32768
# - nofile - max number of open files
* soft nofile 65536
* hard nofile 65536
# - nproc - max number of processes
* soft nproc 16384
* hard nproc 16384
```

3. システムをリブートします。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux システム上で以下の手順を実行します。

1. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。
2. Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して、root ユーザーとして IBM Business Process Manager をインストールする場合は、前述の手順のとおりに行い、このステップはスキップしてください。それ以外の場合は、オープン・ファイルの最大数を少なくとも 8800 に増やします。デフォルト設定は通常、十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n**

を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。ulimit 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。

- a. /etc/security/limits.conf を開きます。
- b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

\* **hard nofile 8800**

\* **soft nofile 8800**

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

この設定の詳細については、**man limits.conf** を実行するか、WebSphere Application Server インフォメーション・センターのトピック『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。

3. ご使用のオペレーティング・システム用の以下のパッケージをインストールします。

オプション	説明
<b>Red Hat Enterprise Linux 5</b>	compat-libstdc++-33-3.2.3-61 compat-db-4.2.52-5.1 libXp-1.0.0-8 rpm-build-4.4.2-37.el5 <b>64 ビット・カーネルのみ:</b> compat-libstdc++-296-2.96-138
<b>Red Hat Enterprise Linux 6</b>	ksh-version.rpm Korn シェル  詳細な手順とパッケージのリストについて『Unable to install Installation Manager on RHEL 6.0 (64-bit)』を参照してください。
<b>SUSE Linux Enterprise Server 9.0</b>	XFree86-libs-32bit-9 glibc-32bit-9 glib-32bit-9 gtk-32bit-9

訂正として新しいパッケージがある場合は、これらのいずれのパッケージについても、より最新のリリースをインストールすることもできます。ご使用のハードウェアに固有の追加パッケージがある場合は、インストールします。

単一行コマンドを使用して、依存関係 (必要な全パッケージ) をインストールできます。以下のコマンドは、サポート対象の Linux 配布版のデフォルトのパッケージ・マネージャーを使用した例です。

- **Red Hat Enterprise Linux 5 (32-bit):**

```
yum install compat-libstdc++-33 compat-db libXp rpm-build RHEL 5.x
```

- **Red Hat Enterprise Linux 5 (64-bit):**

```
yum install compat-libstdc++-33 compat-db libXp rpm-build compat-libstdc++-296
```

- **SUSE Linux:**

```
zypper install XFree86-libs-32bit-9 glibc-32bit-9 glib-32bit-9 gtk-32bit-9
```

4. 以下のコマンドを使用して、**umask** 値を 077 に設定します。

#### **umask 077**

値 077 は、製品が許容する最も制限的な値です。以下のアクセス・レベルの場合は、オプションで、より制限の弱い **umask** 値を設定することを選択できます。

- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り専用アクセス権限の場合は 037
  - 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り/書き込みアクセス権限の場合は 027
  - 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取りアクセス権限、書き込みアクセス権限、および実行アクセス権限の場合は 007
5. Red Hat Enterprise Linux 5 システムの場合、SELinux を使用不可に設定するか、または許容モードに設定します。
  6. コンピューターを再起動します。
  7. Linux システムの調整を行うための手順を実行します。
  8. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

## **Solaris システムのインストール準備**

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Solaris オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』というトピックの、必要な準備手順をすべて実行する必要があります。

注: ただし、WebSphere Application Server のインストールに関連する以下の点に注意してください。

- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、インストールに IBM Installation Manager を使用しますが、InstallShield Multiplatform (ISMP) は使用しません。ISMP の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。
- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、フィックスパックおよびインテリム・フィックスをインストールするのに IBM Installation Manager を使用しますが、WebSphere Update Installer は使用しません。WebSphere Update Installer の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。

Solaris システムで実行するようにインストール・マネージャーを構成するための準備情報については他に、次の技術情報を参照してください: <http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24027719>

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Solaris システム上で以下の手順を実行します。

1. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。

2. オープン・ファイルの最大数を増やしてください。通常デフォルト設定では十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n** を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。**ulimit** 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。

インストール前に、以下のコマンドを実行します。

```
ulimit -Hn 8800
```

または、以下の手順でリソースしきい値ファイルを編集します。

a. Open /etc/system

b. 次の行をファイルの末尾に追加します。

```
set rlim_fd_max=8800
```

c. ファイルを保存して閉じます。

d. オペレーティング・システムからログオフしてから、再度ログインします。

3. 以下のコマンドを使用して、**umask** 値を 077 に設定します。

```
umask 077
```

値 077 は、製品が許容する最も制限的な値です。以下のアクセス・レベルの場合は、オプションで、より制限の弱い **umask** 値を設定することを選択できます。

- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り専用アクセス権限の場合は 037
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り/書き込みアクセス権限の場合は 027
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取りアクセス権限、書き込みアクセス権限、および実行アクセス権限の場合は 007

4. Solaris システムの調整を行うための手順を実行します。

5. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

## Windows システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールするには、まず Windows オペレーティング・システムを準備する必要があります。

IBM Business Process Manager インストール済み環境で DB2 Express を使用する場合は、管理特権 (管理者ユーザー) が必要で、インストールを実行するシステム上に既存の DB2 データベース・サーバーがなくてはなりません。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件製品であるため、IBM Business Process Manager をインストールする前に、WebSphere Application Server の準備作業をすべて完了する必要があります。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Windows システムで以下の手順を実行します。

1. WebSphere Application Server のインストール環境について、以下の手順を実行します。

- a. Web ブラウザーをダウンロードしてインストールします。ランチパッド・アプリケーションを使用したい場合は、Web ブラウザーをインストールする必要があります。システムにデフォルトのブラ

ユーザーがないか、またはブラウザが破損しているか正しくインストールされていない場合は、インストール・ウィザード・パネルでさまざまなハイパーリンクを開こうとするとエラーが発生することがあります。

- b. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。
- c. 製品をインストールしているマシン上で、すべての WebSphere Application Server 関連の Java プロセスを停止します。
- d. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
- e. **process\_spawner.exe** プログラムのすべてのインスタンスを停止します。**process\_spawner.exe** が存在しない場合は、このステップをスキップできます。**process\_spawner.exe** は、WebSphere Application Server が適切に機能するための必要なバイナリー・ファイルです。**process\_spawner.exe** は直接呼び出されるものではなく、Windows 上の WebSphere Application Server のコア機能となります。
- f. 十分なディスク・スペースを用意します。必要なディスク・スペースの量は、インストールされる機構または製品によって異なります。インストール・ウィザードを使用して製品をインストールする場合、「インストールの要約」パネルに、選択された機構および製品に基づく、必要なディスク・スペースの概算量が示されます。アプリケーションおよび構成を以前のバージョンからマイグレーションする計画がある場合は、アプリケーション・オブジェクトに十分なディスク・スペースがあることを確認します。以下の場合に大まかなガイドラインとして、アプリケーションのサイズの 110% に相当するスペースを見込んでおいてください。
- g. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチの有無を調べますが、前提条件をまだ検討していない場合は、サポートされるハードウェアおよびソフトウェア Web サイトで前提条件を検討してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションの方法については、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

WebSphere Application Server インストール済み環境では、IBM Installation Manager ウィザードを使用します。このウィザードのグラフィカル・インターフェースを使用することができます。また、サイレント・モードでウィザードを使用することもできます。リモートでインストールしており、インストール・ウィザードを使用する場合は、グラフィックスの使用をサポートする接続メカニズムを使用する必要があります。ご使用の接続でグラフィックスの使用がサポートされていない場合は、製品をサイレント・インストールします。

インストールを正しく実行するには、**USER\_HOME** ディレクトリーへの書き込み権限が必要です。**USER\_HOME** への書き込み権限がない場合は、以下のインストール上の制限に注意してください。

- プロファイル管理ツールの GUI は、**USER\_HOME** への書き込みを必要とするため、機能しません。代わりに、コマンド行で **manageprofiles** を使用してプロファイルを管理する必要があります。
2. 『Windows システムの調整』のステップを完了します。
  3. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

## データベースとインストールおよび構成のシナリオ

ソフトウェアと連携するようにデータベースを構成する方法は、インストールするソフトウェアおよび達成しようとするシナリオに関連します。

「標準インストール」オプションを使用するインストール・シナリオでは、データベースがローカル側 (IBM Business Process Manager のインストール先と同じシステム上) にあってもリモート側 (別のシステム上) にあっても、データベースを事前に作成しておく必要があります。データベースを事前に作成する必要のないシナリオは、IBM Business Process Manager に組み込まれている DB2 Express データベースをインストールする場合のみです。DB2 Express は、Windows および Linux for Intel の IBM Business Process Manager に組み込まれています。DB2 Express がまだインストールされていない場合は、IBM Business Process Manager インストーラーを実行するとオプションとしてインストールできます。また、このインストーラーによって DB2 Express に共通データベースおよびコンポーネント固有データベースも作成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。

「標準」インストール用の DB2 Express を使用しないシナリオはすべて、既存のデータベースを使用する「標準」インストールと見なされます。つまり、既にインストール済みのデータベースがあり、インストーラーの「既存データベース」パネルを使用して構成プロパティを指定することになります。詳細については、『標準インストール時の既存データベースの構成』を参照してください。このオプションを使用するには、ご使用のデータベースが既に作成されていることを確かめる必要があります。

ユーザーとデータベース管理者は、ソフトウェアをインストールおよび構成する前に、インフォメーション・センター内のデータベースの構成に関する情報を確認する必要があります。

---

## IBM Business Process Manager Standard のインストール

IBM Business Process Manager Standard のインストールには、ソフトウェアの取得とそれに続くソフトウェア・ファイルのインストール (前提ソフトウェア、IBM Business Process Manager Standard によって使用されるデータベース製品、および IBM Business Process Manager Standard ソフトウェア) が含まれます。

## IBM Business Process Manager Standardのインストール

ソフトウェアは、Launchpad プログラムで対話的にインストールするか、Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行してサイレントにインストールします。サイレント・モードでは、インストール・ウィザードはグラフィカル・インターフェースを表示せずに、応答ファイルから応答を読み取ります。

### ロードマップ: IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager インストーラーおよび構成プログラムは、さまざまな開発シナリオおよび実動シナリオに対応します。このロードマップでは、スタンドアロン環境または Network Deployment 環境で IBM Business Process Manager Standard をインストールし構成するために最も広く使用されている方法について説明します。

このロードマップでは、一般的なインストールおよび構成の各シナリオをそれぞれ 1 つのセクションで説明しています。各セクションには、実行するアクティビティ、説明へのリンク、および各アクティビティの完了後の結果についての注を示す表が含まれています。

このロードマップの各セクションでは、以下のシナリオについて説明します。

- 標準インストール。

「標準インストール」オプションでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを構成します。標準インストールでは、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** ユーティリティを使用してプロファイルを別個に作成する必要はありません。

「標準インストール」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。また、(Express、Standard、または Advanced 構成の) すべての Business Process Manager フィーチャーおよび機能を単一のマシンに取り込むための理想的な方法でもあります。標準インストールは電子インストール・イメージからのみ使用でき、DVD からは使用できません。

『「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール』を参照してください。

- スタンドアロン環境のカスタム・インストール。

「カスタム・インストール」オプションでは、ご使用のシステムにソフトウェアをインストールし、次にプロファイル管理ツールを実行して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。標準インストール・パスでは使用できない構成フィーチャーを必要とするスタンドアロンの Process Center 環境または Process Server 環境を作成する場合は、製品バイナリーをインストールした後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを作成します。

『「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成』を参照してください。

- Network Deployment 環境のカスタム・インストールおよび構成。

このインストールおよび構成のシナリオでは、一般に大規模な実稼働環境に要求されるキャパシティ、スケーラビリティ、および頑強性が提供されます。Network Deployment 構成は、コラボレーションを通じてワークロード・バランシングおよびフェイルオーバーを提供する複数のサーバーから成るグループ (クラスターと呼ばれます) で構成されています。各サーバーは、デプロイメント・マネージャーと呼ばれる単一の管理コンソールを使用して一元管理されます。

カスタム・インストールの後に、いくつかの構成オプションを選択できます。

- 単純な Network Deployment 構成用の **configureNode** コマンド行ユーティリティーを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、**configureNode** コマンドを使用して、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成し、パターン・ベースの Network Deployment 構成を作成します。『configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールと Network Deployment 環境の構成』を参照してください。

- プロファイル構成およびデプロイメント環境ウィザードを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、プロファイル構成プログラム (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー) を使用して、1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成します。さらに、デプロイメント環境ウィザードを使用して、パターン・ベースの Network Deployment 構成を作成します。『IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用』を参照してください。

- プロファイル構成および管理コンソールまたは **wsadmin** コマンドを使用する。

インストーラーがご使用のシステムにソフトウェアをインストールします。次に、プロファイル構成プログラム (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー) を使用して、1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成して構成します。さらに、管理コンソールまたは **wsadmin** コマンドを使用して、カス

タマイズされた Network Deployment 構成を作成します。『IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは wsadmin コマンドの使用』を参照してください。

Network Deployment に関する概念情報については、『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』および『デプロイメント環境の計画』を参照してください。

ソフトウェアと一緒にパッケージされ、デプロイメント環境ウィザードによってサポートされるトポロジー・パターンについては、『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』を参照してください。

## 「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール

電子イメージからインストールする場合は、インストールで「標準インストール」オプションを使用して、ソフトウェアのインストールとスタンドアロン・プロファイルの構成を自動的に行うことができます。標準インストールでは、インストール後にプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** を実行する必要はありません。

「標準」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も迅速な方法です。このインストール・オプションでは大半の設定にデフォルトが使用されますが、インストール・パスとデータベース・タイプは指定できます。

標準インストールでは、Process Center と Process Server を別個にインストールします。まず Process Center の標準インストールを最後まで実行してから、Process Server の標準インストールを最後まで実行します。

「標準」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールについては、『標準インストール: IBM Business Process Manager Standard』を参照してください。

## 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルを構成することができます。

表 51. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Standard』を参照してください。	カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center、IBM Process Designer、および Process Server の製品バイナリーをインストールします。  カスタム・インストールでは、インストール中にプロファイルを作成しません。

表 51. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
プロファイル管理ツールの起動	<p>インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。</p> <p><b>制約事項:</b> Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで <b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリティを使用します。</p>	<p>プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。</p> <p>Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。</p>
1 つ以上の Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成	<p>Process Center スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成</li> <li>• manageprofiles ユーティリティを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成</li> </ul>	<p>Process Center スタンドアロン・プロファイルが作成されます。このプロファイルは、スタンドアロン・サーバー環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。</p> <p>プロファイル作成プロセスは、(共通およびコンポーネント固有の) データベースを構成し、スタンドアロン・サーバー環境をサポートするために必要なデータベース表を生成します。</p> <p>これで、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成したり、Process Designer をインストールしたりできるようになります。</p>
Process Designer のインストール	<p>ソフトウェアのビジネス・プロセス設計機能の使用を開始する場合は、Process Designer をダウンロードおよびインストールします。『Process Designer のインストール』を参照してください。</p>	<p>Process Designer がインストールされます。</p> <p>Process Designer の使用方法については、以下のトピックを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Process Designer の雇用サンプル・チュートリアル</li> <li>• Authoring environments</li> <li>• Process Center によるプロセス開発</li> </ul>
1 つ以上の Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成	<p>ランタイム環境も含めてソフトウェアを完全に構成することが目的である場合は、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。Process Server スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロファイル管理ツールを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成</li> <li>• manageprofiles ユーティリティを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成</li> </ul>	<p>スタンドアロン・サーバー環境が構成され、いつでも使用できます。</p>

表 51. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
<p>プロファイル作成時に「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスをクリアした場合は、データベース・スクリプトを手動で実行し、その後ブートストラップ・ユーティリティを実行してデータベースにシステム情報をロードする</p>	<p>ブートストラップ・ユーティリティの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。</p> <p><b>Windows</b> bootstrapProcessServerData.bat</p> <p><b>Linux</b>      <b>UNIX</b></p> <p>bootstrapProcessServerData.sh</p> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティを実行する必要があります。</p>	<p>Process Server/Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。</p>

## configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールと Network Deployment 環境の構成

インストーラーの「標準インストール」または「カスタム・インストール」オプションを使用してソフトウェアをインストールし、次に **configureNode** コマンドを使用して 1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを構成し、さらにパターン・ベースの Network Deployment 環境を作成することができます。また、後から **configureNode** を使用して既存の環境にノードを追加することもできます。

**configureNode** コマンドは、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンを使用して単一セル環境を作成します。このトポロジー・パターンには、以下の 3 つのクラスターが含まれます。

- メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
- サポート・インフラストラクチャー・クラスター
- アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター

表 52. configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
<p>ソフトウェアをインストールする</p>	<p>標準インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager のインストールについては、『標準インストール: IBM Business Process Manager Standard』を参照してください。</p> <p>「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Standard』を参照してください。</p>	<p>IBM Business Process Manager Standard のインストールでは、ご使用のシステムに Process Center および Process Designer の製品バイナリをインストールします。</p> <p>Process Center には Process Server 機能が含まれていますが、Advanced Process Server 機能は含まれていません。例えば、Business Process Choreographer、ビジネス・ルール、および Business Space のコンポーネントは、IBM Business Process Manager Standard の一部ではありません。</p>

表 52. configureNode コマンドを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
configureNode コマンドを使用したデプロイメント・マネージャー、1 つ以上のカスタム・ノード、およびデプロイメント環境の作成	『configureNode コマンドを使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。	Process Center または Process Server の Network Deployment 環境が作成されます。

## IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを構成することができます。プロファイル作成後に、デプロイメント環境ウィザードを使用して、パターン・ベースの Network Deployment 構成を生成できます。

デプロイメント環境ウィザードからどのパターンを選択するかは、ご使用の環境の計画された使用法 (PoC (概念検証)、テスト、実動) およびご使用のエンタープライズで必要な処理能力 (高可用性やフェイルオーバー処理など) を基準にすることができます。

このインストールおよび構成のシナリオでは、ソフトウェアに含まれるトポロジー・パターンの 1 つによってビジネス・ニーズおよび要件を満たすことができると想定しています。ソフトウェアに含まれるパターンでは対応できない要件がある場合は、管理コンソールを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成することができます。9 ページの『IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは wsadmin コマンドの使用』を参照してください。

表 53. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM Business Process Manager Standard』を参照してください。	<p>カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center、Process Designer、および WebSphere ESB の製品バイナリーをインストールします。Process Center には Process Server 機能が含まれていますが、Advanced Process Server 機能は含まれていません。例えば、Business Process Choreographer、ビジネス・ルール、および Business Space のコンポーネントは、IBM Business Process Manager Standard の一部ではありません。</p> <p>これでプロファイル作成プロセスを開始できます。IBM Business Process Manager Standard のプロファイル管理ツールは、データベース設計文書のインポートをサポートしません。</p>

表 53. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
プロファイル管理ツールの起動	<p>インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。</p> <p><b>制約事項:</b> Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで <b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリティを使用します。</p>	<p>プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。</p> <p>Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。</p>
Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成	<p>プロファイルを作成する方法に応じて、以下のトピックのいずれかを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成</li> <li><b>manageprofiles</b> を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャー・プロファイルがあること。</p> <p>このプロファイルは、環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。</p> <p>デプロイメント・マネージャーとは、他のサーバーの論理グループ (セル) の操作を管理するサーバーです。デプロイメント・マネージャーは、サーバーおよびクラスターを管理するための中央の場所になっています。</p>
デプロイメント・マネージャーを開始し、開始操作が成功したことを検証します。	<p>デプロイメント・マネージャーの開始方法に関する詳細については、『デプロイメント・マネージャーの開始』を参照してください。</p>	<p>デプロイメント・マネージャー・サーバーが開始します。</p>
Process Center カスタム (管理対象ノード) プロファイル (複数の場合もある) の作成	<p>このタスクでは、プロファイル作成プロセスの一部としてノードを統合しないと想定しています。(カスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成してから) ノードを後で統合するためのパラメーターをプロファイル管理ツールまたは <b>manageprofiles</b> コマンドで設定すると想定しています。</p> <p>プロファイルを作成する方法に応じて、以下のトピックのいずれかを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成</li> <li><b>manageprofiles</b> を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成</li> </ul> <p>管理対象ノードごとにこのタスクを繰り返します。</p>	<p>カスタム (管理対象ノード) プロファイルが作成されます。これらのノードは、デプロイメント・マネージャーによって管理され、運営されます。</p> <p>これで、ノードを Process Center デプロイメント・マネージャー・セルに統合できるようになります。管理対象ノードには、ノード・エージェントが含まれ、さらに管理対象サーバーを含めることができます。管理対象ノードでは、管理対象サーバーを構成して実行できます。</p>

表 53. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
カスタム (管理対象) ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合	<p><b>addNode</b> コマンドを使用して Process Center カスタム・ノードを Process Center デプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法の説明については、『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。</p>	<p>カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。</p>
デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 構成の作成	<p>デプロイメント環境ウィザードの使用方法については、『パターンを使用した Process Center デプロイメント環境の作成』を参照してください。</p>	<p>このタスクの一部として、すべての据え置かれた構成アイテムを処理し、Process Center デプロイメント環境を生成する必要があります。</p> <p>Process Center Network Deployment 環境が作成されます。</p>
Process Server のセルの作成	<p>Process Server を実行するには、別個のセルを作成する必要があります。</p> <p>そのためには、同じ一連のステップを実行します。ただし、以下のトピックで説明するように、Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび Process Server カスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成し、次にデプロイメント環境ウィザードを使用して Process Server デプロイメント環境を作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成</li> <li>• プロファイル管理ツールを使用した Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成</li> <li>• manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成 <ul style="list-style-type: none"> <li>– カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合</li> </ul> </li> <li>• パターンを使用した Process Server デプロイメント環境の作成</li> </ul> <p>このタスクの一部として、すべての据え置かれた構成アイテムを処理し、Process Server デプロイメント環境を生成する必要があります。</p>	<p>Process Server Network Deployment 環境が作成されます。</p>
手動によるデータベース構成ステップの実行	<p>構成ステップを据え置いた場合は、デプロイメント環境でクラスターを開始する前に、追加のデータベース構成を実行する必要があります。『Network Deployment 環境のデータベース構成の完了』を参照してください。</p>	<p>これで、Network Deployment 環境に必要な手動のデータベース構成アクティビティは完了です。</p>

表 53. デプロイメント環境ウィザードを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベースへのシステム情報のロード	<p>ブートストラップ・ユーティリティーの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。</p> <p><b>Windows</b> bootstrapProcessServerData.bat</p> <p><b>Linux</b>      <b>UNIX</b></p> <p>bootstrapProcessServerData.sh</p> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティーを実行する必要があります。</p>	Process Server / Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

### IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、および管理コンソールまたは wsadmin コマンドの使用

ソフトウェアにパッケージされ、デプロイメント環境ウィザードを使用して実装されるトポロジー・パターンは、広範囲にわたるビジネス・プロセス要件に対応できるように設計されています。ただし、これらのトポロジー・パターンでは十分に対応できないシナリオがある場合は、管理コンソールを使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成できます。

**注:** このシナリオは、管理コンソールを使用して製品コンポーネントおよび機能を構成する方法を十分に理解しているユーザーを対象としています。このセクションで説明するインストールおよび構成のシナリオを開始する前に、デプロイメント環境ウィザードを使用して Network Deployment 環境を作成することを検討してください。

管理コンソール・アクションのサブセットで、コマンド・アシスタンスを使用することができます。コマンド・アシスタンスを使用できる場合は、最後に実行したコンソール・アクションに対応する wsadmin スクリプト・コマンドが表示されます。このデータを使用して、特定の管理タスクを自動化する wsadmin スクリプトを作成できます。コマンド・アシスタンスに関する詳細については、『コマンド・アシスタンスを使用した管理コンソールのアクション』を参照してください。

表 54. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ソフトウェアをインストールし、必要なプロファイルを構成します。	<p>5 ページの『IBM Business Process Manager Standard のインストール、デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの構成、およびデプロイメント環境ウィザードの使用』に記載されている、『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 構成の作成』の前のタスクまでを完了します。</p> <p>デプロイメント環境ウィザードを使用する代わりに、管理コンソールを使用して、カスタマイズされたデプロイメント環境を手動で作成します。</p>	<p>IBM Business Process Manager Standard のカスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center および Process Designer の製品バイナリーをインストールします。</p> <p>Process Center には Process Server 機能が含まれていますが、Advanced Process Server 機能は含まれていません。例えば、Business Process Choreographer、ビジネス・ルール、および Business Space のコンポーネントは、IBM Business Process Manager Standard の一部ではありません。</p> <p>デプロイメント・マネージャー・ノードおよびカスタム管理対象ノードが作成され、ノードがデプロイメント・マネージャー・セルに統合されます。</p> <p>これで、管理コンソールを使用して、Network Deployment 環境を構成するサーバー、サーバー・クラスター、およびコンポーネントを作成できるようになります。</p>
管理コンソールを使用したサーバーおよびクラスターの作成と構成	『管理コンソールを使用したサーバーおよびクラスターの作成と構成』を参照してください。	使用環境のサーバーおよびサーバー・クラスターが作成されました。
Process Server としてのサーバーまたはクラスターの構成	<p>管理コンソールを使用してご使用のサーバーまたはサーバー・クラスターを Process Server として構成するための情報については、『サーバーまたはクラスターの Process Server としての構成』を参照してください。</p> <p>wsadmin を使用して、サーバーまたはクラスターを Process Server として構成することもできます。『configureProcessServer コマンド』を参照してください。</p>	サーバーまたはサーバー・クラスターが Process Server として構成されます。
サーバー上またはクラスター上の Performance Data Warehouse コンポーネントの構成	<p>管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse を構成することに関する情報については、『サーバーまたはクラスター上での Performance Data Warehouse コンポーネントの構成』を参照してください。</p> <p>サーバーまたはクラスター上で wsadmin を使用して Performance Data Warehouse を構成することもできます。『configurePerfDW コマンド』を参照してください。</p>	Process Server 上で Performance Data Warehouse が構成されます。
メッセージング・サービスのセットアップ	管理コンソールを使用してメッセージング・サービスを構成することに関する情報については、『メッセージング・サーバー環境のセットアップ』を参照してください。	メッセージング・サーバー環境がセットアップされます。

表 54. 管理コンソールを使用した IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
JNDILookup Web サービスの構成	管理コンソールを使用して JNDILookup Web サービスを構成することに関する情報については、『JNDILookup Web サービスの構成』を参照してください。	JNDILookup Web サービスが構成されました
データベースへのシステム情報のロード	<p>ブートストラップ・ユーティリティの実行方法については、『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">Windows    bootstrapProcessServerData.bat</p> <hr/> <p style="text-align: center;">Linux      UNIX</p> <p style="text-align: center;">bootstrapProcessServerData.sh</p> </div> <p>クラスター・メンバーの最初の始動の前に、ブートストラップ・ユーティリティを実行する必要があります。</p>	Process Server / Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされます。

## 標準インストール: IBM Business Process Manager Standard

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Standard をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

標準インストールの使用シナリオを理解して、このオプションで作成されるインストール環境がニーズを満たすことを確認してください。システム上に IBM Business Process Manager の個人用コピーを保持するには、「標準的」オプションを選択する必要があります。このようにして、ローカルで統合サービスまたはビジネス・プロセスを開発したり、製品に組み込まれたエクスポート機能およびインポート機能を使用して成果物を提供したりできます。標準インストールは、PoC (概念検証) 作業と、製品のフィーチャーおよび機能の習得にも推奨されます。

**重要:** 標準インストールでは、製品のビット・アーキテクチャーがシステムのビット・アーキテクチャーと一致していなければなりません。32 ビット・システムの場合、32 ビット・バージョンの製品がインストールされます。64 ビット・システムの場合、64 ビット・バージョンの製品がインストールされます。64 ビット・システムに 32-bit ビット製品をインストールする場合は、「カスタム・インストール」オプションを使用する必要があります。

**ヒント:** 組み込みの DB2 Express データベースではなく既存のデータベース・サーバーを使用する場合は、この手順を開始する前に、DB2、Microsoft SQL Server、または Oracle の構成情報を準備します。このオプションを使用するには、データベースが既に作成されている必要があります。DB2 の場合は、少なくとも 32 K のページ・サイズでデータベースを作成する必要があります。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

**Windows** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 で IBM Business Process Manager Standard をインストールまたは実行するには、Microsoft Windows のユーザー・アカウント特権を昇格させる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「管理者として実行 (Run as administrator)」を選択します。

**重要:** 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Standard の複数のインスタンスをインストールできます。

このタスクでは、ランチパッドから標準インストール・オプションを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールする手順について説明します。

- 標準インストールでは、IBM Process Center または IBM Process Server 用の標準スタンドアロン・プロファイルが作成されます。
  - 標準インストールでは、既存のデータベースが指定されていない場合に、DB2 Express をインストールできます。DB2 Express が使用可能なのは、Windows および Linux の 32 ビット・システムと 64 ビット・システムのみです。ユーザーは管理者または root ユーザーであり、他の DB2 製品がインストールされていない必要があります。
  - 標準インストールでは、自動的にデータベースにデータを取り込みます。
  - Windows** Windows オペレーティング・システムの場合、Advanced Process Center のインストールにより、IBM Process Designer が自動的にインストールされます。
  - 標準インストールでは、Process Center 管理コンソール、Playback Server 管理コンソール、Process Designer、および WebSphere 管理コンソールのショートカットが作成されます。
1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、推奨される暫定修正レベルに製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

- Linux** **UNIX** <user.home>/bpm\_updates.properties

**注:** <user.home> は、ユーザーのホーム・ディレクトリーを示します。

- Windows** C:/HOMEPATH%bpm\_updates.properties

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が C:%Documents and Settings%user\_name% を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が C:%Users%user\_name% を示します。

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルは、ifix プレフィックスを使用します。プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。接頭部とドットの後の名前部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、ifix のアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ローケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。以下に例を示します。

ifix.1=C:%bpmUpdates

ifix.2=C:%WASUpdates

2. 以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を開始します。

**Linux**    **UNIX**    `extract_directory/launchpad.sh`

**Windows**    (コマンド行から) `extract_directory%1launchpad.exe`

3. 「ようこそ」 ページで「標準インストール」をクリックします。

4. 以下のインストール・オプションのいずれかを選択します。

- **Process Center:** Process Center は、Process App のビルドに使用する共用開発環境です。Process Center には、Process Designer 開発ツールが含まれています。
- **Process Server:** Process Server は、Process App のデプロイ先となる場所です。

5. 選択したインストール・オプションに関する情報を指定します。

- **Process Center: Process Center** を選択した場合は、以下の情報を指定します。
  - ホスト名
  - インストールの場所
  - Process Designer のインストール場所
- **Process Server: Process Server** を選択した場合は、以下の情報を指定します。
  - ホスト名
  - インストールの場所
  - 環境のタイプ
  - 環境の名前

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択していない場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- ホスト名
- ポート
- ユーザー名
- パスワード

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択した場合は、「ホスト名」、「ポート」、「ユーザー名」、および「パスワード」の各フィールドが使用不可になります。

**重要:** DB2 Express をインストールする場合、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

6. 「次へ」をクリックします。

7. データベースを選択します。

- 組み込みの DB2 Express データベースをインストールする場合は、そのデータベースがインストールされて、すべての構成が行われます。デフォルト値は以下のとおりです。

- **Linux**    インスタンス・ユーザー名およびパスワード: `bpminst` および `bpminst1`

- **Linux**    隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: `bpfenc` および `bpfenc1`

- **Linux**    管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: `bpmadmin` および `bpmadmin1`

- **Windows**    管理ユーザー名およびパスワード: `bpmadmin` および `bpmadmin1`

**重要:** デフォルト・パスワードがご使用のオペレーティング・システム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーに準拠していない場合は、システムのパスワード・ポリシーに適合するパスワードを指定できるように、「標準インストール」ではなく「カスタム・インストール」を使用する必要があります。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

- 既存のデータベースを使用する場合は、データベース固有のフィールドの説明を確認するには、「**セットアップ手順**」のリンクをクリックします。標準インストール時に既存のデータベースを構成する場合の必須フィールドの値に関する情報を参照してください。
- 8. 「次へ」をクリックします。
- 9. 「ライセンス (Licenses)」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」をクリックし、「次へ」をクリックします。
- 10. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

### 重要:

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of *recommended\_value*. Please increase the ulimit number to minimum value of *recommended\_value* and re-start the installation.

Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue `ulimit -n recommended_value` and then restart the installer.

If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit `-n recommended_value` and then restart the installer.

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

- a. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。 AIX
  - 1) `/etc/security/limits` を開きます。
  - 2) **default** セクションを編集または追加して、以下の行を含めます。

**nfiles = *recommended\_value***

- 3) ファイルを保存して閉じます。
- 4) ログオフし、ログインし直します。

#### Linux

- 1) `/etc/security/limits.conf` を開きます。
- 2) **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

\* **hard nofile *recommended\_value***

\* **soft nofile *recommended\_value***

- 3) ファイルを保存して閉じます。
- 4) ログオフし、ログインし直します。

#### Solaris

1) /etc/system を開き、ファイルの終わりに以下の行を追加します。

**set rlim\_fd\_max=8800**

- 2) ファイルを保存して閉じます。
- 3) ログオフし、ログインし直します。

- b. コンピューターを再始動します。
- c. インストーラーを再始動します。

標準インストールでは、全機能を使用可能な Process Center または Process Server がインストールされます。Windows で Process Center をインストールすると、Process Designer もインストールされます。標準インストールでは、Process Center または Process Server のどちらかのプロファイルが作成され、オプションとして、正常に完了した後にファースト・ステップ・コンソールを起動できます。

ファースト・ステップ・コンソールを起動して、インストールの検証、サーバーの始動または停止、管理コンソールへのアクセス、Process Center コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、および製品資料へのアクセスを行います。

#### 関連タスク:

605 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Standard は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

『標準インストール時の既存データベースの構成』

標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

125 ページの『カスタム・インストール: 標準』

デプロイメント環境で追加のクラスター・ノードが必要な場合や、複雑なデプロイメント環境とデータベース・トポロジーがビジネスに必要な場合は、「カスタム・インストール」オプションを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

#### 標準インストール時の既存データベースの構成:

標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

IBM Business Process Manager Standard の標準インストール時に既存のデータベース・サーバーの使用を計画している場合は、データベースが既に存在すること、およびそのデータベースが空であることを確認する必要があります。DB2 の場合は、少なくとも 32 K のページ・サイズでデータベースを作成する必要があります。

標準インストール時に、既存のデータベース・サーバーに関する情報を指定する必要があります。ここでは、データベース認証用のユーザー名とパスワード、データベース・サーバーのホスト名とポート、および Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを指定する必要があります。

「データベース」ページで、そのデータベースに関する必要な情報を指定します。

- 123 ページの表 55 に、DB2 用のデータベース構成フィールドを示します。
- 123 ページの表 56 に、Microsoft SQL Server 用のデータベース構成フィールドを示します。
- 124 ページの表 57 に、Oracle 用のデータベース構成フィールドを示します。

表 55. DB2 データベース の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
Process Center のデータベース名または Process Server のデータベース名	Process Server データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

表 56. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Process Center のデータベース名または Process Server のデータベース名	Process Center または Process Server のデータベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「Windows 認証を適用」オプションを選択します。このオプションを選択すると、それ以降のフィールドが非アクティブになります。	
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

表 56. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>

表 57. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。</p>
ポート	<p>デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
Process Center のデータベース・システム ID	<p>正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。</p>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>

表 57. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>

#### 関連概念:

609 ページの『Microsoft SQL Server データベースの構成』

Microsoft SQL Server と共に使用するスタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### 関連タスク:

118 ページの『標準インストール: IBM Business Process Manager Standard』

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Standard をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

605 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Standard は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

639 ページの『DB2 for z/OS データベースの作成および構成』

デプロイメント環境がリモートの DB2 for z/OS データベースに依存している場合、このセクションの手順および参照情報を使用して、データベースの構成およびデータベース表の作成に役立ててください。

### カスタム・インストール: 標準

デプロイメント環境で追加のクラスター・ノードが必要な場合や、複雑なデプロイメント環境とデータベース・トポロジーがビジネスに必要な場合は、「カスタム・インストール」オプションを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

#### Windows

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 で IBM Business Process Manager Standard をインストールまたは実行するには、Microsoft Windows のユーザー・アカウント特権を昇格させることが必要です。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`launchpad.exe` を右クリックし、「管理者として実行 (Run as administrator)」を選択します。

**重要:** 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Standard の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
  - 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Standard のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が使用可能な場合は、Launchpad プログラムが自動的に開き、ステップ 2 に進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドの 1 つを入力して手動で Launchpad を開始します。

- **Linux** **UNIX** `mount_point/launchpad.sh`

- **Windows** (コマンド行から) `DVD_root¥launchpad.exe`

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
  - b. 以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を開始します。

- **Linux** **UNIX** `extract_directory/launchpad.sh`

- **Windows** (コマンド行から) `extract_directory¥launchpad.exe`

2. 「ようこそ」ページで「**カスタム・インストール**」をクリックします。

**重要:** 64 ビット・システムを使用している場合は、以下のメッセージが表示される場合があります。

ご使用のオペレーティング・システムは、ランチパッド前提条件の検査に失敗しました。IBM Installation Manager の実行のための次の 32 ビット GTK ライブラリーが、基本 OS で使用可能ではありません。*list of missing files*。  
32 ビット GTK ライブラリーをインストールし、そのインストール環境を再始動してください。

このメッセージが表示された場合、サーバーに 32 ビット・バージョンの GTK ライブラリーがインストールされていないか、そのライブラリーが正しいバージョンではありません。オペレーティング・システムの DVD または公式 Web サイトから入手する正しいバージョンの 32 ビット GTK ライブラリーでサーバーを更新してから、インストールを続行してください。

3. オプション: 「**ヘルプ・システムのインストール**」をクリックし、製品のヘルプ・システムと文書をコンピューターにインストールします。ヘルプ・システムは、文書を表示するための Eclipse フレームワークです。インストール後は、文書をスタンドアロン・モードで表示することも、サーバー・モードで表示することもできます。このオプションは、Windows XP 32 ビット、Linux 32 ビット、および AIX PPC64 でのみサポートされています。
4. 「**管理ユーザーとしてのインストール**」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。Windows で管理者グループに属する場合、あるいは Linux または UNIX システムで root ユーザーである場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。管理ユーザーでない場合、または管理特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリアします。
5. 「**インストール**」をクリックします。IBM Business Process Manager Standard をインストールすると、必要な WebSphere Application Server の Network Deployment および Feature Pack for XML は、自動的にインストールされます。
6. Installation Manager の「**パッケージのインストール**」ページで、「**IBM Business Process Manager Standard**」パッケージを選択します。
7. オプション: 「**IBM DB2 Express**」を選択し、組み込みの DB2 Express データベースをインストールおよび使用します。
8. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。

前提条件の検査時に以下のエラー・メッセージを受け取った場合、製品の非互換性の問題に対処し、「戻る」をクリックし、問題を修正して、「次へ」をクリックして続行します。

- DB2 Express をインストールするように選択した場合に、そのシステムに DB2 が既にインストールされていると、以下のエラー・メッセージを受け取ります。

DB2 は既にこのシステムにインストール済みです。既存の DB2 をアンインストールするか、DB2 Express をインストール対象から選択解除してください。

- IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 製品のいずれかを、他のいずれかの IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 または同等の以前のリリースの製品と同じ WebSphere Application Server のロケーションにインストールすることを選択すると、以下のエラー・メッセージを受け取ります。

IBM Business Process Manager V7.5.1 can not coexist with the following offerings:

Installation Manager は、参照用にすべての非互換製品をリストします。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of *recommended\_value*. Please increase the ulimit number to minimum value of *recommended\_value* and re-start the installation.

Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue `ulimit -n recommended_value` and then restart the installer.

If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit `-n recommended_value` and then restart the installer.

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

- a. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。

AIX

- 1) `/etc/security/limits` を開きます。
- 2) **default** セクションを編集または追加して、以下の行を含めます。

**nfiles = *recommended\_value***

- 3) ファイルを保存して閉じます。
- 4) ログオフし、ログインし直します。

Linux

- 1) `/etc/security/limits.conf` を開きます。
- 2) **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

\* **hard nofile *recommended\_value***

\* **soft nofile *recommended\_value***

- 3) ファイルを保存して閉じます。
- 4) ログオフし、ログインし直します。

Solaris

- 1) `/etc/system` を開き、ファイルの終わりに以下の行を追加します。

**set rlim\_fd\_max=8800**

- 2) ファイルを保存して閉じます。
  - 3) ログオフし、ログインし直します。
  - b. コンピューターを再始動します。
  - c. インストーラーを再始動します。
9. 「ライセンス」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。
10. 「ロケーション」ページでは、「**新規パッケージ・グループの作成**」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび **Installation Manager** のロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。「パッケージのインストール」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用するまでインストール済み環境または製品が正常に稼働しない可能性があります。

このような警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、**IBM** 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

**重要:** **DB2 Express** をインストールする場合、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

11. オプション: 組み込みの **DB2 Express** データベースをインストールおよび使用することを選択した場合は、「**共通構成**」ページで **DB2** 管理者の「**ユーザー名**」と「**パスワード**」を指定します。デフォルト値は以下のとおりです。
- **Linux** インスタンス・ユーザー名およびパスワード: **bpminst** および **bpminst1**
  - **Linux** 隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: **bpmfenc** および **bpmfenc1**
  - **Linux** 管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: **bpmadmin** および **bpmadmin1**
  - **Windows** 管理ユーザー名およびパスワード: **bpmadmin** および **bpmadmin1**

**重要:** デフォルト・パスワードがご使用のオペレーティング・システム (**Windows 2008** など) のパスワード・ポリシーに準拠していない場合は、システムのパスワード・ポリシーに適合するパスワードを指定できるように、「**標準インストール**」ではなく「**カスタム・インストール**」を使用する必要があります。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれていてはなりません。

12. 「**要約**」ページで **IBM Business Process Manager Standard** パッケージのインストール前に選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。
13. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
- a. オプション: 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「**インストール・ログ**」ウィンドウを閉じる必要があります。
  - b. 終了時にプロファイル管理ツールを起動する場合は「**プロファイル管理ツール**」を選択し、そうでない場合は「**なし**」を選択してインストールを完了します。

- c. 「完了」をクリックして、Installation Manager を終了します。

ファースト・ステップ・コンソールを起動して、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始または停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、製品資料へのアクセスを行います。

#### 関連タスク:

118 ページの『標準インストール: IBM Business Process Manager Standard』

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Standard をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

### IBM Business Process Manager Standard のサイレント・インストール

IBM Business Process Manager Standard 製品パッケージをサイレント・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

**重要:** 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Standard の複数のインスタンスをインストールできます。

#### コマンド行を使用した IBM Business Process Manager Standard のサイレント・インストール:

コマンド行を使用して、IBM Business Process Manager Standard をインストールできます。(DVD ではなく) 電子インストール・イメージからサイレント・インストールを実行する必要があります。

IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数値を増やしてください。

```
Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of recommended_value.  
Please increase the ulimit number to minimum value of recommended_value and re-start the installation.
```

```
Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue ulimit  
-n recommended_value and then restart the installer.  
If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit  
-n recommended_value and then restart the installer.
```

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

1. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。 AIX
  - a. `/etc/security/limits` を開きます。
  - b. **default** セクションを編集または追加して、以下の行を含めます。

**nofiles = recommended\_value**

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

Linux

- a. `/etc/security/limits.conf` を開きます。
- b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

**\* hard nofile recommended\_value**

**\* soft nofile recommended\_value**

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

Solaris

- a. `/etc/system` を開き、ファイルの終わりに以下の行を追加します。

**set rlim\_fd\_max=8800**

- b. ファイルを保存して閉じます。
- c. ログオフし、ログインし直します。

2. コンピューターを再始動します。
3. インストーラーを再始動します。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment
- Feature Pack for XML

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

IBM Business Process Manager Standard をサイレント・インストールするには、以下のステップを実行します。

1. インストール前にライセンス条項を読んで同意します。**-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。

2. 次のコマンドを実行します。

**重要:** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

Windows

```
extract_directory\imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense  
-installationDirectory location  
-repositories repository  
-properties key=value,key=value  
-showVerboseProgress -log logName.log
```

UNIX

Linux

```
extract_directory/imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense -installationDirectory location  
-repositories repository -properties key=value,key=value -showVerboseProgress -log  
logName.log
```

ここで、

- *list\_of\_product\_IDs* は、インストールする製品と機能の ID のリストです。構文は *productID.feature.feature* で、複数の製品はスペースで区切ります。

表 58. 製品 ID

製品	製品 ID
IBM BPM Standard	com.ibm.ws.WBPMSTD
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm.websphere.ND.v70,core.feature, samples,import.productProviders.feature, import.configLauncher.feature, consoleLanguagesSupport.feature, runtimeLanguagesSupport.feature (すべての必須フィーチャーを含む)
Feature Pack for XML	com.ibm.websphere.XML.v10
Installation Manager	com.ibm.cic.agent,agent_core,agent_jre
DB2 for Linux (32 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.linuxia32
DB2 for Linux (64 ビット版)	com.ibm. ws.DB2EXP97. linuxia64
DB2 for Windows (32 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32
DB2 for Windows (64 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia64

- *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。
- *repository* は、ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスで、以下のいずれかのディレクトリーです。

```
extract_directory/repository/repos_32bit  
extract_directory/repository/repos_64bit
```

複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。

- *key=value* は、インストール環境に渡すキーと値のコンマで区切られたリストです。コンマとコンマの間にスペースを入れないでください。

表 59. キー

キー	説明
user.select.64bit.image	64 ビット・オペレーティング・システムにインストールする場合、以下の行を正確に追加します。  user.select.64bit.image,,com.ibm.websphere.ND.v70=true  デフォルト値は false です。
user.db2.admin.username	Windows のみ。DB2 データベースにアクセスする権限を持つユーザー名。デフォルト値は bpmadmin です。
user.db2.admin.password	Windows のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmadmin1 です。
user.db2.port	DB2 データベースのポート。デフォルト値は 50000 です。
user.db2.instance.username	Linux および UNIX のみ。DB2 インスタンスのユーザー名。デフォルト値は bpminst です。
user.db2.instance.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpminst1 です。
user.db2.fenced.username	Linux および UNIX のみ。fenced ユーザー名。デフォルト値は bpmfenc です。
user.db2.fenced.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmfenc1 です。
user.db2.das.username	Linux および UNIX のみ。管理サーバー (DAS) ユーザー名。デフォルト値は bpmadmin です。
user.db2.das.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmadmin1 です。

- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

このコマンドを実行すると、デフォルト・フィーチャーの製品がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、*imcl* のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

Installation Manager により、リストされた製品がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き込まれます。

次の例では、テスト環境を組み込んだ IBM Business Process Manager Standard、WebSphere Application Server Network Deployment、Feature Pack for XML、および DB2 for Windows 32 ビットを Windows にインストールします。

```
imcl install com.ibm.ws.WBPMSTD com.ibm.websphere.ND.v70,core.feature,samples,
import.productProviders.feature,
import.configLauncher.feature,consoleLanguagesSupport.feature,
runtimeLanguagesSupport.feature com.ibm.websphere.XML.v10 com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32
-acceptLicense -installationDirectory C:\IBM\BPM75 -repositories
D:\temp\BPM\repository\repos_32bit
-properties user.db2.admin.username=bpmadmin,user.db2.admin.password=bpmadmin1
-showVerboseProgress -log silentinstall.log
```

#### 関連資料:

 [imcl のコマンド行引数](#)

## IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

### 応答ファイルを使用した IBM Business Process Manager Standard のサイレント・インストール:

応答ファイルを作成し、その応答ファイルを使用して製品をインストールするコマンドを実行すれば、IBM Business Process Manager Standard をインストールできます。サイレント・インストールは、電子インストール・イメージから行う必要があります (DVD ではなく)。

IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

```
Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of recommended_value.  
Please increase the ulimit number to minimum value of recommended_value and re-start the installation.
```

```
Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue ulimit  
-n recommended_value and then restart the installer.  
If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit  
-n recommended_value and then restart the installer.
```

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

1. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。 AIX
  - a. `/etc/security/limits` を開きます。
  - b. **default** セクションを編集または追加して、以下の行を含めます。

**nfiles = *recommended\_value***

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

Linux

- a. `/etc/security/limits.conf` を開きます。
- b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

\* **hard nofile *recommended\_value***

\* **soft nofile *recommended\_value***

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. ログオフし、ログインし直します。

**Solaris**

- a. /etc/system を開き、ファイルの終わりに以下の行を追加します。

```
set rlim_fd_max=8800
```

- b. ファイルを保存して閉じます。
  - c. ログオフし、ログインし直します。
2. コンピューターを再起動します。
  3. インストーラーを再起動します。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment
- Feature Pack for XML

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

IBM Business Process Manager Standard をサイレント・インストールするには、以下のステップを実行します。

1. 必要な基本製品と IBM Business Process Manager Standard をインストールする応答ファイルを作成します。以下のディレクトリーからサンプル応答ファイルをコピーし、独自の応答ファイルを作成します。

```
extract_directory/responsefiles/BPM/template_response.xml
```

2. 応答ファイル・テンプレートのテキストの指示に従ってパラメーターを変更し、独自の応答ファイルを作成します。

以下の変更を行います。

- リポジトリーのロケーションを設定します。32 ビットまたは 64 ビットのいずれか適切な方のリポジトリーを選択し、使用しない方のリポジトリーはコメント化してください。 `extract_directory/responsefiles/BPM/` ディレクトリーから直接実行しない場合は、使用するインストール・リポジトリーの場所を指定します。リポジトリーは、ローカルでもリモートでも構いません。DVD から実行する場合は、DVD から応答ファイルをコピーし、DVD 上のリポジトリーでこの応答ファイルを再び指定します。
- 応答ファイルの置換変数を次のように設定します。
  - `${INSTALL_LOCATION_IM}` - IBM Installation Manager が既にインストールされているか、またはこれからインストールされるロケーション。
  - `${LOCATION_ECLIPSE_CACHE}` - Eclipse キャッシュのロケーション。このロケーションを設定する必要があるのは、このロケーションがまだ定義されていない場合のみです。このロケーションが既に設定済みの場合は、この行をコメント化してください。

- `{INSTALL_LOCATION}` - 製品のインストール先のロケーション。
  - `{FEATURE_LIST}` - 製品のフィーチャーのリスト。このリストは、インストールするフィーチャーのリストと置き換える必要があります。 `template_response.xml` ファイルに記載されている説明に従ってください。
- DB2 Express をインストールする場合は、`template_response.xml` ファイルの説明に従って、必要なユーザー ID とパスワードを指定します。
3. インストール前にライセンス条項を読んで同意します。**-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
  4. 次のコマンドを実行します。

**重要:** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

管理者または root ユーザー: Windows

```
extract_directory%IM%installc.exe -acceptLicense input
extract_directory%responsefiles%productID
%template_response.xml -log preferred_log_location%silent_install.log
```

UNIX

Linux

```
extract_directory/IM/installc -acceptLicense input
extract_directory/responsefiles/productID/template_response.xml -log preferred_log_location/silent_install.log
```

管理者/root ユーザー以外の場合: Windows

```
extract_directory%IM%userinstc.exe -acceptLicense input
extract_directory%responsefiles%productID
%template_response.xml -log
preferred_log_location%silent_install.log
```

UNIX

Linux

```
extract_directory/IM/userinstc -acceptLicense input
extract_directory/responsefiles/productID/template_response.xml -log preferred_log_location/silent_install.log
```

Installation Manager により、必要なすべての前提条件および IBM Business Process Manager Standard がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

関連資料:



IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

関連情報:



Installation Manager でのサイレント・インストール



Installation Manager を使用した応答ファイルの記録

## 構成のアップグレード

IBM Installation Manager を使用して、同じパッケージ・グループ内のインストール済み構成上に新規構成をインストールすることで、IBM Business Process Manager の構成をアップグレードします。

アップグレードする構成が、Installation Manager を使用してインストールされている必要があります。アップグレードを実行する前に、サーバーまたは Network Deployment 環境をシャットダウンしてください。

サポート対象の製品アップグレード・パスは以下のとおりです。

- IBM Business Process Manager Express から IBM Business Process Manager Standard
- IBM Business Process Manager Express から IBM Business Process Manager Advanced
- IBM Business Process Manager Standard から IBM Business Process Manager Advanced

IBM Business Process Manager Advanced - Process Server 構成への、またはその構成からのアップグレード・パスはありません。

注: 構成のアップグレードを実行するとき、既存の IBM Business Process Manager プロファイルはどれも変更されずに残ります。

サポートされているアップグレード・パスとして、以前のバージョンからV7.5.1 にアップグレードすることができます。例えば、IBM Business Process Manager Express バージョン 7.5.0.1 を、IBM Business Process Manager Standard V7.5.1 または IBM Business Process Manager Advanced V7.5.1 にアップグレードすることができます。バージョンをアップグレードする前に、エディションをアップグレードする必要はありません。

#### 注意:

ある構成の V7.5.1 から、アップグレードされた構成の以前のバージョンにアップグレードすることは推奨されません。例えば、IBM Business Process Manager Express V7.5.1 を使用していて、IBM Business Process Manager Standard にアップグレードする場合は、IBM Business Process Manager Standard の以前のバージョンではなく V7.5.1 にアップグレードする必要があります。以前のバージョンへのアップグレードではプロファイルに問題が生じる可能性があり、暫定修正が存在する場合は、それらの暫定修正を先に削除しないとエラーが発生します。

1. Installation Manager を始動します。
2. 「ファイル」 > 「設定」 > 「リポジトリ」をクリックし、新規構成パッケージが含まれているリポジトリを参照します。「リポジトリの追加」をクリックします。
3. Installation Manager の「ようこそ」ページで、「インストール」をクリックします。
4. 「パッケージのインストール」ページで、インストールする構成を選択します。
5. 「次へ」をクリックして先に進みます。
6. 「ライセンス」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックし、「次へ」をクリックします。
7. 「インストールの場所」ページで、アップグレードする構成が含まれているパッケージ・グループを選択します。
8. パッケージをインストールする前に、「要約」ページで選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識にインストールの完了した割合が表示されます。
9. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
  - a. オプション: 「ログ・ファイルの表示」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。「インストール・ログ」ウィンドウを閉じて続行します。
  - b. 終了時にプロファイル管理ツールを起動する場合は「プロファイル管理ツール」を選択し、そうでない場合は「なし」を選択してインストールを完了します。
  - c. 「完了」をクリックして、Installation Manager を終了します。

## IBM Business Process Manager Standard の構成

IBM Business Process Manager を構成して、スタンドアロンまたは Network Deployment 環境を構築することができます。

構成 (Advanced、Standard、または Express) は、さまざまなレベルのビジネス・プロセス・マネジメント機能を提供します。例えば、Business Process Choreographer 機能は、IBM Business Process Manager Advanced でのみ使用可能です。IBM Business Process Manager Standard 構成の詳細な説明については、「IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 構成の機能」を参照してください。

構成フェーズは、製品構成タスクおよび環境構成タスクという 2 種類のタスクで構成されています。製品構成タスクは、製品プロファイルのセットアップとデータベースの構成を目的としています。環境構成タスクは、デプロイメント環境のセットアップおよび生成を目的としています。

環境の構成タスクの 1 つは、デプロイメント環境のクラスターの作成です。デプロイメント環境内のクラスターには、そのクラスターの機能目的に応じた固有のテーブル、スキーマ、およびユーザー権限が必要です。例えば、デプロイメント環境にメッセージング・インフラストラクチャー・クラスターとアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターの両方が含まれる場合があります。この場合、メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターはメッセージング・エンジンのデータベース表にアクセスし、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは Business Process Choreographer のデータベース表にアクセスします。

図 8 に、製品および環境の計画、インストール、および構成に関するタスク・フローを示します。

図 8. 製品および環境の計画、インストール、および構成に関するタスク・フロー

製品データベースの作成は、製品インストールの前、製品インストールの後 (ただしプロファイル作成の前)、またはプロファイルの作成後に行うことができます。

## configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成

標準的な Network Deployment 環境を構成する場合は、プロファイル管理ツールとデプロイメント環境ウィザード、または `manageprofiles` コマンドと `wsadmin` コマンドを使用する代わりに、`configureNode` コマンドを使用できます。`configureNode` は、後からデプロイメント環境を拡張する場合にも使用できます。

### 関連概念:

40 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

## configureNode コマンドを使用したデプロイメント環境の作成

`configureNode` コマンドを使用して、標準的な Network Deployment 環境を作成することができます。

注: 一般的な構成には、入力ファイル内で使用可能な `configurenode` プロパティを使用できます。拡張データベース・プロパティなどの拡張オプションを使用する構成の場合は、デプロイメント環境ウィザードを使用する必要があります。

製品、およびプロパティ・ファイルに指定されているすべてのデータベースをインストールしておく必要があります。

**重要:** データベース・ソフトウェアをインストールして、データベースを作成しておく必要があります (ただし、テーブルは作成しないでください)。また、プロパティ・ファイルで指定するすべてのユーザー (特に SQL Server および Oracle 用) の作成が完了している必要があります。データベースは、手動で作成することも、以下の SQL スクリプトを使用して作成することもできます。

- Process Server データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%ProcessServer%db_type%createDatabase.sql
```

- Performance Data Warehouse データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%PerformanceDW%db_type%createDatabase.sql
```

- 共通データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%CommonDB%db_type%createDatabase_CommonDB.sql
```

- Business Process Choreographer データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%ProcessChoreographer%db_type%createDatabase.sql
```

#### SQL Server に関する考慮事項:

- 構成を行う前に、ユーザー名とスキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。
- ユーザーが Windows の資格情報を使用してデータベースに接続することを指定するには、データ・ソースを個別に選択し、「編集」をクリックし、「**Windows 認証を適用**」を選択します。

**制約事項:** Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

**制約事項: configureNode** コマンドは順次実行するようにして、複数のマシンで同時に実行しないでください。

**configureNode** コマンドにより、以下の Network Deployment トポロジーが作成されます。

- 単一セル環境
- この環境には、プロパティ・ファイルで指定した数のクラスター・メンバーが含まれます。
- この環境では、以下の 3 つのクラスターを含む、リモート・メッセージングおよびリモート・サポートのトポロジー・パターンを使用します。
  - メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
  - サポート・インフラストラクチャー・クラスター
  - アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター

このコマンドは、以下のタスクを実行します。

- デプロイメント・マネージャー・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてデプロイメント・マネージャー・ノードを作成し、デプロイメント・マネージャーを始動する。
- デプロイメント環境の定義を作成する。
- カスタム・ノード・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてカスタム・ノードを作成する。
- ノードをフェデレートしてデプロイメント環境に追加する。
- デプロイメント環境を生成する。
- データベース表を作成する (データベースは、あらかじめ作成しておく必要があります。手順については、『始める前に』を参照してください)。

- ブートストラップ・ユーティリティを実行し、システム情報と共に Process Server データベースをロードする。

デフォルト・ポートを使用して、デプロイメント・マネージャーが作成されます。**configureNode** を実行した時点で、デプロイメント・マネージャーが既にマシン上で稼働している場合は、デプロイメント環境の作成が失敗します。デプロイメント・マネージャーが既に作成されているが、まだ稼働していない場合は、いずれかのデプロイメント・マネージャーのポートを変更する必要があります。変更しないと、別のデプロイメント・マネージャーを始動したときに、ポートの競合エラーが発生する可能性があります。

デプロイメント環境を初めて作成する場合は、以下の手順を実行します。

1. デプロイメント環境を作成するマシンの `install_root/util/ndUtils/samples/` で、サンプル・プロパティ・ファイルを見つけます。
2. 必要とするプロパティ・ファイルに最も近いサンプル・ファイルをコピーします。例えば、Process Center 用 IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーの場合は、`sample_std_pc_dmgr.properties` ファイルを選択します。例えば、Process Center 用 IBM BPM Advanced のデプロイメント・マネージャーの場合は、`sample_adv_pc_dmgr.properties` ファイルを選択します。ご使用の環境を反映させるために新規ファイルを変更します。

作成するデータベースごとに、データベース・パラメーター・セクションをコピーし、データベース名、ユーザー名、パスワード、およびスキーマ名を指定します。Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースが必要であり、それぞれ別の名前にする必要があります。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメント、または **configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**重要:** Oracle データベースを使用している場合は、オプションのデータベースを含むすべてのデータベースについて、データベースのユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

3. 作成した 2 つのファイルの名前を渡して **configureNode** コマンドを実行します。カスタム・ノード・ファイルはオプションですが、これを含めなかった場合はデプロイメント・マネージャーのみが作成されます。例えば、次のようにします。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response  
my_dmgr_response_file.properties -response node01_response_file.properties
```

```
Linux install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response  
my_dmgr_response_file.properties -response node01_response_file.properties
```

これで、リモート・メッセージングとリモート・サポートのトポロジー・パターンを使用する、デプロイメント・マネージャー、カスタム・ノード、およびデプロイメント環境が作成されました。

メッセージは、ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` に記録されます。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

 [仮想ホスト](#)

関連タスク:

726 ページの『パスワードの暗号化』

IBM Business Process Manager 製品コンポーネントのインストール時には、通常、インストール済みファイル内のパスワードはデフォルトで暗号化されます。これらのパスワードを変更する必要がある場合は、IBM BPM EncryptPassword ユーティリティを使用して新規パスワードを暗号化できます。

## 仮想ホストの構成

### 関連資料:

141 ページの『**configureNode** の例』

このセクションの例では、**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して Network Deployment トポロジーを作成する方法を示します。

## **configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成した後、そのデプロイメント環境をこのコマンドで後から拡張することができます。

**configureNode** コマンドを実行するには、以下の前提条件を満たしている必要があります。

- デプロイメント環境の拡張を行うマシンに製品をインストールしておく必要があります。
- デプロイメント・マネージャーは稼働している必要があります。
- **configureNode** コマンドを実行してデプロイメント環境を作成しておく必要があります。

**制約事項:** **configureNode** コマンドは順次実行するようにして、複数のマシンで同時に実行しないでください。

デプロイメント環境を拡張するには、以下の手順を実行します。

1. デプロイメント環境の拡張を行うマシンで、サンプルのカスタム・ノード・ファイルを見つけます。  
`install_root/util/ndUtils/samples/`
2. 必要とするプロパティ・ファイルに最も近いサンプル・ファイルをコピーします。例えば、Process Center 用 IBM BPM Standard のデプロイメント環境を拡張するには、`sample_std_pc_node.properties` ファイルを選択します。例えば、Process Center 用 IBM BPM Advanced のデプロイメント環境を拡張するには、`sample_adv_pc_node.properties` ファイルを選択します。デプロイメント・マネージャーの詳細を含む、ご使用の環境を反映させるために、新規ファイルを変更します。使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメント、または **configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。
3. サンプル・ファイルの名前を渡して **configureNode** コマンドを実行します。以下に例を示します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node01_response_file.properties
```

```
Linux install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node01_response_file.properties
```

デプロイメント環境を拡張しました。

ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` にメッセージが記録されています。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

## 関連概念:

 仮想ホスト

## 関連タスク:

726 ページの『パスワードの暗号化』

IBM Business Process Manager 製品コンポーネントのインストール時には、通常、インストール済みファイル内のパスワードはデフォルトで暗号化されます。これらのパスワードを変更する必要がある場合は、IBM BPM EncryptPassword ユーティリティを使用して新規パスワードを暗号化できます。

 仮想ホストの構成

## 関連資料:

『**configureNode** の例』

このセクションの例では、**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して Network Deployment トポロジーを作成する方法を示します。

## **configureNode** の例

このセクションの例では、**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して Network Deployment トポロジーを作成する方法を示します。

## 関連タスク:

137 ページの『**configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の作成』

**configureNode** コマンドを使用して、標準的な Network Deployment 環境を作成することができます。

140 ページの『**configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張』

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成した後、そのデプロイメント環境をこのコマンドで後から拡張することができます。

## 例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard、PC、DB2:

**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して、DB2 データベースを使用する 1 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 1 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Standard の Process Center トポロジーを作成します。

この例では、M01 というマシンを使用して以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスター	サポート・クラスター	アプリケーション・ターゲット・クラスター
M01	Dmgr	-	-	-
M01	PCNode01	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_dmgr.properties
```

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_node.properties
```

2. 新規ファイルの名前を、例えば `m01_std_pc_dmgr.properties` と `m01_std_pc_node.properties` に変更します。これらのファイルを必要な値で更新します。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_dmgr.properties
```

```
server.type = PCS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
```

```

# Dmgr settings
hostName=M01.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin

nodeName=Dmgr

# Database settings
dbType=DB2
dbServerName=M01.ibm.com
dbPortNumber=50000

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = BPMDB
prcsvr.dbUserName = bpmadmin
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = PDWDB
perfDW.dbUserName = bpmadmin
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd

```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```

# filename: m01_std_pc_node.properties

nodeName=Node01

# Basic Install environment information
server.type = PCS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1

# Database settings
dbType=DB2

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M01.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

```

3. M01 マシン上で **configureNode** コマンドを実行します。

**Windows** `install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties`

**Linux** **UNIX** `install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties`

例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン:  
**Standard, PC, Oracle:**

**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して、Oracle データベースを使用する 1 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 1 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Standard の Process Center トポロジーを作成します。

注: 一般的な構成には、入力ファイル内で使用可能な **configurenode** プロパティを使用できます。  
**configurenode** コマンドは、単一のマシン上のデータベースについてのみ使用できます。拡張データベー

ス・プロパティなどの拡張オプションを使用する構成の場合、または複数のデータベースについての情報の指定の場合は、「デプロイメント環境ウィザード」を使用する必要があります。

この例では、M01 というマシンを使用して以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスタ	サポート・クラスタ	アプリケーション・ターゲット・クラスタ
M01	Dmgr	-	-	-
M01	PCNode01	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_dmgr.properties
```

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_node.properties
```

2. 新規ファイルの名前を、例えば `m01_std_pc_dmgr.properties` と `m01_std_pc_node.properties` に変更します。これらのファイルを必要な値で更新します。Oracle データベースの場合は、その他の場合はオプションであるデータベースを含めたすべてのデータベースについて、データベース・ユーザー名とパスワードを組み込む必要があります。データベース・ユーザー名は、データベースごとに異なっている必要があります。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_dmgr.properties

server.type = PCS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

# Dmgr settings
hostName=M01.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin

nodeName=Dmgr

# Database settings
dbType=Oracle
dbServerName=M01.ibm.com
dbPortNumber=1521

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = orcl
prcsvr.dbUserName = bpmdba
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Process Server ME
prcsvrME.dbName = orcl
prcsvrME.dbUserName = bpmmedba
prcsvrME.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = orcl
perfDW.dbUserName = pdwdba
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for PerformanceDW ME
perfDWME.dbName = orcl
perfDWME.dbUserName = pdwmedba
perfDWME.dbPassword = s0m3passw0rd
```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_node.properties

nodeName=Node01

# Basic Install environment information
server.type = PCS      # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1

# Database settings
dbType=Oracle

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M01.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin
```

3. M01 マシン上で **configureNode** コマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

```
Linux UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

**例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: Standard、PC、SQL Server:**

**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して、SQL Server データベースを使用する 1 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 1 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Standard の Process Center トポロジーを作成します。

この例では、M01 というマシンを使用して以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスタ	サポート・クラスタ	アプリケーション・ターゲット・クラスタ
M01	Dmgr	-	-	-
M01	PCNode01	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_dmgr.properties
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_pc_node.properties
```

2. 新規ファイルの名前を、例えば m01\_std\_pc\_dmgr.properties と m01\_std\_pc\_node.properties に変更します。これらのファイルを必要な値で更新します。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: m01_std_pc_dmgr.properties

install.type = Standard # Optional
server.type = PCS      # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

# Dmgr setting
hostName=M01.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin
```

```

nodeName=Dmgr

# Database settings
dbType=SQLServer
dbServerName=M01.ibm.com
dbPortNumber=1433
# When dbWinAuth=true, Windows Authentication is used
dbWinAuth=false

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = BPMDB
prcsvr.dbUserName = bpmadmin
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = PDWDB
perfDW.dbUserName = bpmadmin
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd

```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```

# filename: m01_std_pc_node.properties

nodeName=Node01

# Basic Install environment information
server.type = PCS      # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1

# Database settings
dbType=SQLServer

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M01.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

```

3. M01 マシン上で **configureNode** コマンドを実行します。

**Windows** `install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties`

**Linux** **UNIX** `install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties`

例: デプロイメント・マネージャーおよび 1 つのノードをホストする単一マシン: **Standard**、**PS**、**DB2**:

Process Center トポロジーを作成した後に、**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して、DB2 データベースを使用する 1 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 1 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Standard の Process Server トポロジーを作成することもできます。

この例では、M02 というマシンを使用して以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスター	サポート・クラスター	アプリケーション・ターゲット・クラスター
M02	Dmgr	-	-	-
M02	PSNode01	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_ps_dmgr.properties
```

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_std_ps_node.properties
```

2. 新規ファイルの名前を、例えば `m02_std_ps_dmgr.properties` と `m02_std_ps_node.properties` に変更します。これらのファイルを必要な値で更新します。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: m02_std_ps_dmgr.properties
```

```
server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
```

```
# Dmgr setting
hostName=M02.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin
```

```
nodeName=Dmgr
```

```
# Environment settings
environment.type = Test
processCenterURL= http://M01:9080 #(optional, if not set, the environment is offline PS)
repository.user = admin #(optional, if not set, the environment is offline PS)
repository.credential = admin #(optional, if not set, the environment is offline PS)
```

```
# Database settings
dbType=DB2
dbServerName=M01
dbPortNumber=50000
```

```
# DB for Process Server
prcsvr.dbName = BPMPSDB
prcsvr.dbUserName = bpmadmin
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd
```

```
# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = PDWPSDB
perfDW.dbUserName = bpmadmin
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd
```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```
# filename: m02_std_ps_node.properties
```

```
nodeName=PSNode01
```

```
# Basic Install environment information
server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
install.type = Standard # Optional
```

```
#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1
```

```
# Database setting
dbType=DB2
```

```
# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M02.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin
```

3. M02 マシン上で **configureNode** コマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

```
Linux UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response
m01_dmgr_response_file.properties -response m01_response_file.properties
```

例: デプロイメント・マネージャーおよび 3 つのノードをホストする複数のマシン:  
Advanced、PS、DB2:

**configureNode** コマンド行ユーティリティを使用して、DB2 データベースを使用する 4 台のマシンにデプロイメント・マネージャーと 3 つのノードを配置する IBM Business Process Manager Advanced の Process Server トポロジーを作成します。

注: 一般的な構成には、入力ファイル内で使用可能な **configurenode** プロパティを使用できます。拡張データベース・プロパティなどの拡張オプションを使用する構成の場合は、デプロイメント環境ウィザードを使用する必要があります。

この例では、4 台のマシンで以下の構成を作成することを想定しています。

マシン	ノード	メッセージング・クラスター	サポート・クラスター	アプリケーション・ターゲット・クラスター	Web クラスター
M03	Dmgr	-	-	-	
M04	Node01	1	0	1	0
M05	Node02	0	1	0	1
M06	Node03	1	1	1	1

1. 以下のサンプル・プロパティ・ファイルをコピーします。

```
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_adv_ps_dmgr.properties
install_root/util/ndUtils/std/samples/sample_adv_ps_node.properties
```

2. 新しいデプロイメント・マネージャー・ファイル (例えば `adv_dmgr.properties`) と、3 つのカスタム・ノード・ファイル (例えば `node01.properties`、`node02.properties`、および `node03.properties`) を作成します。これらのファイルを必要な値で更新します。

**重要:** DB2 データベースではなく Oracle データベースを使用している場合は、オプションのデータベースを含むすべてのデータベースについて、データベース・ユーザー名とパスワードを組み込む必要があります。データベース・ユーザー名は、データベースごとに異なっている必要があります。

デプロイメント・マネージャー・ファイルの例:

```
# filename: adv_dmgr.properties

server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)

# Dmgr setting
hostName=M03.ibm.com
adminUserName=admin
adminPassword=admin

nodeName=Dmgr

# Environment settings
```

```

environment.type = Test
processCenterURL= http://M01:9080 #(optional, if not set, the environment is offline PS)
repository.user = admin #(optional, if not set, the environment is offline PS)
repository.credential = admin #(optional, if not set, the environment is offline PS)

# Database settings
dbType=DB2
dbServerName=M01
dbPortNumber=50000

# DB for Process Server
prcsvr.dbName = BPMDB 2
prcsvr.dbUserName = bpmadmin
prcsvr.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Performance Data Warehouse
perfDW.dbName = PDWDB 2
perfDW.dbUserName = bpmadmin
perfDW.dbPassword = s0m3passw0rd

# DB for Common DB
cmn.dbName=CMNDB2
cmn.dbUserName=bpmadmin
cmn.dbPassword=s0m3passw0rd

# DB for Business Process Choreographer
bpc.dbName=BPEDB2
bpc.dbUserName=s0m3passw0rd
bpc.dbPassword=bpmadmin

```

カスタム・ノード・ファイルの例:

```

# filename: node01.properties

nodeName=Node01

# Basic Install environment information
server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
install.type = Advanced # Optional

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 0
install.cluster.web = 0

# Database settings
dbType=DB2

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M03.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

# filename: node02.properties

nodeName=Node02

# Basic Install environment information
server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
install.type = Advanced # Optional

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 0
install.cluster.AppTarget = 0
install.cluster.message = 1
install.cluster.web = 1

```

```

# Database settings
dbType=DB2

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M03.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

# filename: node03.properties

nodeName=Node03

# Basic Install environment information
server.type = PS          # Process Center (PCS) or Process Server (PS)
install.type = Advanced # Optional

#Install clusters on this node
install.cluster.support = 1
install.cluster.AppTarget = 1
install.cluster.message = 1
install.cluster.web = 1

# Database settings
dbType=DB2

# Deployment Manager Properties
dmgr.hostName=M03.ibm.com
dmgr.adminUserName=admin
dmgr.adminPassword=admin

```

3. 4 台のマシン上で **configureNode** コマンドを実行します。

a. マシン M03 にログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response adv_dmgr.properties
```

```
Linux   UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response
adv_dmgr.properties
```

b. マシン M04 にログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node01.properties
```

```
Linux   UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node01.properties
```

c. マシン M05 にログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node02.properties
```

```
Linux   UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node02.properties
```

d. マシン M06 にログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
Windows install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node03.properties
```

```
Linux   UNIX install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node03.properties
```

## プロファイルの作成および拡張

製品のインストール後に、標準インストールまたは `configureNode` コマンドを使用してプロファイルの自動作成を行わなかった場合は、1 つ以上のプロファイルを作成して、ランタイム環境を定義する必要があります。

## プロファイルに関する前提条件および考慮事項

IBM Business Process Manager のプロファイルを作成または拡張する前に、前提条件とその他の考慮事項を検討してください。

### プロファイルの作成または拡張に関する前提条件:

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

- IBM Business Process Manager が既にインストールされている必要があります。存在しない場合は、『IBM Business Process Manager のインストールおよび構成』でインストール手順を参照してください。
- 製品をインストールしたユーザー ID でない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。それらの権限を取得する方法については、151 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。プロファイルは、*install\_root/profiles* 以外のディレクトリーに作成する必要があります。

- **Windows** プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 にインストールして実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。ご自身が管理ユーザーであるかまたは非管理ユーザーであるかに関係なく、*pmt.bat* ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、*install\_root\bin\ProfileManagement* ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- **Windows** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 にインストールして実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、*install\_root\bin* ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles -create -templatePath  
install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- 作成または拡張するプロファイルのタイプを知っている必要があります。プロファイルについては詳しくは、『プロファイル』を参照してください。
- 適切な手順に従って、プロファイルを作成または拡張する必要があります。
  - IBM Business Process Manager スタンドアロン構成のプロファイルを作成する場合は、『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』を参照してください。

このトピックには、プロセス・センターのプロファイルおよびプロセス・サーバーのプロファイルの作成に関する情報が含まれています。

- IBM Business Process Manager Network Deployment 構成のプロファイルを作成する場合は、『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』を参照してください。
- 既存の プロファイル を IBM Business Process Manager プロファイルに拡張する場合は、以下のトピックの 1 つを参照してください。

**重要:** 拡張する予定のプロファイルでは、既に統合されている管理対象ノードを定義できません。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張するには、『Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』または『Process Center スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』を参照してください。
  - Network Deployment 環境構成のプロファイルを拡張するには、『Network Deployment 構成のプロファイルの拡張』または『Network Deployment 構成のプロファイルの拡張』を参照してください。
- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。その他の 64 ビット・アーキテクチャー上でプロファイルを作成または拡張するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用できます。

**注:** 32 ビットの IBM Business Process Manager インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でプロファイル管理ツールを使用できます。

- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンする必要があります。
- プロファイル、ノード、ホスト、サーバー (該当する場合) またはセル (該当する場合) の名前を設定するときに考慮しなければならない予約語や問題点について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』の情報を確認する必要があります。
- 新しいプロファイルの作成または拡張に必要な十分なディスク・スペースと一時スペースが必要です。スペース所要量については、詳細なシステム要件の Web ページを参照し、ご使用のバージョンの IBM Business Process Manager へのリンクを選択してください。
  - Advanced 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/advanced/sysreqs/>
  - Standard 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/standard/sysreqs/>
  - Express 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/express/sysreqs/>

#### 関連概念:

154 ページの『プロファイルの作成または拡張に関するデータベースの前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連のデータベースの前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

#### 関連タスク:

443 ページの『manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成』

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを作成します。

274 ページの『manageprofiles を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Standard 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

225 ページの『manageprofiles を使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

IBM Business Process Manager Standard 用の Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

#### プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品インストール・ユーザー (root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになりま

す。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。

ここの説明全体にわたり、「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。

**制約事項:** IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。このため、非 root ユーザーによる、別のユーザーによって所有されているプロファイルの拡張はサポートされません。

非 root ユーザーは、自分の環境を管理できるように、独自のプロファイルを作成します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の *install\_root/profiles* ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

**制約事項:** プロファイルを作成する非 root ユーザーには、操作性の制限があります。固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任を非 root ユーザーに割り当てることができます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。その場合は、このトピック内のステップのうち、それらのディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップをスキップしてください。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。ほとんどの場合、プロファイルは以前に作成済みです。

### 製品インストール・ユーザーが適切な権限を付与するために実行する必要がある手順

インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、profilers グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします (製品インストール・ユーザーは、root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合があります。)
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は profilers) を作成します。
  - プロファイルの作成を実行できるユーザー (名前は user1) を作成します。
  - ユーザー product\_installer と user1 を profilers グループに追加します。
3.   ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

**Windows** Windows の資料の説明に従って、`install_root¥logs¥manageprofiles` ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥logs¥manageprofiles
```

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して `install_root/properties/fsdb` ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

**Windows** Windows の資料の説明に従って、`install_root¥properties¥fsdb` ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥properties¥fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、インストール・ユーザーとして、ご使用のオペレーティング・システムの方法に従って `profileRegistry.xml` ファイルを作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

**Linux** **UNIX**

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

**Windows**

```
install_root¥properties¥profileRegistry.xml
```

ご使用のオペレーティング・システムの説明に従って、次の情報を `profileRegistry.xml` ファイルに追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。

**Linux** **UNIX**

次の例では、変数 `$WASHOME` が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの `profiles` と想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

**Linux** 以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

Windows

次の例では、変数 `$WASHOME` が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの であると想定しています。Windows の資料の説明に従って、`profilers` グループに以下のディレクトリーとそれらのファイルに対する読み取り権限および書き込み権限を付与します。

```
@WASHOME%\logs\manageprofiles
@WASHOME%\properties
@WASHOME%\properties\fsdb
@WASHOME%\properties\profileRegistry.xml
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

Linux

UNIX

`install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK`

Windows

`install_root\properties\profileRegistry.xml_LOCK`

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

## 結果

インストール・ユーザーが `profilers` グループを作成し、特定のディレクトリーとファイルに対する適切な、プロファイル作成のための権限をこのグループに付与しました。非 root ユーザーがプロファイルの作成のために書き込む必要がある、IBM Business Process Manager のインストール・ルートに存在するディレクトリーとファイルはこれだけです。

## 次の作業

`profilers` グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

1 つの非 root ユーザー ID で、複数のプロファイルを管理することができます。サーバーとノード・エージェントが含まれているデプロイメント・マネージャー・プロファイルであっても、カスタム・プロファイルであっても、1 つのプロファイル全体を同じ非 root ユーザー ID で管理することができます。グローバル・セキュリティまたは管理セキュリティが使用可能か使用不可かに関係なく、セル内のプロファイルごとに異なるユーザー ID を使用することができます。ユーザー ID には、root ユーザー ID と非 root ユーザー ID を混用することができます。例えば、root ユーザーでデプロイメント・マネージャー・プロファイルを管理する一方で、非 root ユーザーでサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルを管理することができ、またこの逆も可能です。ただし、通常は単一の root ユーザーまたは非 root ユーザーがセル内のすべてのプロファイルを管理することができます。

非 root ユーザーは、root ユーザーと同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

## プロファイルの作成または拡張に関するデータベースの前提条件:

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連のデータベースの前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

製品データベースに関連する前提条件を以下に示します。

- デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の一部であるデータベース構成パネルには、データベース管理者 (DBA) 特権が必要です。

ユーザー ID に DBA 特権がない場合は、以下のような予備手段を使用します。

1. プロファイルを作成せずに製品をインストールします。
2. プロファイル管理ツールを使用して、デプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを (すべてに対して拡張パスを使用して) 作成します。「標準的」パスは使用しないでください。プロファイル作成プロセスの一部としてデータベース表を作成しないでください。
3. カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合します。
4. 管理コンソールを使用して、必要なデプロイメント環境を作成します。詳しくは、『パターンを使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。

- **Linux** **UNIX** DB2 Universal Database™ を使用する場合:

**db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に使用される DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを /etc/profile ディレクトリに追加します。

vi /etc/profile を実行し、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

db2profile スクリプトを /etc/profile ディレクトリに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、root ユーザーでログインし、db2inst1 をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合、root を /etc/group 管理グループに追加します

vi /etc/group を実行し、以下の行を更新します。

```
dasadm: |:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm: |:102:root
db2fadm: |:103:db2fenc1,root
```

プロファイル作成の典型的な例外:

**db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
  Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

When DB2 database manager is down or not running...

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

## 関連概念:

150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』  
プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

## プロファイル管理ツールの開始:

プロファイル管理ツールを開始する前に、制約事項に注意し、特定の前提条件が満たされていることを確認してください。プロファイル管理ツールは、実行するときのプラットフォームに応じて、いくつかの方法で開始できます。

## 制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。他の 64 ビット・アーキテクチャーでプロファイルを作成するときは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用できます。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティの使用について詳しくは、『220 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成』』を参照してください。プロファイル管理ツールは、これらのアーキテクチャー上の IBM Business Process Manager 32 ビットのインストール済み環境でも使用できます。

- **Vista** **Windows 7** **複数インスタンスを持つ非管理ユーザーの制約事項:** IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得ます。

**Linux** **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root¥java¥bin¥java -Duser.language=locale install_root¥bin¥ProfileManagement¥startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/ ¥  
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

## すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

任意のプラットフォームで、ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。詳しくは、『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。

## Linux および UNIX プラットフォームでのツールの開始

**Linux** **UNIX** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始できます。

**Linux** Linux プラットフォームでは、オペレーティング・システムのメニューを使用して、プロファイル管理ツールを開始することもできます。例えば、「[Linux\\_operating\\_system\\_menus\\_to\\_access\\_programs](#)」 > 「**IBM WebSphere**」 > 「*your\_product*」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。

## Windows プラットフォームでのツールの開始

**Windows** Windows プラットフォームでは、以下の方法でツールを開始できます。

- `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。

## カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

**重要:** AIX プラットフォームで「インストールが完了しました」ページからプロファイル管理ツールを起動し、終了コード 721035 の JVM 終了エラーを受け取った場合は、以下のいずれかの方法でプロファイル管理ツールを起動します。

### 64 ビット AIX プラットフォーム

64 ビット版の AIX を使用している場合は、`manageprofiles` コマンドを使用します。

### 64 ビット AIX プラットフォーム

32 ビット版の AIX を使用している場合は、以下のコマンドを使用します。

```
install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh
```

プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用してのプロファイル作成に関する情報については、以下のリンクのうち 1 つを選択してください。

### 関連概念:

220 ページの『[manageprofiles および wsadmin を使用した環境の構成](#)』

プロファイル管理ツールおよびデプロイメント環境ウィザードを使用してセットアップする構成と同じ構成を、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティおよび `wsadmin` コマンドを使用して実現できます。

### 関連タスク:

274 ページの『[manageprofiles を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成](#)』

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Standard 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

## プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

Process Center スタンドアロン・プロファイルの統合は、バージョン 7.5 ではサポートされていません。

- 『[プロファイルの作成または拡張に関する前提条件](#)』を確認します。

- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべて

のメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*  
-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Standard 用の *Process Center* スタンドアロン・プロファイルを作成する場合。

ここに示すステップでは、「**拡張プロファイル作成**」と「**標準プロファイル作成**」の両方について説明します。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」をクリック、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。

「**プロファイル**」タブが表示されます。

「**プロファイル**」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「**環境の選択**」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「**環境の選択**」ページで、プロファイルの作成対象の構成を見つけ、そのセクションを展開します。

例えば、IBM BPM Advanced 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。IBM BPM Standard 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。IBM BPM Express 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Express、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。

**注:** WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「**プロファイル作成オプション**」ページが表示されます。

「プロファイル作成オプション」ページから、「標準プロファイル作成」または「拡張プロファイル作成」のいずれかの方法を使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成させます。

#### 関連タスク:

『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

162 ページの『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

157 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のステップは「標準プロファイル作成」の説明です。標準プロファイル作成オプションは、プロファイル管理ツールで以下のことを行う場合に使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。

1. 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されません。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

「次へ」をクリックして、「データベース構成 - パート 2」ページを表示します。

「データベース構成 - パート 2」ページの内容は、「データベース構成 - パート 1」ページの「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」メニューで指定した値によって異なります。

3. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を完了します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。  
Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サー

バー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

4. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成した Process Center スタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動することができます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

#### 関連タスク:

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

157 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

## プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

157 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のステップは「**拡張プロファイル作成**」の説明です。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - 管理コンソールをデプロイします。
  - デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、管理コンソールおよびデフォルト・アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。

### サンプル・アプリケーションのデプロイ

IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。サンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

### 管理コンソールのデプロイ (推奨)

サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。

### デフォルト・アプリケーションのデプロイ

Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。

「次へ」をクリックすると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さに関する制限など、プロファイルの命名の際に考慮する必要がある問題について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。以下の例は、プラットフォームの相違を示しています。profile\_name はユーザーが指定する名前です。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

次のいずれかの問題が発生すると、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトにする」チェック・ボックスを選択します。

**注:** このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

デフォルト・プロファイルにするプロファイルを作成すると、コマンドは自動的にそのプロファイル  
を処理対象とします。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロ  
ファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーか  
ら実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1  
つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数の  
プロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する  
必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してくだ  
さい。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance  
tuning setting)」プルダウン・リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チュー  
ニング・レベルを選択します。
- e. 「次へ」をクリックします。

**注:** 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、  
このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

3. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、作成するプロファイルに対して次の処置を行いま  
す。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でな  
ければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『ブ  
ロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してくだ  
さい。

- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の  
値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および  
`tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

5. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

6. 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower® 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、**WebSphere Application Server Network Deployment** インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 (166 ページ) に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義 (Web Server Definition)」ページが表示されます。ステップ 9 (167 ページ) に進みます。

8. 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

**Windows** Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合にのみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

**Linux** 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」チェック・ボックスを選択します。
  - b. ページ上の Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. 「**第 2 部**」ページの Web サーバーの特性を指定します。

Web サーバーを使用して、要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを IBM Business Process Manager に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイルに定義する必要があります。

- d. 「**次へ**」をクリックします。
10. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:** 「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。
11. 「**データベース構成 - パート 1**」ページで、以下のアクションを実行します。
  - 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
  - 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。

- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

「次へ」をクリックして、「データベース構成 - パート 2」ページを表示します。

「データベース構成 - パート 2」ページの内容は、「データベース構成 - パート 1」ページの「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」メニューで指定した値によって異なります。

12. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **Microsoft SQL Server**

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

13. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成した Process Center スタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動することができます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

#### 関連タスク:

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

157 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

#### プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

Process Server スタンドアロン・プロファイルの統合は、バージョン 7.5 ではサポートされていません。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

**ヒント:** プロファイル管理ツールを使用する代わりに、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成することもできます (『コマンド行ユーティリティーおよび `wsadmin` を使用したソフトウェアの構成』を参照)。

IBM Business Process Manager Standard 用のスタンドアロンの *Process Server* プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。このステップでは、「標準的なプロファイル作成」オプションと「高度なプロファイル作成」オプションの両方について説明します。

1. プロファイル管理ツールを開始します。このツールの開始方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。「ようこそ」ページが表示されます。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。  
「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
4. 「環境の選択」ページで、プロファイルの作成対象の構成を見つけ、そのセクションを展開します。

例えば、IBM BPM Advanced 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。IBM BPM Standard 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。IBM BPM Express 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Express、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。

**注:** WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、以下のオプションのいずれかを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成します。

#### 標準的なプロファイル作成

デフォルトの構成設定を使用してプロファイルを作成します。

#### 「拡張プロファイル作成」

指定した構成値を使用してプロファイルを作成します。

スタンドアロン・プロファイルを作成するためのオプションについては、『171 ページの表 60』を参照してください。

表 60. スタンドアロン・プロファイルに応じた作成オプションの選択

選択	目的
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールで以下のアクションを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。</li> <li>• 管理コンソールをインストールします。</li> <li>• プロファイルの個人セキュリティー証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティー証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul> <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合のみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。</li> </ul>
高度なプロファイル作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。</li> <li>• 管理コンソールをデプロイします。</li> <li>• デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。</li> <li>• Web サーバー定義を作成します。</li> <li>• ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul>

引き続き、以下のいずれかのタイプの Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

- 標準的なプロファイル作成
- 「拡張プロファイル作成」

**関連タスク:**

172 ページの『プロファイル管理ツールを使用した標準 Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、標準的なスタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

175 ページの『プロファイル管理ツールを使用した拡張 Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境の拡張プロファイルを作成することができます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

**関連資料:**

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### 関連情報:

データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成

#### プロファイル管理ツールを使用した標準 *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、標準的なスタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

169 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期構成の手順を完了します。

IBM Business Process Manager Standard 用の標準スタンドアロン *Process Server* プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。以下のステップは「標準プロファイル作成」の説明です。

1. 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

#### 環境名

構成する環境の名前を指定します。

#### 環境タイプの選択

以下のオプションを使用できます。

**実動** 実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

#### ステージング

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーを実行する場合は、「**ステージング**」を選択します。

**テスト** 構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

インストール時に設定した環境タイプは、Process Server の使用方法を指すものであり、サーバーに適用できる環境変数および値を決定します。Process App ごとに環境固有の変数を設定できます。

次に、プロセスが実行される環境のタイプごとに値を定義します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。負荷テストはテスト・サーバーで実行され、ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用されます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「環境タイプ」として「ステージング」を指定することが考えられます。

## Process Center の構成情報

この Process Center に接続するための構成の詳細を指定します。一方、オフライン・モードで実行する場合は、サーバーをオフライン・モードで使用するためのチェック・ボックスを選択します。

### サーバーをオフラインで使用する

構成するサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

### プロトコル

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

### ホスト名

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

**ポート** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

### ユーザー名

Process Center に存在する有効なユーザー名を入力します。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。

### パスワード

前述のユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「**次へ**」をクリックします。

3. 「データベース構成」ページで、以下の措置を行います。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。

- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

Oracle の場合、「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」および「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」(実際にはこれがデータベース・インスタンス名)を、「**共通データベース名**」と同じにすることができます。その他のデータベース・タイプでは、データベース名は固有である必要があります。

4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **Microsoft SQL Server**

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

5. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。デフォルト構成設定を使用してプロファイルを作成するステップが完了しました。

「ファースト・ステップ・コンソール」から、先程作成した *Process Server* スタンドアロン・プロファイルを開始できます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

#### 関連タスク:

169 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』  
プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した拡張 *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境の拡張プロファイルを作成することができます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

169 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期構成の手順を完了します。

IBM Business Process Manager Standard 用の拡張スタンドアロン *Process Server* プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。以下のステップは「**拡張プロファイル作成**」オプションの説明です。

1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、プロファイル環境にデプロイするアプリケーションを選択します。

#### サンプル・アプリケーションのデプロイ

IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。サンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

## 管理コンソールのデプロイ (推奨)

サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。

## デフォルト・アプリケーションのデプロイ

Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さに関する制限など、プロファイルの命名の際に考慮する必要がある問題について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。以下の例は、プラットフォームの相違を示しています。*profile\_name* はユーザーが指定する名前です。

-   `install_root/profiles/profile_name`
-  `install_root%profiles%profile_name`

次のいずれかの問題が発生すると、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した *profile\_name* が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトにする」チェック・ボックスを選択します。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

デフォルト・プロファイルにするプロファイルを作成すると、コマンドは自動的にそのプロファイルを処理対象とします。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」プルダウン・リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。
      - e. 「次へ」をクリックします。

注: 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

3. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、作成するプロファイルに対して次の処置を行います。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「管理セキュリティー」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

5. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

6. 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義 (Web Server Definition)」ページが表示されます。ステップ 9 (180 ページ) に進みます。

8. 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

**Windows** Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合のみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動

しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

**Linux** 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「次へ」をクリックして先に進みます。

9. Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」チェック・ボックスを選択します。
  - b. ページ上の Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. 「第 2 部」ページの Web サーバーの特性を指定します。

Web サーバーを使用して、要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを IBM Business Process Manager に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイルに定義する必要があります。

- d. 「次へ」をクリックします。
10. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

e. 「次へ」をクリックします。

11. 設計ファイルを使用したデータベースの構成を行わないことを選択した場合、「データベース構成」パネルでデータベースの詳細を指定します。詳細は、以下のステップを参照してください。

a. 「データベース構成」ページで、以下の措置を行います。

- 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「Process Server データベース名 (Process Server database name)」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

Oracle の場合、「Process Server データベース名」と「Performance Data Warehouse データベース」の名前 (データベース・インスタンス名) は、「共通データベース名」と同じにすることができます。その他のデータベース・タイプでは、データベース名は固有である必要があります。

b. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

## DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

## Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

12. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

「ファースト・ステップ・コンソール」から、先程作成した Process Server スタンドアロン・プロファイルを開始できます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

### 関連タスク:

169 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コ

マンドを実行する必要があります。

## Network Deployment プロファイルの作成

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成および構成する場合は、これ以上の構成は不要です。それ以外の場合は、デプロイメント環境を作成する前に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成する必要があります。

プロファイル管理ツールを使用した **Process Center** デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、ネットワーク・デプロイメント構成の **Process Center** デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

• 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。

- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Standard Network Deployment 構成用の **Process Center** デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する場合。

注: デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成は、Network Deployment 構成を作成するための複数ある処理の中の 1 ステップです。

Network Deployment 環境構成とは、IBM Business Process Manager Standard をスタンドアロン以外で構成したものです。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する対象となる IBM Business Process Manager Standard 構成を見つけ、セクションを展開します。IBM BPM Standard, Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのオプションを選択して、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルのみの作成を扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」または「標準」のどちらのオプションを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するかを決定します。

表 61. デプロイメント・マネージャー・プロファイルに応じたプロファイル作成オプションの選択

選択	目的
高度なプロファイル作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。</li> <li>• 管理コンソールをデプロイします。</li> <li>• デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。</li> <li>• Web サーバー定義を作成します。</li> <li>• ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul>
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールによって以下の処理が行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。</li> <li>• 管理コンソールをインストールします。</li> <li>• プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul> <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。</li> </ul>

Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されました。

Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成を実行するために、プロファイル管理ツールの標準または拡張のいずれかのオプションを選択できます。

#### 関連タスク:

『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

191 ページの『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

#### プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

183 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

拡張オプションを使用して、以下のタスクを実行します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - 管理コンソールをデプロイします。
  - デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、管理コンソールをデプロイするかどうかを選択します。

「次へ」をクリックすると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しない場合は、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照して、プロファイルの命名時に考慮する必要のある問題点 (ディレクトリー名の長さ制限など) について確認してください。

2. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーはプラットフォームに応じて異なります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成しているプロファイルをデフォルト・プロファイルにする場合は、「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択します。

プロファイルがデフォルト・プロファイルに設定されると、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。

**注:** このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーション上に最初に作成するプロファイルが、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

3. 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックすると、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

**注:** 初期設定では、「**次へ**」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「**次へ**」ボタンは有効になりません。

「**次へ**」をクリックします。

5. 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

6. 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

8. 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

**Windows** Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合にのみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、`startServer` または `startManager` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザ

ー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

**Linux** 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. 「データベース構成」ページで、以下のアクションを実行します。

- 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- データベース表の作成に使用する SQL スクリプトを書き込むディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

このソフトウェアとともに使用しているデータベース製品がすでにある場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースを使用する (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「共通データベース名」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、デフォルトの **CMNDB** 値を受け入れます。
- データベース・スクリプトが自動的に実行されるようにするには (プロファイル作成処理の一環として)、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:**

- 「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択したときに表が既に存在している場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」が選択されていないことを確認してください。両方のオプションが選択されていると、エラーが発生してプロファイルの作成が失敗します。
- 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択して、Oracle または DB2 for z/OS を構成する場合は、プロファイル管理ツールがデータベース・システムにアクセスして表を作成する必要があります。プロファイル管理ツールがデータベース・システムに接続して表を作成できない場合は、データベースの妥当性検査エラーがスローされます。

10. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されました。

デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、クラスターを構築し、それらのクラスター上でコンポーネントを構成することができます。

Network Deployment 環境で構成に使用可能なコンポーネントは、ご使用のシステムにインストールされている IBM Business Process Manager Standard (拡張または標準) によって異なります。

クラスターを構築し、Network Deployment 構成用に IBM Business Process Manager Standard コンポーネントを構成できます。

#### 関連概念:

649 ページの『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成』  
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後に、Network Deployment 構成を作成できます。

666 ページの『管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成』  
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後で、管理コンソールを使用して Network Deployment 環境を作成できます。

#### 関連タスク:

183 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、ネットワーク・デプロイメント構成の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』  
スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

183 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

プロファイル管理ツールで以下のタスクを実行する場合は、標準オプションを使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。
1. 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「データベース構成」ページで、以下のアクションを実行します。
  - 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
  - データベース表の作成に使用する SQL スクリプトを書き込むディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

このソフトウェアとともに使用しているデータベース製品がすでにある場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースを使用する (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「共通データベース名」フィールドで、共通データベースの名前を入力するか、デフォルトの CMNDB 値を受け入れます。
- データベース・スクリプトが自動的に実行されるようにするには (プロファイル作成処理の一環として)、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:**

- 「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択したときに表が既に存在している場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」が選択されていないことを確認してください。両方のオプションが選択されていると、エラーが発生してプロファイルの作成が失敗します。
  - 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択して、Oracle または DB2 for z/OS を構成する場合は、プロファイル管理ツールがデータベース・システムにアクセスして表を作成する必要があります。プロファイル管理ツールがデータベース・システムに接続して表を作成できない場合は、データベースの妥当性検査エラーがスローされます。
3. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了しましたが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されました。

デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、クラスターを構築し、それらのクラスター上でコンポーネントを構成することができます。

Network Deployment 環境で構成に使用可能なコンポーネントは、ご使用のシステムにインストールされている IBM Business Process Manager Standard (拡張または標準) によって異なります。

クラスターを構築し、Network Deployment 構成用に IBM Business Process Manager Standard コンポーネントを構成できます。

**関連概念:**

649 ページの『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成』  
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後に、Network Deployment 構成を作成できます。

666 ページの『管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成』  
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後で、管理コンソールを使用して Network Deployment 環境を作成できます。

## 関連タスク:

183 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、ネットワーク・デプロイメント構成の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

## プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成することができます。

- Process Center 用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成済みであること。
- デプロイメント・マネージャーが実行されていること。

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Standard Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成する場合。

**注:** プロセス・センターのみ、またはプロセス・サーバーのみに適用する情報については、この手順でそのように注記しています。

このトピックでは、カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成するための「標準」および「拡張」の両方の方法について説明します。

ノードは、作成プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができますし、後で **addNode** コマンドを使用して統合することもできます。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux**    **UNIX**    `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows**    `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

- 「環境の選択」ページで、カスタム・プロファイルを作成中でセクションを拡張する対象の IBM Business Process Manager 構成 (高度または標準) を見つけます。カスタム・プロファイルのオプションを選択して、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

- 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」または「標準」のいずれかのオプションを使用してカスタム・プロファイルを作成するかどうかを決定します。

表 62. カスタム・プロファイルに応じたプロファイル作成オプションの選択

選択	目的
高度なプロファイル作成	<p>以下のアクションを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。</li> <li>管理コンソールをデプロイします。</li> <li>デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。</li> <li>Web サーバー定義を作成します。</li> <li>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul>
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールによって、以下のアクションを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。</li> <li>管理コンソールをインストールします。</li> <li>プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul> <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。</li> </ul>

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成を実行するために、標準または拡張のいずれかのオプションを選択できます。

関連タスク:

『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイルの作成』  
プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成します。

200 ページの『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイルの作成』  
プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成します。

### プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成します。

194 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のアクションを実行する場合は、拡張オプションを使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 管理コンソールをデプロイします。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

1. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しない場合は、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照して、プロファイルの命名時に考慮する必要がある問題点 (ディレクトリー名の長さ制限など) について確認してください。

- b. 「**プロファイル**」フィールドで、プロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照...**」ボタンを使用して目的のプロファイル・ディレクトリーに進みます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- **Linux**    **UNIX**    `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows**    `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
- 指定したディレクトリーが空ではない。
- 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
- プロファイルを作成するための十分なスペースがない。

- c. オプション: 作成しているプロファイルをデフォルト・プロファイルにする場合は、「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択します。

プロファイルがデフォルト・プロファイルに設定されると、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。

**注:** このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーション上に最初に作成するプロファイルが、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「**次へ**」をクリックします。

**注:** 「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

2. 「**ノード名およびホスト名**」ページで、作成するプロファイルに対して次の措置を行います。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、『**プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項**』を参照してください。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックすると、「**フェデレーション**」ページが表示されます。

3. 「**フェデレーション**」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート番号、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証に使用する場合) を指定します。

#### **重要:**

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」にチェック・マークを付けます。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。

- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理 (System administration)」>「デプロイメント・マネージャー (Deployment manager)」>「管理サービス (Administration services)」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

4. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

5. 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルー

ト署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

6. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

IBM Business Process Manager のプロファイルが作成されました。

プロファイル内のノードを統合し、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

デプロイメント環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

#### 関連タスク:

194 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成することができます。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center カスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成します。

194 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

プロファイル管理ツールで以下のアクションを実行する場合は、標準オプションを使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。
1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート番号、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証に使用する場合) を指定します。

## 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」にチェック・マークを付けます。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理 (System administration)」>「デプロイメント・マネージャー (Deployment manager)」>「管理サービス (Administration services)」を選択します。)

## カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ス

「**テップ・コンソールの起動**」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「**終了**」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「**プロファイル**」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

IBM Business Process Manager のプロファイルが作成されました。

プロファイル内のノードを統合し、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

デプロイメント環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

#### 関連タスク:

194 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成』

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成および構成することができます。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。
- Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Standard Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する場合。

注: デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成は、Network Deployment 構成を作成するための複数ある処理の中の 1 ステップ です。

Network Deployment 環境構成とは、IBM Business Process Manager Standard をスタンドアロン以外で構成したものです。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux**    **UNIX**    `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows**    `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」をクリック、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。

「**プロファイル**」タブが表示されます。

「**プロファイル**」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「**環境の選択**」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「**環境の選択**」ページで、**デプロイメント・マネージャー・プロファイル**を作成する対象となる **IBM Business Process Manager Standard**構成を見つけ、セクションを展開します。**IBM BPM Standard, Process Server** **デプロイメント・マネージャー・プロファイル**のオプションを選択して、「**次へ**」をクリックします。

**注:** WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルのみの作成を扱います。

「**プロファイル作成オプション**」ページが表示されます。

5. 「**プロファイル作成オプション**」ページで、「**拡張**」または「**標準**」のどちらのオプションを使用して**デプロイメント・マネージャー・プロファイル**を作成するかを決定します。

表 63. デプロイメント・マネージャー・プロファイルに応じたプロファイル作成オプションの選択

選択	目的
高度なプロファイル作成	以下の手順を実行します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。</li><li>• 管理コンソールをデプロイします。</li><li>• デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。</li><li>• Web サーバー定義を作成します。</li><li>• ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li></ul>

表 63. デプロイメント・マネージャー・プロファイルに応じたプロファイル作成オプションの選択 (続き)

選択	目的
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールによって、以下のステップを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。</li> <li>• 管理コンソールをインストールします。</li> <li>• プロファイルの個人セキュリティー証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティー証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul> <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合のみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。</li> </ul>

Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成を実行するために、標準または拡張のいずれかのオプションを選択できます。

**関連タスク:**

『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

206 ページの『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

**プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Network Deployment 構成の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

202 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

プロファイル管理ツールで以下のアクションを実行する場合は、標準オプションを使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。

- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。

1. 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

IBM Business Process Manager Standard Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成しました。

クラスターを構築し、クラスター上のコンポーネントを構成します。Network Deployment 環境で構成に使用可能なコンポーネントは、ご使用のシステムにインストールされている IBM Business Process Manager Standard (拡張または標準) によって異なります。

Network Deployment 構成のためのクラスターの構築方法および IBM Business Process Manager Standard コンポーネントの構成方法には、いくつかのオプションがあります。

#### 関連タスク:

202 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Network Deployment 構成の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

202 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のアクションを実行する場合は、拡張オプションを使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - 管理コンソールをデプロイします。
  - デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、管理コンソールをデプロイするかどうかを選択します。

「次へ」をクリックすると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しない場合は、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照して、プロファイルの命名時に考慮する必要のある問題点 (ディレクトリー名の長さ制限など) について確認してください。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーはプラットフォームに応じて異なります。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成しているプロファイルをデフォルト・プロファイルにする場合は、「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択します。

プロファイルがデフォルト・プロファイルに設定されると、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理ようになります。

**注:** このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーション上に最初に作成するプロファイルが、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

3. 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「管理セキュリティー」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティー」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

**注:** 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

5. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

6. 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権 を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 に進みます。

8. 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

**Windows** Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合にのみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プ

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

**Linux** 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. 「プロファイルの要約」 ページで、「作成」 をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」 をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」 ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。**」 というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了しましたが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」 ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」 チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」 をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」 ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

IBM Business Process Manager Standard Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成しました。

クラスターを構築し、クラスター上のコンポーネントを構成します。Network Deployment 環境で構成に使用可能なコンポーネントは、ご使用のシステムにインストールされている IBM Business Process Manager Standard (拡張または標準) によって異なります。

Network Deployment 構成のためのクラスターの構築方法および IBM Business Process Manager Standard コンポーネントの構成方法には、いくつかのオプションがあります。

#### 関連タスク:

202 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成して構成することができます。

Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成されていること。および、データベース構成スクリプトの実行により共通データベースおよびテーブルが作成されていること。

ノード (カスタム・プロファイル) を使用するには、既存のデプロイメント・マネージャーにそのノードを統合する必要があります。作成プロセス中にノードを統合する場合は、デプロイメント・マネージャーが実行中でなければなりません。

**ヒント:** プロファイル管理ツールを使用する代わりに、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成することもできます (『コマンド行ユーティリティーおよび `wsadmin` を使用したソフトウェアの構成』を参照)。

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Standard Network Deployment 構成用の *Process Server* カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成する場合。

**注:** プロセス・センターのみ、またはプロセス・サーバーのみに適用する情報については、この手順でそのように注記しています。

このトピックでは、カスタム・プロファイル (管理対象ノード) を作成するための「標準」および「拡張」の両方の方法について説明します。

作成プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーにノード (カスタム・プロファイル) を統合するか、あるいは後で `addNode` コマンドを使用してノードを統合するかを選択できます。作成プロセス時にノードを統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。ノードを統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、カスタム・プロファイルを作成中でセクションを拡張する対象の IBM Business Process Manager 構成 (高度または標準) を見つけます。カスタム・プロファイルのオプションを選択して、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

- 「プロファイル作成オプション」ページで、カスタム・プロファイルの作成に「標準的なプロファイル作成」オプションまたは「高度なプロファイル作成」オプションのどちらを使用するかを決定します。

表 64. カスタム・プロファイルのプロファイル作成オプションの選択

選択	目的
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールによって以下の処理が行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。</li> <li>管理コンソールをインストールします。</li> <li>プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul> <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合のみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。</li> </ul>
高度なプロファイル作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。</li> <li>管理コンソールをデプロイします。</li> <li>デフォルト・アプリケーション (Snoop, Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。</li> <li>Web サーバー定義を作成します。</li> <li>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul>

「標準的なプロファイル作成」を選択した場合は、ステップ 6 に進んでください。

「高度なプロファイル作成」を選択した場合は、ステップ 9 (215 ページ) に進みます。

- 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

**重要:**

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「このノードを後でフェデレートする (Federate this node later)」にチェック・マークを付けます。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

7. 「データベース構成」ページで、デプロイメント・マネージャーが使用するデータベースを選択し、JDBC ドライバー・クラスパス・ファイルの場所を指定します。
8. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファース

ト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。デフォルト構成設定を使用してプロファイルを作成するステップが完了しました。

このトピックで残っているステップは、「高度なプロファイル作成」のステップです。

9. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しない場合は、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照して、プロファイルの命名時に考慮する必要のある問題点 (ディレクトリー名の長さ制限など) について確認してください。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーはプラットフォームに応じて異なります。

- **Linux**    **UNIX**    `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows**    `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成しているプロファイルをデフォルト・プロファイルにする場合は、「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択します。

プロファイルがデフォルト・プロファイルに設定されると、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。

**注:** このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

ワークステーション上に最初に作成するプロファイルが、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「次へ」をクリックします。

**注:** 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

10. 「ノード名およびホスト名」ページで、作成するプロファイルに対して次の措置を行います。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「フェデレーション」ページが表示されます。

11. 「**フェデレーション**」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「このノードを後でフェデレートする (Federate this node later)」にチェック・マークを付けます。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアル化する必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

12. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 「データベース構成」ページで、データベース製品と、JDBC ドライバーの場所を選択します。
15. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。**」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

カスタム・プロファイルの作成が完了しました。

デプロイメント・マネージャーにノードを統合してから、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、プロファイル内のノードは空です。

Network Deployment 環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

#### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。以下の説明に従って、カスタム・ノードの統合およびデプロイのプロセスを実行します。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、IBM Business Process Manager または WebSphere ESB デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。

- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

– **Linux** **UNIX** `profile_root/bin/startManager.sh`

– **Windows** `profile_root%bin%startManager.bat`

- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager または WebSphere ESB デプロイメント・マネージャーに拡張されていること。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーが管理できるように、カスタム・ノードを統合します。

**addNode** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) プラットフォームに応じて以下のディレクトリーのいずれかに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

- **Linux** **UNIX** `profile_root/bin`

- **Windows** `profile_root%bin`

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`

- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`

セキュリティーが使用可能である場合は、コマンド行から以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **Linux** **UNIX** `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-usernameuserID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication`

- **Windows** `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-usernameuserID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。**addNode** コマンドとそのパラメーターについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『wsadmin スクリプトを使用した addNode コマンドの実行 (Using wsadmin scripting to run the addNode command)』を参照してください。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

### manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの削除:

プロファイルは、コマンド行から **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して削除することができます。

1. コマンド・プロンプトを開き、使用するオペレーティング・システムに基づいて以下のいずれかのコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -delete -profileName profile_name`
- **Windows** `manageprofiles.bat -delete -profileName profile_name`

変数 *profile\_name* は削除するプロファイルの名前を示します。

2. 以下のログ・ファイルを調べて、プロファイルの削除が完了したことを確認します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log`
- **Windows** `install_root%logs%manageprofiles%profile_name_delete.log`

削除したプロファイルに関連付けられたものと同じプロファイル名および同じデータベース名の両方を使用して、削除したプロファイルを再作成する場合は、プロファイル名とデータベース名を再作成する前に、関連付けられたデータベース名を手動で削除する必要があります。

### manageprofiles および wsadmin を使用した環境の構成

プロファイル管理ツールおよびデプロイメント環境ウィザードを使用してセットアップする構成と同じ構成を、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティおよび **wsadmin** コマンドを使用して実現できます。

#### 関連概念:

157 ページの『カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成』

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

### manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの作成:

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティおよびプロパティ・ファイルを使用して、コマンド行からプロファイルを作成できます。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティについて詳しくは、『**manageprofiles** コマンド行ユーティリティ』を参照してください。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティのサンプル応答ファイルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件をすべて確認している。
- プロファイル作成コマンドの例を
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことをチェックしている。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクには、**セキュリティー・ロールが必要です**。『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM Business Process Manager Process Center スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **dmgr.procctr**: IBM Business Process Manager Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の IBM Business Process Manager Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。使用するソリューションにデプロイメント環境が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。

カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。フェデレート先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードをフェデレートしないでください。

- **default.procsvr**: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **dmgr.procsvr**: IBM Business Process Manager Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の IBM Business Process Manager Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。

使用するソリューションに Network Deployment 構成が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。

2. 『**manageprofile** の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、**manageprofiles** パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。

**注:** `samplesPassword` パラメーターを指定せずに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用  
して IBM Business Process Manager にプロファイルを作成した場合は、  
`INSTCONFPARTIALSUCCESS` メッセージが返されます。これは以下の基準が満たされたときに起  
ります。

- IBM Business Process Manager または WebSphere Application Server のインストール中にサンプルを  
インストールした。
- `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成している。
- `manageprofiles` コマンド行ユーティリティに `samplesPassword` パラメーターが指定されていな  
い。

#### 4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にありま  
す。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process  
Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてくださ  
い。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や  
`'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作  
成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

#### 5. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

- `Linux` `UNIX` `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- `Windows` `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答フ  
ァイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応  
答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

「`INSTCONFSUCCESS`: プロファイルの作成は正常に終了しました。」というメッセージが表示された場合  
は、プロファイルの作成が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できま  
す。

- `Linux` `UNIX` `Windows` `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`
- `Windows` `install_root\logs\manageprofiles\profile_name_create.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に作成されたことを確認する。こ  
のためには、以下のコマンドを実行します。

- `Linux` `UNIX` `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- `Windows` `profile_root\bin\wbi_ivt.bat`

#### 関連概念:

64 ページの『JDBC ドライバーおよびロケーション』

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属してい  
る JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には  
付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

## IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、サンプル応答ファイルが用意されています。これを基に、使用するシステムの構成方法の詳細がすべて含まれた応答ファイルを作成することができます。

IBM Business Process Manager 構成の基礎として使用する WebSphere Application Server をインストールし、構成します。

作成する応答ファイルは、次に示す 8 つのサンプル応答ファイルのいずれかに基づきます。

- PCStd\_StandAlone\_MSSQLSERVER\_Win.response

SQL Server データベースを使用するスタンドアロン構成で IBM Business Process Manager Standard Process Center を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PSStd\_StandAlone\_DB2\_UNIVERSAL\_Win.response

DB2 データベースを使用するスタンドアロン構成で IBM Business Process Manager Standard Process Server を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PCAdv\_StandAlone\_MSSQLSERVER\_MICROSOFT\_Win.response

SQL Server データベースを使用するスタンドアロン構成で IBM Business Process Manager Standard Process Center を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PSAdv\_StandAlone\_DB2\_UNIVERSAL\_Win.response

DB2 データベースを使用するスタンドアロン構成で IBM Business Process Manager Standard Process Server を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PCAdv\_Dmgr\_ORACLE\_Unix.response

Oracle データベースを使用するデプロイメント・マネージャー構成で IBM Business Process Manager Standard Process Center を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PSAdv\_Dmgr\_DB2\_DATASERVER\_Unix.response

DB2 Dataserver データベースを使用するデプロイメント・マネージャー構成で IBM Business Process Manager Standard Process Server を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PCAdv\_Custom\_ORACLE\_Unix.response

Oracle データベースを使用するカスタム構成で IBM Business Process Manager Standard Process Center を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

- PSAdv\_Custom\_DB2\_DATASERVER\_Unix.response

DB2 Dataserver データベースを使用するカスタム構成で IBM Business Process Manager Standard Process Server を構成するときに使用する応答ファイルを作成できます。

1. `Install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーから、サンプル応答ファイルを見つけて作業ディレクトリーにコピーします。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択します。

2.   **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルのコピーに適切な許可を割り当てます。例:

```
chmod 644 myResponseFile
```

3. 使用している構成に合わせて、応答ファイル内のパラメーターを編集します。 **templatePath** プロパティのパスが、特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

4. 編集した応答ファイルを保存します。
5. **z/OS のみ:** 製品構成スクリプトを最後まで実行させるために、OMVS の制限時間を延長します。MVS コンソールで、次のコマンドを実行します。 **SETOMVS MAXCPU TIME=86400**
6. **z/OS のみ:** z/OS UNIX システム・サービス・コマンド・シェルにアクセスし、管理者ユーザー ID に切り替えます。例: **su wsadmin**
7. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** **manageprofiles.sh -response myResponseFile**

- **Windows** **manageprofiles.bat -response myResponseFile**

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

8. サーバーを始動します。

次の例では、Windows 上でスタンドアロン Process Center プロファイルを作成するための応答ファイルを示します。

```
*****
# Creates a stand-alone Process Center profile on a Windows platform.
# Call manageprofiles -response PCStd_StandAlone__DB2_UNIVERSAL_Win.response
*****
create
templatePath=C:/Program Files/IBM/WebSphere/AppServer/profileTemplates/BPM/default.procctr
profileName=ProcCtr01
cellName=SampleCell
nodeName=SampleNode01
serverName=server1
hostName=SampleHost.com
winserviceCheck=false
enableAdminSecurity=true
adminUserName=tw_admin
adminPassword=tw_admin
applyPerfTuningSetting=standard
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbType=DB2_UNIVERSAL
dbUserId=bpmadmin
dbPassword=bpmadmin1
dbHostName=DB_hostname
dbServerPort=50000
dbCreateNew=true
dbDelayConfig=false
procSvrDbName=PCBPMDB
dbProcSvrUserId=procadmin
dbProcSvrPassword=procpwd
perfDWDbName=PCPERFDB
dbPerfDWUserId=perfadmin
dbPerfDWPassword=perfpwd
samplesPassword=smppwd
```

次の例では、Windows 上でスタンドアロン Process Server プロファイルを作成するための応答ファイルを示します。

```
*****
# Creates a stand-alone Process Server profile on a Windows platform.
# Call manageprofiles -response PSStd_StandAlone_DB2_UNIVERSAL_Win.response
*****

create
templatePath=C:/Program Files/IBM/WebSphere/AppServer/profileTemplates/BPM/default.procsvr
profileName=ProcSrv01
cellName=SampleCell
nodeName=SampleNode01
serverName=server1
hostName=SampleHost.com
environmentName=SampleEnv
winserviceCheck=false
enableAdminSecurity=true
adminUserName=tw_admin
adminPassword=tw_admin
processCenterURL=http://processcenter_hostname:9080
processCenterUserId=tw_admin
processCenterPassword=tw_admin
applyPerfTuningSetting=standard
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbType=DB2_UNIVERSAL
dbUserId=bpmadmin
dbPassword=bpmadmin1
dbHostName=DB_hostname
dbServerPort=50000
dbCreateNew=true
dbDelayConfig=false
procSvrDbName=PSBPMDB
perfDWDbName=PSPERFDB
samplesPassword=smppwd
```

### カスタム・インストール後の **manageprofiles** を使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

このセクションでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成する方法について説明します。ここでは、インストーラーを実行済みであり、カスタム・インストールを実行済みであることを想定しています。

また、カスタム・インストールの実行後に、プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成することもできます。

### **manageprofiles** を使用した *Process Center* スタンドアロン・プロファイルの作成:

IBM Business Process Manager Standard 用の *Process Center* スタンドアロン・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認済みである。
- プロファイル作成コマンドの例を確認済みである。

- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことをチェックしている。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して IBM Business Process Manager Standard 用の Process Center プロファイルを作成する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: Process Center スタンドアロン・プロファイル用に、IBM BPM Standard 構成および Express 構成に固有の機能を使用してスタンドアロン・サーバーを定義します。
2. 『**manageprofile** の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
  3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、**manageprofiles** パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
  4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、*install\_root/BPM/samples/manageprofiles/* ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux**    **UNIX**    **manageprofiles.sh -response myResponseFile**
- **Windows**    **manageprofiles.bat -response myResponseFile**

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

#### 関連概念:

150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

538 ページの『**manageprofiles** の例』

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファ

イルを作成する方法を示します。

### **Standard Process Center 用の応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

### **DB2 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
```

```

# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each

```

```

# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

```

```

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports

```

```

# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux

```

```

# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false

```

```

#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbCreateNew=true
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.

```

```

#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2_DATASERVER
# Default Values:
# DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
# The database server host name or IP address. The default value is the
# local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
# specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
# specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
# The database server port number. Depending on the database you are using,
# you can specify a different port number instead of the default port
# number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.

```

```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for

```

```

# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserID
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production

```

```

# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

**DB2 for z/OS 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

```

```

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties

```

```

# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters

```

```

# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile

```

```

# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not

```

```

# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbiddesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#

```

```

# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#

```

```

# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
#   Creates a password to be used for samples. The password is used to
#   restrict access to Web application samples installed during the
#   installation of the application server.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

### Oracle 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#

```

```

# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#

```

```

# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#

```

```

# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an

```

```

# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log

```

```

# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter:  dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter:  dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#    Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#    created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#    default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#    scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#    database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#    The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#    databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#    The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#    privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#    uses this ID to authenticate the database connection.
#    Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#    authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#    The password required for database authentication. Required when the
#    -bpmdbDesign file is not set.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####

```

```

dbName=orc1
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
# The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the

```

```

# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,

```

```

# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:

```

```

# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

### SQL 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****

```

```

# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:

```

```

# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01
#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber

```

```

#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#

```

```

# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service

```

```

# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbdbDesign that was used in previous

```

```

# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by

```

```

# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:

```

```

# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword

```

```

#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.

```

```

# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

### **manageprofiles** を使用した *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの作成:

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Standard 用の *Process Server* スタンドアロン・プロファイルを作成します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認している。
- プロファイル作成コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Standard 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procsvr**: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard 構成および Express 構成に固有の機能を持ったスタンドアロン・サーバーを定義します。
2. 『manageprofile の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
  3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、**manageprofiles** パラメーター のトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
  4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`

- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

#### 関連概念:

157 ページの『カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成』

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

538 ページの『**manageprofiles** の例』

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

#### **Standard Process Server 用の応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

#### **DB2 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
```

```

# Specifies the directory path to the template files in the installation
# root directory. Within the profileTemplates directory are various
# directories that correspond to different profile types and that vary with
# the type of product installed. The profile directories are the paths that
# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####

```

```

# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#

```

```

# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####

```

```

#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdriver/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#

```

```

# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
# The schema name for the Common database. If no value is specified, the
# following default database schema names are used:
# DB2 database
# The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
# The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
# Oracle and Microsoft SQL Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer

```

```

#     people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter:  samplesPassword
#
# Description:
#     Creates a password to be used for samples. The password is used to
#     restrict access to Web application samples installed during the
#     installation of the application server.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

**DB2 for z/OS 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####

```

```

# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.

```

```

# This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
# development
# standard
# production
# Default Values:
# None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
# Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####

```

```

# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:

```

```

# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.

```

```

# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true, the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:

```

```

# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
# The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#

```

```

# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
# The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
# The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.

```

```

# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

**Oracle 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.

```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the

```

```

# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#     parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#     is required if the Process Server is online (connected to a Process
#     Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#     advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#     Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#     This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#     parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#     Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#     or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None

```

```

#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```

```

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the

```

```

# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#

```

```

# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####

```

```

# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# ORACLE
# Default Values:
# ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#

```

```

# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orc1
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the

```

```

# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

```

```

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.

```

```

# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

### SQL 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.

```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the

```

```

# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#     parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#     is required if the Process Server is online (connected to a Process
#     Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#     advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#     Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#     This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#     parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#     Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#     or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None

```

```

#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```

```

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the

```

```

# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#

```

```

# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####

```

```

# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

#####

```

```

# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter:  dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrMePassword

```

```

#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMPassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMPassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

```

```
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword
```

**Advanced Process Server 用の応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

**DB2 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT
```

```

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties

```

```

# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters

```

```

# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative

```

```

# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to

```

```

#     set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceCheck

```

```

#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2_DATASERVER
# Default Values:
# DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
# The database server host name or IP address. The default value is the
# local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
# specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
# specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
# The database server port number. Depending on the database you are using,
# you can specify a different port number instead of the default port
# number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2

```

```

dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

```

```

#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:

```

```

# DB2 database
# The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
# The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
# Oracle and Microsoft SQL Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
# User name for application messaging engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbAppMeUserId=app_me_userID
#dbAppMePassword=app_me_pwd

```

```

#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   User name for CEI messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCeiMeUserId=cei_me_userID
#dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbSysMeUserId=sys_me_userID
#dbSysMePassword=sys_me_pwd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter

```

```

#     has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#     Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#     Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#     test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#     stage environment type might be used as a temporary location to host
#     changes before putting those changes into production. You might specify
#     Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#     accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#     are as follows:
#     Test
#     Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#     environment.
#     Stage
#     Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#     preproduction server.
#     Production
#     Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#     The default value is Test.
#
# Valid Values:
#     Test
#     Production
#     Stage
# Default Values:
#     Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#     Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#     This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#     non-production server prior to deploying the applications on their
#     production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#     creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#     file repository is installed. This file repository contains a sample
#     organization that can be used to test Business Process Choreographer
#     people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
#     Creates a password to be used for samples. The password is used to
#     restrict access to Web application samples installed during the

```

```

#      installation of the application server.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter:  webFormConfig
#
# Description:
#   Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
#   with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
#   is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
#   Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
#   required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#   Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
#   for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  webFormHTTP
#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter:  configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#
# Description:
# Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
# is created.
# The following conditions apply:
# Only DB2 databases are supported.
# The default is set to true for DB2.
# It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
# name is always BPEDB.
# Business Process Choreographer database parameters set in the Database
# Design Tool and generated to the database design file are ignored by
# Business Process Choreographer at profile creation time.
# See -bpmdbDesign for information about the database design file.
# Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
# -configureBPC to false and using other documented methods to configure
# Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#####
configureBPC=true

```

### DB2 for z/OS 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_DB2zOS.response

```

```

#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####

```

profileName=ProcSrv01

```
#####  
# Parameter: applyPerfTuningSetting  
#  
# Description:  
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are  
#   creating.  
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.  
#  
# Valid Values:  
#   development  
#   standard  
#   production  
# Default Values:  
#   None  
#####  
#applyPerfTuningSetting=standard  
  
#####  
# Parameter: cellName  
#  
# Description:  
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each  
#   profile.  
#   The default value for this parameter is based on a combination of the  
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:  
#   if (DMgr)  
#       shortHostNameCellCellNumber  
#   else  
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell  
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is  
#   the node number that you used to define the node name.  
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters  
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   Varies  
#  
# Parameter: nodeName  
#  
# Description:  
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.  
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile  
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.  
#   This parameter is required for profile creation only with the  
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.  
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.  
#   The default value for this parameter is based on the short host name,  
#   profile type, and a trailing number, for example:  
#   if (DMgr)  
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber  
#   else  
#       shortHostNameNodeNodeNumber  
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.  
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters  
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   Varies  
#  
# Parameter: serverName  
#
```

```

# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####

```

```
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
```

```
# Parameter: signingCertDN
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: signingCertValidityPeriod
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: keyStorePassword
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#####
```

```
#signingCertDN =distinguished_name
```

```
#signingCertValidityPeriod =validity_period
```

```
#keyStorePassword =keyStore_password
```

```
#####
```

```
# Parameter: defaultPorts
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: startingPort
```

```

#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbiddbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:

```

```

# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2UDBOS390
# Default Values:
# DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:

```

```

# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
# The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#

```

```

# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
# The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
# The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a

```

```

# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms

```

```

# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
# Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
# for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
# is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
# for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
# Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
# the IBM Forms Server install root might be
# C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
# if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
# stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root
#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
# Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
configureBRM=false

```

**Oracle 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:

```

```

# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
# profile.
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard

```

```

# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE

```

```

dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter:  dbCommonUserId
#
# Description:
#    The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#    default user name is the first three characters of the Oracle database
#    service name. For example: If the database service name is ORCL,
#    dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#    Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#    profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#    and no bpmdbDesign file was specified.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  dbCommonPassword
#
# Description:
#    The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#    all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#    deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#    to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter:  dbAppMeUserId
#
# Description:
#    The default user name is the first three characters of the Oracle database
#    service name. For example: If the database service name is ORCL,
#    dbAppMeUserId is ORCSA00. If you enter a user-specified a user name and
#    password during profile creation and if you specified ORACLE for dbType,
#    this parameter is required.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  dbAppMePassword
#
# Description:
#    The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter. If you enter
#    a user-specified a user name and password during profile creation and if
#    you specified ORACLE for dbType, this parameter is required.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbAppMeUserId=app_me_userID
dbAppMePassword=app_me_pwd

#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   The default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCeiMeUserId is ORCCM00. If you enter a user-specified a user name and
#   password during profile creation and if you specified ORACLE for dbType,
#   this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCeiMeUserId=cei_me_userID
dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00. If you enter a
#   user-specified a user name and password during profile creation, this
#   parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword. If you enter a user-specified a user name and password during

```

```

# profile creation, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbSysMeUserId=sys_me_userID
dbSysMePassword=sys_me_pwd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample

```

```

# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
# Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
# for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
# is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
# for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
# Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
# the IBM Forms Server install root might be
# C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
# if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
# stand-alone server profiles only.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
configureBPC=false

```

### SQL 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to

```

```

# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,

```

```

# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,

```

```

# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#     parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#     is required if the Process Server is online (connected to a Process
#     Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#     advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#     Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#     This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#     parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#     Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#     or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId

```

processCenterPassword=process\_Center\_Password

#####

# Parameter: enableAdminSecurity

#

# Description:

# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles. You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword along with the values for these parameters.

#

# Valid Values:

# true

# Default Values:

# true

#####

enableAdminSecurity=true

adminUserName=adminUser\_ID

adminPassword=adminPassword

#####

# Parameter: signingCertDN

#

# Description:

# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you create when you create the profile. Specify the distinguished name in quotation marks. This default personal certificate is located in the server keystore file. If you do not specifically create or import a root signing certificate, one is created by default. See the -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.

#

# Valid Values:

# Varies

# Default Values:

# None

#

# Parameter: signingCertValidityPeriod

#

# Description:

# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid for 20 years.

#

# Valid Values:

# Varies

# Default Values:

# None

#

# Parameter: keyStorePassword

#

# Description:

# Specifies the password to use on all keystore files created during profile creation. Keystore files are created for the default personal certificate and the root signing certificate.

#

# Valid Values:

# Varies

# Default Values:

# None

#####

#signingCertDN =distinguished\_name

#signingCertValidityPeriod =validity\_period

#keyStorePassword =keyStore\_password

#####

# Parameter: defaultPorts

```

#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the

```

```

# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:

```

```

# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:

```

```

# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

```

```

#####
# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
#   User name for application messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbAppMeUserId=app_me_userID
#dbAppMePassword=app_me_pwd

#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   User name for CEI messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCeiMeUserId=cei_me_userID
#dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbSysMeUserId=sys_me_userID
#dbSysMePassword=sys_me_pwd
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:

```

```

# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.

```

```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.

```

```
# Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
# -configureBPC to false and using other documented methods to configure
# Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
configureBPC=false
```

## カスタム・インストールの後の **manageprofiles** を使用したデプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成:

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成することができます。

このセクションでは、Network Deployment 構成の場合に、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してデプロイメント・マネージャーおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法について説明します。ここでは、インストーラーを実行済みであり、カスタム・インストールを実行済みであることを想定しています。

カスタム・インストールの実行後の、プロファイル管理ツールを使用する際のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルの作成に関する情報については、「プロファイル管理ツールを使用する際のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の作成」を参照してください。

## **manageprofiles** を使用した Process Center デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルの作成:

Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認済みである。
- プロファイル作成コマンドの例を確認済みである。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルを作成する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

以下のテンプレートを可以使用します。

- `dmgr.procctr`: Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
  - `managed.procctr`: Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。使用するソリューションにデプロイメント環境が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。
2. 『`manageprofile` の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
  3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、`manageprofiles` パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
  4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。
  - `Linux` `UNIX` `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
  - `Windows` `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

#### Standard Process Center 用の応答ファイル:

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

#### DB2 用の Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:

```

```

# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
# profile.
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService

```

```

#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage

```

```

# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**DB2 for z/OS 用の Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2z0S.
#

```

```

# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true

```

```

# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
# Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.

```

```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.

```

```

# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Oracle 用の Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####

```

```

# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters

```

```

# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None

```

```

#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.

```

```

#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual

```

```

#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM

```

```

# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### SQL 用の Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
# Specifies the directory path to the template files in the installation

```

```

#    root directory. Within the profileTemplates directory are various
#    directories that correspond to different profile types and that vary with
#    the type of product installed. The profile directories are the paths that
#    you indicate while using the -templatePath option.
#    Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#    a valid template directory.
#
#    When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#    path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr
#####

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####

# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:

```

```

# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:

```

```

# An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser

```

```

# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem

```

```

#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### Standard Process Center 用の応答ファイル:

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

### DB2 用の Standard Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#

```

```

# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:

```

```

# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:

```

```

# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample

```

```

# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**DB2 for z/OS 用の Standard Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
# Specifies the directory path to the template files in the installation
# root directory. Within the profileTemplates directory are various

```

```

# directories that correspond to different profile types and that vary with
# the type of product installed. The profile directories are the paths that
# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the

```

```

#    root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#    with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#    for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#    Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#    false. The default value for this parameter is false. When the
#    manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#    set to true , the Linux service is created with the profile when the
#    command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#    manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#    service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#    does not have sufficient permission to set up the service. An
#    INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#    creation and the profile creation log
#    install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#    message indicating the current user does not have sufficient permission to
#    set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#    Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#    service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#    service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#    The type of the owner account of the Windows service created for the
#    profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#    localsystem value runs the Windows service under the local account of the

```

```

# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled

```

```

# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:

```

```

# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### Oracle 用の Standard Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.

```

```

# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#

```

```

# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####

```

```

#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host

```

```

# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####

```

```
environmentType=Test
```

```
#####  
# Parameter: isDeveloperServer  
#  
# Description:  
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.  
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a  
# non-production server prior to deploying the applications on their  
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when  
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM  
# file repository is installed. This file repository contains a sample  
# organization that can be used to test Business Process Choreographer  
# people resolution, ready for you to use as is.  
#  
# Valid Values:  
# false  
# true  
# Default Values:  
# false  
#####  
#isDeveloperServer=false
```

### SQL 用の Standard Process Center カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT  
# *****  
#  
# Licensed Materials - Property of IBM  
# 5725-C94  
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.  
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied  
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own  
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to  
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal  
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,  
# in customer's own products.  
#  
# *****  
# END COPYRIGHT  
  
#####  
# These response file has the applicable parameters for creating a  
# Managed PC Std profile that uses SQLServer.  
#  
# Depending on your environment, you may need to change the default values.  
#  
# To create a profile with this response file specify:  
#  
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_SQLServer.response  
#  
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on  
# the command-line. If you include any manageprofile parameters  
# (in addition to -response) on the command-line, the response file  
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .  
#####  
  
#####  
# Parameter: create  
#
```

```

# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:

```

```

#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root

```

```

# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType

```

```

#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The

```

```

# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing

```

```

# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### **manageprofiles** を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成:

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを作成します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認済みである。
- プロファイル作成コマンドの例を確認済みである。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルを作成する方法について説明します。Process Server デプロイメント・マネージャーの場合はこのタスクを使用し、Network Deployment 構成の場合はカスタム・プロファイルを使用します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下の手順を実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procsvr`: デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
  - `managed.procsvr`: Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーにフェデレートされた場合、管理対象ノードを定義します。使用するソリューションに **Network Deployment** 構成が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。また、: Process Server プロファイルは **WebSphere Enterprise Service Bus** デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、**WebSphere Enterprise Service Bus** プロファイルは : Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
  - `managed.procsvr.adv`: Process Server カスタム・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーに統合されると、**IBM BPM Advanced** 構成に固有の機能を持った管理対象ノードを定義します。
  - `dmgr.esbserver`: **WebSphere Enterprise Service Bus** デプロイメント・マネージャー・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーを定義します。
  - `managed.esbserver`: **WebSphere Enterprise Service Bus** カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に、管理対象ノードを定義します。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。 **WebSphere Enterprise Service Bus** プロファイルでは **Enterprise Service Bus** または **IBM Business Process Manager Process Server** デプロイメント・マネージャーを使用できます。
2. 『`manageprofile` の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
  3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、`manageprofiles` パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
  4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'`personalCertValidityPeriod=1`' や '`winserviceCheck=false`' ) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『**IBM Business Process Manager** サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

-   `manageprofiles.sh -response myResponseFile`

- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

#### 関連概念:

150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

538 ページの『`manageprofiles` の例』

このセクションの例では、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

#### Standard Process Server 用の応答ファイル:

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

#### DB2 用の Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
```

```

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each

```

```

# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you

```

```

# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.

```

```

# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual

```

```

#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:
#    manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#    Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#    Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#    test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#    stage environment type might be used as a temporary location to host
#    changes before putting those changes into production. You might specify
#    Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#    accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#    are as follows:
#    Test
#    Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#    environment.
#    Stage
#    Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#    preproduction server.
#    Production
#    Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#    The default value is Test.
#
# Valid Values:
#    Test
#    Production
#    Stage
# Default Values:
#    Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#    Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#    This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#    non-production server prior to deploying the applications on their
#    production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#    creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#    file repository is installed. This file repository contains a sample
#    organization that can be used to test Business Process Choreographer
#    people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#    false
#    true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### DB2 for z/OS 用の Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
```

```

# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#

```

```

# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an

```

```

#      automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#      -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#      parameter. The recommended port values can be different than the default
#      port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Oracle 用の Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.

```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####

```

```

cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####

```

```

# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the

```

```

# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is

```

```

#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#     The following values for Windows service startup can be used:
#     manual
#     automatic
#     disabled
#     The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#     manual
#     automatic
#     disabled
# Default Values:
#     manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#     The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#     databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#     server operating system. Server installations on all operating systems use
#     type 4.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:

```

```

# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### SQL 用の Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、SQL データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal

```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```

```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####

```

```

# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this

```

```

# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An

```

```

# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host

```

```

# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Advanced Process Server 用の応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

**DB2 用の Advanced Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own

```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_DMgr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```

```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

```

```

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#

```

```

# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true, the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux

```

```

# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be

```

```

# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
dbCreateNew=true
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2_DATASERVER
# Default Values:
# DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
# The database server host name or IP address. The default value is the
# local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
# specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
# specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
# The database server port number. Depending on the database you are using,
# you can specify a different port number instead of the default port
# number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdriver/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#    Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#    created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#    default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#    scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#    database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#    The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#    databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#    The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#    privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#    uses this ID to authenticate the database connection.
#    Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#    authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#    The password required for database authentication. Required when the
#    -bpmdbDesign file is not set.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**DB2 for z/OS 用の Advanced Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr.adv

#####
```

```

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber

```

```

# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#    Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#    parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#    Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#    for the profile.
#    Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#    settings for the new profile.
#    Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#    parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#    Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#    reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#    Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#    a DB2 database.
#
# Valid Values:
#    false
# Default Values:
#    false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#    The database type. Set one of the following values for the type of
#    database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#    Required only for one of the following:
#    A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#    An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    DB2UDBOS390
# Default Values:
#    DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#    Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#    created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#    default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#    scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#    database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#    The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#    databases and to CMNDB for all other supported databases.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

```

```
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
```

```
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

**Oracle 用の Advanced Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
```

```

# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_DMgr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:

```

```

#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies

```

```

#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```

```

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option

```

```

# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:

```

```

# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew

```

```

#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:

```

```

# The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
# when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
# only valid if you are using Oracle databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=orcl
#dbUserId=db_userid
#dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####

```

```
environmentType=Test
```

```
#####  
# Parameter: isDeveloperServer  
#  
# Description:  
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.  
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a  
# non-production server prior to deploying the applications on their  
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when  
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM  
# file repository is installed. This file repository contains a sample  
# organization that can be used to test Business Process Choreographer  
# people resolution, ready for you to use as is.  
#  
# Valid Values:  
# false  
# true  
# Default Values:  
# false  
#####  
#isDeveloperServer=false
```

### SQL 用の Advanced Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT  
# *****  
#  
# Licensed Materials - Property of IBM  
# 5725-C94  
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.  
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied  
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own  
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to  
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal  
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,  
# in customer's own products.  
#  
# *****  
# END COPYRIGHT  
  
#####  
# These response file has the applicable parameters for creating a  
# DMgr PS Adv profile that uses SQLServer.  
#  
# Depending on your environment, you may need to change the default values.  
#  
# To create a profile with this response file specify:  
#  
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_DMgr_SQLServer.response  
#  
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on  
# the command-line. If you include any manageprofile parameters  
# (in addition to -response) on the command-line, the response file  
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .  
#####  
  
#####  
# Parameter: create  
#
```

```

# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:

```

```

#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root

```

```

# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType

```

```

#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.

```

```

#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:

```

```

#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter:  dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#

```

```

# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbName=CMNDB
#dbUserId=db_userid
#dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or

```

```

# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### **Standard Process Server 用の応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと応答ファイルを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

### **DB2 用の Standard Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.

```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####

```

cellName=cell\_name  
nodeName=node\_name

```
#####  
# Parameter: enableAdminSecurity  
#  
# Description:  
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative  
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.  
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword  
#   along with the values for these parameters.  
#  
# Valid Values:  
#   true  
# Default Values:  
#   true  
#####
```

enableAdminSecurity=true  
adminUserName=adminUser\_ID  
adminPassword=adminPassword

```
#####  
# Parameter: signingCertDN  
#  
# Description:  
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you  
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in  
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the  
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root  
#   signing certificate, one is created by default. See the  
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#
```

```
# Parameter: signingCertValidityPeriod  
#  
# Description:  
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the  
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter  
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid  
#   for 20 years.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#
```

```
# Parameter: keyStorePassword  
#  
# Description:  
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile  
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate  
#   and the root signing certificate.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#####
```

#signingCertDN =distinguished\_name  
#signingCertValidityPeriod =validity\_period  
#keyStorePassword =keyStore\_password

```
#####
```

```

# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#

```

```

# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### **DB2 for z/OS 用の Standard Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to

```

```

# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,

```

```

# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

```

```

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:

```

```

# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true

```

```

#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or

```

```

# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### Oracle 用の Standard Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.

```

```

#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the

```

```

# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#

```

```

# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option

```

```

# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:

```

```

# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#

```

```

# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false

```

### SQL 用の Standard Process Server カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のカスタム・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
```

```

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber

```

```

# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#    Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#    false. The default value for this parameter is false. When the
#    manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#    set to true , the Linux service is created with the profile when the
#    command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#    manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#    service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#    does not have sufficient permission to set up the service. An
#    INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#    creation and the profile creation log
#    install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#    message indicating the current user does not have sufficient permission to
#    set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#    Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#    service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#    service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#    The type of the owner account of the Windows service created for the
#    profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#    localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#    user who creates the profile. The default value for this parameter is
#    localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    localsystem
#    specifieduser
# Default Values:
#    localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#    Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#    as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#    belong to the Administrator group and have the following advanced user
#    rights:
#    Act as part of the operating system

```

```

# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated

```

```

# windows authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#

```

```

# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.

```

```
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

## manageprofiles の例:

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

### 関連タスク:

443 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成』

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、Network Deployment 構成用の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを作成します。

274 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Standard 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

225 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

IBM Business Process Manager Standard 用の Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

### 例: DB2 データベースおよび **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した Process Server プロファイルの作成:

このトピックには、DB2 データベースを備えたインストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した、Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

### スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PSVRSA\_profile* と呼ばれる IBM Business Process Manager スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターおよび デフォルト指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターにおけるパラメーターは、以下のものを指定します。

- DB2 データベース製品は Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースに使用され、これらはすべてローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の **manageprofiles** パラメーターの完全なリストは、トピック『**manageprofiles** パラメーター』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント: manageprofiles** コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 65. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥default.procsvr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"50000"
-dbHostName	"localhost"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-procSvrDbName	"BPMDB"
-perfDWDbName	"PDWDB"
-dbCreateNew	"false"
-dbDelayConfig	"true"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-samplesPassword	"samples_pwd"
-environmentName	"environment_name"

**要確認: enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

**ヒント: samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 66. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥my_BPM_PSVRSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
 -environmentType	"Test"

表 66. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値
<b>Windows</b> -processCenterURL	URL が指定されていない場合は、デフォルトでオフライン・サーバーになります。
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥DB2"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_BPM_PSVRSA_profile ¥dbscripts"

### デプロイメント・マネージャーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PSVRDMGR\_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

表 67 および 541 ページの表 68 のパラメーターは以下を指定します。

- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** **manageprofiles** コマンド行ユーティリティが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。有効なすべての **manageprofiles** パラメーターのリストについては、リファレンス資料の『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 67. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ dmgr.procsvr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRDMGR_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-dbCreateNew	"false"
-dbDelayConfig	"true"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"

表 67. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbHostName	"remote_host_name"
-dbServerPort	"50000"

**要確認:** **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 68. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥my_BPM_PSVRDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥DB2"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_BPM_PSVRDMGR_profile¥dbscripts"

## カスタム・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PSVRCUSTOM\_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。

この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

542 ページの表 69 および 542 ページの表 70 のパラメーターは以下を指定します。

- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。
- プロファイル作成中に、カスタム・ノードは統合されます。そのためにはデプロイメント・マネージャーが稼働していることが必要です。

**ヒント:** デプロイメント・マネージャーが稼働していない場合、またはプロファイル作成後にカスタム・ノードを統合したい場合は、**federateLaterBPM** を true に設定します。

すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、カスタム・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 69. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ managed.procsvr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRCUSTOM_profile"
-dmgrHost	"remote_host"
-dmgrPort	"8879" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root</i> ¥logs ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Management SOAP connector port:」の項目の値を見つけます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-federateLaterBPM	"false"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥DB2"

**要確認:** **federateLaterBPM** パラメーターが true に設定されている場合、**dmgrHost**、**dmgrPort**、**dmgrAdminPassword**、および **dmgrAdminUserName** を指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 70. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PSVRCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

### 例: Oracle データベースおよび **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した **Process Center** プロファイルの作成:

このトピックには、Oracle データベースを備えたインストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した、**Process Center** スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

#### スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PCTRSA\_profile* と呼ばれる **Process Center** スタンドアロン・プロファイルを作成します。

指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターでのパラメーターは、以下の機能を指定します。

- Oracle データベース製品は Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースに使用され、これらはローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** **manageprofiles** コマンド行ユーティリティが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

データベース構成を実行する前に、プロファイル作成用に指定されたすべてのユーザー ID がデータベース内になければなりません。

- **dbDelayConfig** が **false** に設定されている場合は、プロファイルを作成する前にユーザー ID を作成する必要があります。
- **dbDelayConfig** が **true** に設定されている場合は、プロファイル作成が完了してからサーバーを始動するまでの間に、データベース表と同時にユーザー ID を作成できます。

**注:** **dbDelayConfig** が **true** に設定されている場合は、サーバーを始動する前に **bootstrapProcessServerData** スクリプトを実行する必要があります。詳しくは、636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。このシナリオでは、このステップがスタンドアロン・プロファイルに適用されます。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 71. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root\profileTemplates\BPM\default.procctr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PCTRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"1521"
-dbType	"ORACLE"
-procSvrDbName	"BPMDB"
-dbProcSvrUserId	"procsvr_db_id"
-dbProcSvrPassword	"procsvr_db_pwd"
-perfDWDbName	"PDWDB"

表 71. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbPerfDWUserId	" <i>perfdw_db_id</i> "
-dbPerfDWPassword	" <i>perfdw_db_pwd</i> "
-dbDelayConfig	"true"
-samplesPassword	" <i>samples_pwd</i> "
-environmentName	" <i>environment_name</i> "

**要確認:** **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

**ヒント:** **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

**制約事項:** **dbProcSvrUserId** および **dbPerfDWUserId** パラメーターは、同じ値が **procSvrDbname** および **perfdWDbName** パラメーターに与えられていた場合には、同じ値を持つことはできません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 72. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_BPM_PCTRSA_profile</i> "
-hostName	" <i>host_name</i> "
-nodeName	" <i>host_name</i> Nodenode_number"
-cellName	" <i>host_name</i> Nodenode_numbercell_numberCell"
<b>Windows</b> -environmentType	"Test"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	" <i>install_root</i> ¥jdbcdrivers¥Oracle"
-dbOutputscriptDir	" <i>install_root</i> ¥profiles¥ <i>my_BPM_PCTRSA_profile</i> ¥dbscripts"
-dbHostName	"local_host_name"

『Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 73. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値	注釈
-dbCeiMeUserId	" <i>cei_me_userID</i> " (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	" <i>cei_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	" <i>app_me_userID</i> " (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	" <i>app_me_pwd</i> "	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

## デプロイメント・マネージャー・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PCTRDmgr\_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

『指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター』のパラメーターは以下を指定します。

- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント: manageprofiles** コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 74. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ dmgr.procctr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PCTRD MGR_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"ORACLE"
-dbDelayConfig	"true"
-dbHostName	"remote_host_name"
-dbServerPort	"1521"

**要確認: enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 75. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥my_BPM_PCTRD MGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"
-cellName	"host_nameCellcell_number"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"
 -winserviceStartupType	"manual"
 -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥Oracle"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥my_BPM_PCTRD MGR_profile¥dbscripts"

『Oracle 用追加 manageprofiles コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

## カスタム・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PCTRCUSTOM\_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。

この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 76 および 548 ページの表 77 のパラメーターは以下を指定します。

- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。
- プロファイル作成中に、カスタム・ノードは統合されます。そのためにはデプロイメント・マネージャー稼働していることが必要です。

**ヒント:** デプロイメント・マネージャー稼働していない場合、またはプロファイル作成後にカスタム・ノードを統合したい場合は、**federateLaterBPM** を true に設定します。

すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、カスタム・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 76. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ managed.procctr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PCTRCUSTOM_profile"
-dmgrHost	"remote_host"
-dmgrPort	"8879" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root¥logs</i> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで AboutThisProfile.txt ファイルを開き、「Management SOAP connector port:」の項目の値を見つけてみます。)
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-federateLaterBPM	"false"
-dbType	"ORACLE"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥Oracle"

**要確認:** `federateLaterBPM` パラメーターが `true` に設定されている場合、`dmgrHost`、`dmgrPort`、`dmgrAdminPassword`、および `dmgrAdminUserName` を指定する必要はありません。

デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 77. デフォルトの `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
<code>-profilePath</code>	<code>"install_root\%profiles%\my_BPM_PCTRCUSTOM_profile"</code>
<code>-hostName</code>	<code>"host_name"</code>
<code>-nodeName</code>	<code>"host_nameNodenode_number"</code>

### 例: `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーによる Oracle データベースを使用した `Process Server` および `WebSphere ESB` プロファイルの作成:

このトピックには、Oracle データベースを備えたインストール済み環境で `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用した、`Process Server` スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

#### スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で `my_BPM_PSVRSA_profile` と呼ばれる IBM Business Process Manager スタンドアロン・プロファイルを作成します。

指定の `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター、デフォルト指定の `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター、および追加の `manageprofiles` コマンド行ユーティリティー・パラメーター (Oracle 用)におけるパラメーターが以下の機能を指定します。

- Oracle データベース製品は `Process Server` データベースおよび `Performance Data Warehouse` データベースに使用され、これらはすべてローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (`-dbDelayConfig "true"` のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の `manageprofiles` パラメーターの完全なリストは、トピック『`manageprofiles` パラメーター』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、`-portsFile` パラメーターを使用します。すべての有効な `manageprofiles` パラメーターのリストについては、参照資料の「`manageprofiles` パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

データベース構成を実行する前に、プロファイル作成用に指定されたすべてのユーザー ID がデータベース内になければなりません。

- `dbDelayConfig` が `false` に設定されている場合は、プロファイルを作成する前にユーザー ID を作成する必要があります。

- **dbDelayConfig** が true に設定されている場合は、プロファイル作成が完了してからサーバーを始動するまでの間に、データベース表と同時にユーザー ID を作成できます。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 78. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ default.procsvr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"1521"
-dbType	"ORACLE"
-procSvrDbName	"BPMDB"
-dbProcSvrUserId	"procsvr_db_id"
-dbProcSvrPassword	"procsvr_db_pwd"
-perfDWDbName	"PDWDB"
-dbPerfDWUserId	"perfdw_db_id"
-dbPerfDWPassword	"perfdw_db_pwd"
-dbDelayConfig	"true"
-environmentName	"environment_name"

**要確認:** **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

**ヒント:** **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

**制約事項:** **dbProcSvrUserId** および **dbPerfDWUserId** パラメーターは、同じ値が **procSvrDbname** および **perfDWDbName** パラメーターに与えられていた場合には、同じ値を持つことはできません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 79. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥my_BPM_PSVRSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
 -winserviceCheck	"true"
 -winserviceAccountType	"localsystem"

表 79. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcDrivers¥Oracle"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PSVRSA_profile¥dbscripts"
-dbHostName	"local_host_name"

『Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 80. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値	注釈
-dbCeiMeUserId	"cei_me_userID" (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	"cei_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	"app_me_userID" (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	"app_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

## デプロイメント・マネージャー・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PSVRDMGR\_profile* と呼ばれるデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

表 81 および 表 82 におけるパラメーターは、以下のものを指定します。

- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント: manageprofiles** コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。有効なすべての **manageprofiles** パラメーターのリストについては、リファレンス資料の『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 81. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root\profileTemplates\BPM\ dmgr.procsvr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRDMGR_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbType	"ORACLE"
-dbDelayConfig	"true"
-dbPassword	"db_pwd"
-dbHostName	"remote_host_name"
-dbServerPort	"1521"

**要確認: enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 82. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root\profiles\my_BPM_PSVRDMGR_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameCellManagernode_number"

表 82. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	デフォルト値
-cellName	"host_nameCellcell_number"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcDrivers¥Oracle"
-dbOutputScriptDir	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PSVRDMGR_profile¥dbscripts"

### カスタム・プロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PSVRCUSTOM\_profile* と呼ばれるカスタム・プロファイルを作成します。

この例は、上で作成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルと一緒に動作するように設定されています。

表 83 および 553 ページの表 84 のパラメーターは以下を指定します。

- Oracle データベース製品は共通データベース用に使用されますが、これは既に存在すると想定されています。カスタム・プロファイルの作成では、カスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースを指し示す必要があります。
- 管理セキュリティは、カスタム・プロファイルの統合先となるデプロイメント・マネージャーで使用可能になります。

すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、カスタム・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 83. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥ profileTemplates¥BPM¥ managed.procsvr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRCUSTOM_profile"
-dmgrHost	"remote_host"
-dmgrPort	"8879" (-dmgrPort の値を見つけるには、このカスタム・プロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーの <i>dmgr_profile_root¥logs</i> ディレクトリーに移動します。このディレクトリーで <i>AboutThisProfile.txt</i> ファイルを開き、「Management SOAP connector port:」の項目の値を見つけます。)

表 83. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dmgrAdminPassword	"admin_pwd"
-dmgrAdminUserName	"admin_id"
-federateLaterBPM	"false"
-dbType	"ORACLE"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcDrivers¥Oracle"

**要確認:** **federateLaterBPM** パラメーターが **true** に設定されている場合、**dmgrHost**、**dmgrPort**、**dmgrAdminPassword**、および **dmgrAdminUserName** を指定する必要はありません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 84. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PSVRCUSTOM_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"

#### 例: **manageprofiles** コマンドでのデータベース設計ファイルの使用:

データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに **manageprofiles** コマンド用の値が含まれます。

**-bpmdbDesign** パラメーターでデータベース設計ファイルの名前を指定すると、指定する必要がある他のデータベース・パラメーターは、**dbDelayConfig** パラメーターのみになります。

#### **BPM Standard** 用のスタンドアロン・サーバーのプロファイル

次の例では、**BPM Standard** 用に **SAPC** という名前のスタンドアロン・サーバーのプロファイルが作成されます。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath C:¥w¥4210¥profileTemplates¥BPM¥default.procctr -profileName
SAPC -profilePath C:¥w¥4210¥profiles¥SAPC -cellName Cell1 -nodeName SN1 -serverName server1
-hostName srikanthc.usca.ibm.com -enableAdminSecurity true -adminUserName bpmadmin
-adminPassword bpmadmin -winserviceCheck false -applyPerfTuningSetting standard
-webFormConfig false -omitAction samplesInstallAndConfig
-createDefaultProfileForMigration false -bpmdbDesign C:¥w¥bpm.standalone.dbDesign
-dbDelayConfig true
```

#### **BPM Advanced** 用のスタンドアロン・サーバーのプロファイル

次の例では、**BPM Advanced** 用に **SAAPC** という名前のスタンドアロン・サーバーのプロファイルが作成されます。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath C:¥w¥4210¥profileTemplates¥BPM¥default.procctr.adv
-profileName SAAPC -profilePath C:¥w¥4210¥profiles¥SAAPC -cellName Cell1 -nodeName
SN1 -serverName server1 -hostName srikanthc.usca.ibm.com -enableAdminSecurity true -adminUserName
bpmadmin -adminPassword bpmadmin -winserviceCheck false -applyPerfTuningSetting standard
-webFormConfig false -omitAction samplesInstallAndConfig -createDefaultProfileForMigration
false -bpmdbDesign C:¥w¥bpm.standalone.dbDesign -dbDelayConfig true
```

```
manageprofiles.bat -create -templatePath C:\w\4210\profileTemplates\default.esbserver -profileName
SAESB -profilePath C:\w\4210\profiles\SAESB -cellName Cell11 -nodeName SN1 -serverName server1
-hostName srikanthc.usca.ibm.com -enableAdminSecurity true -adminUserName bpmadmin -adminPassword
bpmadmin -winserviceCheck false -applyPerfTuningSetting standard -webFormConfig false
-omitAction samplesInstallAndConfig -createDefaultProfileForMigration false -dbDelayConfig true
-bpmbdbDesign C:\Projects\Defects\714891 \wesb.standalone.dbDesign
```

## プロファイルの拡張

WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 の既存のプロファイルを拡張して、WebSphere Enterprise Service Bus のサポートを追加できます。

- トピック『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルの作成または拡張を行うためのリストを参照してください。
- プロファイルが以下の特性を保有していることを確認してください。
  - IBM Business Process Manager のインストール済み環境を持つシステム上に存在していること。
  - デプロイメント・マネージャーに統合されていないこと。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、統合済みのプロファイルを拡張することはできません。
  - 稼働中のサーバーがないこと。

ご使用のシステムに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルが既に存在している場合は、それらのプロファイルで定義されている稼働環境で WebSphere ESB の機能を使用できるようになります。

### 制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。他の 64 ビット・アーキテクチャーでプロファイルを拡張するときは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用できます。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティの使用については、『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。32 ビットの IBM Business Process Manager インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。

このセクションおよびサブセクション内の説明に従って、Process Server および Process Center のプロファイルを拡張します。プロファイルの拡張は、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うことも、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してコマンド行から行うこともできます。

### プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.5.1 のプロファイル IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 Process Server プロファイルに拡張します。

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- 拡張後のプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) が、拡張前のプロファイルのタイプと同じである。
- 150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。

- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、デプロイメント・マネージャーに統合されていないことを確認した。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、ツールのすべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

1. IBM Business Process Manager プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」ボタンまたは「プロファイル管理ツール」タブをクリックします。

「プロファイル」タブが表示されます。

3. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを強調表示し、「**拡張**」をクリックします。

システムに存在するプロファイルが「プロファイル」タブにリストされます。この手順では、既存のプロファイルを拡張するものと想定しています。

#### 制約事項:

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2 のプロファイルを IBM Business Process Manager バージョン 7.0 のプロファイルに拡張することはできません。
- セル・スタンドアロン・サーバー、管理エージェント、管理ジョブ・マネージャー、またはセキュア・プロキシのプロファイルは拡張できません。
- WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを拡張した場合は、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。

「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。

「プロファイル拡張オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するよう  
に選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示  
します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロ  
ファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別の  
プロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合されたプロファイルは拡張できませ  
ん。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリッ  
クして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
6. プロファイル管理ツールの次のページに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を  
行って、プロファイルの拡張を構成および完了してください。

選択したプロファイル拡張のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サー バー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に 基づいてプロファイルの拡張を完了するための手順
標準的	Process Serverプロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>• 574 ページの『「標準 (Typical)」オプションを使用し た Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡 張』</li> <li>• 589 ページの『Process Server デプロイメント・マネー ジャー・プロファイルの拡張』</li> <li>• 590 ページの『Process Server のカスタム・プロファイ ル (管理対象ノード) の拡張』</li> </ul> Process Center プロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>• 557 ページの『「標準 (Typical)」オプションを使用し た Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡 張』</li> <li>• 571 ページの『Process Center のデプロイメント・マネ ージャー・プロファイルの拡張』</li> <li>• 573 ページの『Process Center カスタム・プロファイ ル (管理対象ノード) の拡張』</li> </ul>
高度	Process Serverプロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>• 581 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用 した Process Server スタンドアロン・プロファイルの 拡張』</li> </ul> Process Center プロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>• 564 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用 した Process Center スタンドアロン・プロファイルの 拡張』</li> </ul>

## Process Center 用プロファイルの拡張:

「標準」プロファイル拡張オプションまたは「詳細」プロファイル拡張オプションを使用して、Process Center 用のプロファイルを拡張することができます。

### 「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- Process Center のスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張

以下のステップは「標準プロファイル拡張」の説明です。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、現在マシン上にあるプロファイルのリストが表示されます。この手順では、Process Center の既存のスタンドアロン・プロファイルを拡張するものと想定しています。新しい Process Center プロファイルの作成手順については、157 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』を参照してください。

### 制約事項:

- セル・スタンドアロン・サーバー、管理エージェント、管理ジョブ・マネージャー、またはセキュア・プロキシのプロファイルは拡張できません。
- WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを拡張した場合は、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。

「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

3. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。その後、「次へ」をクリックします。

「プロファイル拡張オプション」ページが表示されます。

「プロファイル拡張オプション」ページで、適用するプロファイル拡張方式を選択します。以下のオプションを使用できます。

- **標準プロファイル拡張**

デフォルトの構成設定を使用してプロファイルを拡張します。

- **詳細プロファイル拡張**

拡張するプロファイルに対して独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合されたプロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

4. 「管理セキュリティー」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。
5. Performance Data Warehouse の構成設定を選択します。

Performance Data Warehouse の機能をこのプロファイル用に構成するには、「**Performance Data Warehouse の構成**」チェック・ボックスを選択します。

6. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは拡張パスのみを対象としていません。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

e. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、621 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

7. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されません。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

8. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定し、「次へ」をクリックします。

**注:** データベース・スクリプトを実行しない場合でも、このページを完成させる必要があります。「データベース構成 - パート 2」ページで選択した値は、前のページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合は、これらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

**制約事項:** DB2 for z/OS V8 または V9、または Oracle を使用している場合は、新規データベースを作成できません。これらの場合は、Process Server/Performance Data Warehouse データベースが存在してい

る必要があります。

次のリストで、使用しているデータベースの名前を示すリンクを選択してください。

- DB2 データベース
- DB2 for z/OS V8、 V9 および V10
- Microsoft SQL Server
- Oracle

a. DB2 データベースの値を設定します。

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 85. DB2 Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>• DB2 Universal</li><li>• DB2 DataServer</li></ul>
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"><li>• インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code></li><li>• インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code></li></ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

b. DB2 for z/OS V8、V9、および V10 の値を設定します。

以下の表に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。これらのデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。

表 86. DB2 Universal Database for z/OS の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。

表 86. DB2 Universal Database for z/OS の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Process Server のスキーマ名 (Process Server Schema name)	Process Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
Performance Server のスキーマ名 (Performance Server Schema name)	Performance Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

c. Microsoft SQL Server の値の設定

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 87. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 2.0</b> 注: JDBC 3.0 もサポートされています。JDBC 3.0 の場合は、「Microsoft SQL Server JDBC 2.0」を選択してください。</li> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 1.2</b></li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>

表 87. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー</p> <p><code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers\SQLServer</code> に置かれています。</p>

d. Oracle データベースの値の設定

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 88. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Process Server データベース・ユーザー名および Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名および Process Server データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
サーバー・ポート	<p>デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers%oracle</code> に置かれています。</p>

9. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」：プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

### 「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「詳細」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

- 150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

*IBM BPM Advanced*、Process Center スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Center から独立して機能します。

このタスクは、プロファイル管理ツールの「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法を説明しています。

「拡張」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

**重要:** このトピックの手順には、「拡張」オプションを使用してスタンドアロン Process Server プロファイルを拡張する際に表示されることがある、プロファイル管理ツールのすべてのページが含まれています。ただし、拡張するプロファイルに構成済みコンポーネント (共通データベース、Business Space powered by WebSphere など) がすでに含まれている場合は、プロファイル管理ツール内のこれらのコンポーネント用のページは表示されません。

554 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を使用してプロファイルの拡張を開始し、中止した手順から以下のステップを再開してください。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. プロファイル管理ツールを使用して、拡張する Process Center プロファイルを選択し、「**拡張 (Augment)**」をクリックします。「拡張の選択」ページが開きます。
2. プロファイルに適用する拡張のタイプを選択し、「**次へ**」をクリックします。「プロファイル拡張オプション」ページが開きます。
3. 「**詳細プロファイル拡張**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。「管理セキュリティ」ページが開きます。
4. 「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

5. システムで複数のサーバーを定義している場合は、サーバーを選択します。「Application Scheduler の構成」ページが開きます。「Application Scheduler の構成」ページの「**プロファイルに複数のサーバーが定義されているときの詳細プロファイル拡張の場合: (For Advanced profile augmentation when profile has multiple servers defined:)**」セクションで、ドロップダウン・リストからサーバーを選択し、「**次へ**」をクリックします。

「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張するための初期手順が完了しました。

以下のシステム・セットアップに応じて、拡張プロセスを完了させます。

- システム上でデータベースが定義されていない。
- システム上でデータベースが定義されている。

#### 関連タスク:

566 ページの『データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースが既にあるときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

567 ページの『データベースが定義されていない場合の拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースがまだないときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

## データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースが既にあるときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

564 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが既に定義されている場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**  
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**  
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

2. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Center スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
  - プロファイル管理ツールを使用した Performance Data Warehouse データベースおよび Process Center データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
    - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」オプションが選択されていることを確認します。
    - b. 「終了」をクリックして終了します。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。

- a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
- b. 「終了」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
- c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
- d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、データベースを作成するか、または作成および構成します。
- e. データベースの構成時に、『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているとおりに、プロファイルに関連付けられた「ファースト・ステップ・コンソール」を開始します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティーを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

#### 関連タスク:

564 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「詳細」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

#### データベースが定義されていない場合の拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースがまだないときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

564 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが定義されておらず、かつ定義する必要がある場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。「データベース設計」ページが表示されます。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっていません。

1. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、「**拡張**」オプションを使用して作成したスタンドアロン・サーバーのプロファイルとデプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。

**注:** IBM Business Process Manager Express 構成では、データベース設計ファイルの使用は推奨されません。

- a. 「**データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. 「**次へ**」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、621 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

2. 「Process Center 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

#### 環境名

構成する環境の名前を指定します。

#### 環境タイプの選択

環境タイプは、Process Center の使用方法を示します。以下のいずれかのオプションを選択します。

**実動** 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。

#### ステージング

サーバーを実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームにする場合は、「**ステージング**」を選択します。

#### テスト

サーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

例えば、負荷テストはテスト・サーバーで実行し、変更を実稼働環境に反映させるまでの間、それらの変更をホストするための一時的なロケーションとしてステージング環境タイプを使用します。構成する Process Center が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

#### Process Center の構成情報

Process Center の接続先となる Process Server を構成します。以下のフィールドにパラメーターを設定します。

#### サーバーをオフラインで使用する

構成するサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

#### プロトコル

Process Server への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。

#### ホスト名

この Process Center が Process Server と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Center と Process Server サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Server にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

**ポート** Process Server のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Server にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

「接続のテスト」をクリックすることによって、Process Server への接続をテストできます。

「次へ」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、以下のアクションを実行します。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」 ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」 フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」 フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」 チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」 チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

4. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」 ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」 ページに進みます。

## DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

## Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

5. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**

プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**

プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

6. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Center スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
  - プロファイル管理ツールを使用した Performance Data Warehouse データベースおよび Process Center データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
    - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」オプションが選択されていることを確認します。
    - b. 「**終了**」をクリックして終了します。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
    - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」チェック・ボックスをクリアします。
    - b. 「**終了**」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。

- c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
- d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、データベースを作成するか、または作成および構成します。
- e. データベースの構成時に、『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているとおりに、詳細を確認しながら、プロファイルに関連付けられた「ファースト・ステップ・コンソール」を開始します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。
プロセス ID は 3348 です
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

#### 関連タスク:

564 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

#### **Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) のを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張し、構成します。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

- 150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張することを前提としています。したがって、プロファイル管理ツールを既に開始しており、Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張を選択しているものと想定しています。

このタスクでは、

554 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティ」ページが表示されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルでセキュリティが有効になっています。

#### 1. 管理セキュリティを有効にする

「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

#### 2. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

#### 3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの開始」を選択して、サーバーの動作を確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境で、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

### **Process Center カスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:**

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の拡張オプションを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) を拡張および構成します。

プロファイル管理ツールを開始し、カスタム・プロファイルの拡張を選択しています。

この構成のタイプでは、拡張プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合するか、後で **addNode** コマンドを使用して統合するかを選択できます。

1. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。
  - プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティーが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。そして、「**次へ**」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

**重要:** 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーである。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「**OK**」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイルの要約」ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが Process Center プロファイルに拡張されました。

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

#### **Process Server のプロファイルの拡張:**

「**標準**」プロファイル拡張オプションまたは「**詳細**」プロファイル拡張オプションを使用して、Process Server のプロファイルを拡張できます。

#### **「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張:**

IBM Business Process Manager Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張と構成を行うには、プロファイル管理ツールの「**標準プロファイル拡張**」オプションを使用します。「**標準 (Typical)**」オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「**標準プロファイル拡張**」オプションと「**詳細プロファイル拡張**」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張することを前提としています。プロファイル管理ツールを既に開始しており、Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張を選択し、「**標準プロファイル拡張**」オプションを選択していると想定しています。

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下のタスクを実行します。

- 管理コンソールをデプロイするためのオプションを表示します。

**制約事項:** スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、**標準的な**オプションを使用してプロファイルを作成しないでください。「**標準 (Typical)**」のプロファイル拡張で提供されるメッセージング・エンジン・ストレージおよびデータベース・タイプのデフォルト値は、デプロイメント環境のインストールには適していません。代わりに、「**拡張**」オプションを使用してプロファイルを拡張してください。詳しくは、581 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』を参照してください。

554 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティー」ページが表示されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルでセキュリティーが有効になっています。

1. 「管理セキュリティー」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

#### 環境名

構成する環境の名前を指定します。

#### 環境タイプの選択

以下のオプションがあります。

- 実稼働

実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

- ステージ

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーが機能することになる場合は、「**ステージング**」を選択します。

- テスト

構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

環境タイプは、Process Server の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。テスト・サーバーでは負荷テストを実行できます。ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用できます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

#### Process Center の構成情報

Process Server の接続先の Process Center を構成します。

以下のフィールドにパラメーターを設定します。

- **サーバーをオフラインで使用する**

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- プロトコル

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- ホスト名

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- ポート

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

「**接続のテスト**」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「**次へ**」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。IBM Business Process Manager Standard の Process Server を拡張する際は、「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」および「**Process Server データベース名 (Process server database name)**」フィールドは表示されません。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定し、「次へ」をクリックします。

注: データベース・スクリプトを実行しない場合でも、このページを完成させる必要があります。「データベース構成 - パート 2」ページで選択した値は、前のページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合は、これらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

**制約事項:** DB2 for z/OS V8 または V9、または Oracle を使用している場合は、新規データベースを作成できません。これらの場合は、Process Server/Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があります。

次のリストで、使用しているデータベースの名前を示すリンクを選択してください。

- DB2 データベース
- DB2 for z/OS V8、 V9 および V10
- Microsoft SQL Server
- Oracle

a. DB2 データベースの値を設定します。

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 89. DB2 Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>DB2 Universal</li> <li>DB2 DataServer</li> </ul>
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: <math>\{\text{WAS\_INSTALL\_ROOT}\}/\text{db2}/\text{java}</math></li> <li>インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: <math>\{\text{WAS\_INSTALL\_ROOT}\}/\text{jdbcdriivers}/\text{DB2}</math></li> </ul>

表 89. DB2 Database の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

b. DB2 for z/OS V8、V9、および V10 の値を設定します。

以下の表に、DB2 for z/OS V8 および V9 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。これらのデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。

表 90. DB2 Universal Database for z/OS の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Process Server のスキーマ名 (Process Server Schema name)	Process Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
Performance Server のスキーマ名 (Performance Server Schema name)	Performance Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

c. Microsoft SQL Server の値の設定

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 91. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	<p>以下のオプションから選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 2.0</b> 注: JDBC 3.0 もサポートされています。JDBC 3.0 の場合は、「Microsoft SQL Server JDBC 2.0」を選択してください。</li> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 1.2</b></li> </ul>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー</p> <p><code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

d. Oracle データベースの値の設定

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 92. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Process Server データベース・ユーザー名および Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名および Process Server データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。

5. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

#### 「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「詳細」オプションを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン・プロファイルは、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、BPM Advanced インストール済み環境からプロファイル管理ツールを起動しておく必要があります。

このタスクは、プロファイル管理ツールの「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法を説明しています。

「拡張」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

**重要:** このトピックの手順には、「拡張」オプションを使用してスタンドアロン Process Server プロファイルを増張する際に表示されることがある、プロファイル管理ツールのすべてのページが含まれています。ただし、増張するプロファイルに構成済みコンポーネント（共通データベース、Business Space powered by WebSphere など）がすでに含まれている場合は、プロファイル管理ツール内のこれらのコンポーネント用のページは表示されません。

554 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を使用してプロファイルの増張を開始し、中止した手順から以下のステップを再開してください。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. プロファイル管理ツールを使用して、増張する Process Server プロファイルを選択し、「**拡張 (Augment)**」をクリックします。「**拡張の選択**」ページが開きます。
2. プロファイルに適用する増張のタイプを選択し、「**次へ**」をクリックします。「**プロファイル増張オプション**」ページが開きます。
3. 「**詳細プロファイル増張**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。「**管理セキュリティ**」ページが開きます。
4. 「**管理セキュリティ**」ページから、増張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

増張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

5. システムで複数のサーバーを定義している場合は、サーバーを選択します。「**Application Scheduler の構成**」ページが開きます。「**Application Scheduler の構成**」ページの「**プロファイルに複数のサーバーが定義されているときの詳細プロファイル増張の場合: (For Advanced profile augmentation when profile has multiple servers defined:)**」セクションで、ドロップダウン・リストからサーバーを選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**詳細**」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルを増張するための初期手順が完了しました。

以下のシステム・セットアップに応じて、増張プロセスを完了させます。

- システム上でデータベースが定義されていない。
- システム上でデータベースが定義されている。

#### 関連タスク:

583 ページの『データベースが定義されている場合の「**詳細**」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの増張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル増張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを増張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースが既に定義されている場合に増張することができます。

585 ページの『データベースが定義されていない場合の「**詳細**」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの増張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル増張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを増張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースがま

だ定義されていない 場合に拡張することができます。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースが既に定義されている 場合に拡張することができます。

IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、BPM Advanced インストール済み環境からプロファイル管理ツールを起動しておく必要があります。581 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが既に定義されている 場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**  
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**  
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

2. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Server スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
  - プロファイル管理ツールを使用した Performance Data Warehouse データベースおよび Process Server データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
    - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」オプションが選択されていることを確認します。
    - b. 「終了」をクリックして終了します。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
    - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
    - b. 「終了」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、データベースを作成するか、または作成して構成します。
    - e. データベースの構成時に、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

#### 関連タスク:

581 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

## データベースが定義されていない場合の「詳細」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースがまだ定義されていない場合に拡張することができます。

IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、BPM Advanced インストール済み環境からプロファイル管理ツールを起動しておく必要があります。581 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、「**拡張**」オプションを使用して作成されたスタンドアロン・サーバー・プロファイルおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの両方で使用できます。

- a. 「**データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. 「**次へ**」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用について詳しくは、621 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

2. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

### 環境名

構成する環境の名前を指定します。

### 環境タイプの選択

以下のオプションがあります。

- 実稼働

実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

- ステージ

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーが機能することになる場合は、「**ステージング**」を選択します。

- テスト

構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

環境タイプは、Process Server の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。テスト・サーバーでは負荷テストを実行できます。ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするため

の一時的なロケーションとして使用できます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「環境タイプ」として「ステージング」を指定することが考えられます。

### Process Center の構成情報

Process Server の接続先の Process Center を構成します。

以下のフィールドにパラメーターを設定します。

- **サーバーをオフラインで使用する**

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- **プロトコル**

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- **ホスト名**

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート**

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ユーザー名**

Process Center にログオンする際に使用するユーザー名を入力します。

- **パスワード**

Process Center にログオンする際に使用するパスワードを入力します。

- **パスワードの確認**

Process Center にログオンする際に使用するパスワードを確認します。

「**接続のテスト**」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「**次へ**」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BP MDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。
4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 (その 2)」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 (その 2)」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

#### **Microsoft SQL Server**

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

5. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**  
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**  
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

6. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Server スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
- プロファイル管理ツールを使用した Performance Data Warehouse データベースおよび Process Server データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
    - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」オプションが選択されていることを確認します。
    - b. 「**終了**」をクリックして終了します。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
    - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
    - b. 「**終了**」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、データベースを作成するか、または作成して構成します。
    - e. データベースの構成時に、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

#### 関連タスク:

581 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「詳細」オプションを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

#### Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) のを使用して、Process Server または のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張し、構成します。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

- 150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。
- **Solaris** Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張することを前提としています。したがって、プロファイル管理ツールを既に開始しており、Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張を選択しているものと想定しています。

このタスクでは、

554 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティ」ページが表示されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルでセキュリティが有効になっています。

#### 1. 管理セキュリティを有効にする

「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認し、「**終了**」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。

プロファイルで定義されたノードには、名前が **Dmgr** というデプロイメント・マネージャーがあります。

ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの開始**」を選択して、サーバーの動作を確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境で、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

### **Process Server のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の拡張:**

プロファイル管理ツールを使用して、WebSphere Application Server バージョン 7.0、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.0 のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) を Process Server プロファイルに拡張します。

プロファイル管理ツールを開始し、カスタム・プロファイルの拡張を選択しています。

この構成のタイプでは、拡張プロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合するか、後で **addNode** コマンドを使用して統合するかを選択できます。

1. 「フェデレーション」 ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの拡張とは別に後で実行するかを選択します。

- プロファイル拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。そして、「**次へ**」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

**重要:** 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない (ノードの統合はシリアル化する必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。
- デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーである。
- デプロイメント・マネージャーが、拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「**OK**」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」 ページで別の選択を行ってください。

- プロファイルの拡張とは別に、後でノードを統合することを選択する場合は、「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイルの要約」 ページが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」 ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

3. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認し、「終了」をクリックして終了します。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

プロファイルの拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張:

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルは IBM Business Process Manager プロファイルに拡張することができます。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張できます。プロファイルを拡張するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

この手順を実行する前に、以下の作業が完了していることを確認してください。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件 (Prerequisites for creating or augmenting profiles)』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判別します。
  - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、このプロファイルを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。
  - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されておらず、後から **addNode** コマンドを使用してそのプロファイルを統合する場合、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
    - 実行されていなければなりません。
    - IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャー・プロファイルでなければなりません。
    - リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。
      - IBM Business Process Manager プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用することができません。
      - WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは、WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーまたは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
    - JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- **manageprofiles** パラメーターとデフォルト値を『**manageprofiles** パラメーター』で既に検討しました。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクには、**セキュリティー・ロールが必要**です。『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- `default.procctr`: Process Center スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- `default.procsvr`: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- `dmgr.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のワークステーション上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
- `managed.procctr`: IBM BPM Standard または Express の Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。使用するソリューションにデプロイメント環境が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには空のノードが含まれており、デプロイメント・マネージャー・セルに統合して作動可能にする必要があります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。
- `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。Network Deployment 構成を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要がある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されている

プロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。-**templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、-**templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

3. 応答ファイルを作成します。 応答ファイルを作成するには、-**profilePath** パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、`manageprofile` パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

4. -**response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。 (INSTCONFSUCCESS: Profile augmentation succeeded.)」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの拡張が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に拡張されたことを確認します。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥wbi_ivt.bat`

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用した **Process Center** スタンドアロン・プロファイルの拡張:

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。プロファイルは、コマンド行から `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することができます。

- 『150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。

- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判別します。
  - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。
  - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から **addNode** コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
    - 実行されていなければなりません。
    - リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。
    - JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。 デフォルト・プロトコルは SOAP です。
    - インストールした製品に応じて、事前に IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張されている必要があります。
- このセクションにあるプロファイル拡張コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**この作業に必要なセキュリティの役割:** 151 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。この手順では、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張することを前提とします。

このタスクでは、**manageprofiles** を使用して Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 拡張先のテンプレートを探します。 既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイル IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- **default.procctr:** Process Server スタンドアロン・プロファイル用。IBM Business Process Manager Standard または Express の機能が組み込まれたスタンドアロン・サーバーを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完

全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

2. 応答ファイルを作成します。 応答ファイルを作成するには、**-profilePath** パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、`manageprofile` パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

3. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

- `Linux` `UNIX` `manageprofiles.sh -response myResponseFile`

- `Windows` `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用した *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの拡張:

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager プロファイルに拡張できます。プロファイルは、コマンド行から `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することができます。

- 『150 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判別します。
  - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、このプロファイルを `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。
  - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から `addNode` コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
    - 実行されていなければなりません。
    - リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。
    - JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。 デフォルト・プロトコルは SOAP です。

- インストールした製品に応じて、事前に IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張されている必要があります。
- このセクションにあるプロファイル拡張コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**この作業に必要なセキュリティの役割:** 151 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。この手順では、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張することを前提とします。

このタスクでは、**manageprofiles** を使用して Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- **default.procsvr:** Process Server スタンドアロン・プロファイル用。IBM Process Manager Standard および Express 構成の機能を含むスタンドアロン・サーバーを定義します。
- **default.esbserver:** WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

**注:** *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

2. 応答ファイルを作成します。応答ファイルを作成する際には、**-profilePath** パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、**manageprofile** パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、*install\_root/BPM/samples/manageprofiles/* ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'personalCertValidityPeriod=1 ' や 'winserviceCheck=false ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

3. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`

- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。(INSTCONFSUCCESS: Profile augmentation succeeded.)」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの拡張が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`

- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に拡張されたことを確認します。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/bpm_ivt.sh`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥bpm_ivt.bat`

### プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド:

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

以下のいずれかの表を参照して、特定のデータベース・タイプに必要なデータベース・パラメーターを特定してください。

表 93. プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター

データベース・タイプ
DB2 Universal Database 構成フィールド
DB2 Universal Database for z/OS 構成フィールド
Microsoft SQL Server データベース構成フィールド
Oracle データベース構成フィールド

### DB2 Universal Database 構成フィールド

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 - パート 2」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 94. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>DB2 Universal</li> <li>DB2 DataServer</li> </ul>
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーのいずれかに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code></li> <li>インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code></li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、メッセージング・エンジン表がそのデータベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成する際に、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

### DB2 Universal Database for z/OS 構成フィールド

以下の表に、DB2 Universal Database for z/OS をデータベース製品として選択した場合に「データベース構成 - パート 2」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 95. DB2 for z/OS Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

表 95. DB2 for z/OS Universal Database の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
スキーマ名 (Schema name)	データベース・スキーマ名を入力してください。
Performance Server のスキーマ名 (Performance Server Schema name)	Performance Server のデータベース・スキーマ名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。

### Microsoft SQL Server データベース構成フィールド

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 - パート 2」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 96. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「Windows 認証を適用」オプションを選択します。このオプションを選択すると、共通データベース、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベースのフィールドが非アクティブになります。	
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 共通データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>

表 96. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers%</code> SQLServer に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、メッセージング・エンジン表がそのデータベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成する際に、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

• SQL 認証:

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、Common Event Infrastructure (CEI)、および Business Process Choreographer のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。

• Windows 認証:

- Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードはいつも同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザ

ーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。

- メッセージング・エンジン・スキーマ名については、『*Microsoft SQL Server* で使用するスタンドアロン・プロファイルの作成』のステップ 2 を参照してください。

## Oracle データベース構成フィールド

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 97. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p><b>パスワード</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p><b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>

表 97. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p><b>パスワード</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリ <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、Common Event Infrastructure (CEI)、および Business Process Choreographer のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。

#### 関連タスク:

157 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

611 ページの『Microsoft SQL Server で使用するスタンドアロン・プロファイルの作成』

Microsoft SQL Server で使用する Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して必須パラメーターを渡します。また、データベース設計ツール (DDT) で生成される設計ファイルを使用してプロファイルを作成することもできます。

## データベースの構成

プロファイルを開始する前に、そのプロファイルで使用するようになるデータベースを構成しておく必要があります。

すべてのデータベース名およびスキーマ名のリストなど、データベース要件を計画しておく必要があります。詳しくは、『データベース構成の計画』を参照してください。

## 提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成の一環としてデータベースを作成するか、データベース設計ツール (dbDesignGenerator) を使用するか、データベースを手動で作成するか、またはプロファイル作成後にデータベース・スクリプト・ファイルを実行してデータベースを作成できます。ネットワーク・デプロイメント環境では、デプロイメント・マネージャーを開始してカスタム・プロファイルを作成する前に、データベースを作成する必要があります。

**制約事項:** Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

生成された SQL スクリプトを実行してデータベースを作成するには、以下の手順に従います。

1. スクリプトは以下のディレクトリにあります。

- Process Server データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%ProcessServer%db_type%createDatabase.sql
```

- Performance Data Warehouse データベースの場合:

```
install_root%dbscripts%PerformanceDW%db_type%createDatabase.sql
```

2. 該当するスクリプトに必要な変更を加えます。変更が必要な箇所を見つけるには、@ を探します。例えば、@DB\_NAME@ を任意のデータベース名で置き換えます。

**注:** SQL Server の場合は、Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、COLLATE 属性値に含まれる文字列 CI によって指定されます。この変数が SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS のように (SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name 'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
```

```

at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]

```

3. 該当するスクリプトを実行して、エラーなく完了することを確認します。

#### 関連タスク:

607 ページの『Process Center または Process Server のデータベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

608 ページの『Performance Data Warehouse データベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

610 ページの『XA トランザクションの構成』

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

### 手動でのデータベースの作成

IBM Business Process Manager Standard は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

ここに示す手順は、DB2 と SQL Server のみを対象としています。Oracle の場合は、Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、必ず BPM データベースごとに異なるユーザー ID を使用してください。

データベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

- **DB2の場合:**

```

create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;

```

- **SQL Server の場合:**

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** は データベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

Microsoft SQL Server データベースがインストールされた後、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。

**注: SQL Server の場合は、Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。**これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean
failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not
instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]:
Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException:
PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?];
nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name
'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError
(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult
(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored
(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement
(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmtExecCmd.doExecute
(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

1. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
2. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
3. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
4. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
5. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されます。
6. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

#### 関連タスク:

『Process Center または Process Server のデータベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

608 ページの『Performance Data Warehouse データベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

610 ページの『XA トランザクションの構成』

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

## Process Center または Process Server のデータベース表の作成

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Process Center または Process Server のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Process Center または Process Server の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

**注:** Process Server はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、`profile_root/dbscripts/ProcessServer/DB_product` に出力されます。以下に例を示します。

`profile_root/dbscripts/ProcessServer/DB2`

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux**    **UNIX**    **configProcessServerDB.sh createDB**
- **Windows**    **configProcessServerDB.bat createDB**

**注:** **createDB** パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。**createDB** パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して **createTable\_ProcessServer.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

4. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブル・プロシーチャーを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して **createProcedure\_ProcessServer.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

5. 接続をリセットします。

Process Center 構成または Process Server 構成用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Process Center 構成または Process Server 構成上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

#### 関連タスク:

604 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

605 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Standard は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

## Performance Data Warehouse データベース表の作成

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Performance Data Warehouse のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Performance Data Warehouse の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

**注:** Performance Data Warehouse はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/DB\_product* に出力されます。以下に例を示します。

*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/DB2*

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux**    **UNIX**    **configPerformanceDWDB.sh createDB**
- **Windows**    **configPerformanceDWDB.bat createDB**

**注:** **createDB** パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。**createDB** パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Performance Data Warehouse 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Performance Data Warehouse 用に構成したデータベース (PDWDB) に対して **createTable\_PerformanceDW.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Performance Data Warehouse 上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

#### 関連タスク:

604 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

605 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Standard は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

## Microsoft SQL Server データベースの構成

Microsoft SQL Server と共に使用するスタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

### 前提条件

プロファイルを作成する前に、データベースをホストするサーバーに Microsoft SQL Server をインストールする必要があります。

### データベース特権およびセキュリティー上の考慮事項

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

表 98 は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 98. データベース特権

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド **ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

#### 関連タスク:

122 ページの『標準インストール時の既存データベースの構成』  
標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

#### XA トランザクションの構成:

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションの構成に失敗すると、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA 制御接続を作成できませんでした。(Failed to create the XA control connection.) エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。

- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ダイアログ・ボックスで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 『リソース』セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. 任意のフォルダーにアーカイブを unzip します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに認可するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「User」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

#### Microsoft SQL Server で使用するスタンドアロン・プロファイルの作成:

Microsoft SQL Server で使用する Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用して必須パラメーターを渡します。また、データベース設計ツール (DDT) で生成される設計ファイルを使用してプロファイルを作成することもできます。

プロファイルを作成する前に、以下の前提条件を満たしてください。

- データベースをホストするサーバーに、Microsoft SQL Server をインストールします。

- CMNDB (CommonDB) データベースと、BPEDB (Business Process Choreographer)、BPMDB (Process Server)、および PDWDB (Performance Data Warehouse) の各データベースを作成します。Microsoft SQL Server 用のデータベースの作成に使用するコマンドの例を次に示します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** は データベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれているのは、BPMDB (Process Server) データベースと PDWDB (Performance Data Warehouse) データベースで大/小文字を区別しないようにする必要があるのであります。

- Business Space が構成されている場合は、CMNDB データベース内にスキーマ名 IBMBUSSP でテーブルが作成されます。CMNDB データベースにメッセージング・エンジン・テーブルを作成するには、ステップ 2 (618 ページ) の説明に従ってスキーマを手動で作成する必要があります。ローカル・データベースを使用する場合は、プロファイルの作成時に Common Event Infrastructure データベースが作成されます。それ以外の場合は、プロファイルの作成時に生成されたスクリプトを使用して、Common Event Infrastructure データベースを作成する必要があります。
- Common Event Infrastructure (CEI) を使用する予定の場合は、CEI データベースを手動で作成する必要があります。『Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成』を参照してください。

IBM Business Process Manager には SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージされています。JDBC ドライバー (バージョンおよびレベル情報を含む) については、『IBM Business Process Manager のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細 (Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager)』ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager に同梱されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルは、お客様ご自身で用意していただく必要があります。

CommonDB、Process Server、Performance Data Warehouse、Business Space、Service Component Architecture (SCA) システム・メッセージング・エンジン、および SCA アプリケーション・メッセージング・エンジンは、スタンドアロン・プロファイルの作成時に構成できます。

Business Process Choreographer コンテナ、Business Process Choreographer メッセージング・エンジン、および Business Process Choreographer Explorer は、bpeconfig.jacl スクリプトまたは管理コンソールを使用して構成します。Business Process Choreographer の構成方法については、ステップ 3 (618 ページ) を参照してください。

1. プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用するか、DDT によって生成される dbDesign ファイルをインポートして、プロファイルを作成します。
  - プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するには、『169 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』』を参照してください。『613 ページの表 99』は、「データベース構成 (その 2)」ページおよび『Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)』で入力する必要のあるフィールドのリストを示しています。

表 99. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	<p>以下のオプションから選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 2.0</b> 注: JDBC 3.0 もサポートされています。JDBC 3.0 の場合は、「Microsoft SQL Server JDBC 2.0」を選択してください。</li> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 1.2</b></li> </ul>
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>

表 99. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。

表 100. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	必要なアクション
Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジン (Common Event Infrastructure bus messaging engine)	Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Common Event Infrastructure バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジン	SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード SCA アプリケーション・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>

表 100. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3) (続き)

フィールド	必要なアクション
SCA システム・バス・メッセージング・エンジン	<p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>SCA システム・バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server バス・メッセージング・エンジン (Process Server bus messaging engine)	<p>Process Server バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジン (Performance Data Warehouse bus messaging engine)	<p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse バス・メッセージング・エンジンで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>

Process Server スタンドアロン・プロファイルの構成時に、プロファイル管理ツールは以下のアクションを実行します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、サーバー、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- 共通データベースを構成します。
- Process Server および Performance Data Warehouse データベースを構成します。

- **-dbDelayConfig** パラメーターが **false** に設定されている場合は、それぞれのデータベースでテーブルを作成します。このパラメーターが **true** に設定されている場合は、*install\_root/profiles/profile\_name/dbscripts* ディレクトリーにある SQL スクリプトを手動で実行する必要があります。

注: リモート・データベースを使用していて、データベース・スクリプトの実行を遅らせたい場合は、**-dbDelayConfig** パラメーターを **true** に設定します。

- 管理コンソールおよび WebSphere Application Server のサンプル・アプリケーションをデプロイします。
  - デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む) をデプロイします。
  - Web サーバ定義を作成します。
  - 管理セキュリティを使用可能にします。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するには、『274 ページの『manageprofiles を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』』を参照してください。

以下のコマンド例は、CommonDB、Common Event Infrastructure、メッセージ・エンジン、Business Space の各コンポーネントが 1 つのデータベースに含まれるスタンドアロン・プロファイルを作成するために使用されます。

Microsoft SQL Server JDBC 1.2 ドライバーの場合:

```
install_root/bin/manageprofiles -create -templatePath
install_root/profileTemplates/BPM/
default.procsvr -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT -dbJDBCClasspath
path to JDBC driver -dbDriverVersion 1.2 -dbUserId userID -dbPassword password -dbCommonForME
true -dbCeimeSchemaName
ceiSchema -dbSysMeSchemaName sysSchema
-dbAppMeSchemaName appSchema
```

Microsoft SQL Server JDBC 2.0 ドライバーの場合:

```
install_root/bin/manageprofiles -create -templatePath
install_root/profileTemplates/BPM/
default.procsvr -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT -dbJDBCClasspath
path to JDBC driver -dbDriverVersion 2.0 -dbUserId userID -dbPassword
password -dbCommonForME true -dbCeimeSchemaName
ceiSchema -dbSysMeSchemaName sysSchema
-dbAppMeSchemaName appSchema
```

表 101 に、Microsoft SQL Server 上で共通データベースを構成する場合に使用可能な **manageprofiles** のパラメーターを示します。

表 101. Microsoft SQL Server を使用して共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーター

パラメーター	説明
<b>-dbJDBCClasspath</b> <i>jdbc_driver_location</i>	デフォルトは <install_root>/jdbcdrivers/<dbProduct> です。ここで、<dbProduct> は次のとおりです。  dbProduct=SQLServer

表 101. Microsoft SQL Server を使用して共通データベースを構成するために使用可能な *manageprofiles* パラメーター (続き)

パラメーター	説明
<b>-dbType</b> <i>db_type</i>	データベース・タイプ。以下の値を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li><b>MSSQLSERVER_MICROSOFT</b> (Microsoft JDBC ドライバー V1.2 または V2.0 を使用する Microsoft SQL Server データベース)</li> </ul>
<b>-dbCreateNew</b> true   false	データベースを作成するのか、再使用するのかを示します。有効な値は <b>true</b> または <b>false</b> です。デフォルト値は <b>true</b> です。
<b>-dbDelayConfig</b> true   false	プロファイルの作成後にテーブルを作成するかどうかを示します。有効な値は <b>true</b> または <b>false</b> です。このパラメーターは、デフォルトでは <b>false</b> に設定されています。リモート・データベースを使用していて、データベース・スクリプトの実行を遅らせたい場合は、このパラメーターを <b>true</b> に設定します。
<b>-dbDriverVersion</b> <i>db_driver_version</i>	データベース・ドライバーのバージョン。このパラメーターは、Microsoft SQL Server にのみ有効です。SQL Server データベースの場合は、 <b>1.2</b> (Microsoft SQL JDBC ドライバー V1.2 の場合) または <b>2.0</b> (Microsoft SQL JDBC ドライバー V2.0 の場合) を指定します。指定しない場合、この値は自動的にデフォルトの <b>2.0</b> に設定されます。
<b>-dbHostName</b> <i>db_host_name</i>	データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルト値は <b>localhost</b> です。
<b>-dbName</b> <i>db_name</i>	データベースの名前。デフォルト値は <b>CMNDB</b> です。
<b>-dbOutputScriptDir</b> <i>db_output_dir</i>	この値は絶対パスでなければなりません。相対パスを設定した場合、SQL スクリプトはエクスポートまたは実行されず、その結果、サーバー始動時に多数の例外が発生することになります。エクスポートされたデータベース・スクリプトのロケーション。デフォルト値は <b>dbscripts¥CommonDB¥DB2</b> です。
<b>-dbPassword</b> <i>db_pswd</i>	データベース認証に必要なパスワード。このパラメーターは必須です。
<b>-dbServerPort</b> <i>db_port_number</i>	データベース・サーバーのポート番号。使用するデータベースに応じて、デフォルトのポート番号の代わりに別のポート番号を指定できます。デフォルト値は <b>1433</b> です。
<b>-dbUserId</b> <i>db_userid</i>	データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースは、この ID を使用してデータベース接続を認証します。Microsoft SQL Server データベースの場合、データベース表を所有する SQL Server のユーザー ID を指定します。

- DDT によって生成される dbDesign ファイルをインポートしてデータベース構成を作成するには、「データベース設計ファイルの使用」オプションを選択します。このオプションは、「拡張」オプションを使用して作成されたスタンドアロン・サーバー・プロファイルで使用でき、プロファイル管理ツールの「データベース構成」ページに表示されます。
  - 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - 「参照」をクリックします。

- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を指定し、「次へ」をクリックします。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:** 「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択したときに表が既に存在している場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」が選択されていないことを確認してください。両方のオプションが選択されていると、エラーが発生してプロファイルの作成が失敗します。

- e. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択すると、データベースの構成を完了するために、設計ファイルのロケーションがコマンド行に渡されます。データベース構成用の設計ファイルの使用については、621ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

2. SQL Server Studio を使用して、所有者 `sdo` として以下のスキーマを CMNDB データベースに作成します。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、メッセージング・エンジンの開始前、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

ここで、MED はメッセージ・エンジン・データベース名の最初の 3 文字です。

3. Business Process Choreographer の構成。

- a. BPEDB データベースの計画
- b. `bpeconfig.jacl` スクリプトによる Business Process Choreographer の構成
- c. Business Process Choreographer 用の Microsoft SQL Server データベースの作成

4. オプション: プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティでデータベース・スクリプトの実行を遅らせるオプションを選択した場合は、以下の SQL スクリプトを実行して、データベース・テーブルを手動で作成する必要があります。

**重要:** スクリプトを実行する前に、`install_root/profiles/profile_name/dbscripts` フォルダをデータベース・マシンにコピーする必要があります。

- a. `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/CommonDB/SQLServer/configCommonDB`
- b. `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/BusinessSpace/SQLServer/configBusinessSpaceDB`
- c. `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/ProcessServer`
- d. `install_root/profiles/profile_name/dbscripts/PerformanceDW`

5. サーバーを始動します。

#### 関連資料:

598 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』  
スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

## Microsoft SQL Server と共に使用する Network Deployment 環境の作成:

このトピックでは、Microsoft SQL Server と共に使用する Network Deployment 環境を作成する方法について説明します。

プロファイルを作成する前に、以下の前提条件を満たしてください。

- データベースをホストするサーバーに、Microsoft SQL Server をインストールします。
- BPMDB (Process Server) および PDWDB (Performance Data Warehouse) の各データベースを作成します。 Microsoft SQL Server 用のデータベースの作成に使用するコマンドの例を次に示します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

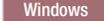
ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** は データベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれているのは、BPMDB (Process Server) データベースと PDWDB (Performance Data Warehouse) データベースで大/小文字を区別しないようにする必要があるのであります。

- Common Event Infrastructure (CEI) を使用する予定の場合は、CEI データベースを手動で作成する必要があります。『*Common Event Infrastructure (CEI) データベースの構成*』を参照してください。

IBM Business Process Manager には SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージされています。JDBC ドライバー (バージョンおよびレベル情報を含む) については、『IBM Business Process Manager のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細 (Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager)』ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager に同梱されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルは、お客様ご自身で用意していただく必要があります。

CommonDB はデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時に構成できますが (IBM Business Process Manager Advanced のみ)、残りのコンポーネントは、管理コンソールでデプロイメント環境の各パネルを使用して構成する必要があります。構成されるコンポーネントは以下のとおりです。

- Common Event Infrastructure
  - Business Space
  - メッセージング・エンジン
1. デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。以下の方法のいずれかを使用します。
    - プロファイル管理ツールの使用。詳しくは、『202 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成』』を参照してください。
    - **manageprofiles** コマンドの使用。詳しくは、443 ページの『manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成』を参照してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、デプロイメント・マネージャーを始動します。
    -  「スタート」メニューから、「IBM」 > 「BPM Advanced」 > 「プロファイル」 > 「**profile\_name**」 > 「デプロイメント・マネージャーの始動」を選択します。
    - ファースト・ステップ・コンソールで、「デプロイメント・マネージャーの始動」をクリックします。
    - **startManager** コマンドを使用します。

3. デプロイメント環境で使用するノード (管理対象プロファイル) を少なくとも 1 つ作成します。詳しくは、443 ページの『manageprofiles を使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルとカスタム・プロファイルの作成』を参照してください。
4. デプロイメント環境を作成します。
  - a. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」を選択します。
  - b. 「新規」をクリックします。
  - c. データベースの構成までの各ステップで情報を指定します。
  - d. 「データベース」ページで、ご使用の環境が使用しているコンポーネントのデフォルト値を更新します。

以下のコンポーネントについては、ユーザー名とスキーマ名に必ず正しい値を入力してください。デプロイメント環境の構成では、スキーマおよびユーザーは構成の一部として作成されません。スキーマおよびユーザーは、デプロイメント環境の生成が行われる前に存在している必要があります。SQL Server では、ユーザーのデフォルト・スキーマがデータベースに設定されていることを確認する必要があります。ユーザーごとに、データベース内のスキーマに同じ値を設定することをお勧めします。各ユーザーにデフォルト・スキーマを設定しなかった場合、その値はデフォルトで「dbo」に設定され、すべてのコンポーネントがこのデフォルト・スキーマで構成されるため、環境が機能しなくなります。データベース・パネルに示されるスキーマの値は、該当するユーザーに対応したスキーマの値でなければなりません。フィールドにスキーマ値を入力するオプションがない場合は、ユーザーと同じデフォルト・スキーマがデータベースに設定されるものと予想されます。

- e. これらのコンポーネントに必要なテーブルを作成するには手動のステップが必要なため、Business Space の「テーブルの作成」チェック・ボックスは無効になっています。このコンポーネント用のテーブルを作成するには、以下のステップ 6 に従います。
  - f. 残りのステップを実行して、環境を作成し、設定を保存します。「サーバー」 > 「デプロイメント環境」は表示されますが、デプロイメント環境は始動されません。この時点では、デプロイメント環境を始動しないでください。
5. オプション: 4 でプロファイルを作成したときに「テーブルの作成」をクリアした場合は、メッセージ・エンジン用のスクリプトを生成します。
    - a. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」 > 「*your\_deployment\_environment*」 > 「据え置かれた構成」を選択します。
    - b. コマンド行で、スクリプトを生成する場所に移動します。
    - c. sibDDLGenerator.bat ユーティリティを実行して、環境に必要な各スキーマ用のスクリプトを生成します。このユーティリティの実行について詳しくは、「据え置かれた構成」ページを参照してください。スキーマ名は上記のデータベース・パネルで選択した値です。

```
sibDDLGenerator.bat -system sqlserver -version 2005 -platform windows  
-schema WPRCM00 -user user_name -statementend ; > output_script_filename
```

必ず正しいスキーマ (「据え置かれた構成」ページにリストされているもの) とユーザー名を使用してください。また、結果をファイルにリダイレクトしてください。そうしないと、生成されたスクリプトがファイルではなくコマンド・プロンプトに出力されます。

注: データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成した場合は、sibDDLGenerator.bat ユーティリティを実行する必要はありません。詳しくは、『621 ページの『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』』を参照してください。

6. Business Space データベースを手動で作成します。

- a. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」 > 「*your\_deployment\_environment*」 > 「据え置かれた構成」を選択します。
  - b. Business Space のスクリプトを見つけます。
  - c. createDatabase\_BusinessSpace.sql スクリプトを実行し、次に createTable\_BusinessSpace.sql スクリプトを実行します。
7. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」 > 「*your\_deployment\_environment*」 > 「据え置かれた構成」を選択し、「実行された構成」をクリックします。
  8. 管理コンソールからログオフし、デプロイメント・マネージャーをシャットダウンして、すべてのカスタム・プロファイルをシャットダウンします。
  9. オプション: 該当するすべてのプロファイル・ログを削除するか、それらを別のディレクトリーに保存します。ログの削除または移動が必要な場合があります。これはログが最終構成に付加されるためです。その場合に最新情報の表示が困難になる可能性があります。
  10. カスタム・プロファイルを開始し、デプロイメント・マネージャーを始動して、管理コンソールにログインします。
  11. デプロイメント環境を開始します。
    - a. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「デプロイメント環境」をクリックして、デプロイメント環境を開始します。デプロイメント環境の横にあるチェック・ボックスを選択し、「開始」をクリックします。
    - b. 5 分から 10 分後 (システムによってはそれ以上) に、「デプロイメント環境」ページが最新表示されます。デプロイメント環境の状況が「開始」に変わります。
  12. オプション: 以下の項目の状況を確認します。
    - a. 管理コンソールで「アプリケーション」 > 「エンタープライズ・アプリケーション」を選択し、インストール済みのアプリケーションが正常に始動したことを確認します。
    - b. 「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択し、メッセージ・エンジンに関連しない (つまり、名前に **ME** が含まれない) すべてのコンポーネントの接続が正常かどうかをテストします。

## データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成

データベース構成の設計を作成および生成するには、データベース設計ツールを使用します。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### 関連概念:

553 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』

データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

### データベース設計ツールを使用したスタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時に使用できるデータベース表の設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールは、ユーザー対話型の入力または既存の設計ファイルから、設計ファイルを生成します。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者 (DBA) やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明でもあります。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを実行する前に、必ず以下の決定を行っておいてください。

- スケーラビリティと高可用性の要件に基づいた、データベースを使用するデプロイメント環境のタイプ (スタンドアロン・プロファイルまたは Network Deployment 環境)。
- データベース表のロケーション。
- データベース・タイプに関する詳細。具体的には以下の項目ですが、これらに限定されません。
  - データベースのタイプ (DB2、Oracle、DB2 for zOS、SQL Server)
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード

**ヒント:** IBM Business Process Manager の計画された使用方法に関する情報を検討するときにデータベースの使用法を計画して、データベース設計ツールが必要とする情報を決定してください。

このタスクでは、データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルを作成する方法について説明します。データベース設計ツールへの入力、ユーザー対話型の入力または既存の設計ファイルのいずれかです。使用可能なオプションは、環境によって異なります。

**DbDesignGenerator** コマンドのオプションは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator** コマンドにアクセスし、ファイルを実行します。

**DbDesignGenerator** コマンドは以下のロケーションにあります。

-  `install_root\util\dbUtils`

例えば、`C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils> DbDesignGenerator.bat` です。

- Linux UNIX `/install_root/util/dbUtils`

例えば、`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh` とします。

**ヒント:** 「指定されたパスが見つかりません」というメッセージが表示された場合は、入力したパス名が間違っている可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

以下のような、データベース・パターンの選択を求めるプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)] :

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.standalone
- (4) wesb.nd.topology
- (5) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用またはデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。 スタンドアロン・プロファイルの場合は「.standalone;」を含むオプションを選択し、デプロイメント環境の場合は「.nd.」を含むオプションを選択します。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境用のデータベース・パターンを構成する場合は、番号 1 を入力してオプション「**(1)bpm.advanced.nd.topology**」を選択し、Enter を押します。次の例に示すような情報が表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[通知] 「マスター」コンポーネントを最初に設計して、次に親コンポーネントを設計します。

これは他のコンポーネントが親の値を継承していることがあるためです。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

```

(1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 未完了]
(2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [status = not complete]
(3)[BPC] WBI_BPC : [status = not complete]
(4)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [状況 = 未完了]
(5)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(6)[Bspace] WBI_BSPACE : [状況 = 未完了]
(7)[SibME] WBI_BPC_ME : [状況 = 未完了]
(8)[SibME] WBI_CEI_ME : [状況 = 未完了]
(9)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [状況 = 未完了]
(10)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [状況 = 未完了]
(11)[SibME] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [状況 = 未完了]
(12)[SibME] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [状況 = 未完了]
(13)[save and exit]

```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。データベース・コンポーネントが表示されますが、これらは前に選択された環境に合わせて構成されている可能性があります。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、**(1)bpm.advanced.nd.topology** 設計パターンのマスター・コンポーネントを構成するには、番号 1 を入力してオプション「**(1)[CommonDB] WBI\_CommonDB : [マスター] [状況 = 未完了]**」を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType キーが設定されていません
(DbType key is not set).

```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. データベース・コンポーネントを編集するには、構成するデータベース・タイプを選択し、y と入力して Enter を押します。

データベース・コンポーネントの編集を選択すると、次の例に示すような情報が表示されます。

```

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

```

```

(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server

```

6. ご使用の環境で使用するデータベース・タイプに対応する番号を入力し、Enter を押します。データベース・プロパティを指定するための一連のプロンプトが表示されます。これらのプロンプトは、使用するデータベース・タイプに応じて異なります。

例えば、番号 1 を入力してデータベース・タイプとして **(1)DB2-distributed** を選択したとします。共通 DB の構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、次の例に示すような情報が表示されます。

```

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:
(Database User name[default=] :)
システム・パスワード
(スタンドアロン・プロファイル作成の一環としてデータベースを
作成する場合にのみ必要)
(System password(this is required ONLY for creating the database

```

as a part of standalone profile creation.))[デフォルト=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1)false
- (2>true

番号を入力してください。

これは Process Center のデータベースですか?

(Please enter the number for the

Is this database for a Process Center?)[デフォルト=いいえ]: 1

([default=false] :1)

管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:

(The user ID you use for administrative security[default=] :)

adminUserName パラメーターで指定した名前のパスワード

[デフォルト=]: 1

(The password for the name specified

with the adminUserName parameter

[default=] :1)

通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:

(Regular pagesize[default=32k] :)

通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :

(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)

一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:

(Temporary pagesize[default=32k] :)

一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :

(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

7. それぞれのプロンプトで、データベース構成に適した値を入力するか、(デフォルト値がリストされている場合は) Enter を押してデフォルト値を受け入れます。管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは WebSphere 管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。

([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

8. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、次のようなデータベース・プロバイダーが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider # XA data source # DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA)
- (2)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider # XA data source # DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA)** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を選択して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択した後、次の例に示すような情報が表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. それぞれのプロンプトで、データベース構成に適した値を入力するか、(デフォルト値がリストされている場合は) Enter を押してデフォルト値を受け入れます。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「No」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

-----

```
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
```

```
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
```

```
[通知] 「マスター」コンポーネントを最初に設計して、
次に親コンポーネントを設計します。
これは他のコンポーネントが親の値を継承していることがあるためです。
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[CommonDB] WBI_CommonDB : [マスター] [状況 = 完了]
(2)[BPCReporting] WBI_BPCEventCollector : [status = complete]
(3)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(4)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [状況 = 完了]
(5)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(6)[BSpace] WBI_BSPACE : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(10)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [状況 = 完了]
(12)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [状況 = 完了]
(13)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントと

もにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

9. オプション: 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**注:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかを選択してください
[これは Process Center のデータベースですか?]:
([info] Please pick one of the following
[Is this database for a Process Center?(s)] :)
```

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。
10. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。例えば、**(1)bpm.advanced.nd.topology** データベース・パターンの構成を終了したら、番号 13 を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 残り項目が 0 になったため、bpm.advanced.nd.topology は完了しました
([status] bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
出力ディレクトリーを入力してください
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:
(Please enter the output directory
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

11. データベース設計ファイルを保存するロケーションを入力し、Enter キーを押します。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

12. 生成したデータベース設計ファイルのファイル名を入力し、Enter を押します。 プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

13. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。

- a. そのデータベース・コンポーネントのスクリプトを格納する出力ディレクトリーの絶対パスを指定して Enter を押します。

y と入力して Enter を押し、データベース・スクリプトを生成することを示すと、データベース・コンポーネントごとに以下の例のような情報が表示されます。

WBI\_CommonDB の出力ディレクトリーを入力してください  
(Please enter the output directory for WBI\_CommonDB)  
[default=DB2-distributed-CommonDB] :

出力ディレクトリーのロケーションを入力し、Enter を押すと、各項目の後に以下の例のような情報が表示されます。

[通知] スクリプトを次のディレクトリーに生成しました  
(The script(s) have been generated in) C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥  
dbUtils¥DB2-distributed-CommonDB

各プロンプトで値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

指定したロケーションに、データベース設計ファイルと、オプションでデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

#### 関連概念:

553 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』  
データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

## データベース設計ツールを使用した特定のコンポーネントのためのデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定のコンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルを作成することができます。データベース設計ツールは、ユーザー対話型の入力または既存の設計ファイルから、設計ファイルを作成します。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者 (DBA) やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の事項について決定します。

- スケーラビリティと高可用性の要件に基づいた、データベースを使用するデプロイメント環境のタイプ (スタンドアロン・プロファイルまたは Network Deployment 環境)。
- データベース表のロケーション。
- データベース・タイプに関する詳細。具体的には以下の項目ですが、これらに限定されません。
  - データベースのタイプ (DB2、Oracle、DB2 for zOS、SQL Server)
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード

**ヒント:** IBM Business Process Manager の計画された使用法に関する情報を検討するときにデータベースの使用法を計画して、データベース設計ツールが必要とする情報を決定してください。

このタスクでは、データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントのためのデータベース設計ファイルを作成する方法について説明します。データベース設計ツールへの入力は、ユーザー対話型の入力または既存の設計ファイルのいずれかです。使用可能なオプションは、環境によって異なります。

**DbDesignGenerator** コマンドのオプションは以下のとおりです。

```
-? , -help
ヘルプ情報を表示します。

-e db_design_file_name
指定したデータベース設計ファイル (*.dbDesign、*.properties など) を編集します。

-v db_design_file | db_scripts_output_directory
db_design_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、
指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。
db_scripts_output_directory が指定されている場合は、
指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。 現在のところ、検証が可能なのは、
テンプレート dd1 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のステップ 1 からステップ 9 (633 ページ) までを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。DB2 for z/OS サブシステム内にメッセージ・エンジンのデータ・ストアを作成する際の考慮事項については、メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成を参照してください。

1. **DbDesignGenerator** コマンドにアクセスし、ファイルを実行します。

**DbDesignGenerator** コマンドは以下のロケーションにあります。

- **Windows** `install_root%util%dbUtils`

例えば、`C:%Program Files%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat` です。

- **Linux** **UNIX** `/install_root/util/dbUtils`

例えば、`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh` とします。

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) 終了する [q]

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントのプロンプトが出されます。例えば、以下のようになります。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

(3)bpm\_performancedw

(4)bpm\_processserver

(6)cei

(7)comondb

(8)sca

(9)sibme

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション「**(4)bpm\_processserver**」を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

4. ご使用の環境で使用するデータベース・タイプに対応する番号を入力し、Enter を押します。データベース・プロパティを指定するための一連のプロンプトが表示されます。プロンプトは、使用するデータベース・タイプに応じて異なります。

例えば、番号 1 を入力してデータベース・タイプとして **(1)DB2-distributed** を選択したとします。データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]: (Database User name[default=] :)  
システム・パスワード  
(スタンドアロン・プロファイル作成の一環としてデータベースを  
作成する場合にのみ必要)  
(System password(this is required ONLY for creating the database  
as a part of standalone profile creation.))[デフォルト=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[デフォルト=いいえ]: 1  
([default=false] :1)  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for  
administrative security[default=] :)  
adminUserName パラメーターで指定した名前のパスワード  
[デフォルト=]: 1  
(The password for the name specified  
with the adminUserName parameter  
[default=] :1)  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=TWSSPACE]:  
(Regular TableSpace[default=TWSSPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
Temporary TableSpace[default=TWSTEMPSPACE] :

- それぞれのプロンプトで、データベース構成に適した値を入力するか、(デフォルト値がリストされている場合は) Enter を押してデフォルト値を受け入れます。 管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは WebSphere 管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・
セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects section
properties needed for database scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

- データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

データベース・タイプとして **DB2-distributed** を選択した後にデータベースのデータ・ソースを構成する場合は、次の例に示すような情報が表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider # XA data source # DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA)
- (2)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- 該当するオプションの番号を入力してデータ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter を押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider # XA data source # DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA)** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を選択して Enter キーを押します。データ・ソースとしてこのデータベース・プロバイダーを選択した後、次の例に示すような情報が表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- それぞれのプロンプトで、(デフォルト値がリストされている場合は) Enter キーを押してデフォルト値を受け入れるか、構成に適した値を入力します。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ディレクトリーを入力してください
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\%dbUtils]:
(Please enter the output directory
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\%dbUtils] :)
```

- データベース設計ファイルを保存するロケーションを入力し、Enter キーを押します。場所を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=BPM\_ProcessServer\_DB2-distributed.properties] :  
(Please enter the output filename  
[default=BPM\_ProcessServer\_DB2-distributed.properties] :)

8. 生成させるデータベース設計ファイルのファイル名を入力して Enter を押します。 ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

9. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、以下のステップを実行します。

- a. y を入力して、Enter キーを押します。

y と入力して Enter を押し、データベース・スクリプトの生成を指示すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
BPM_ProcessServer [デフォルト=DB2-distributed-BPM_ProcessServer] の  
出力ディレクトリーを入力してください:  
(Please enter the output directory for BPM_ProcessServer  
[default=DB2-distributed-BPM_ProcessServer] :)
```

- b. そのデータベース・コンポーネントのスクリプトを格納する出力ディレクトリーの絶対パスを指定して Enter を押します。

出力ディレクトリーのロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] スクリプトを C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils  
¥DB2-distributed-BPM_ProcessServer に生成しました  
([[info] The script(s) have been generated in C:¥IBM¥WebSphere¥  
;AppServer¥util¥dbUtils ¥DB2-distributed-BPM_ProcessServer)
```

各プロンプトで値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### 関連概念:

553 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』  
データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

#### データベース設計ツールの例:

データベース設計ツールを使用すると、DB2、Oracle、SQL Server など、複数のタイプのデータベースの設計ファイルを生成することができます。

## DB2

**bpm.standard.standalone** または **bpm.standard.nd** を選択すると、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (3) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (4) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (5) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):5

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.standard.standalone は完了しました  
(bpm.standard.standalone is complete with 0 remaining item(s):)

**wesb.standard** または **wesb.nd.topology** を選択すると、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (3) [SibMe] WBI\_CEI\_ME : [状況 = 完了]
- (4) [SibMe] WBI\_SCA\_APP\_ME : [状況 = 完了]
- (5) [SibMe] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [状況 = 完了]
- (6) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component) :6

[状況] 残り項目が 0 になったため、wesb.standalone は完了しました  
(wesb.standalone is complete with 0 remaining item(s):)

## Oracle

**bpm.advanced.standalone** または **bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合は、**CommonDB** を構成した後、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_ProcessServer** および **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPCReporting] WBI\_BPCEventCollector : [status = complete]
- (3) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (4) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [状況 = 未完了]
- (5) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (6) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (10) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (12) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (13) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):4

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
DB\_USER の必須プロパティ「databaseUser」が空です。  
(required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPCReporting] WBI\_BPCEventCollector : [status = complete]
- (3)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (4)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [状況 = 完了]
- (5)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (6)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (10)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (12)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (13)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):5

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
DB\_USER の必須プロパティ「databaseUser」が空です。  
(required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.)  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
SECURITY\_ADMIN\_USER の必須プロパティ「adminUserName」が空です。  
(required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.)  
[ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD の必須プロパティ「adminPassword」が空です。  
(required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.)

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

## SQL Server

**bpm.standard.standalone** または **bpm.standard.nd** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後、**BPM\_PerformanceDW** コンポーネントに対して、必要なデータベース認証を手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (3)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (4)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (5)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):2

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):

```
[ 1 ] BPM_PerformanceDW.BPM PerformanceDW : databaseObjects :
      DB_USER の必須プロパティ「databaseUser」が空です。
      (required property 'databaseUser' for DB_USER is empty.)
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

#### 関連概念:

553 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』  
データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに  
manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

#### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に  
dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含ま  
れています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

#### 関連概念:

553 ページの『例: manageprofiles コマンドでのデータベース設計ファイルの使用』  
データベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成すると、生成されるファイルに  
manageprofiles コマンド用の値が含まれます。

#### データベースへのシステム情報のロード

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コ  
マンドを実行する必要があります。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データがデータベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイル作成中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

- スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。
- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターでは、単一のクラスター・メンバーを指定して、このコマンドを 1 回だけ実行してください。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよびデプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。

コマンド行から bootstrap ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
<install_root>/profiles/Dmgr01/bin  
C:¥<install_root>¥profiles¥ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **Linux** **UNIX** **bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath *classpath*] -clusterName *cluster\_name***
- **Linux** **UNIX** **bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath *classpath*] -nodeName *node\_name* -serverName *server\_name***
- **Windows** **bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath *classpath*] -clusterName *cluster\_name***
- **Windows** **bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath *classpath*] -nodeName *node\_name* -serverName *server\_name***

ここで、

- **-dbJDBCClasspath** は、データベース JDBC ドライバーのロケーションです。**dbJDBCClasspath** で指定するパスにスペースが含まれている場合は、その値を引用符で囲む必要があります。デフォルト・ロケーションは `WAS_INSTALL_ROOT/jdbcdrivers` です。
- **-clusterName** はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターまたは **-nodeName** および **-serverName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- **-nodeName** はノードの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび **-serverName** パラメーター、または **-clusterName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- **-serverName** はサーバーの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび **-nodeName** パラメーター、または **-clusterName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。

**重要: For SQL Server**、ブートストラップ・ユーティリティーが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、**COLLATE** 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、create コマンドが以下のようにになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name 'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError
(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand
(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -nodeName node01 -serverName server1
```

Process Center または Process Server をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

カスタム JDBC ドライバーのロケーションを指定して、デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -dbJDBCClasspath c:/DB2/java
```

スタンドアロン・サーバーまたは最初のクラスター・メンバーを始動できます。

## DB2 for z/OS データベースの作成および構成

デプロイメント環境がリモートの DB2 for z/OS データベースに依存している場合、このセクションの手順および参照情報を使用して、データベースの構成およびデータベース表の作成に役立ててください。

### 関連タスク:

122 ページの『標準インストール時の既存データベースの構成』  
標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

### SPUFI、DSNTEP2、または DButility.sh を使用した DB2 for z/OS データベースおよびストレージ・グループの作成:

プロファイル作成プロセスにより、構成用の DB2 データベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータ定義言語 (DDL) スクリプトが生成されます。ご使用の構成に対するデータベース・オブジェクトを作成するための DDL スクリプトを実行するために使用できるツールがいくつかあります。また、SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベースを作成し、これにオブジェクトを取り込むこともできます。

DB2 データベースとストレージ・グループを作成する前に、以下のタスクを実行する必要があります。

- サーバー構成を作成します。スタンドアロン・サーバーと Network Deployment 環境の構成の作成方法については、『ロードマップ: IBM BPM Standard のインストールおよび構成 ロードマップ: IBM BPM Express のインストールおよび構成』を参照してください。
- データベースの構成に使用するすべてのコンポーネント用に、DDL が生成されていることを確認します。DDL を生成するには、以下のタスクを実行します。
  - データベース構成の設計

Network Deployment 環境においては、データベース設計ツール (DDT) の使用を推奨します。

スタンドアロン・サーバー環境でも DDT を使用することはできますが、スタンドアロン・プロファイルでは通常、「プロファイル管理ツール」のデータベース・パネルだけで、必要な機能を実行できます。

DDT の出力は、データベース構成の設計文書 (xml ファイル) と、オプションとしてデータベース表を作成するための SQL スクリプトです。

- DDL ファイル使用の準備
  - DDL ファイルを、IBM Business Process Manager ファイル・システムから区分データ・セット (PDS) にコピーすることが必要になる場合があります。Dd12Pds.sh などのツールを使用して、ファイルをコピーできます。
  - データベース・オブジェクトに適用する命名規則や編成規則に制限はありません。
  - CEI DDL ファイルと SIB DDL ファイルは、実行する前にカスタマイズが必要です。

注: サンプルの SIB DDL が、単一データベース構成向けに用意されています。

DBUtility.sh、SPUFI、または DSNTEP2 を使用して DDL スクリプトを実行できます。使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。また、DB2 オブジェクトの作成に使用するツール (特に、実稼働環境で使用するもの) について、組織が標準や規則を実装している場合もあります。各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

複数のデータベースにわたるデータベース・オブジェクトを作成する一方で、作業は z/OS UNIX システム・サービス環境で行う場合は、データベース名ごとに異なるコンポーネントを指定して **DBUtility.sh** スクリプトを複数回使用し、DDL スクリプトを実行します。

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。行が長いと、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になってしまいます。

1. データベースおよびストレージ・グループを作成します。
2. 生成された DDL スクリプトを使用して、データベースにデータを取り込みます。生成された DDL スクリプトのロケーションは、生成方法によって異なります。

**DbDesignGenerator** コマンドは以下のロケーションにあります。

- **Windows** `install_root%util%dbUtils`

例えば、`C:%Program Files%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat` です。

- **Linux** **UNIX** `/install_root/util/dbUtils`

例えば、`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh` とします。

その他の方法で生成された DDL の場合は、次のロケーションの下にあるディレクトリー内に DDL が存在します。

- `WAS_HOME/profiles/default/dbScripts` (スタンドアロン構成の場合)
- `WAS_HOME/profiles/default/dbScripts` (Network Deployment 構成の場合)

ここで、`WAS_HOME` は WebSphere Application Server 構成のトップ・ディレクトリーです。

3. z/OS UNIX 環境から DDL を実行する場合は、ファイルのコピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 755 createTable_AppScheduler.sql
```

4. ファイル内の値を必要に合わせて編集します。データベース名、ストレージ・グループ、およびスキーマ名は、製品構成プロセスでカスタマイズされます。各ファイルの値を調べ、構成スクリプトへの入力を提供する応答ファイルに入力した値に一致しており、かつデータベースに適していることを確認します。

**注:** ファイルは ASCII フォーマットで提供できます。スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールではスクリプトが EBCDIC フォーマットでなければならない場合は、**iconv** コマンドを使用して、ファイルを EBCDIC に変換します。以下に例を示します。

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

ファイルを ASCII フォーマットから EBCDIC に変換したが、ファイルの実行は ASCII フォーマットで行う必要がある場合は、**iconv** を使用して、ファイルを ASCII に戻してください。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >
createTable_AppScheduler.sql
```

5. 適切なツールを使用して、カスタマイズされたスクリプトを実行します。以下に例を示します。

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

### DBUtility.sh

**DBUtility.sh** は、IBM Business Process Manager for z/OS に付属のユーティリティで、インストール・ファイル・システムにインストールされます。例えば、/bin/DBUtility.sh のようになります。このユーティリティを使用すると、データベースおよびストレージ・グループを作成できるだけでなく、後で z/OS UNIX から SQL を実行してデータベース表を作成することもできます。**DBUtility.sh** は ASCII 入力を使用します。**DBUtility.sh** スクリプトで使用される構文の例を次に示します。

```
/WebSphere/V7S03Z1/AppServer/profiles/default/bin/DBUtility.sh
createTable
-DdbStorageGroup=S3DBSTO
-DdbSchemaName=S3CELL
-DsqlScriptName.default=createTable_AppScheduler.sql
-DsqlScriptPath.default=/WebSphere/V7S03Z1/AppServer/profiles/default/dbscripts/CommonDB/DB2zOS/S3CELLDB
/createTable_AppScheduler.sql
-DdbType=DB2UDBOS390
-DdbName=S3CELLDB
-DprofileName=default
-DprofilePath=/WebSphere/V7S03Z1/AppServer/profiles/default
-DdbJDBCProperties=/wps/dbscripts/db2v9
-DdbConnectionLocation=DSN810PP
-DdbJDBCClasspath=/usr/lpp/db2910/db2910/jcc/classes
-DdbUserId=wsadmin
-DdbPassword=password
-DdbDelayConfig=false
-DdbCreateNew=false
-DdbHostName=winmvsp1.hursley.ibm.com
-DdbServerPort=448
>/tmp/output.out 2>>/tmp/error.out
```

6. 出力を調べて、データベース、ストレージ・グループ、および表がエラーなく正常に作成されたことを確認します。
7. スタンドアロン構成を作成する場合は、以下のようにして IBM Business Process Manager のインストール済み環境を検証します。
  - a. サーバーを始動します。
  - b. ブラウザー・ウィンドウを開き、表示するサーバーの URL を入力して、管理コンソールを開きます。以下に例を示します。  
`http://server_name.domain_name:port_number/admin`
  - c. 管理コンソールにログインします。
  - d. 「ようこそ」ページに IBM Business Process Manager for z/OS が表示されることを確認します。これをクリックすると、詳細情報を表示できます。
  - e. コンソール内を移動して、サーバーが始動済みの状況であることを確認します。すべてのアプリケーションが開始したこと、およびメッセージング・エンジンが開始したことも確認してください。開始に失敗したものがある場合は、サーバー・ジョブ・ログで、失敗についての詳細を示す「SEVERE」または「WARNING」のメッセージを探します。

DB2 データベースおよびストレージ・グループが作成され、表や索引など、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

スタンドアロン構成を作成する場合は、これでアプリケーションをサーバーにデプロイすることができます。

Network Deployment 構成を作成する場合は、空のノードを 1 つ以上作成して、デプロイメント・マネージャー・セルに追加する必要があります。『カスタム・インストール後に 1 つのデプロイメント・マネージャーおよびカスタム・プロファイルを作成するためのソフトウェア構成』を参照してください。

## JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス用の DDL には、コメント化された GRANT コマンドが既に含まれていて、これを SIB テーブルへのアクセス権を付与するための基盤として使用できます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを何も提供しません。

JCA 認証別名と同じものでないスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID が表を除去する能力を持たないようにしてください (テーブルを除去する能力は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。) DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを DROP することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにしたまま、IBM Business Process Manager を機能させるには、DDL をコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成することにより、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。次のような GRANT コマンドを作成します。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE  
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

## SIB の正しいスキーマ名の設定:

SIB メッセージング・エンジンが適切な DB2 表にアクセスできるようにするには、DB2 表にアクセスするために使用する SIB メッセージング・テーブルに正しいスキーマ名を設定します。

サーバー (スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー) を始動します。

管理コンソールを使用して、スキーマ名を変更します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各バスについて、以下を実行します。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
  - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、この SIB の DB2 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. 管理コンソールからログアウトします。
5. サーバーを停止した後で、再始動します。
6. 付属ジョブ・ログの出力を参照して、成功を示す SIB メッセージング・エンジン始動メッセージを探します。以下に例を示します。

```
BB000222I: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

SIB メッセージング・テーブルが DB2 表にアクセスするために使用するスキーマ名が変更されます。

## DB2 for z/OS を使用したインストールの検査:

DB2 for z/OS データベースを使用するインストールを検査するときは、サーバント・ジョブおよび付属ジョブのログを確認し、データ・ストアへのアクセスに問題があることを示すエラー・メッセージがないかどうかを調べることが重要です。

1. 付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 システム管理者に依頼してください。構成時に起こる可能性がある DB2 のセキュリティに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与したくなる場合があります。
2. ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用状況を調べるように、DB2 システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が正しくなくても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムを使用するユーザーに引き渡した後でなく、この時点で解決しておくことを推奨します。例えば、ストレージ・グループおよび VCAT の修正は、表と索引が使用された後では容易ではありません。
3. 管理コンソールにログインします。
4. 管理コンソールで、すべてのアプリケーションが開始されていることと、メッセージング・エンジンが開始されていること、およびすべてのデータ・ソースに対して「テスト接続」オプションを使用してアクセスできることを確認します。始動に失敗したアプリケーションがある場合は、サーバント・ログおよび付属ジョブ・ログで「SEVERE」または「WARNING」のメッセージを探し、失敗の詳細を確認します。
  - 管理コンソールに SQLCODE -204 などの DB2 エラーが表示された場合は、データ・ソースのカスタム・プロパティ・セクションに正しいスキーマ名または currentSQLID 値を設定します。スキーマ名が JCA 認証別名のユーザー ID と異なる場合、SQL 要求は、JCA 認証別名のユーザー ID によって修飾されている表を探そうとします。
  - SQLCODE -913 理由コード 00C90088 などの DB2 デッドロック・エラーが表示された場合は、RRULOCK DB2 パラメーターを YES に設定し、IBM Business Process Manager テーブルのテーブル・スペースがロックされないようにします。

すべてのメッセージング・エンジンが正しく初期化済みで、JDBC 接続を開くことに関連するその他のエラーが出力されていない場合は、IBM Business Process Manager の構成のカスタマイズを続行できます。

## Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パスワードとユーザー ID の変更

データベース構成が完了した後に、必要に応じてデータベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成することができます。

データベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成するには、管理コンソールを使用します。データベース・パスワードおよびユーザー ID を変更するには、以下の 3 つの処理を実行する必要があります。

- すべてのデータ・ソースの認証別名を更新する
- メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する
- 98database.xml ファイルで Process Server および Performance Data Warehouse のパスワードを手動で更新する

**重要:** 何らかの構成変更を行う前に、config フォルダをバックアップすることをお勧めします。config フォルダは、Deployment Manager の下の <Dmgr-profile>/config にあります。詳しくは WebSphere Application Server 管理者にお問い合わせください。

### データ・ソース認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、データ・ソース認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。

データ・ソース認証別名を変更するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択します。

注: 「コンポーネント管理認証別名」および「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」に対して構成されている値を書き留めておいてください。

3. 必要なデータ・ソースを選択します。
4. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」を選択します。
5. ステップ 2 で書き留めた、適切な「コンポーネント管理認証別名」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
6. 「JAAS - J2C 認証データ」パネルに戻り、ステップ 2 で書き留めた「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
7. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

### メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。
- Network Deployment クラスターおよびサーバーを停止した後、別名を変更する前に、DMGR とすべてのノード・エージェントを始動する必要があります。

メッセージング・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」を選択します。
3. 各バスの認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。
  - a. 「バス」 > 「[Bus\_NAME]」 > 「メッセージング・エンジン」 > 「[MESSAGING\_ENGINE]」 > 「データ・ストア」を選択します。

要確認: データ・ストアでの「認証別名」の値を書き留めておいてください。

- b. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」をクリックします。

- c. ステップ a で書き留めた値を選択します。パスワードを編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
- d. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

### 構成ファイル内のパスワードおよびユーザー名の更新:

データベース・パスワードを変更するには、いくつかの構成ファイルを更新する必要があります。

ユーザー名およびパスワード更新を始める前に、DMGR と各ノード・エージェントが稼働していることを確認してください。新規パスワードで 98Database.xml ファイルを更新したら、「完全同期」をクリックして、変更内容をすべてのノードに適用する必要があります。その後、ご使用の環境を再始動して、ご使用の Network Deployment 環境またはスタンドアロン環境で新規パスワードを確実にアクティブ化する必要があります。

IBM Process Center、IBM Process Server、および IBM Performance Data Warehouse では、それぞれのデータベース情報が 98Database.xml ファイルに保管されるため、このファイルを更新した場合は、このファイルを更新する必要があります。このファイルが存在するすべての場所については、このトピックに記載されている表を参照してください。

サンプルの 98Database.xml ファイルには、次のようなコード・セグメントが含まれています (これは例であり、セットアップに応じて異なる場合があります)。

```
<databases>
  <default-database-name>default</default-database-name>
  <database type="default">
    <driver>com.ibm.db2.jcc.DB2Driver</driver>
    <url>jdbc:db2://localhost:50000/BA8000_1</url>
    <user>bpmdb</user>
    <schema></schema>
    <encrypted-password>GFgs/fnJCC9RnNCHDH3kLA==:acGciJgBON8WtkOZF/dS/A==</encrypted-password>
    <db-name>BA8000_1</db-name>
    <storage-group></storage-group>
  </database>
</databases>
```

ユーザー ID を変更するには、`<user>new_userID</user>` のように、user タグに新規の値を追加します。

パスワードについては、暗号化ツールを使用して生成されたパスワード値を組み込んで、次に示す項目を更新する必要があります。「関連リンク」セクションの『パスワードの暗号化』で説明されている方法を使用してください。

```
<encrypted-password>7Yu5Kz3XaYL5aUjbWfISHg==:VyP9e8ytnTz6623hERR4lg==</encrypted-password>
```

表 1 に、スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 102. スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	Process Center  <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥process-center¥config¥system  パフォーマンス・データウェアハウス  <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥performance-data-warehouse¥config¥system
Process Server	Process Server  <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥process-server¥config¥system  パフォーマンス・データウェアハウス  <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥performance-data-warehouse¥config¥system

表 2 に、Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 103. Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	<p><b>1 または 2 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Center</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-center%config%system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-center%config%system</b></p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</b></p>
	<p><b>3 または 4 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Center</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-center%config%system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-center%config%system</b></p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;SUPPORT-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</b></p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</b></p>

Process Server	<p><b>1 または 2 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Server</p> <p>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-server%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-server%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p> <hr/> <p><b>3 または 4 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Server</p> <p>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-server%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-server%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;SUPPORT-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p>
----------------	---

パスワードの暗号化

## DB2 データベースのトランザクション・ログ・オプションの変更

IBM Business Process Manager で使用できるように DB2 を構成する場合は、トランザクション・ログ・オプションを変更する必要があります。

1. DB2 コマンド・ライン・プロセッサを開始します。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
CONNECT TO [DB_name]
UPDATE DB CFG FOR DB_name USING LOGFILSIZ 4096 IMMEDIATE
UPDATE DB CFG FOR DB_name USING LOGSECOND 64 IMMEDIATE
CONNECT RESET
```

3. DB2 を停止して再始動します。

## Network Deployment 環境の構成

インストールが完了し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム・プロファイルを作成したら、Network Deployment 構成を作成できます。

### Network Deployment 環境の作成

カスタム・インストールを実行した後、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、複数のマシンにわたって Network Deployment セルを作成することができます。各セルについて、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイル、および 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成します。これで、必要なデプロイメント構成を作成できます。

もう 1 つの方法として、単純な Network Deployment トポロジーを構成する場合は、プロファイル管理ツールとデプロイメント環境ウィザード、または **manageprofiles** コマンドと **wsadmin** コマンドを使用する代わりに、**configureNode** コマンドを使用して必要なプロファイルとクラスターを作成できます。

このセクションでは、Network Deployment 環境を構成する方法について説明します。要約は以下のとおりです。

1. プロファイル管理ツールを使用して、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成します。
2. デプロイメント環境ウィザードまたは管理コンソールを使用して、デプロイメント構成を作成します。

このセクションに記載された情報では、インストーラーを実行してカスタム・インストールを実行したことが前提となります。

**ヒント:** プロファイル管理ツールを使用する代わりに、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成することもできます (『コマンド行ユーティリティーおよび **wsadmin** を使用したソフトウェアの構成』を参照)。

### デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成:

カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後、Network Deployment 構成を作成できます。

このセクションでは、デプロイメント環境ウィザードを使用して、ソフトウェアにパッケージされているトポロジー・パターン・テンプレートに基づいて Network Deployment 環境を作成する方法について説明します。

このセクションの情報では、インストーラーを実行済みであること、またカスタム・インストールを実行済みであること、およびデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成済みであることを想定しています。

**wsadmin** を使用した Network Deployment 構成の作成については、『コマンド行を使用したデプロイメント環境の作成』を参照してください。

### 関連概念:

35 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

52 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

## 仮想ホスト

### 関連タスク:

671 ページの『コマンド行を使用したデプロイメント環境の作成』

wsadmin を使用して、Process Server および Process Center デプロイメント環境を作成できます。

**createDeploymentEnvDef** および **generateDeploymentEnv** は、デプロイメント環境ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成するのと同様のコマンド行を提供します。

## 仮想ホストの構成

### パターンを使用した *Process Server* デプロイメント環境の作成:

Network Deployment 構成の基礎とするパターンを決定したら、「デプロイメント環境」ウィザードを使用して、そのパターンに基づいた IBM BPM Standard Process Server デプロイメント環境を作成します。

**ヒント:** パターンを使用してデプロイメント環境を作成する代わりに、インポートされた設計を使用することもできます。詳しくは、『管理コンソールを使用した設計文書に基づくデプロイメント環境定義のインポート』を参照してください。

**このタスクに必要なセキュリティー・ロール:** セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

構成するパターンとフィーチャーはすでに計画されているはずです。詳細は、『Network Deployment 環境の計画』を参照してください。

製品がインストール済みであり、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび関連ノードが作成済みであることを前提とします。

さらに、「デプロイメント環境構成」ウィザードのステップの 1 つに、データベース設計文書のインポートが含まれています。データベース設計文書は、選択されたデプロイメント環境フィーチャーのデータベース構成を定義します。IBM Business Process Manager には、ユーザーの入力に基づいてデータベース設計文書を作成する応答型のデータベース設計ツール (DDT) が含まれています。DDT は、設計文書の作成以外に、データベース表を作成するオプションも提供します。通常、DDT を実行する人が、適宜データベース表の作成を選択します。その後その文書を IBM Business Process Manager デプロイメント環境ウィザードで使用して、デプロイメント環境で使用されるデータベースを構成できます。DDT およびデータベース構成全般について詳しくは、『データベースの構成』を参照してください。

このタスクでは、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境の作成手順を説明し、デプロイメント環境構成ウィザードを使用します。

**注:** ウィザードで作業中に操作を間違えた場合は、「戻る」をクリックして前に戻ることができます。

1. 管理コンソールから、「デプロイメント環境」ページに移動します。例えば、「サーバー」 > 「デプロイメント環境」をクリックします。
2. 「デプロイメント環境」ページで「新規」をクリックして、「デプロイメント環境構成」ウィザードを起動します。
  - a. 「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」オプションが選択されています。「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」は、システムのデフォルトです。このトピックで説明するのは、このオプションです。

デプロイメント環境パターンにより、よく使用するビジネス・インテグレーション・トポロジを記録します。パターンは、作成するデプロイメント環境のテンプレートになります。

注: パターンは、構成済みのデプロイメント・マネージャーによってサポートされる製品と直接的な関係を持ちます。IBM Business Process Manager は、システム・デフォルトである「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンと共に、特定のパターン・セットをサポートしています。デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager 以外の製品もサポートしている場合は、追加のパターンが適用される可能性があります。各製品に適用されるパターンについては、製品固有の資料を参照してください。

IBM Business Process Manager に用意されているパターンのタイプの詳細は、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

- b. 「デプロイメント環境名」フィールドに、デプロイメント環境の固有の名前を入力します。
- c. オプション: ウィザードですべての構成ステップを表示するには、「詳細: すべてのステップを表示します」を選択します。

「ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します」を選択した場合は、ウィザードにはデフォルト値が割り当てられていないページだけが表示されます。「ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します」は、デプロイメント環境構成に対してシステム提供のデフォルト値を受け入れる場合にのみ選択してください。

このトピックでは、「詳細: すべてのステップを表示します」を選択したものと想定します。

- d. 「次へ」をクリックして、「デプロイメント環境フィーチャー」ページを表示します。
3. 「デプロイメント環境フィーチャー (Deployment Environment Features)」ページで、デプロイメント環境のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして互換性のあるフィーチャーのリストを表示するか、デプロイメント環境パターンのリストを表示します。フィーチャーはデプロイメント環境のランタイム処理機能を表します。

「デプロイメント環境フィーチャー」ページの使用可能なフィーチャーのリストは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルに基づきます。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張して IBM Business Process Manager と一緒に別の製品を組み込んだ場合 (IBM Business Monitor など)、「デプロイメント環境フィーチャー」ページにはこれらのフィーチャーもリストされます。

IBM Business Process Manager のプロファイルをインストールして構成した場合、「デプロイメント環境フィーチャー」ページには以下の詳細が表示されます。

- IBM Business Process Manager Standard の場合:
  - **BPMSPS** (IBM BPM Standard の場合)。Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル。ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、およびビジネス・ルールをサポートする Process Server デプロイメント環境を提供します。
  - **BPMSPC** (IBM BPM Standard の場合)。Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル。ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、およびビジネス・ルールをサポートする Process Center デプロイメント環境を提供します。

デプロイメント環境フィーチャーのデフォルト値は、デプロイメント・マネージャーのランタイム機能に対応しています。

4. 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」ページで必要に応じて追加のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして、1 次フィーチャーおよび補助フィーチャーの選択に関連したパターンのリストを表示します。

注: 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」 ページは、デプロイメント・マネージャーが他のビジネス・プロセス・マネジメント (BPM) フィーチャー (IBM Business Monitor など) で拡張されている場合にのみ表示されます。

通常のフィーチャーと互換フィーチャーとの関係を理解するには、『計画』セクションのデプロイメント環境に関する情報を参照してください。

5. 「デプロイメント環境パターンの選択 (Select the deployment environment pattern)」 ページで、選択したデプロイメント環境のパターンを選択し、「次へ」をクリックして「ノードの選択」 ページを表示します。

「デプロイメント環境パターン」 ページに表示されるパターンのリストは動的です。このリストは、以下の環境条件および構成決定によってアクティブ化され、それらの条件および決定に依存します。

- ソフトウェアをインストールしたプラットフォーム
- 「デプロイメント環境フィーチャーの選択 (Select the deployment environment feature)」 ページおよび「互換性があるデプロイメント環境フィーチャーの選択 (Select compatible deployment environment features)」 ページでの選択内容。

パターンからフィーチャーへの関係については、『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』を参照してください。

6. オプション: 「ノードの選択」 ページで、このデプロイメント環境に含めるノードを選択し、「次へ」をクリックして「クラスター」 ページを表示します。

ステップ 3 (651 ページ) で選択した環境で必要な機能を持つノードを選択します。例えば、デプロイメント環境タイプとして **BPMSPC** を選択した場合、選択したノードではその環境タイプの機能を実行できる必要があります。

デプロイメント環境用に少なくとも 1 つのノードを選択します。高可用性環境とフェイルオーバー環境の場合は、2 つ以上のノードを選択します。スケーラビリティを実現するには、すべてのノードを選択します。

ノードを組み込むには、ノード名の隣にあるチェック・ボックスを選択します。「ノード・マッピング」を使用すると、選択したノードが別のノード名にマップされます。

7. オプション: 「クラスター」 ページで、デプロイメント環境のクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、サポート・インフラストラクチャー) ごとに各ノードに必要な数のクラスター・メンバーを割り当てます。

デフォルトでは、機能ごとに各ノード上で 1 つのクラスター・メンバーが割り当てられます。この数を変更するには、各列の数値を置換します。それぞれのクラスター・タイプで提供される各種のクラスター・ロールおよび機能について十分な知識がない場合は、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

ノードの値が 0 (ゼロ) の場合、選択したフィーチャーに関して、その選択した機能にノードが寄与しないことを意味します。

クラスター・メンバーを割り当てた後、「次へ」をクリックすると、デプロイメント環境のクラスター・タイプごとに「クラスター命名」 ページを表示することができます。表示される「クラスター命名」サブステップは、選択したデプロイメント環境パターンによって異なります。

クラスター名およびクラスター・メンバー名のデフォルト値は、システムによって生成されます。

クラスター名もクラスター・メンバー名をカスタマイズしない場合は、以下の手順で、ウィザード・ナビゲーション・ペインを使用して、「REST サービス」ページに直接移動できます。

サブステップ・ページの構造はどれも共通しています。『クラスター名およびクラスター・メンバー名をカスタマイズします』に説明があります。

a. オプション: クラスター名とクラスター・メンバー名をカスタマイズします。

「クラスター命名」ページを使用して、クラスター・タイプのクラスター名またはクラスター・メンバー名をカスタマイズします。選択したパターンのクラスター・タイプごとに、1つのサブステップ・ページがあります。例えば、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンを選択した場合は、3つのサブステップがあります。すなわち、そのパターンのクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、およびサポート・インフラストラクチャー) ごとに1つのサブステップがあります。

それぞれのサブステップ・ページには、以下の情報が表示されます。

#### クラスター

クラスターの機能ロールを指定する読み取り専用フィールド。

値は、以下のようにクラスター・タイプによって異なります。

- アプリケーション・デプロイメント・ターゲット
- メッセージング・インフラストラクチャー
- サポート・インフラストラクチャー
- Web アプリケーション・インフラストラクチャー

各クラスター・タイプで提供される機能ロールについては、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

#### クラスター名

クラスター名のシステム生成デフォルト値が入ります。

デフォルト値は、<デプロイメント環境名>.<クラスター・タイプ名> という命名規則に従っています。ここで、**クラスター・タイプ名** は、以下のいずれかの値です。

- AppTarget

アプリケーション・デプロイメントのターゲットのロールを実行するクラスターの場合

- メッセージング

メッセージング・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合

- サポート

サポート・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合

- Web

サポート Web アプリケーションのロールを実行するクラスターの場合

**注:** このクラスター・タイプ名は、WebSphere Business Monitor が主なフィーチャーまたは製品である BPM 構成に適用されます。

#### クラスター・メンバー名

システム生成デフォルト値を受け入れるか、任意の名前を指定します。

クラスター・メンバー名のデフォルト値は、<クラスター名>.<ノード名>.<ノード番号シーケンス> という命名規則に従っています。

表に表示されるクラスター・メンバー名のは、 「クラスター」 ページのクラスター・タイプ列およびノード行に入力したクラスター・メンバーの数と一致します。「クラスター」 ページについては、前のステップを参照してください。

8. オプション: 「データベース構成のインポート」 ページで、「参照」 をクリックしてデータベース設計文書に進むか、またはデータベース設計文書へのパスを入力した後、「次へ」 をクリックして、「データ・ソース」 ページに進みます。設計文書は、データベース設計ツール (DDT) を使用して作成したデータベース設計に基づく設計文書にすることも、選択したパターンとフィーチャーに基づいて提供された設計文書にすることもできます。

注: プロファイルの作成時に作成された commonDB は、デプロイメント環境用にインポートされたデータベース設計文書によって変更されることはありません。

9. 必須: 「データベース」 ページで、デプロイメント環境のデータ・ソースのデータベース・パラメーターを構成し、「次へ」 をクリックして「セキュリティー」 ページに移動します。

注: このパネルで指定されるデータベースは既に存在している必要があります。デプロイメント環境構成で新規データベースが作成されることはありません。

DB2 データベースおよび SQL Server データベースの場合、IBM Process Server および IBM Performance Data Warehouse では残りのコンポーネントと同じデータベースを使用できません。Oracle データベースを使用する場合には、IBM Process Server および IBM Performance Data Warehouse は同じデータベース・インスタンスを使用できますが、それぞれ異なるユーザーを使用する必要があります。

このページでは、このデプロイメント環境に組み込まれるコンポーネントのデータベース情報を定義します。該当するところには、ウィザードによってパラメーターのデフォルト情報が提供されていますが、その値を、環境の計画を立てたときに定義した値に一致するように変更します。

注: データベース設計文書をインポートしてある場合は、その文書に存在するデータ・ソース構成が「データベース」 ページの情報に反映されます。

ファースト・パス・デプロイメント環境構成用にこのステップが表示されるかどうかは、条件に依存します。複数のデータベースが定義されている場合は、ファースト・パス・デプロイメント環境構成用にこのステップが表示されます。

DB2 for z/OS または Oracle データベース・プロバイダーを使用している場合には、このステップが常に表示されます。

注: このページに表示されるデフォルト・スキーマ名は、お客様のサイトの命名規則と矛盾したり、既存のスキーマと矛盾したりする場合があります。そのような場合は、スキーマ名の変更が必要になります。名前の競合を避けるため、指定する値には注意してください。

#### Oracle データベースの考慮事項:

- ユーザー名とスキーマ名が正確に一致していることを確認します。ユーザー名には、環境を生成する前にデータベース内に存在していたユーザー名を指定する必要があります。

#### SQL Server に関する考慮事項:

- 構成を行う前に、ユーザー名とスキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。

- ユーザーが Windows の資格情報を使用してデータベースに接続することを指定するには、データ・ソースを個別に選択し、「編集」をクリックし、「**Windows 認証を適用**」を選択します。

実稼働環境の場合は、「ユーザー名」と「スキーマ名 (Schema name)」に同じ値を設定し、「**テーブルの作成**」を選択解除する必要があります。実稼働環境の場合は、必要なスキーマを手動で作成し、生成された SQL ファイルを使用してテーブルを作成します。

**注:** Business Space では、「**テーブルの作成**」を選択できません (このオプションは選択不可になっています)。Business Space の SQL ファイルは手動で実行する必要があります。Business Space 用の SQL の手動実行については、『Business Space のデータベース表の構成』を参照してください。

すべてのキー・パラメーターを編集することができます。キー・パラメーターには、データベース名、テーブルを作成するかどうか、データ・ソース・ランタイム・ユーザー名、デプロイメント環境のパスワードなどがあります。

特定のコンポーネントに使用するデータベースを選択できます。

**DB2 for z/OS:** DB2 for z/OS データベース・プロバイダーを使用している場合、「**テーブルの作成**」オプションは使用できません。

「デプロイメント環境構成」ウィザードで実行できないステップは、手動で実行する必要があります。これらのステップは「据え置かれた構成」ページにリストされます。

10. 「Process Server」ページで、Process Server 構成の値を次のように設定します。

- **環境名**

Process Server の環境名を入力します。

環境名は、このサーバーまたはクラスターを Process Center ユーザーが識別するための名前です。

- **環境タイプ**

プルダウン・リストから、構成する Process Server の環境タイプを選択します。

環境タイプは、Process Server の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。負荷テストはテスト・サーバーで実行され、ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用されます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」に「**ステージング**」を指定することが考えられます。

選択可能な環境のタイプには、以下の 3 つがあります。

**実稼働** 実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

**ステージ**

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーを実行する場合は、「**ステージング**」を選択します。

**テスト** 構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

- **サーバーをオフラインで使用する**

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- **プロトコル**

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- **負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト**

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート**

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ユーザー名**

Process Center 上に存在する有効なユーザー名を入力します。Process Server は、Process Center にこのユーザーとして接続します。

- **パスワード**

上記のユーザーのパスワードを入力します。

11. 「セキュリティ」ページで、セキュア・コンポーネントへのアクセス時に WebSphere が使用する認証別名を構成します。

認証別名のユーザー名とパスワードは、このページで変更することができます。これらの別名を使用してセキュア・コンポーネントにアクセスしますが、データ・ソースにアクセスすることはできません。

12. オプション: 「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページで、デプロイメント環境のコンポーネント・ベース Web アプリケーションのコンテキスト・ルートを設定するか、システム提供のコンテキスト・ルートのデフォルト値を受け入れます。「**次へ**」をクリックして、「**要約**」ページを表示します。

「システム Web アプリケーション」ページは、デプロイメント環境でリモート・メッセージング、サポート、および Web アプリケーション・パターンを使用している場合に表示されます。

テーブルには以下のコントロール情報が含まれています。

#### **Web アプリケーション**

Web アプリケーションの名前。

作成するデプロイメント環境の一部であるコンポーネントの中には、Web アプリケーションが含まれているものがあります。「**Web アプリケーション**」列には、以下のコンポーネントが表示されます。

- Business Process Choreographer Explorer
- Business Rules Manager

#### **コンテキスト・ルート**

コンポーネントのコンテキスト・ルートの現行値。

デフォルトでは、Web アプリケーションのデフォルトのコンテキスト・ルートが適用されます。「コンテキスト・ルート」フィールドの値を上書きすることにより、コンテキスト・ルートを変更できます。

注: Business Space のコンテキスト・ルートは読み取り専用のため、編集できません。

13. 「要約」 ページ上の情報が正しいことを確認してから、以下のサブステップを実行します。
  - a. オプション: デプロイメント環境構成を保存しない場合は、「キャンセル」をクリックします。
  - b. オプション: 構成を生成せずに終了する場合は、「終了」をクリックします。

パネルに戻る (完了せずに終了した場合) には、管理コンソールで、「デプロイメント環境」 > 「*name of deployment environment*」 > 「環境の生成」を選択します。

- c. デプロイメント環境構成を保存するには、「終了」をクリックし、「メッセージ」ウィンドウで「保存」をクリックします。

「保存」をクリックすると、デプロイメント環境がマスター構成に保存されます。デプロイメント環境の生成時にエラーが発生した場合は、その構成の設定がマスター構成に保存されます。

- d. 据え置かれた構成ステップがないかどうかを確認します。

「デプロイメント環境」 > デプロイメント環境の名前 > 「据え置かれた構成」を選択します。

据え置かれた構成ステップが存在する場合は、デプロイメント環境を始動する前に、そのステップを処理する必要があります。

- e. デプロイメント環境構成が正しいことを確認し、据え置かれているステップが存在する場合はすべて処理してから、「終了して環境を生成」をクリックし、デプロイメント環境の構成を保存して完了します。

14. `bootstrapProcessServerData.sh` コマンドを実行します。636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。

注: このコマンドは、Process Center または Process Server クラスター・メンバーを始動する前に実行する必要があります。

構成が完了すると、構成ファイルを調べて、変更を表示できます。

変更をマスター構成に保管または廃棄します。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

#### 関連概念:

35 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

52 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

 仮想ホスト

## 関連タスク:

677 ページの『データベース構成の完了』

Network Deployment 環境内のクラスターを開始する前に、データベース表を作成してデータベース構成を完了する必要があります。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。



## 仮想ホストの構成

### パターンを使用した Process Center デプロイメント環境の作成:

Network Deployment 構成の基礎とするパターンを決定したら、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、そのパターンに基づいた IBM® Process Center デプロイメント環境を作成します。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで、「サーバー」>「デプロイメント環境」にナビゲートします。

**このタスクに必要なセキュリティー・ロール:** セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

デプロイメント環境ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する手順には、パターンおよびフィーチャーを選択するステップが含まれています。したがって、『計画』のセクションに記載されているパターンおよびフィーチャーに関する情報を読んで理解していることを前提としています。

製品がインストール済みであり、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび関連ノードが作成済みであることを前提とします。

さらに、「デプロイメント環境構成」ウィザードのステップの 1 つに、データベース設計文書のインポートが含まれています。データベース設計文書は、選択されたデプロイメント環境フィーチャーに合わせてデータベース構成を定義します。IBM Business Process Manager には、ユーザーの入力に基づいてデータベース設計文書を作成する応答型のデータベース設計ツール (DDT) が含まれています。データベース設計文書を DDT で使用することによりデータベース・スクリプトを作成できます。また、データベース設計文書を IBM Business Process Manager デプロイメント環境ウィザードで使用することによりデプロイメント環境で使用されるデータベースを構成できます。DDT およびデータベース構成全般については、『データベースの構成』を参照してください。

このタスクでは、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境の作成手順を説明し、デプロイメント環境構成ウィザードを使用します。

注: ウィザードで作業中に操作を間違えた場合は、「戻る」をクリックして前に戻ることができます。

1. 管理コンソールで「サーバー」>「デプロイメント環境」をクリックして、「デプロイメント環境」ページを表示します。
2. 「デプロイメント環境」ページで「新規」をクリックして、「デプロイメント環境構成」ウィザードを起動します。
  - a. 「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」オプションが選択されています。「パターンに基づくデプロイメント環境の作成」は、システムのデフォルトです。このトピックで説明するのは、このオプションです。

デプロイメント環境パターンにより、よく使用するビジネス・インテグレーション・トポロジを記録します。パターンは、作成するデプロイメント環境のテンプレートになります。

注: パターンは、構成済みのデプロイメント・マネージャーによってサポートされる製品と直接的な関係を持ちます。IBM Business Process Manager は特定のパターン・セットをサポートします。その中の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンがシステム・デフォルトです。デプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager 以外の製品もサポートしている場合は、追加のパターンを適用できます。各製品に適用されるパターンについては、製品固有の資料を参照してください。

IBM Business Process Manager に組み込まれてサポートされるパターンについては、『概要: デプロイメント環境のトポロジおよびパターン』を参照してください。

- b. 「デプロイメント環境名」フィールドに、デプロイメント環境の固有の名前を入力します。
- c. オプション: ウィザードですべての構成ステップを表示するには、「詳細: すべてのステップを表示します」を選択します。

「ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します」を選択した場合は、ウィザードにはデフォルト値が割り当てられていないページだけが表示されます。「ファースト・パス: 必要なステップのみを表示します」は、デプロイメント環境構成に対してシステム提供のデフォルト値を受け入れる場合にのみ選択してください。

このトピックでは、「詳細: すべてのステップを表示します」を選択したものと想定します。

- d. 「次へ」をクリックして、「デプロイメント環境フィーチャー」ページを表示します。
3. 「デプロイメント環境フィーチャー (Deployment Environment Features)」ページで、デプロイメント環境のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして互換性のあるフィーチャーのリストを表示するか、デプロイメント環境パターンのリストを表示します。フィーチャーはデプロイメント環境のランタイム処理機能を表します。

「デプロイメント環境フィーチャー」ページの使用可能なフィーチャーのリストは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルに基づきます。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張して IBM Business Process Manager と一緒に別の製品を組み込んだ場合 (IBM Business Monitor など)、「デプロイメント環境フィーチャー」ページにはこれらのフィーチャーもリストされます。

IBM Business Process Manager 用のプロファイルをインストールおよび構成した場合は、「デプロイメント環境フィーチャー (Deployment Environment Features)」ページに以下のものが含まれます。

- IBM Business Process Manager Standard の場合:
  - **BPMSPS** (IBM BPM Standard の場合)。Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル。ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、およびビジネス・ルールをサポートする Process Server デプロイメント環境を提供します。
  - **BPMSPC** (IBM BPM Standard の場合)。Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイル。ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、およびビジネス・ルールをサポートする Process Center デプロイメント環境を提供します。
- IBM Business Process Manager Advanced の場合:
  - **WESB** は WebSphere Enterprise Service Bus を指し、メディエーションをサポートするデプロイメント環境が提供されます。
  - **BPMAPS** (IBM BPM Advanced の場合)。Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル。メディエーション、ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、Business Space 機能、およびビジネス・ルールをサポートする Process Server デプロイメント環境を提供します。

- **BPMAPC** (IBM BPM Advanced の場合)。Process Center デプロイメント・マネージャー・プロフィール。メディエーション、ビジネス・プロセス、ヒューマン・タスク、Business Space 機能、およびビジネス・ルールをサポートする Process Center デプロイメント環境を提供します。

4. 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」ページで必要に応じて追加のフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックして、フィーチャーの選択に関連したパターンのリストを表示します。

注: 「互換性のあるデプロイメント環境フィーチャーの選択」ページは、デプロイメント・マネージャーが他のビジネス・プロセス・マネジメント (BPM) フィーチャー (IBM Business Monitor など) で拡張されている場合にのみ表示されます。

通常のフィーチャーと互換フィーチャーとの関係を理解するには、『計画』セクションのデプロイメント環境に関する情報を参照してください。

5. 「デプロイメント環境パターンの選択」ページで、選択したデプロイメント環境のパターンを選択し、「次へ」をクリックして「ノードの選択」ページを表示します。

「デプロイメント環境パターン」ページに表示されるパターンのリストは動的です。このリストは、以下の環境条件および構成決定によってアクティブ化され、それらの条件および決定に依存します。

- ソフトウェアをインストールしたプラットフォーム
- 「デプロイメント環境フィーチャーの選択 (Select the deployment environment feature)」ページおよび「互換性があるデプロイメント環境フィーチャーの選択 (Select compatible deployment environment features)」ページでの選択内容。

6. オプション: 「ノードの選択」ページでこのデプロイメント環境に含めるノードを選択し、「次へ」をクリックして「クラスター」ページを表示します。

ステップ 3 (659 ページ) で選択した環境に必要な機能を持つノードを選択します。例えば、デプロイメント環境タイプとして **BPMSPC** を選択した場合、選択したノードではその環境タイプの機能を実行できる必要があります。

デプロイメント環境用に少なくとも 1 つのノードを選択します。高可用性環境とフェイルオーバー環境の場合は、2 つ以上のノードを選択します。スケーラビリティを実現するには、すべてのノードを選択します。

ノードを組み込むには、ノード名の隣にあるチェック・ボックスを選択します。「ノード・マッピング」を使用すると、選択したノードが別のノード名にマップされます。

7. オプション: 「クラスター」ページで、デプロイメント環境のクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、サポート・インフラストラクチャー) ごとに各ノードに必要な数のクラスター・メンバーを割り当てます。

デフォルトでは、機能ごとに各ノード上で 1 つのクラスター・メンバーが割り当てられます。この数を変更するには、各列の数値を置換します。それぞれのクラスター・タイプで提供される各種のクラスター・ロールおよび機能について十分な知識がない場合は、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

ノードの値が 0 (ゼロ) の場合、選択したフィーチャーに関して、その選択した機能にノードが寄与しないことを意味します。

クラスター・メンバーを割り当てた後、「次へ」をクリックすると、デプロイメント環境のクラスター・タイプごとに「クラスター命名」ページを表示することができます。表示される「クラスター命名」サブステップは、選択したデプロイメント環境パターンによって異なります。

クラスター名およびクラスター・メンバー名のデフォルト値は、システムによって生成されます。

クラスター名もクラスター・メンバー名をカスタマイズしない場合は、以下の手順で、ウィザード・ナビゲーション・ペインを使用して、「REST サービス」ページに直接移動できます。

a. オプション: クラスター名とクラスター・メンバー名をカスタマイズします。

「クラスター命名」ページを使用して、クラスター・タイプのクラスター名またはクラスター・メンバー名をカスタマイズします。選択したパターンのクラスター・タイプごとに、1つのサブステップ・ページがあります。例えば、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」パターンを選択した場合は、3つのサブステップがあります。すなわち、そのパターンのクラスター・タイプ (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、メッセージング・インフラストラクチャー、およびサポート・インフラストラクチャー) ごとに1つのサブステップがあります。

それぞれのサブステップ・ページには、以下の情報が表示されます。

フィールド	説明	値
クラスター	クラスターの機能性役割を指定する読み取り専用フィールド。	値は、次のようにクラスター・タイプに応じて異なります。 <ul style="list-style-type: none"><li>• アプリケーション・デプロイメント・ターゲット</li><li>• サポート・インフラストラクチャー</li><li>• メッセージング・インフラストラクチャー</li><li>• Web アプリケーション・インフラストラクチャー</li></ul> 各クラスター・タイプで提供される機能ロールについては、『トポロジー・タイプおよびデプロイメント環境パターン』を参照してください。

フィールド	説明	値
クラスター名	システムによって生成されたクラスター名のデフォルト値。	<p>デフォルト値は、<b>Deployment Environment Name.Cluster type name</b> の命名規則に基づきます。この <b>Cluster type name</b> は次のいずれかの値です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• AppTarget アプリケーション・デプロイメントのターゲットのロールを実行するクラスターの場合</li> <li>• メッセージング メッセージング・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合</li> <li>• サポート サポート・インフラストラクチャーのロールを実行するクラスターの場合</li> <li>• Web サポート Web アプリケーションのロールを実行するクラスターの場合</li> </ul> <p><b>注:</b> このクラスター・タイプ名は、WebSphere Business Monitor が主なフィーチャーまたは製品である BPM 構成に適用されます。</p>
クラスター・メンバー名	システムによって生成されたクラスター・メンバー名のデフォルト値。クラスターの一部であるサーバーは、クラスター・メンバーと呼ばれます。	<p>システムによって生成されたデフォルト値を受け入れるか、または選択した名前を指定します。クラスター・メンバー名のデフォルト値は、<b>クラスター名.ノード名.ノード番号シーケンス</b> という命名規則に従っています。表に表示されるクラスター・メンバー名の数は、「クラスター」ページのクラスター・タイプ列およびノード行に入力したクラスター・メンバーの数と一致します。</p>

8. オプション: 「データベース構成のインポート」ページで、「参照」をクリックしてデータベース設計文書に進むか、またはデータベース設計文書へのパスを入力した後、「次へ」をクリックして、「データ・ソース」ページに進みます。設計文書をインポートすると、設計文書からの情報が、ウィザードの「データベース」ページに反映されます。設計文書は、データベース設計ツール (DDT) を使用して作成したデータベース設計に基づく設計文書にすることも、選択したパターンとフィーチャーに基づいて提供された設計文書にすることもできます。

**注:** プロファイルの作成時に作成された commonDB は、デプロイメント環境用にインポートされたデータベース設計文書によって変更されることはありません。

9. 必須: 「データベース」 ページで、デプロイメント環境のデータ・ソースのデータベース・パラメーターを構成し、「次へ」をクリックして「セキュリティー」 ページに移動します。

注: このパネルで指定されるデータベースは既に存在している必要があります。デプロイメント環境構成で新規データベースが作成されることはありません。

DB2 および SQL Server データベースの場合、IBM Process Server と IBM Performance Data Warehouse では、他のコンポーネントと同じデータベースを使用しないようにしてください。ただし、Oracle データベースを使用する場合には、IBM Process Server と IBM Performance Data Warehouse で同じデータベース・インスタンスを使用できます。しかし、別々のユーザーを使用してください。

このページでは、このデプロイメント環境に組み込まれるコンポーネントのデータベース情報を定義します。該当するところには、ウィザードによってパラメーターのデフォルト情報が提供されていますが、その値を、環境の計画を立てたときに定義した値に一致するように変更します。

注: データベース設計文書をインポートした場合、「データベース」 ページの情報は、インポートしたデータベース設計文書に存在するとおりのデータ・ソース構成を反映しています。データベース設計文書をインポートした後、データ・ソース構成を変更すると、その変更が、データベース設計ツールによって生成された DDL および元の値と互換性を持たなくなる可能性があります。

ファースト・パス・デプロイメント環境構成でこのステップが表示されるかどうかは、条件によります。複数のデータベースが定義されている場合、ファースト・パス・デプロイメント環境構成でこのステップが表示されます。

DB2 for z/OS または Oracle データベース・プロバイダーを使用している場合には、このステップが常に表示されます。

注: このページに表示されるデフォルト・スキーマ名は、お客様のサイトの命名規則と矛盾したり、既存のスキーマと矛盾したりする場合があります。そのような場合は、スキーマ名の変更が必要になります。名前の競合を避けるため、指定する値には注意してください。

#### Oracle データベースの考慮事項:

- ユーザー名/スキーマ名がまったく同じであることを確認します。ユーザー名には、環境を生成する前にデータベース内に存在していたユーザー名を指定する必要があります。

#### SQL Server に関する考慮事項:

- 構成を行う前に、ユーザー名/スキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。
- ユーザーが Windows の資格情報を使用してデータベースに接続することを指定するには、データ・ソースを個別に選択し、「編集」をクリックし、「Windows 認証を適用」を選択します。

実稼働環境の場合は、「ユーザー名」と「スキーマ名 (Schema name)」に同じ値を設定し、「テーブルの作成」を選択解除する必要があります。実稼働環境の場合は、必要なスキーマを手動で作成し、生成された SQL ファイルを使用してテーブルを作成します。

すべてのキー・パラメーターは編集可能です。キー・パラメーターには、データベース名、表を作成するかどうか、データ・ソース・ランタイム・ユーザー名、デプロイメント環境のパスワードがあります。

特定のコンポーネントに使用するデータベースを選択できます。

**DB2 for z/OS:** DB2 for z/OS データベース・プロバイダーを使用している場合、「テーブルの作成」オプションは使用できません。

「デプロイメント環境構成」ウィザードで実行できないステップは、手動で実行する必要があります。これらのステップは「据え置かれた構成」ページにリストされます。

10. 「Process Center」ページで、Process Center 構成の値を次のように設定します。

- **環境名**

Process Server の環境名を入力します。

環境名は、このサーバーまたはクラスターを Process Center ユーザーが識別するための名前です。

- **環境タイプ**

プルダウン・リストから、構成する Process Center の環境タイプを選択します。

環境タイプは、Process Center の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー（実動、ステージング、またはテスト）です。負荷テストはテスト・サーバーで実行され、ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用されます。構成する Process Center が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「環境タイプ」として「ステージング」を指定することが考えられます。

選択可能な環境のタイプには、以下の 3 つがあります。

**実稼働** 実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「実動」を選択します。

- **ステージ**

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーを実行する場合は、「ステージング」を選択します。

**テスト** 構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

- **サーバーをオフラインで使用する**

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- **プロトコル**

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- **負荷分散環境でのホスト名または仮想ホスト**

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホスト名または仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート**

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシー・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

11. 「セキュリティ」ページで、セキュア・コンポーネントへのアクセス時に WebSphere が使用する認証別名を構成します。

認証別名のユーザー名とパスワードは、このページで変更することができます。これらの別名を使用してセキュア・コンポーネントにアクセスしますが、データ・ソースにアクセスすることはできません。

12. オプション: 「システム Web アプリケーション (System web applications)」ページで、デプロイメント環境のコンポーネント・ベース Web アプリケーションのコンテキスト・ルートを設定するか、システム提供のコンテキスト・ルートのデフォルト値を受け入れます。「次へ」をクリックして、「要約」ページを表示します。

「システム Web アプリケーション」ページは、デプロイメント環境でリモート・メッセージング、サポート、および Web アプリケーション・パターンを使用している場合に表示されます。

テーブルには以下のコントロール情報が含まれています。

#### Web アプリケーション

Web アプリケーションの名前。

#### コンテキスト・ルート

コンポーネントのコンテキスト・ルートの現行値。

デフォルトでは、Web アプリケーションのデフォルトのコンテキスト・ルートが適用されます。

「コンテキスト・ルート」フィールドの値を上書きすることにより、コンテキスト・ルートを変更できます。

**注:** Business Space のコンテキスト・ルートは読み取り専用のため、編集できません。

13. 「要約」ページ上の情報が正しいことを確認してから、以下のサブステップを実行します。
  - a. オプション: デプロイメント環境構成を保存しない場合は、「キャンセル」をクリックします。
  - b. オプション: 構成を生成せずに終了する場合は、「終了」をクリックします。
  - c. デプロイメント環境構成を保存するには、「終了」をクリックし、「メッセージ」ウィンドウで「保存」をクリックします。

「保存」をクリックすると、デプロイメント環境がマスター構成に保存されます。デプロイメント環境の生成中にエラーが起きた場合でも、構成設定はマスター構成に保存されます。

- d. 据え置かれた構成ステップがないかどうかを確認します。

「デプロイメント環境」 > デプロイメント環境の名前 > 「据え置かれた構成」を選択します。

据え置かれた構成ステップが存在する場合は、デプロイメント環境を始動する前に、そのステップを処理する必要があります。

- e. デプロイメント環境構成が正しいことを確認し、据え置かれているステップが存在する場合はすべて処理してから、「終了して環境を生成」をクリックし、デプロイメント環境の構成を保存して完了します。
14. `bootstrapProcessServerData.sh` コマンドを実行します。636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。

構成が完了すると、構成ファイルを調べて、変更を表示できます。

変更をマスター構成に保管または廃棄します。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

#### 関連概念:

35 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

52 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

#### 仮想ホスト

#### 関連タスク:

677 ページの『データベース構成の完了』

Network Deployment 環境内のクラスターを開始する前に、データベース表を作成してデータベース構成を完了する必要があります。

636 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### 仮想ホストの構成

#### 管理コンソールを使用した Network Deployment 環境の構成:

カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後で、管理コンソールを使用して Network Deployment 環境を作成できます。

このセクションでは、管理コンソールを使用して Network Deployment 構成を作成する方法について説明します。

このセクションでは、以下の情報が真であることを想定しています。

- カスタム・インストールを作成するためにインストーラーを実行済みです。
- デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成済みです。
- ユーザーは、Network Deployment のトポロジーと構成および管理コンソールについて精通しています。

**重要:** デプロイメント環境ウィザードを使用して Network Deployment 環境を作成することを検討してください。

また、管理コンソールから実行できるいずれの操作も、wsadmin を使用して実行することができます。また、コマンド・アシスタンスは、管理コンソール・アクションのサブセットに対して使用することができます。使用可能である場合には、コマンド・アシスタンスは、実行した最後のコンソール・アクションに関する

る wsadmin スクリプト・コマンドを表示します。コマンド・アシスタンスに関する情報については、『コマンド・アシスタンスによる管理コンソール・アクション』を参照してください。

### サーバーとクラスターの作成および構成:

管理コンソールを使用すると、IBM Business Process Manager のサーバーとクラスターを作成および構成できます。

このセクションの情報では、管理コンソールを使用して、IBM Business Process Manager 用のサーバーとクラスターを手動で作成する方法について説明します。

### クラスターの作成:

以下の手順では、1 つのクラスター・メンバーを持つクラスターを作成する方法について説明します。管理コンソールを使用してクラスターを作成することの利点は、作業中に変更を元に戻せることと、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用できることです。

管理コンソールを使用してクラスターを作成する前に、デプロイメント・マネージャーを始動してください。

以下の手順では、管理コンソールを使用して、1 つのクラスター・メンバーを持つクラスターを作成する方法について説明します。なお、このトピックで説明する、管理コンソールから実行されるタスクは、管理スクリプトを使用して実行することもできます。 **createCluster** パラメーターについては、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで、『AdminTask オブジェクトの ClusterConfigCommands コマンド・グループ』を参照してください。

wsadmin ツールを使用したクラスター・メンバーの作成については、『スクリプトによるクラスター・メンバーの作成』を参照してください。

クラスターを作成すると、後でそのクラスターにサーバーを容易に追加できるため、現時点では単一サーバーで高可用性要件とスケーラビリティ要件を十分に満たせる場合でも、クラスターを作成することを検討してください。

1. 管理コンソールにログインし、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「**WebSphere Application Server クラスター (WebSphere application server clusters)**」にナビゲートします。
2. 「新規」をクリックして、「新規クラスターの作成 (Create new cluster)」ページを表示します。
3. 「新規クラスターの作成」ページで、基本的なクラスター情報を入力します。
  - a. 「**クラスター名**」フィールドにクラスターの名前を入力します。
  - b. ホスト・スコープのルーティング最適化を有効にしたい場合は、「**ローカルを優先**」を選択します。このオプションは、デフォルトでは有効になっています。このオプションが有効の場合、EJB 要求は可能であればクライアント・ホストにルーティングされます。このオプションを使用すると、クライアント要求がローカルのエンタープライズ Bean に送信されるため、パフォーマンスが向上します。

**注:** preferLocal 最適化を有効にする場合は、構成に影響を与えるために、デプロイメント・マネージャーを稼働させておく必要があります。デプロイメント・マネージャーがシャットダウンしていると、preferLocal 最適化が実行されず、クラスターのすべてのメンバーに要求が分散される可能性があります。

- c. このクラスターに対してメモリー間の複製ドメインを作成したい場合は、「**HTTP セッションのメモリー間の複製の構成**」を選択します。

複製ドメインにはクラスターと同じ名前が付けられ、複製ドメインのデフォルト設定で構成されます。デフォルト設定が有効な場合は、データの断片ごとにレプリカが 1 つ作成され、暗号化は無効になります。また、メモリー間の複製用に、クラスター・メンバーごとの Web コンテナも構成されます。

複製ドメインのこれらの設定を変更するには、「環境」 > 「複製ドメイン」 >

「*replication\_domain\_name*」をクリックします。Web コンテナの設定を変更するには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > 「*cluster\_name*」 > 「クラスター・メンバー」 > 「*cluster\_member\_name*」をクリックします。次に、管理コンソールの「コンテナ設定」セクションで、「Web コンテナ設定」 >> 「Web コンテナ」 > 「セッション管理」 > 「分散環境設定」をクリックします。1 つのクラスター・メンバーでこれらの設定を変更する場合、このクラスターの他のメンバーでも設定変更が必要になる場合があります。

4. 「次へ」をクリックして、「最初のクラスター・メンバーの作成 (Create first cluster member)」ページに進みます。
5. 「最初のクラスター・メンバーの作成」ページで、そのクラスター・メンバーに関する情報を入力します。
  - a. 「メンバー名」フィールドにメンバー名を入力します。
  - a. 「ノードの選択」リストから、サーバーを定義するノードをクリックします。
  - b. 「ウェイト」フィールドに、このクラスター・メンバーのウェイト値を入力します。

ウェイト値は、アプリケーション・サーバーに送信される処理の量を制御します。このサーバーのウェイト値が、クラスター内の他のサーバーに割り当てられたウェイト値よりも大きい場合は、このサーバーが受ける作業負荷の割合が大きくなります。ウェイト値は、特定のアプリケーション・サーバーに割り当てられた作業負荷の相対比率を表します。値の範囲は 0 から 20 です。

- **z/OS システム**では、作業負荷のタイプに応じて、ウェイトで作業負荷のバランスを取る場合と、z/OS システムによってバランスを取る場合があります。HTTP 要求については、Web サーバー・プラグインと、クラスター化されたアプリケーション・サーバーを処理するコントローラーの間で、HTTP トラフィックを分散させる目的でウェイトが使用されます。HTTP トラフィックを受信する必要のあるアプリケーション・サーバーには、より高いウェイト値を割り当ててください。
  - Web サービス呼び出しについては、1 つのアプリケーション・サーバー内のサーバントから別のアプリケーション・サーバー内のコントローラーに情報が転送されます。呼び出しを受けるアプリケーション・サーバーのウェイト値は最も高くなります。
  - ウェイトは、Internet Inter-ORB Protocol (IIOP) 要求には影響しません。IIOP 要求は、sysplex ディストリビューターを使用して正しいアプリケーション・サーバーに配布されます。
- c. ソース・サーバーで定義された HTTP トラnsポートごとに固有のポート番号を生成したい場合は、「固有の HTTP ポートを生成する」(デフォルト・オプション)を選択します。

このオプションが選択されている場合は、このクラスター・メンバーの HTTP トラnsポートや HTTP トラnsポート・チャンネルが、同じノード上で定義されている他のどのサーバーとも競合しなくなります。「固有の HTTP ポートを生成する」チェック・ボックスを選択解除すると、すべてのクラスター・メンバーが同じ HTTP ポートを共有するようになります。

6. 「最初のクラスター・メンバーの基礎を選択」セクションで、以下のオプションから選択します。
  - アプリケーション・サーバー・テンプレートを使用してメンバーを作成します

これは、標準的なクラスター作成方法です。「」を選択します。

このオプションを選択して「次へ」をクリックすると、空白のフォームが表示され、これを使用して追加のクラスター・メンバーを定義できます。作成したばかりのサーバーが画面の下部にリストされます。

- a. 「次へ」をクリックします。
- b. 要約画面で詳細を確認し、「次へ」をクリックします。
- c. 構成変更を保存します。

作成したクラスターがリストに表示されます。

- d. ご使用の構成に合わせてポート番号をカスタマイズします。
- 既存のアプリケーション・サーバーをテンプレートとして使用してメンバーを作成します

このオプションはサポートされません。

- 既存のアプリケーション・サーバーを変換してメンバーを作成します

**注:** このオプションは選択しないでください。WebSphere Application Server では、**resourcesScope** という名前の新しいパラメーターが `createCluster` コマンドと `createClusterMember` コマンドに追加されています。これにより、最初のクラスター・メンバーがクラスターに追加される際のリソースの処理方法を制御することができます。これらのパラメーターについては、技術情報の

『resourcesScope という名前の新しいパラメーターが `createCluster` コマンドと `createClusterMember` コマンドに追加されました (New parameter named resourcesScope was added to the createCluster and createClusterMember commands)』を参照してください。

IBM Business Process Manager の場合は、**resourcesScope** パラメーターの値を **cluster** にして使用する必要があります。現在、**resourcesScope** パラメーターは管理コンソールには表示されません。IBM Business Process Manager では、管理コンソールを使用して、既存の単一サーバーを使用するクラスターを最初のクラスター・メンバーとして作成することはできません。このオプションを選択すると、管理コンソールまたはデプロイメント・マネージャーの `SystemOut.log` に、以下のエラー・メッセージが返されます。

既存サーバーからクラスターを作成する場合は、「resourcesScope」パラメーターを「cluster」に設定する必要があります。

コマンド行を使用して、既存の単一サーバーを使用するクラスターを最初のクラスター・メンバーとして作成することは有効です。**resourcesScope** の値は **Cluster** に設定する必要があります。以下に例を示します。

```
$AdminTask createCluster {-clusterConfig
{-clusterName newcluster -preferLocal true}
-convertServer {-serverNode NODE1Node01 -serverName testserver
-resourcesScope cluster}}
```

**createCluster** パラメーターについては、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで『AdminTask オブジェクトの ClusterConfigCommands コマンド・グループ』を参照してください。

wsadmin ツールを使用したクラスター・メンバーの作成については、『スクリプトによるクラスター・メンバーの作成』を参照してください。

- なし

常に処理を行います。

7. 「次へ」をクリックします。

## 8. 追加のクラスター・メンバーを作成します。

追加のクラスター・メンバーを作成する前に、最初のクラスター・メンバーの構成設定を確認してください。これらの設定は、「新規クラスターの作成」ウィザードの「追加クラスター・メンバーの作成」パネルの下部に表示されます。作成する追加メンバーごとに、以下の手順を実行します。

- a. メンバーの固有の名前を指定します。この名前は、ノード内で固有にする必要があります。
  - b. クラスター・メンバーの割り当て先となるノードを選択します。
  - c. このメンバーに割り当てるウェイトを指定します。ウェイト値は、アプリケーション・サーバーに送信される処理の量を制御します。このサーバーのウェイト値が、クラスター内の他のサーバーに割り当てられたウェイト値よりも大きい場合は、このサーバーが受ける作業負荷の割合が大きくなります。値の範囲は 0 から 20 です。
  - d. ソース・サーバーで定義された HTTP トランスポートごとに固有のポート番号を生成したい場合は、「固有の HTTP ポートを生成する」を選択します。
  - e. 「メンバーの追加」をクリックします。最初のクラスター・メンバー以外の新規作成されたクラスター・メンバーの構成設定を編集したり、追加のクラスター・メンバーを作成したりすることができます。最初のクラスター・メンバーのプロパティを編集するには、「戻る」をクリックします。最初のクラスター・メンバーの設定は、最初のクラスター・メンバーの作成時に自動的に作成されるクラスター・メンバー・テンプレートの設定になります。
9. クラスター・メンバーの作成が終了したら、「次へ」をクリックします。
10. クラスターを作成するには、クラスターの要約を確認して「終了」をクリックします。前のウィザード・パネルに戻るには、「戻る」をクリックします。クラスターを作成せずにウィザードを終了するには、「キャンセル」をクリックします。
11. さらにクラスターの構成を行うには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」をクリックし、そのクラスターの名前をクリックします。変更内容を保存するまでは、「構成」タブと「ローカル・トポロジー」タブしか表示されません。
12. 「レビュー (Review)」をクリックして、クラスターの構成設定を確認します。追加の構成変更を行う必要がある場合は、前のステップを繰り返します。
13. 追加の構成変更を行う必要がない場合は、「ノードと変更を同期化」を選択し、「保存」をクリックします。変更内容が保存され、すべてのノード間で同期されます。

注: 「ノードと変更を同期化」を選択しない場合、「保存」をクリックしても、クラスターの再始動時に、製品がノード上のクラスター・サーバーを検出できないため、クラスター・サーバーは開始されません。構成変更をノード間で常に同期したい場合は、コンソール・プリファレンスの 1 つとして「ノードと変更を同期化」を選択することができます。

## 14. クラスターを再始動します。

選択したサーバーを使用して、選択した管理対象ノード内に最初のクラスター・メンバーとしてクラスターが作成されます。

### 関連概念:

 仮想ホスト

### 関連タスク:

 仮想ホストの構成

## サーバーの新規作成:

実稼働環境のニーズに対応するアプリケーションを処理するためには、ほとんどのインストール環境に複数のサーバーが必要になります。コマンド行ツールまたは管理コンソールを使用して、必要なサーバーを作成できます。

新規サーバーをクラスターに含めるかどうかを決定します。このサーバーをクラスターの一部にする場合には、新規アプリケーション・サーバーの作成ウィザードでなく、新規クラスターの作成ウィザードを使用して、サーバーを作成する必要があります。

**重要:** このタスクでは、管理対象サーバーを作成します。スタンドアロン・サーバーが必要な場合は、以下のステップを実行しないでください。代わりに、スタンドアロン・サーバーのプロファイルを作成してください。

管理対象サーバーを新規作成するには、以下のステップを実行します。

『アプリケーション・サーバーの作成』の説明に従い、「サーバー・テンプレートの選択」ページでテンプレートを選択するか、適切なユーザー定義テンプレートを選択します。**制約事項:** 「必要に応じてコンポーネントを開始」機能は、サポートされていません。

必要なコンポーネントをサーバーで構成します。詳しくは、『コンポーネントの構成』を参照してください。

## コマンド行を使用したデプロイメント環境の作成:

wsadmin を使用して、Process Server および Process Center デプロイメント環境を作成できます。

**createDeploymentEnvDef** および **generateDeploymentEnv** は、デプロイメント環境ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成するのと同様のコマンド行を提供します。

### 関連概念:

649 ページの『デプロイメント環境ウィザードを使用した Network Deployment 環境の構成』  
カスタム・インストールを実行し、デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成した後に、Network Deployment 構成を作成できます。

35 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

52 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

 [仮想ホスト](#)

### 関連タスク:

 [仮想ホストの構成](#)

## コマンド行を使用したデプロイメント環境定義の作成:

wsadmin コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を作成できます。**createDeploymentEnvDef** を実行すると、デプロイメント環境の定義が提供されます。

デプロイメント環境定義を作成するデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティー・ロール:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用する必要があります。

IBM Business Process Manager はパターンのセットをサポートしており、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」は、Network Deployment 実稼働環境のために使用するパターンです。ご使用のデプロイメント・マネージャーが IBM Business Process Manager 以外の製品もサポートする場合は、デプロイメント環境定義を作成するときに、それらの製品のパターンを使用した方がよい可能性があります。他の製品のパターンについては詳しくは、それらの製品の資料を参照してください。

このタスクは、**wsadmin** コマンドを使用して、特定のパターンに基づいたデプロイメント環境定義を作成します。

**wsadmin** コマンドを使用して、管理コンソールから作成する環境と同じデプロイメント環境を作成することができます。この機能により、管理タスクを実行して、既存の構成 (プロファイル作成時に作成した構成) に基づくすべてのデフォルト値が設定されたデプロイメント環境定義を作成することができます。このコマンドには、データベース設計文書をインポートするオプションのプロパティーも含まれます。データベース設計文書は、作成しているトポロジー用のデータベース構成を保持しています。

デプロイメント環境を生成するときに、テーブルを作成するかどうかについての情報が設計文書から取得されます。指定するデータベース設計ファイルに **createTables** パラメーターが正しく設定されていることを確認してください。

**重要: createTables** パラメーターを使用する場合は、データベースが既に存在していなければなりません。生成されたデータベース・スクリプトをカスタマイズする実稼働環境では、**createTables** を使用しないでください。リモート・データベース・サーバーが存在する場合は、**createTables** を使用しないでください。

DB2 および SQL Server データベースの場合、IBM Process Server と IBM Performance Data Warehouse では、他のコンポーネントと同じデータベースを使用しないようにしてください。Oracle データベースを使用する場合には、IBM Process Server および IBM Performance Data Warehouse は同じデータベース・インスタンスを使用できますが、それぞれ異なるユーザーを使用する必要があります。

Oracle データベースでは、ユーザー名およびスキーマ名がまったく同じであることを確認します。環境を生成する前にユーザーがデータベースに存在する必要があります。

SQL Server データベースでは、構成を行う前に、ユーザー名およびスキーマが存在していることを確認します。スキーマ値は、選択するユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。

実稼働環境の場合は、ユーザー名およびスキーマ名に同じ値を設定します。**createTables** は選択しないでください。必要なスキーマを手動で作成し、生成された SQL ファイルを使用してテーブルを作成します。

デプロイメント環境定義には、デプロイメント環境を構成する、特定のコンポーネント、(クラスター、ノード、サーバーの) 構成、リソース、および関連構成パラメーターが記述されています。この定義は、デプロイメント環境構成のインスタンスと呼ばれることもあります。デプロイメント環境構成は、デプロイメント環境定義にエクスポートできます。デプロイメント環境定義をインポートして、ご使用のシステムに新しいデプロイメント環境構成を追加することができます。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。 **wsadmin** コマンドは、次のディレクトリーのいずれかにあります。

```
install_root/profiles/dmgr profile/bin  
install_root/bin
```

2. コマンド・プロンプトから **wsadmin** コマンドを入力して **wsadmin** 環境に入ります。
3. **createDeploymentEnvDef** コマンドを使用して、特定のランタイムとパターンに関して固有の名前を持つデプロイメント環境定義を作成します。

注: 管理セキュリティーが有効になっていて、コマンド内でユーザー ID とパスワードを指定しなかった場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

この例では、管理セキュリティーが有効な状態で、ホスト **myDmgr** 上に **myDepEnv** がある **IBM Business Process Manager** ランタイムでのリモート・メッセージングおよびリモート・サポート・パターンに関するデプロイメント環境定義を作成します。この例では、**nd.topology.dbDesign** という名前のデータベース設計文書をインポートします。

注: **-topologyRuntime** に割り当てる値は、**IBM BPM** の構成 (**Advanced** または **Standard**) および選択した環境によって異なります。以下に例を示します。

- **IBM BPM Standard** の場合、**-topologyRuntime** は次のようになります。
  - **BPMSPS** (**IBM BPM Standard Process Server** の場合)
  - **BPMSPC** (**IBM BPM Standard Process Center** の場合)
- **IBM BPM Advanced** の場合、**-topologyRuntime** は次のようになります。
  - **BPMAPS** (**IBM BPM Advanced Process Server** の場合)
  - **BPMAPC** (**IBM BPM Advanced Process Center** の場合)

注: 管理セキュリティーを無効にする場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

デプロイメント・マネージャー上にデプロイメント環境をインポートまたは作成したあと、**generateDeploymentEnv** コマンドを使用してデプロイメント環境を構成できます。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、**WebSphere Application Server** ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、**WebSphere Application Server** は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する **WebSphere Application Server** の資料を参照してください。

#### 関連概念:

35 ページの『概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン』

**Network Deployment** 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

52 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

 仮想ホスト

#### 関連タスク:

 仮想ホストの構成

674 ページの『コマンド行を使用したデプロイメント環境の生成』

**wsadmin** インターフェースを使用してデプロイメント環境を生成することができます。この機能により、スクリプトを使用して、デプロイメント・マネージャー上の複数のデプロイメント環境を無人で構成できます。

## コマンド行を使用したデプロイメント環境定義へのノードの追加:

**wsadmin** コマンドを使用して、デプロイメント環境定義にノードを追加することができます。

このタスクでは、ノードがデプロイメント・マネージャーに統合されていることを前提としています。

トポロジーが既に構成されている場合、このコマンドを実行しても、デプロイメント環境定義にノードは追加されません。

ノードを追加するデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティー・ロール:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用する必要があります。

このタスクでは、**wsadmin** コマンドを使用して、統合ノードをデプロイメント環境定義に追加します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。 **wsadmin** コマンドは、次のディレクトリーのいずれかにあります。

```
install_root/profiles/dmgr profile/bin
install_root/bin
```

2. コマンド・プロンプトから **wsadmin** コマンドを入力して **wsadmin** 環境に入ります。
3. **addNodeToDeploymentEnvDef** コマンドを入力して、デプロイメント環境定義にノードを追加します。

**注:** 管理セキュリティーが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

この例では、管理セキュリティーが有効な状態で、ノード (**MyNode**) をデプロイメント環境定義 (**myDepEnv**) に追加します。

**重要:** 単一クラスターのトポロジー・パターンにノードを追加する場合は、**-toplogyRole** の値を **ADT** に設定する必要があります。デプロイメント環境のトポロジー・パターンは、**createDeploymentEnvDef** コマンドまたは「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する場合に指定されます。

**注:** 管理セキュリティーが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

## コマンド行を使用したデプロイメント環境の生成:

**wsadmin** インターフェースを使用してデプロイメント環境を生成することができます。この機能により、スクリプトを使用して、デプロイメント・マネージャー上の複数のデプロイメント環境を無人で構成できます。

デプロイメント環境を構成するデプロイメント・マネージャーでコマンドを入力する必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティ・ロール:** セキュリティーおよびロール・ベースの許可が使用可能になっている場合、このタスクを実行するには、管理者またはコンフィギュレーターとして管理コンソールにログインする必要があります。

デプロイメント・マネージャー上にデプロイメント環境をインポートまたは作成したあと、**generateDeploymentEnv** コマンドを使用してデプロイメント環境を構成できます。

1. **wsadmin** 環境に入ります。
2. 構成するトポロジーごとに **generateDeploymentEnv** コマンドを入力します。

以下のコマンドは、ホスト **myDmgr** 上で **eastEnvironment** トポロジーを構成します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879
> $AdminTask generateDeploymentEnv {-topologyName eastTopology}
> $AdminConfig save
```

**注:** 管理セキュリティを有効にしている場合、**wsadmin** コマンドの処理後にユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

構成されたデプロイメント環境を保存します。コマンド行から、**\$AdminConfig save** と入力します。

#### コマンド行からのデプロイメント環境定義の検証:

**wsadmin** コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を検証することができます。

このタスクでは、ノードがデプロイメント・マネージャーに統合されていることを前提としています。

デプロイメント環境定義を生成したデプロイメント・マネージャーを起動しておく必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティ・ロール:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用する必要があります。

このタスクは、**wsadmin** コマンドを使用して、デプロイメント環境定義を検証します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。 **wsadmin** コマンドは、次のディレクトリーのいずれかにあります。

```
install_root/profiles/dmgr profile/bin
install_root/bin
```

2. コマンド・プロンプトから **wsadmin** コマンドを入力して **wsadmin** 環境に入ります。
3. **validateDeploymentEnvDef** コマンドを入力して、デプロイメント環境定義を検証します。

**注:** 管理セキュリティが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

この例では、管理セキュリティが有効な状態で、デプロイメント環境定義 (**myDepEnv**) を検証します。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgrAdmin -password -dmgrPass
> $AdminTask validateDeploymentEnvDef { -topologyName topOne}
```

**注:** 管理セキュリティが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

#### コマンド行を使用したデプロイメント環境の状況表示:

**wsadmin** コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示できます。

状況を表示する場合、状況表示の対象となるデプロイメント・マネージャーに管理クライアントを接続する必要があります。

**このタスクに必要なセキュリティー・ロール:** セキュリティーとロール・ベースの許可が有効になっている場合、このタスクを実行するには、管理者権限またはオペレーター権限を持つユーザー ID とパスワードを使用する必要があります。

このタスクは、**wsadmin** コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。 **wsadmin** コマンドは、次のディレクトリーのいずれかにあります。

```
install_root/profiles/dmgr profile/bin
install_root/bin
```

2. コマンド・プロンプトで **wsadmin** コマンドを入力して、コマンド環境に入ります。

**注:** 接続モードで実行する場合は、**wsadmin** を適切なデプロイメント・マネージャーに接続してください。

3. **showDeploymentEnvStatus** コマンドを使用して、デプロイメント環境の現在の状況を表示します。

**注:** 管理セキュリティーが有効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます (コマンド内で指定していない場合)。

次の表は、結果として返される状態をまとめたものです。

**注:** 表にリストされた状態には、構成済みのトポロジに対してのみ有効な状態も含まれています。その場合、構成済みのトポロジに対してのみ適用されるということが説明欄に記載されています。

表 104. トポロジ・インスタンスの使用可能状況 (使用可能性が低い順から高い順)

状態	説明
不完全	デプロイメント環境で欠落している要素はありませんが、不完全な部分があります。  この状態は、デプロイメント環境に必須のロール、ノード、コンポーネント、または依存関係が欠落している可能性がある状態です。  追加の詳細情報は、警告メッセージに含まれています。
完了	この状態は、未構成 とも呼ばれます。これは、既知の構成が完了しているが、まだ生成されていない状態です。
構成済み	これは、構成の同期がとれている状態です。
一部が構成済み	デプロイメント環境は生成していますが、据え置かれた構成が完了していません。
不明	これは、デプロイメント環境の現在の状態をシステムが判別できない状態です。再同期操作は、この状態で実行することができます。
停止	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。トポロジ内のすべてのデプロイメント・ターゲットが停止している状態です。
実行中	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能であり、すべての機能が実行中の状態です。
一部が開始済み	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能になっているが、部分的に実行中の機能が 1 つ以上ある状態です。
開始中	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が始動中の状態です。
一部が停止済み	この状態は、構成済みのトポロジに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が使用可能になっているが、停止した機能または部分的に停止した機能が 1 つ以上ある状態です。

表 104. トポロジー・インスタンスの使用可能状況 (使用可能性が低い順から高い順) (続き)

状態	説明
停止中	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境が停止中の状態です。
使用不可	この状態は、構成済みのトポロジーに対してのみ適用されます。デプロイメント環境の状態は使用できません。

この例では、管理セキュリティーが有効な状態で、ホスト (**myDmgr**) 上のデプロイメント環境 (**MyDepEnv**) の状況を表示します。

注: デプロイメント・マネージャーの **bin** フォルダーから管理クライアントを実行する場合は、コマンドに **-host** パラメーターと **-port** パラメーターを指定する必要はありません。

```
wsadmin -connType SOAP -host myDmgr -port 8879 -user dmgradadmin -password dmgrpass
> $AdminTask showDeploymentEnvStatus {-topologyName myDepEnv}
```

**-connType** パラメーターでは、使用する接続のタイプを指定します。デフォルトの引数は **SOAP** です。**SOAP** はデフォルトであるため、この値を明示的に指定する必要はありません。

**-host** パラメーターでは、**SOAP** または **RMI** の接続で使用するホストを指定します。**-host** のデフォルト値はローカル・ホストです。ノードがローカル・ホストで稼働している場合は、**-host** を指定する必要はありません。

注: 管理セキュリティーが無効になっている場合は、ユーザー ID とパスワードを指定する必要はありません。

## データベース構成の完了

Network Deployment 環境内のクラスターを開始する前に、データベース表を作成してデータベース構成を完了する必要があります。

### Process Center または Process Server のデータベース表の作成:

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Process Center または Process Server のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Process Center または Process Server の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

注: Process Server はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/ProcessServer/DB\_product* に出力されます。以下に例を示します。

```
profile_root/dbscripts/ProcessServer/DB2
```

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux** **UNIX** `configProcessServerDB.sh createDB`
- **Windows** `configProcessServerDB.bat createDB`

**注:** `createDB` パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。`createDB` パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して `createTable_ProcessServer.sql` を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

4. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブル・プロシージャーを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して `createProcedure_ProcessServer.sql` を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

5. 接続をリセットします。

Process Center 構成または Process Server 構成用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Process Center 構成または Process Server 構成上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

#### 関連タスク:

604 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

605 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Standard は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### Performance Data Warehouse データベース表の作成:

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Performance Data Warehouse のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Performance Data Warehouse の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

**注:** Performance Data Warehouse はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、`profile_root/dbscripts/PerformanceDW/DB_product` に出力されます。以下に例を示します。

`profile_root/dbscripts/PerformanceDW/DB2`

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux** **UNIX** `configPerformanceDWDB.sh createDB`

- **Windows** `configPerformanceDWDB.bat createDB`

**注:** `createDB` パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。`createDB` パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Performance Data Warehouse 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Performance Data Warehouse 用に構成したデータベース (PDWDB) に対して `createTable_PerformanceDW.sql` を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Performance Data Warehouse 上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

#### 関連タスク:

604 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

605 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Standard は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

## データベースへのシステム情報のロード

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データがデータベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイル作成中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

- スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、`bootstrap` コマンドを実行する必要があります。
- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターでは、単一のクラスター・メンバーを指定して、このコマンドを 1 回だけ実行してください。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよび

デプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。

コマンド行から `bootstrap` ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
<install_root>/profiles/Dmgr01/bin  
C:¥<install_root>¥profiles¥ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **Linux** **UNIX** `bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath classpath] -clusterName cluster_name`
- **Linux** **UNIX** `bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath classpath] -nodeName node_name -serverName server_name`
- **Windows** `bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath classpath] -clusterName cluster_name`
- **Windows** `bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath classpath] -nodeName node_name -serverName server_name`

ここで、

- **-dbJDBCClasspath** は、データベース JDBC ドライバーのロケーションです。**dbJDBCClasspath** で指定するパスにスペースが含まれている場合は、その値を引用符で囲む必要があります。デフォルト・ロケーションは `WAS_INSTALL_ROOT/jdbcdrivers` です。
- **-clusterName** はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターまたは **-nodeName** および **-serverName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- **-nodeName** はノードの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび **-serverName** パラメーター、または **-clusterName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- **-serverName** はサーバーの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび **-nodeName** パラメーター、または **-clusterName** パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。

**重要: For SQL Server**、ブートストラップ・ユーティリティが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、**COLLATE** 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、`create` コマンドが以下のようにになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name  
'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean  
failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not  
instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]:
```

```
Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException:
PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?];
nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name
'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError
(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand
(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -nodeName node01 -serverName server1
```

Process Center または Process Server をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

カスタム JDBC ドライバーのロケーションを指定して、デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -dbJDBCClasspath c:/DB2/java
```

スタンドアロン・サーバーまたは最初のクラスター・メンバーを始動できます。

## コンポーネントの構成

IBM Business Process Manager のコンポーネントを個別に構成することが可能です。

コンポーネントは、次の 3 つの方法のいずれかで構成できます。

1. 一部の IBM Business Process Manager コンポーネントは、プロファイルの作成時に構成される場合があります。これは、特にスタンドアロン・サーバーの場合に当てはまります。スタンドアロン・サーバーでは、大半のコンポーネントがプロファイルの作成時に構成される場合があります。
2. Network Deployment セルでは、デプロイメント環境のビルドおよび生成によって、コンポーネントが構成される場合があります。デプロイメント環境をセットアップすると、サーバー・クラスターがビルドされ、それらのサーバー・クラスター上に IBM Business Process Manager コンポーネントが構成されます。

注: スタンドアロン・サーバーではデプロイメント環境は使用できません。

3. 管理コンソールまたは管理スクリプトのいずれかを使用して、IBM Business Process Manager サーバーおよびクラスター (およびこれらのサーバー/クラスター上で実行されるコンポーネント) を個別に構成できます。

このセクションでは、IBM Business Process Manager の個々のコンポーネントを構成する方法について説明します。

## Process Center の構成

管理コンソールを使用してアプリケーション・サーバーまたはクラスターを Process Center として構成できます。サーバーまたはクラスターを Process Center として構成すると、そのサーバーまたはクラスターは共用開発環境をサポートできるようになり、その環境で Process Designer および Integration Designer は Process App や関連サービスなどの資産を共用できます。

このタスクでは、管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスターを Process Center として構成する方法について説明します。

サーバーまたはクラスターを Process Center として (wsadmin スクリプトの使用により) 構成する方法 (パラメーター定義および例を含む) については、リファレンス資料で `configureProcessCenter` コマンドを参照してください。

注:

スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用する場合、または以前にサーバーまたはクラスター用の Process Center サポートを構成した場合は、管理コンソールで現行構成を検討することはできますが、構成を変更することはできません。

1. 管理コンソールを起動します。
2. 管理コンソールで、サーバーまたはクラスターを構成するためのパスを選択します。

サーバーを構成するには、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ (Server Types)」 > 「WebSphere Application Server」 > 「`server_name`」 > 「Process Center」をクリックします。

クラスターを構成するには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > 「`cluster_name`」 > 「Process Center」をクリックします。

3. パラメーターを設定してサーバーまたはクラスターを Process Center として構成します。

すべてのパラメーターの説明については、パネルにアクセスして「ページのヘルプ」を選択するか、リファレンス資料の『管理コンソールのヘルプ (Administrative console help)』セクションで『Process Center』を参照してください。

4. 構成を保管します。

サーバーまたはクラスターを Process Center として構成しました。

インストールに含まれるその他の Business Process Manager コンポーネントおよび製品を構成します。

管理コンソールを使用して Business Process Manager コンポーネントを構成する場合、Process Center の構成後に Performance Data Warehouse を構成する必要があります。

TeamWorksConfiguration.running.xml ファイルは、各サーバーが始動したときに、複数のローカル構成 XML ファイルから生成されます。このファイルは、

BPM\_ROOT¥profiles¥profile\_name¥config¥cells¥cellName¥nodes¥nodeName¥servers¥serverName¥process-center¥TeamWorksConfiguration.running.xmlにあります。

TeamWorksConfiguration.running.xml の内容を確認します。TeamWorksConfiguration.running.xml ファイルを生成するのに使用する構成ファイルを編集する必要がある場合があります。

URL、IP アドレス、およびポートを変更する必要がある場合は、99Local.xml および 100Custom.xml 構成ファイルを更新してから、サーバーを再始動します。クラスターに Web サーバーを追加する場合は、これらのファイルを更新する必要があります。これは、アプリケーションの URL を生成する際に、これらのファイルの情報が使用されるためです。影響を受けるすべてのノードでファイルの変更内容が同じであり、99Local.xml および 100Custom.xml ファイルが、これらのファイルが置かれているシステムに対してローカルであることを確認します。これらのファイルは、ノード間で自動的に複製されません。xml ファイルの更新について詳しくは、トピック『構成設定の管理』および『Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ』を参照してください。

## Process Server の構成

管理コンソールを使用してアプリケーション・サーバーまたはクラスターを Process Server として構成できます。サーバーまたはクラスターを Process Server として構成することにより、そのサーバーまたはクラスターが Process App および関連サービスをサポートできるようになります。

このタスクでは、管理コンソールを使用してサーバーまたはクラスターを Process Server として構成する方法について説明します。

サーバーまたはクラスターを Process Server として (wsadmin スクリプトの使用により) 構成する方法 (パラメーター定義および例を含む) については、リファレンス資料で configureProcessServer コマンドを参照してください。

### 注:

スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用する場合、または以前にサーバーまたはクラスター用の Process Server サポートを構成した場合は、管理コンソールで現行構成を検査することはできますが、構成を変更することはできません。

1. 管理コンソールを起動します。
2. 管理コンソールで、サーバーまたはクラスターを構成するためのパスを選択します。

サーバーを構成するには、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」 > 「server\_name」 > 「Process Server」をクリックします。

クラスターを構成するには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > 「cluster\_name」 > 「Process Server」をクリックします。

3. パラメーターを設定してサーバーまたはクラスターを Process Server として構成します。

すべてのパラメーターの説明については、パネルにアクセスして「ページのヘルプ」を選択するか、リファレンス資料の『管理コンソール・ヘルプ』セクションで『Process Server』を参照してください。

4. 構成を保管します。

サーバーまたはクラスターを Process Server として構成しました。

インストールに含まれるその他の Business Process Manager コンポーネントおよび製品を構成します。

管理コンソールを使用して Business Process Manager コンポーネントを構成する場合、Process Server の構成後に Performance Data Warehouse を構成する必要があります。

TeamWorksConfiguration.running.xml ファイルは、各サーバーが始動したときに、複数のローカル構成 XML ファイルから生成されます。このファイルは、`BPM_ROOT¥profiles¥profile_name¥config¥cells¥cellName¥nodes¥nodeName¥servers¥serverName¥process-center¥TeamWorksConfiguration.running.xml`にあります。

TeamWorksConfiguration.running.xml の内容を確認します。TeamWorksConfiguration.running.xml ファイルを生成するのに使用する構成ファイルを編集する必要がある場合があります。

URL、IP アドレス、およびポートを変更する必要がある場合は、99Local.xml および 100Custom.xml 構成ファイルを更新してから、サーバーを再始動します。クラスターに Web サーバーを追加する場合は、これらのファイルを更新する必要があります。これは、アプリケーションの URL を生成する際に、これらのファイルの情報が使用されるためです。影響を受けるすべてのノードでファイルの変更内容が同じであり、99Local.xml および 100Custom.xml ファイルが、これらのファイルが置かれているシステムに対してローカルであることを確認します。これらのファイルは、ノード間で自動的に複製されません。xml ファイルの更新について詳しくは、トピック『構成設定の管理』および『Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ』を参照してください。

## サーバー上またはクラスター上の Business Performance Data Warehouse コンポーネントの構成

管理コンソールを使用して、サーバーまたはクラスター上で Business Performance Data Warehouse コンポーネントを構成することができます。

サーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントを構成する前に、対応する Process Server または Process Center をまず構成する必要があります。Network Deployment 環境では、この 2 つのコンポーネントは同じサーバー上またはクラスター上に存在する場合があります、複数のサーバーまたはクラスターに分割されている場合もあります。

このタスクでは、管理コンソールを使用して、サーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントを構成する方法について説明します。

wsadmin スクリプトを使用してサーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントを構成する方法 (パラメーター定義および例を含む) については、リファレンス資料で『configurePerfDW コマンド』を参照してください。

### 注:

スタンドアロン・サーバー・プロファイルを使用する場合、または以前にサーバーまたはクラスター用の Performance Data Warehouse サポートを構成した場合は、管理コンソールで現行構成を検討することはできませんが、構成を変更することはできません。

1. 管理コンソールを起動します。
2. 管理コンソールで、サーバーまたはクラスターを構成するためのパスを選択します。

サーバーを構成するには、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ (Server Types)」 > 「WebSphere Application Server」 > 「server\_name」 > 「Performance Data Warehouse サーバー (Performance Data Warehouse Server)」をクリックします。

クラスターを構成するには、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > 「*cluster\_name*」 > 「Performance Data Warehouse サーバー (Performance Data Warehouse Server)」をクリックします。

3. サーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントを構成するためのパラメーターを設定します。

すべてのパラメーターの説明については、パネルにアクセスして「ページのヘルプ」を選択するか、リファレンス資料の『管理コンソールのヘルプ (*Administrative console help*)』セクションで『Performance Data Warehouse』を参照してください。

4. 構成を保管します。

サーバーまたはクラスター上で Performance Data Warehouse コンポーネントが構成されました。

インストールに含まれるその他の Business Process Manager コンポーネントおよび製品を構成します。

## Common Event Infrastructure の構成

サーバー AdminTask オブジェクトを使用して、Common Event Infrastructure リソースを構成できるほか、既存のリソースを変更することもできます。

Network Deployment 環境、クラスター構成、またはスタンドアロン・サーバー構成に CEI をインストールする場合は、管理コンソールを使用して CEI を構成します。

また、wsadmin コマンドを使用して CEI を構成するか、既存の CEI 構成を変更するコマンドを使用することもできます。いずれの場合も、サーバー AdminTask オブジェクトを使用して管理コマンドを実行することにより、CEI の構成を変更します。

CEI 構成を変更した後、サーバーまたはクラスターを再始動する必要があります。

### Common Event Infrastructure コンポーネント:

Common Event Infrastructure コンポーネントは、一連のアプリケーション、サービス、およびリソースとしてサーバー上にインストールされます。

Common Event Infrastructure を構成すると、いくつかのコンポーネントが作成され、サーバー上にデプロイされます。

### Common Event Infrastructure サービス

サーバーにインストールされるサービスで、アプリケーションおよびクライアントが Common Event Infrastructure を使用できるようにします。Common Event Infrastructure サービスの構成は、次のようにして管理コンソールに表示できます。

- サーバーの場合は、「サーバー」 > 「アプリケーション・サーバー」 > *server\_name* > 「ビジネス・インテグレーション」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「Common Event Infrastructure サービス」をクリックします。
- クラスターの場合は、「サーバー」 > 「クラスター」 > *cluster\_name* > 「ビジネス・インテグレーション」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「Common Event Infrastructure サービス」をクリックします。

「イベント・インフラストラクチャー・サーバーを使用可能に設定」というチェック・ボックスが選択されている場合、サービスはインストール済みで稼働しているか、サーバーまたはクラスターを再始動すると始動します。このチェック・ボックスがクリアされている場合、サービスはインストールされていないか、サーバーまたはクラスターを再始動するとアンインストールされます。

## イベント・サービス設定

イベント・サービスが使用する一連のプロパティ。これらのプロパティにより、データ・ストアを使用して、イベントの配布および永続化が可能になります。通常、このリソースに構成は必要ありませんが、同じセルに複数のイベント・サービスをセットアップする場合は、追加のイベント・サービス設定を作成することが必要な場合があります。イベント・サービス設定を表示するには、「サービス統合」 > 「イベント・サービス」 > 「イベント・サービス設定」をクリックします。

## イベント・メッセージング構成

Java Messaging Service (JMS) を使用して、イベントをイベント・サービスに非同期的に転送することが可能なりソース。デフォルトのメッセージング構成では、サーバー組み込みメッセージが使用されます。必要な場合は、イベント・メッセージング用に外部の JMS プロバイダーを構成することもできます。

## イベント・データベース

イベント・データベースは、イベント・サービスが受け取ったイベントを永続的に保管するために使用されます。DB2、Oracle、および SQLServer の各製品上で、外部イベント・データベースを構成することができます。

## イベント・フィルター・プラグイン

フィルター・プラグインは、XPath イベント・セレクターを使用して、ソースのイベントをフィルターに掛けるために使用されます。フィルター・プロパティを構成するには、「サービス統合」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「イベント・エミッター・ファクトリー」 > 「イベント・フィルター設定」をクリックします。

## エミッター・ファクトリー

エミッター・ファクトリーは、エミッターを作成するためにイベント・ソースで使用されるオブジェクトです。エミッターは、イベントをイベント・サービスに送信するために使用されます。エミッター・ファクトリーのプロパティは、そのエミッター・ファクトリーを使用して作成したすべてのエミッターの動作に影響を与えます。使用可能なエミッター・ファクトリーを表示するには、「サービス統合」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「イベント・エミッター・ファクトリー」をクリックします。

## イベント・サービス伝送

イベント・サービス伝送は、エミッターが EJB 呼び出しを使用してイベント・サービスに同期的にアクセスする方法を決定するプロパティを定義するオブジェクトです。これらのプロパティは、エミッターを新規作成するときにエミッター・ファクトリーで使用されます。使用可能なイベント・サービス伝送は、エミッター・ファクトリー設定から表示または変更できます。

## JMS 伝送

JMS 伝送は、エミッターが JMS キューを使用してイベント・サービスに非同期的にアクセスする方法を決定するプロパティを定義するオブジェクトです。これらのプロパティは、エミッターを新規作成するときにエミッター・ファクトリーで使用されます。使用可能な JMS 伝送は、エミッター・ファクトリー設定から表示または変更できます。

## イベント・グループ

イベント・グループは、イベントの論理的な集合であり、イベントをその内容に応じて分類するために使用されます。イベント・サービスからイベントを照会する場合、またはイベント配布をサブスクライブする場合、イベント・コンシューマーは、イベント・グループを指定することにより、そのグループのイベントのみを取得できます。イベント・グループは、永続データ・ストアに保管するイベントを指定するために使用することもできます。使用可能なイベント・グループを管理コ

ンソールで表示するには「サービス統合」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「イベント・サービス (Event service)」 > 「イベント・サービス (Event services)」 > *event\_service* > 「イベント・グループ」をクリックします。

### Common Event Infrastructure サーバーの構成:

サーバー管理コンソールを使用して Common Event Infrastructure を構成します。

以下のようにして、管理コンソールの「Common Event Infrastructure サーバー」パネルを開きます。

サーバーを構成する場合は、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」 > *server\_name* > 「ビジネス・インテグレーション」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「Common Event Infrastructure サーバー」を選択します。

クラスターを構成する場合は、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」 > *cluster\_name* > 「ビジネス・インテグレーション」 > 「Common Event Infrastructure」 > 「Common Event Infrastructure サーバー」をクリックします。

1. Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションのデプロイメントを可能にするために、「イベント・インフラストラクチャー・サーバーを使用可能に設定」というチェック・ボックスを選択します。「使用可能に設定」チェック・ボックスがクリアされている場合、Common Event Infrastructure はまだ構成されていないか、以前の構成が無効にされており、サーバーが再始動されていません。情報メッセージにより、このデプロイメント・ターゲットに Common Event Infrastructure が構成済みであるかどうかを示されます。

#### 注:

- サーバーがまだ構成されていない場合に、チェック・ボックスを選択して Common Event Infrastructure サーバーを使用可能にすると、表示されたパラメーターを変更しない限り、それらのパラメーターを使用してサーバーが構成されます。
  - 共通データベースの下で、固有のスキーマの下にメッセージング・サービスが作成されます。
  - Common Event Infrastructure が構成されたサーバーまたはクラスターが再始動されると、変更が有効になります。
2. オプション: イベント・データベースを構成するために使用できる手段は、スクリプティングのみです。ただし、イベント・データベースはパフォーマンスに悪影響を及ぼすので、イベント・データベースを使用することはお勧めしません。イベント・データベースは、イベントを表示するために Common Base Event ブラウザーのみが使用します。『イベント・データベースの構成』を参照してください。
  3. Common Event Infrastructure バスがサーバー上で「ローカル」として存在するか、あるいは「リモート」として他のサーバー上に存在するかを選択します。「リモート」を選択した場合は、メニューからリモート・ロケーションを選択するか、「新規」をクリックして新規リモート・バスを作成します。
  4. メッセージング用の Common Event Infrastructure サポートを構成します。
    - 「編集」をクリックして、このパネルよりも詳細なオプション・リストを持つデータベース構成パネルを表示します。
    - パネルの各フィールドを使用して、情報を入力します。
      - a. 「データベース名」 - メッセージの保管に使用するデータベースの名前を入力します。
      - b. 「スキーマ」 - スキーマの名前を入力するか、デフォルト名を受け入れます。
      - c. 「ユーザー名」および「パスワード」 - メッセージング・データベースの認証用。
      - d. 「サーバー」 - メッセージング・データベースが存在するサーバーの名前。
      - e. 「プロバイダー」 - データベースのプロバイダーをメニューから選択します。
  5. Common Event Infrastructure バスのメッセージング認証別名を作成します。

- a. 「追加プロパティ」 > 「JMS 認証別名」を選択します。
  - b. システム統合バスでのセキュア通信に使用するユーザー ID およびパスワードを入力します。セキュリティが使用不可となっている場合、ユーザー ID およびパスワードの両方に対する CEI のデフォルト構成値を受け入れることができます。セキュリティが使用可能となった場合は、バス認証のために使用しているユーザー ID およびパスワードを入力します。実稼働環境においては、システム保護のため、所有するユーザー ID およびパスワードを選択してください。
  - c. 「OK」をクリックします。
6. 「OK」または「適用」をクリックします。
  7. サーバーまたはクラスターを再始動します。

これで、Common Event Infrastructure の主要な部分がすべて構成されて、サーバーまたはクラスターで稼働するようになります。この構成にはイベント・データ・ストア、メッセージング・エンジン、およびイベント・アプリケーションが含まれます。この単一のパネルを、本来なら Common Event Infrastructure の構成に使用する多数のコマンドやステップの代わりに使用できます。

サーバーまたはクラスターを再始動した後、アプリケーションから出力されるサービス・コンポーネント・イベントを保管できるようになります。この時点で、「**Common Event Infrastructure の宛先**」パネルを選択することにより、Common Event Infrastructure サーバーのランタイム・プロパティを変更できます。また、始動時に Common Event Infrastructure サーバーを始動するかどうかを選択したり、イベントが送信されるエミッター・ファクトリー JNDI 名を指定することができます。

#### イベント・メッセージングの構成:

JMS でイベントをイベント・サービスに転送する場合に使用するメッセージングの構成を変更できます。

管理コンソール・パネルを使用して、サーバー上に Common Event Infrastructure を構成するときは、Common Event Infrastructure のメッセージング・インフラストラクチャーを作成します。一般に、メッセージング構成は、イベント・サービスへのイベントの非同期伝送にデフォルトのメッセージング・プロバイダーを使用し、単一の JMS キューを作成します。必要であれば、このメッセージング構成を変更できます。

#### 追加の JMS キューの構成:

デフォルトのイベント・メッセージング構成を使用している場合は、イベントをイベント・サービスに転送するために JMS キューを追加できます。

デフォルトのメッセージング構成を使用して追加の JMS キューを構成するには、サービス統合バスのキュー宛先に転送される複数の JMS キューをセットアップします。Common Event Infrastructure サービス統合バスのキュー宛先は、イベント・サービスがデプロイされる有効範囲によって決まります。

Scope	サービス統合バスのキュー宛先
サーバー	<code>node.server.CommonEventInfrastructureQueueDestination</code>
クラスター	<code>cluster.CommonEventInfrastructureQueueDestination</code>

#### 外部 JMS プロバイダーを使用したイベント・メッセージングの構成:

デフォルトの組み込みメッセージング構成をイベント伝送で使わない場合は、非同期メッセージ・トランスポートを構成することにより、外部の Java Messaging Service (JMS) プロバイダーを使用できます。

外部 JMS プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成する前に、まず使用している JMS プロバイダーに適したインターフェースを使用して JMS キューおよび接続ファクトリーを作成する必要があります。リスナー・ポートまたはアクティベーション・スペックを作成する必要もあります。

外部 JMS プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成するには、以下の手順を実行します。

wsadmin ツールから **deployEventServiceMdb** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **deployEventServiceMdb** コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

#### **applicationName**

デプロイするイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean のアプリケーション名。このパラメーターは必須です。

#### **nodeName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするノードの名前を指定します。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。ノード名はオプション・パラメーターで、デフォルト値は現在のノードです。クラスターにアプリケーションをデプロイする場合は、このパラメーターを指定しないでください。

#### **serverName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするサーバーの名前を指定します。このパラメーターは、サーバーの有効範囲にアプリケーションをデプロイする場合、必須です。それ以外の場合は、任意指定です。クラスターにアプリケーションをデプロイする場合は、サーバー名を指定しないでください。

#### **clusterName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイするクラスターの名前を指定します。このパラメーターは、アプリケーションをクラスターにデプロイする場合にのみ指定します。

#### **listenerPort**

イベントの公開時にイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用するリスナー・ポートの名前を指定します。指定するリスナー・ポートは存在する必要があります。リスナー・ポートとアクティベーション・スペックのいずれかを指定する必要がありますが、両方を指定しないでください。

#### **activationSpec**

イベントの公開時にイベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用するアクティベーション・スペックの JNDI 名を指定します。指定するアクティベーション・スペックは存在する必要があります。リスナー・ポートとアクティベーション・スペックのいずれかを指定する必要がありますが、両方を指定しないでください。

#### **qcfJndiName**

イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean が使用する JMS キュー接続ファクトリーの JNDI 名。このパラメーターは、アクティベーション・スペックを指定する場合、必須です。それ以外の場合は、任意指定です。キュー接続ファクトリーとリスナー・ポートを指定する場合、キュー接続ファクトリーは、そのリスナー・ポート用に構成されたものと一致する必要があります。

**deployEventServiceMdb** 管理コマンドは、指定したリスナー・ポートまたはアクティベーション・スペック用に構成された、イベント・サービスのメッセージ駆動型 Bean をデプロイします。外部の JMS 構成を使用して、エミッター・ファクトリーと JMS 伝送の作成も行います。アプリケーションは、(デフォルトのメッセージング構成を使用するように構成された) デフォルトのエミッター・ファクトリー、または (外部の JMS プロバイダーを使用する) 新しいエミッター・ファクトリーを使用できます。

イベント・サービスに対して複数の JMS キューをセットアップする場合は、異なるエンタープライズ・アプリケーション名と JMS キューを指定して、このコマンドを複数回実行します。スクリプトを実行するたびに、追加のメッセージ駆動型 Bean がデプロイされ、新規リソースで指定された JMS キューを使用するように構成されます。

### **JMS 認証別名の構成:**

WebSphere セキュリティーが使用可能で、非同期 JMS メッセージングを使用してイベントをイベント・サービスに送信する場合は、JMS 認証別名を構成する必要があります。

JMS 認証別名を構成するには、以下の手順を実行します。

wsadmin ツールから **setEventServiceJmsAuthAlias** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **setEventServiceJmsAuthAlias** コマンドのパラメーターは、以下のとおりです。

#### **userName**

JMS 認証別名で使用するユーザーの名前。このパラメーターは必須です。

#### **password**

JMS 認証別名で使用するユーザーのパスワード。このパラメーターは必須です。

#### **nodeName**

JMS 認証別名を更新または作成するノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。クラスターの認証別名を構成する場合は、ノード名を指定しないでください。

#### **serverName**

JMS 認証別名を更新または作成するサーバーの名前。このパラメーターは、ノードを指定する場合にのみ必要です。クラスターで認証別名を構成する場合は、このパラメーターは無効です。

#### **clusterName**

JMS 認証別名を更新または作成するクラスターの名前。このパラメーターは、クラスターで認証別名を構成する場合にのみ指定します。クラスター名を指定する場合は、ノード名またはサーバー名を指定しないでください。

イベント・サービス・オブジェクトが使用する JMS 認証別名は、指定された有効範囲で更新されます。認証別名が存在しない場合は、指定された値を使用して認証別名が作成されます。

### **イベント・データベースの構成:**

サポートされている各データベース製品に固有のコマンドを使用して、イベント・データ・ソースを構成できます。

イベント・データベースでは、イベントの永続性をサポートする必要があります。管理コンソールの Common Event Infrastructure 構成パネルを使用しなかった場合でも、ここで説明するコマンドを使用すればイベント・データベースを作成できます。

### **イベント・データベースの制限:**

特定のデータベース・ソフトウェアを使用してイベント・データベースを構成する場合は、いくつかの制限が適用されます。

ご使用の環境に適用される制限については、以下の表を参照してください。

表 105. イベント・データベースの制限

データベース・タイプ	制限
Oracle	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Oracle 11 JDBC Thin ドライバーでは、Unicode 文字セットを使用する場合にストリング値のサイズ制限があります。大きい値 (長メッセージ属性など) を含むイベントがイベント・データベースに保管されると、Oracle ORA-01461 エラーが発生する可能性があります。この制限についての詳細は、Oracle 11 の資料を参照してください。</li> </ul> <p style="margin-left: 2em;">この問題を避けるには、Oracle 11 OCI ドライバーまたは Oracle 11 Thin ドライバーを使用してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Oracle データベース・ソフトウェアは、ブランクのストリングを NULL 値として扱います。ブランクのストリングをイベント属性値として指定すると、そのストリングは、Oracle イベント・データベースに保管されるときに NULL に変換されます。</li> </ul>
SQL Server	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SQL サーバー・データベースは、混在認証モードを使用するように構成する必要があります。トラステッド接続はサポートされません。</li> <li>• XA ストアード・プロシージャをインストールする必要があります。このストアード・プロシージャは、Microsoft Corporation が提供する JDBC ドライバーに同梱されています。</li> <li>• PATH ステートメントで指定したディレクトリーに sqljdbc.dll ファイルが含まれ、使用できる必要があります。このファイルは、Microsoft Corporation が提供する JDBC ドライバーに同梱されています。</li> <li>• Distributed Transaction Coordinator (DTC) サービスを開始する必要があります。</li> </ul>

## DB2 イベント・データベースの構成 (Linux、UNIX、および Windows システム):

Linux、UNIX、または Windows システムで、DB2 Universal Database を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

Linux、UNIX、または Windows システムで DB2 イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2DB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。 **configEventServiceDB2DB** コマンドに最低限指定する必要のあるパラメーターを以下に示します。

### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行するかどうかを指定します。 **true** または **false** を指定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

**nodeName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

**serverName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーの名前。

**clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成するクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

**jdbcClassPath**

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

**dbHostName**

データベースがインストールされているサーバーのホスト名。

**dbUser**

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID。指定するユーザー ID には、データベースを作成および除去するための十分な特権が必要です。

**dbPassword**

使用する DB2 パスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceDB2DB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。 **createDB** パラメーターに **true** を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

**z/OS システムでの DB2 データベースの構成:**

DB2 データベース・ソフトウェアを使用して、z/OS システムでイベント・データベースを構成することができます。

リモート・クライアントから DB2 データベースを構成するには、最新のフィックスパックを含む DB2 Connect 製品がインストールされている必要があります。

イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. **Linux** **UNIX** **Windows** z/OS イベント・データベースを Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムから構成する場合は、以下のステップを実行して、データベースを作成およびカタログします。
  - a. z/OS システム上で、DB2 管理メニューを使用してサブシステムを作成します。

- b. オプション: イベント・データベースに使用するストレージ・グループを作成します。既存のストレージ・グループ (**sysdeflt** など) を使用することもできます。
- c. イベント・データベースで使用する 4 K、8 K、および 16 K のバッファ・プールを使用可能にします。
- d. データ・ソースが使用するユーザー ID に対して必要な権限を付与します。このユーザー ID には、作成したデータベースおよびストレージ・グループへのアクセス権限がなければなりません。また、データベース用新規テーブル、テーブル・スペース、および索引を作成する権限も必要です。
- e. リモート・データベースをカタログします。スクリプトまたは DB2 コマンド行ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
catalog tcpip node zosnode remote hostname server IP_port
      system db_subsystem
catalog database db_name as db_name at node zosnode authentication DCS
```

ノードとそのデータベースをカタログする方法については、DB2 Connect の資料を参照してください。

- f. リモート・サブシステムへの接続を確立できることを確認してください。この確認を行うには、以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to subsystem user userid using password
```

- g. ホスト・データベースにバインドします。以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to db_name user userid using password
db2 bind db2_root/bnd/@ddcsmvs.lst blocking all sqlerror continue message
      mvs.msg grant public
db2 connect reset
```

クライアントをホスト・データベースにバインドする方法について詳しくは、DB2 Connect の資料を参照してください。

2. WebSphere システムで、wsadmin ツールを開始します。
3. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceDB2ZOSDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**configEventServiceDB2ZOSDB** コマンドに最低限指定する必要があるパラメーターを以下に示します。

#### createDB

**Linux** **UNIX** **Windows** データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行するかどうかを示します。このパラメーターは、管理コマンドを **Linux**、**UNIX**、または **Windows** クライアント・システムから実行する場合にのみ適用されます。**true** または **false** を指定します。

このパラメーターを **false** に設定するか、z/OS システム上でコマンドを実行すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスタ名

#### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成するサーバーの名前。

**clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成するクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

**jdbcClassPath**

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

**dbHostName**

データベースがインストールされているサーバーのホスト名。

**dbUser**

イベント・データベースの作成時に使用する DB2 ユーザー ID。指定するユーザー ID には、データベースを作成および除去するための十分な特権が必要です。

**dbPassword**

使用する DB2 パスワード。

**dbPort**

DB2 インスタンス・ポート。

**dbSubSystemName**

データベース・サブシステムの名前。

**storageGroup**

イベント・データベースとイベント・カタログ・データベースのストレージ・グループ。

**eventDBName**

作成するイベント・データベース名。

**eventCatalogDBName**

作成するイベント・カタログ・データベース。

**bufferPool14K**

4K バッファ・プールの名前。

**bufferPool18K**

8K バッファ・プールの名前。

**bufferPool16K**

16K バッファ・プールの名前。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用方法については、**configEventServiceDB2ZOSDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。また、コマンドを Linux、UNIX、または Windows DB2 クライアント上で実行している場合、**createDB** パラメーターに **true** を指定すると、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。z/OS システムの場合は、SQL Processor Using File Input (SPUFI) 機能を使用して、生成された DDL ファイルを実行する必要があります。DDL ファイルは、*profile\_root/databases/event/node/server/db2zos/dd1* ディレクトリーに保管されます。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2zos* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

データベースの構成が終了した後、サーバー管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできません。このタスクを実行する場合、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートして「テスト接続」オプションを選択します。

### Oracle イベント・データベースの構成:

Linux、UNIX、または Windows システム上で、Oracle データベースを使用して、外部のイベント・データベースを構成できます。

Oracle イベント・データベースを構成する前に、まずデータベースを作成しておく必要があります。イベント・データベースの構成コマンドを実行する前に、Oracle SID が既に存在している必要があります。イベント・データベースのデフォルトの SID は、**event** です。

Oracle イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. wsadmin ツールを開始します。
2. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceOracleDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**configEventServiceOracleDB** コマンドに最低限指定する必要があるパラメーターを以下に示します。

#### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを示します。**true** または **false** を指定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

#### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスター名

#### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前。

#### clusterName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

#### jdbcClassPath

JDBC ドライバーへのパス。ドライバー・ファイルのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

#### oracleHome

ORACLE\_HOME ディレクトリー。このパラメーターは、createDB パラメーターに **true** を指定した場合にのみ必要です。

#### dbPassword

データベース構成時に作成されるスキーマ・ユーザー ID に対して使用するパスワード (デフォルトのユーザー ID は **ceiuser** です)。このパスワードは、Oracle データベース接続を認証するために使用されます。

#### sysUser

Oracle SYSUSER ユーザー ID。このユーザー ID には、SYSDBA 特権が必要です。

## sysPassword

指定した SYSUSER ユーザー ID のパスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその使用方法については、**configEventServiceOracleDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。createDB パラメーターに **true** を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/oracle* ディレクトリーに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリーの下に保管されます。) 任意指定の outputScriptDir パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

## SQL サーバー・イベント・データベースの構成:

Windows システムで、Microsoft SQL Server Enterprise を使用して、外部イベント・データベースを構成できます。

SQL サーバー・イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. SQL サーバー・データベース・サーバー・システムで、データベース・ファイルを格納するために使用するディレクトリーを作成します。デフォルトでは、ファイルは *c:\%program files%\ibm\event\%ceiinst1%\sqlserver\_data* ディレクトリーに書き込まれます。別の場所を指定する必要がある場合は、生成されたデータベース構成スクリプトを編集して **ceiInstancePrefix** パラメーターの値を変更し、次にスクリプトを手動で実行する必要があります。
2. サーバー・システムで、wsadmin ツールを開始します。
3. AdminTask オブジェクトを使用して、**configEventServiceSQLServerDB** 管理コマンドをバッチ・モードまたは対話モードで実行します。**configEventServiceSQLServerDB** コマンドに最低限指定する必要のあるパラメーターを以下に示します。

### createDB

データベース構成スクリプトを管理コマンドで作成して実行する必要があるかどうかを示します。**true** または **false** を指定します。このパラメーターを **false** に設定すると、スクリプトは作成されますが、実行されません。この場合、データベース構成を完了するにはデータベース構成スクリプトを実行する必要があります。

### nodeName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーを含むノードの名前。ノード名を指定する場合は、サーバー名も指定する必要があります。以下のいずれかを指定してください。

- ノード名およびサーバー名
- クラスタ名

### serverName

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるサーバーの名前。サーバー名を指定する場合は、ノード名も指定する必要があります。

**clusterName**

イベント・サービス・データ・ソースを作成する必要があるクラスターの名前。クラスター名を指定する場合は、ノード名とサーバー名を指定しないでください。

**dbServerName**

SQL サーバー・データベースのサーバー名。このパラメーターは、createDB パラメーターに **true** を指定した場合にのみ必要です。

**dbHostName**

SQL サーバー・データベースが稼働しているサーバーのホスト名。

**dbPassword**

イベント・データベース表を所有するために作成されたユーザー ID に対して使用するパスワード (デフォルトのユーザー ID は ceiuser です)。WebSphere データ・ソースは、このパスワードを使用して SQL サーバー・データベース接続を認証します。

**saUser**

データベースとユーザーを作成および除去する特権を持つユーザー ID。このパラメーターは、createDB パラメーターに **true** を指定した場合にのみ必要です。

**saPassword**

指定した SA ユーザーのパスワード。

環境によっては、その他のパラメーターが必要になる場合もあります。詳細なパラメーターのリストとその用法については、**configEventServiceSQLServerDB** 管理コマンドのヘルプを参照してください。

管理コマンドは、必要なデータ・ソースを指定された有効範囲に作成します。createDB パラメーターに **true** を指定した場合、コマンドは、生成されたデータベース構成スクリプトも実行し、データベースを作成します。

デフォルトでは、生成されたデータベース構成スクリプトは、*profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/dbscripts/sqlserver* ディレクトリに保管されます。(Network Deployment 環境では、これらのスクリプトは、デプロイメント・マネージャーのプロファイル・ディレクトリの下に保管されます。) 任意指定の *outputScriptDir* パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されます。これらのスクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

**データベース構成スクリプトの手動実行:**

データベース構成管理コマンドで生成されたスクリプトは、いつでも手動で実行できます。

データベース構成には 2 つのステップがあります。まず、データベース構成管理コマンドが、環境に対応したデータベース固有のスクリプトを生成します。次に、この生成されたスクリプトが、イベント・データベースとデータ・ソースを構成します。管理コマンドの実行時に createDB パラメーターに **true** を指定した場合は、両方のステップが自動的に実行されます。

ただし、createDB パラメーターに **false** を指定した場合は、生成されたスクリプトをターゲット・システム上で手動で実行して、データベース構成を完了する必要があります。以下の状況の場合は、スクリプトを手動で実行する必要がある可能性があります。

- 管理コマンドを実行したシステムとは異なるシステムでイベント・データベースを構成する必要がある。
- イベント・データベースを後で再作成する必要がある。
- 生成されたスクリプトを実行する前に、そのスクリプトが使用するデフォルト・オプションを変更する必要がある。

## Linux、UNIX、または Windows システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

**cr\_event\_db2** コマンドを使用して、Linux、UNIX、または Windows サーバー上の DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成します。

以下の手順を実行して、Linux、UNIX、または Windows システム上の DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行します。

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトのロケーションは `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** **cr\_event\_db2.bat**

- **Linux** **UNIX** **cr\_event\_db2.sh**

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_db2 [client|server] db_user [db_password]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

### **client|server**

データベースがクライアントとサーバーのいずれであるかを示します。 **client** または **server** を指定する必要があります。

### **db\_user**

データベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

### **db\_password**

データベース・ユーザーのパスワード。クライアント・データベースのパスワードを指定しない場合は、パスワードの入力プロンプトが表示されます。

例えば、以下のコマンドは、ユーザー ID **db2admin** とパスワード **mypassword** を使用して、クライアント・データベース用の DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2 client db2admin mypassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

## z/OS システム上での手動による DB2 イベント・データベースの作成:

Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムで **cr\_event\_db2zos** コマンドを使用して、z/OS システム上の DB2 イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成します。

以下の手順に従って、Linux、UNIX、または Windows クライアント・システムを使用して、z/OS システム上の DB2 イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行します。

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトのロケーションは `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** `cr_event_db2zos.bat`
- **Linux** **UNIX** `cr_event_db2zos.sh`

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します（該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください）。

```
cr_event_db2zos [dbName=db_name] db_user [db_password]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

**db\_name**

使用するデータベース名。このパラメーターは任意指定です。データベース名を指定しない場合は、名前が生成されます。

**db\_user**

使用するためのデータベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

**db\_password**

データベース・ユーザーのパスワード。パスワードを指定しない場合、DB2 データベースは、パスワードの入力プロンプトを表示します。

例えば、以下のコマンドは、ユーザー ID `db2admin` とパスワード `mypassword` を使用して、`event` という名前の DB2 イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_db2zos dbName=client db2admin mypassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、`stopNode` および `startNode` コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

### Oracle イベント・データベースの手動による作成:

`cr_event_oracle` コマンドを使用して、Oracle イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成します。

以下の手順を実行して、Oracle イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行します。

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトのロケーションは `profile_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2` ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの `outputScriptDir` パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して構成スクリプトを変更します。スクリプトの名前は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。

- **Windows** `cr_event_oracle.bat`

• **Linux** **UNIX** **cr\_event\_oracle.sh**

3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します (該当する場合は、ファイル拡張子を指定することを忘れないでください)。

```
cr_event_oracle password sys_user
  sys_password [sid=sid]
  [oracleHome=oracle_home]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

**password**

スキーマ・ユーザー ID のパスワード。このパラメーターは必須です。

**sys\_user**

Oracle データベースの SYSDBA 特権を持つユーザー ID (通常は、システム・ユーザー)。このパラメーターは必須です。

**sys\_password**

指定したシステム・ユーザー ID のパスワード。このユーザー ID でパスワードを使用しない場合は、**none** を入力します。

**sid=sid**

Oracle システム ID (SID)。このパラメーターはオプションです。

**oracleHome=oracle\_home**

Oracle ホーム・ディレクトリー。このパラメーターは任意指定です。値を指定しない場合は、生成されたパスが使用されます。

例えば、以下のコマンドは、スキーマ・ユーザー ID **auser** とシステム・ユーザー ID **sys** を使用して、Oracle イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_oracle auser sys syspassword sid=event oracleHome=c:\oracle
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要があります。

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

### SQL サーバー・イベント・データベースの手動による作成:

**cr\_event\_mssql** コマンドを使用して、SQL Server イベント・データベース用のデータベース構成スクリプトを手動で生成します。

以下の手順を実行して、SQL Server イベント・データベース用に生成されたデータベース構成スクリプトを手動で実行します。

1. サーバー・システムで、生成されたスクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトのロケーションは *profile\_root/databases/event/node/server/dbscripts/db2* ディレクトリーです。データベース構成管理コマンドの **outputScriptDir** パラメーターに値を指定した場合は、その場所にスクリプトが保管されています。
2. 必要に応じ、ASCII テキスト・エディターを使用して **cr\_event\_mssql.bat** スクリプトを変更します。
3. 以下の構文を使用して、データベース作成スクリプトを実行します。

```
cr_event_mssql user_id password [server=server] sauser=sa_user
  sapassword=sa_password
```

パラメーターは、以下のとおりです。

**user\_id**

作成されたテーブルを所有する SQL サーバー・ログイン・ユーザー ID。このユーザー ID は、データベースへの JDBC 接続ができるようにするために SQL サーバー内で作成する必要があります。(JDBC ドライバーは、トラステッド接続をサポートしません。)

**password**

作成する新しいログイン・ユーザー ID のパスワード。

**server=server**

SQL サーバー・データベースを含むサーバーの名前。このパラメーターは任意指定です。デフォルト値は、ローカル・ホストです。

**sauser=sa\_user**

sa ユーザー ID。このユーザー ID には、データベースおよびユーザー・ログインを作成するための十分な特権が必要です。

**sapassword=sa\_password**

sa パスワード (混在認証モードを使用する場合)。sa ユーザー ID にパスワードが設定されていない場合は、**sapassword=** に値を指定しないでください。トラステッド接続を使用する場合は、このパラメーターを省略します。

例えば、以下のコマンドは、ログイン・ユーザー ID **userid** を使用して、SQL サーバー・イベント・データベースを作成します。

```
cr_event_mssql userid apassword server=myserver sauser=sa sapassword=sapassword
```

4. サーバーを再始動します。統合ノードの場合は、**stopNode** および **startNode** コマンドを使用して、ノード・エージェントを停止してから再始動する必要もあります。

データベースの構成が完了したら、管理コンソールを使用してデータベース構成をテストできます。これを行うには、該当する JDBC データ・ソースにナビゲートし、「**テスト接続**」オプションを選択します。

### 以前のバージョンからのイベント・データベースのアップグレード:

以前のバージョンの Common Event Infrastructure からマイグレーションした場合、イベント永続性を使用するには、既存のイベント・データベースのアップグレードが必要になる場合があります。

イベント・データベースのアップグレードが必要になるのは、Common Event Infrastructure バージョン 5.1 以前からマイグレーションする場合です。

データベースのアップグレード・プロセスでは、現在のイベント・データを保持しながら、既存のイベント・データベースのスキーマとメタデータが現行バージョンにアップグレードされます。

データベースのアップグレード・スクリプトでは、既存のイベント・データベースのスキーマとメタデータが現行バージョンにアップグレードされます。

**サポートされないバージョン:** Common Event Infrastructure 6.0 でサポートされなくなったバージョンのデータベース・ソフトウェアをイベント・データベースが使用している場合は、まず、そのデータベース・ソフトウェア用の適切な手順を使用して、データベースをサポートされるバージョンへとマイグレーションする必要があります。次に、イベント・データベースのアップグレード・プロセスに従って、データベースをアップグレードします。

## 以前のバージョンからの DB2 イベント・データベースのアップグレード:

Linux、UNIX、または Windows システムに Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の DB2 イベント・データベースがある場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

Linux または UNIX システムで DB2 イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリーに移動します。
3. 次のように、ご使用のオペレーティング・システム用の DB2 アップグレード・スクリプトを実行します。

- **Windows** Windows システムの場合:

```
eventUpgradeDB2 runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[dbNode=node] [scriptDir=dir]
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeDB2.sh runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[dbNode=node] [scriptDir=dir]
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

### runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベース・アップグレードを後で、または別のシステム上で手動で実行する場合は、**false** を指定します。

### dbUser

使用する DB2 ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

### dbName

DB2 データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は **event** です。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

### dbPassword

指定した DB2 ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは任意指定です。パスワードを指定しない場合、DB2 は、パスワードの入力プロンプトを表示します。

### dbNode

データベース・ノード名を指定します。このパラメーターは、DB2 クライアント・システムからアップグレード・スクリプトを実行する場合、必須です。

### scriptDir

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`./eventDBUpgrade/db2` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeDB2** スクリプトを実行します。

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。 **runUpgrade=true** を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

Windows システムの既存の DB2 データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeDB2 runUpgrade=true dbUser=db2inst1 dbName=event
```

**runUpgrade=false** を指定した場合は、データベース・システム上で DDL スクリプトを手動で実行して、データベース・アップグレードを完了する必要があります。

### 以前のバージョンからの DB2 for z/OS イベント・データベースのアップグレード:

z/OS システムに Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の DB2 イベント・データベースがある場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

z/OS システムの DB2 イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリに移動します。
3. ご使用のクライアント・オペレーティング・システム用の DB2 for z/OS アップグレード・スクリプトを以下のように実行します。

- **Windows** Windows システムの場合:

```
eventUpgradeDB2ZOS runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[scriptDir=dir] storageGroup=group  
bufferPool4K=4kbufpool bufferPool8k=8kbufpool  
bufferPool16K=16kbufpool
```

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeDB2ZOS.sh runUpgrade=[true|false] dbUser=user  
[dbName=name] [dbPassword=pw]  
[scriptDir=dir] storageGroup=group  
bufferPool4K=4kbufpool bufferPool8k=8kbufpool  
bufferPool16K=16kbufpool
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

#### runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、**false** を指定します。

**z/OS システム:** このパラメーターは、ネイティブ z/OS システムでは無視されます。生成された DDL スクリプトの自動実行は、クライアント・システムでのみサポートされます。

#### dbUser

使用する DB2 ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

#### dbName

DB2 データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は **event** です。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

#### dbPassword

指定した DB2 ユーザー ID のパスワードを指定します。このパラメーターは任意指定です。パスワードを指定しない場合、DB2 は、パスワードの入力プロンプトを表示します。

**scriptDir**

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`./eventDBUpgrade/db2zos` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

**storageGroup**

ストレージ・グループの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool4K**

4K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool8K**

8K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

**bufferPool16K**

16K バッファ・プールの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeDB2ZOS** スクリプトを実行します。

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。クライアント・システムで **runUpgrade=true** を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

Windows クライアント・システムから DB2 for z/OS イベント・データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeDB2ZOS runUpgrade=true dbUser=db2inst1 dbName=event
storageGroup=sysdef1t bufferPool4K=BP9 bufferPool8K=BP8K9 bufferPool16K=BP16K9
```

**runUpgrade=false** を指定した場合、または z/OS システム上でアップグレード・スクリプトを実行した場合は、生成された DDL スクリプトを、SQL Processor Using File Input (SPUFI) 機能を使用して z/OS システムで手動で実行する必要があります。この手順によって、データベース・アップグレードが完了します。

**Oracle イベント・データベースのバージョン 5 からのアップグレード:**

Common Event Infrastructure バージョン 5.1 の既存の Oracle イベント・データベースを使用している場合は、それを現行バージョンにアップグレードする必要があります。

Oracle イベント・データベースをアップグレードするには、以下の手順を実行します。

1. 既存のイベント・データベースのバックアップ・コピーを作成します。
2. `profile_root/bin` ディレクトリーに移動します。
3. 次のように、ご使用のオペレーティング・システム用の Oracle アップグレード・スクリプトを実行します。

- Windows システムの場合:

```
eventUpgradeOracle runUpgrade=[true|false] schemaUser=schemauser
[oracleHome=dir] [dbName=name]
[dbUser=sysuser] [dbPassword=pw]
[scriptDir=dir]
```

- Linux および UNIX システムの場合:

```
eventUpgradeOracle.sh runUpgrade=[true|false] schemaUser=schemauser  
[oracleHome=dir] [dbName=name]  
[dbUser=sysuser] [dbPassword=pw]  
[scriptDir=dir]
```

通常、必要なパラメーターは以下のとおりです。

#### runUpgrade

生成された DDL スクリプトをアップグレード・スクリプトで自動的に実行してデータベース・アップグレードを完了するかどうかを指定します。このパラメーターは必須です。データベースを後で、または別のシステム上で手動でアップグレードする場合は、**false** を指定します。

#### schemaUser

データベース表を所有する Oracle ユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

#### oracleHome

Oracle ホーム・ディレクトリーを指定します。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

#### dbName

Oracle データベース名を指定します。デフォルトのイベント・データベース名は **event** です。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

#### dbUser

Oracle システム・ユーザー ID を指定します。このパラメーターは、**runUpgrade=true** を指定した場合、必須です。

#### dbPassword

システム・ユーザー ID のパスワードを指定します。システム・ユーザー ID にパスワードがない場合は、このパラメーターを指定しないでください。

#### scriptDir

生成された DDL スクリプトを含めるディレクトリーを指定します。このパラメーターは任意指定です。ディレクトリーを指定しない場合は、`¥eventDBUpgrade¥oracle` ディレクトリーにスクリプトが保管されます。

詳細なパラメーターのリストとその使用方法を確認するには、パラメーターを指定せずに **eventUpgradeOracle** スクリプトを実行します。

アップグレード・スクリプトは、イベント・データベースをアップグレードするために必要な DDL スクリプトを生成します。**runUpgrade=true** を指定した場合は、DDL スクリプトが自動的に実行され、アップグレードが完了します。

Windows システムの既存の Oracle データベースをアップグレードする例を以下に示します。

```
eventUpgradeOracle runUpgrade=true schemaUser=cei  
dbName=event dbUser=sys
```

**runUpgrade=false** を指定した場合は、データベース・システム上で DDL スクリプトを手動で実行して、データベース・アップグレードを完了する必要があります。

## SMTP サーバーの構成

Process Server ランタイム環境で E メール通知を送信するときに使用する Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) サーバーを定義します。新規インストールの後、SMTP サーバーを手動で構成して、メール通知を使用可能にする必要があります。

このトピックでは、正しい SMTP サーバーを指すように SMTP サーバーの設定を変更するために必要なステップについて説明します。デフォルトの SMTP サーバーの設定は次のとおりです。

```
<server merge="mergeChildren">
    <!-- email properties -->
    <email>
        <!-- SMTP server that mail should be sent to -->
        <smtp-server>smtp.yourcompany.com</smtp-server>
    </email>
```

1. サーバーを停止します。
2. テキスト・エディターを使用して 100Custom.xml ファイルを開きます。

- ネットワーク・デプロイメント環境の場合:

- Process Server および Process Center のクラスター:

```
DMGR-profile-root%config%cells%cell-name%clusters%ClusterName%
process-center%config%100Custom.xml
```

- Process Server および Process Center のクラスター・メンバー:

```
DMGR-profile-root%config%cells%cell-name%nodes%node-name%servers%serverName%
process-center%config%100Custom.xml
```

- スタンドアロン環境の場合:

```
profile-root%config%cells%cell-name%nodes%node-name%servers%serverName%
process-center%config%100Custom.xml
```

3. 100Custom.xml ファイルに以下を追加します。

```
<properties>
  <server merge="mergeChildren">
    <!-- email properties -->
    <email merge="mergeChildren">
        <!-- SMTP server that mail should be sent to -->
        <smtp-server merge="replace">SMTP.YOURCOMPANY.COM</smtp-server>
    </email>
  </server>
</properties>
```

ここで、**SMTP.YOURCOMPANY.COM** は実際の SMTP サーバーの名前です。

4. 変更内容を保存して、サーバーを再始動します。

## 拡張構成: 環境のカスタマイズ

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティー・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

### Process Center への接続で Process Server が使用する設定のカスタマイズ

IBM Business Process Manager をインストールして構成したら、Process Server をオフライン・サーバーから Process Center 接続サーバーに変更することができます (その逆も可能)。

IBM Business Process Manager の Process Server コンポーネントがインストールされて構成されていることを確認します。

このトピックの手順を使用して、スタンドアロン・サーバー環境または Network Deployment 環境用に Process Server 接続設定をカスタマイズします。

通常、構成のカスタマイズは 100Custom.xml ファイルを編集することによって管理します。(例えば Process Center のアドレス変更など、構成の変更が必要な場合は、認証別名の構成を更新し、管理用タスクを実行してください。) 100Custom.xml ファイルのカスタマイズと編集の例については、『716 ページの『インストール後のパスワード変更』』を参照してください。

例えば、以下のタスクを実行できます。

- 接続の詳細のホストおよびポート名の更新。
- Process Server を、オフライン・サーバーから Process Center 接続サーバーに変更する (その逆も可能)。例えば、Process Server をオフライン・サーバーとして構成した場合、その構成を Process Center 接続サーバーに変更することができます。Process Center に接続された Process Server は、Process Center 管理コンソールから直接管理することができます。Process Center のユーザー・インターフェースから Process Server を管理する方法については、『IBM Business Process Manager の管理』を参照してください。
- 接続 URL の変更。

Process Center が Process Server に接続されている場合、Process Center ユーザー・インターフェースを使用して直接管理することができます。

ネットワーク構成に複数のアプリケーション・ターゲットが存在する場合に、Process Center と Process Server 間の通信のターゲットごとに新規ユーザーを構成するには、構成ファイルにまだ含まれていない新規ユーザーそれぞれの認証別名を作成する必要があります。

Process Center への接続で Process Server が使用する設定をカスタマイズするには、以下のステップを実行します。

1. デプロイメント・マネージャーと、Process Server クラスターまたはサーバーを停止します (稼働している場合)。
2. 構成を更新します。
  - **V7.5.1.1 を実行中の場合:** 以下に示す手順で、認証別名構成ページを更新し、管理タスクを実行します。
    - a. 管理コンソールを開きます。
    - b. 「セキュリティ」 > 「ビジネス・インテグレーション・セキュリティ」をクリックします。
    - c. 構成する認証別名をクリックするか、認証別名に関連したチェック・ボックスを選択して、「編集」ボタンをクリックします。デフォルトの IBM Business Process Manager ユーザー・アカウントごとに、外部コンポーネントが Process Server に接続するためのデフォルトの認証別名が用意されています。例えば、BPMPrimaryAdmin\_Auth\_Alias は、デフォルトの管理ユーザー用の認証別名です。ユーザー名とパスワードの資格情報を指定してください。

**注:** 認証別名の構成に変更を加えるためには、管理者ロールまたは構成ロールのメンバーである必要があります。

- d. 次に示す値を更新して、管理用タスクを実行します。
  - **repositoryServerURL:** http://localhost:9190/ProcessCenter
  - **repositoryServerHeartbeat:** 10

**注:** オフライン・サーバーは、値 **-1** によって示されます。  
サーバーの場合:

```
AdminTask updateBPMConfig {-nodeName Node_Name -serverName Server_Name -repositoryServerURL
http://localhost:9190/ProcessCenter -repositoryServerHeartbeat 10}
AdminConfig save
```

クラスターの場合:

```
AdminTask updateBPMConfig {-clusterName Cluster Name -repositoryServerURL
http://localhost:9190/ProcessCenter -repositoryServerHeartbeat 10}
AdminConfig save
```

**注:** **user-auth-alias** と **designated-user-auth-alias** の値を更新することもできます。

**user-auth-alias** の値により、ユーザーがプロセス・サーバーから Process Center へ接続するための認証別名を指定します。この別名で設定されたユーザーとパスワードは、Process Center に存在している必要があります。

**designated-user-auth-alias** の値により、ユーザーが Snapshot にアクセスしてランタイム Process Server にデプロイし、IBM Process Designer 内の Process Inspector からそのプロセス・サーバーにアクセスするための認証別名を指定します。この認証別名は、Process Server と Process Center の両方で定義されている必要があります。また、パスワードも一致している必要があります。

**updateBPMconfig** 管理タスクは XML 構成ファイルを更新します。これらの XML 構成ファイルには、環境に適用されるすべての変更が指定された単一ファイルを提供する 100Custom.xml ファイルが含まれます。100Custom.xml ファイルが存在していない場合は、管理タスクがこのファイルを作成します。複数のバージョンのカスタム・ファイル (101Custom.xml や 102Custom.xml など) がある場合は、100Custom.xml ファイルのみが更新されます。

- **V7.5.1 を実行中の場合:** 99Local.xml ファイルの接続値を編集します。

99Local.xml ファイルのディレクトリー・パス・ロケーションは、スタンドアロン環境であるか、クラスター化された Network Deployment 環境であるか、あるいは単一サーバーの Network Deployment 環境であるかによって異なります。

**スタンドアロン・サーバー環境の場合:**

```
stand-alone-profile-root%config%cells%cell-name\nodes\stand-alone-node-name\
servers\server_name\process-server\config\system\99Local.xml
```

**Network Deployment クラスター環境の場合:**

- Network Deployment の Process Server クラスター: *DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\clusters\cluster-name\process-server\config\system\99Local.xml*
- 次の場所の各 Process Server クラスター・メンバー: *DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\nodes\custom-node-name\servers\cluster-member-name\process-server\config\system\99Local.xml*

**Network Deployment 単一サーバー環境の場合:**

```
DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\nodes\custom-node-name\servers\
server_name\process-server\config\system\99Local.xml
```

次の例を参照してください。

**更新前:**

```
<repository-server-url>/ProcessCenter</repository-server-url>
<repository-server-interval>-1</repository-server-interval>
```

**更新後:**

```
<repository-server-url>http://localhost:9190/ProcessCenter</repository-server-url>
<repository-server-interval>10</repository-server-interval>
```

**重要:** オフライン・サーバーは **-1** の値で示されます。

例: `<repository-server-interval>-1</repository-server-interval>`。

3. デプロイメント・マネージャーを再始動します。
4. Network Deployment 環境の場合、管理コンソールでノード・エージェントを同期化します。スタンドアロン・サーバーの場合、デプロイメント・マネージャーとノード・エージェントの同期は必要ありません。ノード・エージェントの同期方法については、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで **syncNode** コマンドを参照してください。
5. Process Server クラスターまたはサーバーを再始動します。

Process Server を Process Center に接続するための設定がカスタマイズされました。

#### 関連タスク:

716 ページの『インストール後のパスワード変更』

IBM Business Process Manager のインストール時に指定したパスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

#### 関連情報:



WebSphere Application Server インフォメーション・センター

## Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズ

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の後、Web サーバーと連動するクラスターとして適切に機能できるように、環境をカスタマイズする必要があります。

Process Server をインストールして構成してあること、サーバーおよびクラスターを作成して構成してあることを確認してください。このトピックの手順を完了するまでは、クラスターを始動できません。

**注: updateBPMconfig** 管理タスクは V7.5.1.1 で追加されました。この管理タスクは、XML 構成ファイルを更新します。これらの構成ファイルには、環境に適用されるすべての変更が指定された単一ファイルを提供する 100Custom.xml ファイルが含まれます。100Custom.xml ファイルが存在していない場合は、管理タスクがこのファイルを作成します。複数のバージョンのカスタム・ファイル (101Custom.xml や 102Custom.xml など) がある場合は、100Custom.xml ファイルのみが更新されます。

このトピックでは、以下の操作の手順を示します。

- Process Server と Process Center の両方で、Web サーバーを指すように 100Custom.xml ファイルを構成します。ネットワーク・デプロイメント環境では、このファイルが複数の場所に存在します。100Custom.xml ファイルの作成方法または検索方法について詳しくは、『IBM Business Process Manager 構成設定の管理』を参照してください。このトピックでは 100Custom.xml について説明しますが、他の 100 レベル・ファイルに構成情報を含めることもできます。例えば Process Center のアドレス変更など、構成の変更が必要な場合は、認証別名の構成を更新し、管理用タスクを実行してください。100Custom.xml ファイル内の認証別名のそれぞれに、有効なユーザー名とパスワードが含まれている必要があります。
- Web サーバーで使用できるよう、Process Server をオフライン・モードからオンライン・モードに変更します。
- HTTP over SSL または HTTP Secure (HTTPS) を処理するよう、Process Center から Process Server への通信を設定します。

1. Process Server と Process Center の両方で、Web サーバーを指すように 100Custom.xml ファイルを構成します。100Custom.xml 構成ファイルを直接編集する前に、そのバックアップ・ファイルを作成します。ファイルを安全に保つため、.bak 拡張子を追加します。

- a. デプロイメント・マネージャーを停止します。
- b. 99Local.xml ファイルを開き、<authoring-environment> セクションを探します。
- c. このセクションをコピーして、100Custom.xml ファイルに貼り付けます。
- d. merge="mergeChildren" 修飾子を使用して、100Custom.xml ファイルに貼り付けたテキストを更新します。Web サーバーが存在しない場合、100Custom.xml ファイル内のすべての URL はクラスター・メンバーのホスト名とポートを指します。Web サーバーが存在しない場合、クラスター・サーバー・メンバーの xml ファイルを変更する必要はありません。Web サーバーが存在する場合は、その Web サーバーの実際のホスト名とポートを使用して、Web サーバーのホスト名とポートを指すようにすべての値を変更します。http (80) または https (443) にデフォルト・ポートを使用する場合は、このポートが URL のオプション部分になります。100Custom.xml ファイル内にトークン化された値を残さないようにしてください。以下に、変更を加えた後のエントリーの例を示します。

```
<authoring-environment merge="mergeChildren">
  <!-- Prefix for serving images in the Authoring Environment -->
  <images-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/teamworks</images-prefix>

  <!-- Prefix for URLs that refer to the portal -->
  <portal-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/portal</portal-prefix>

  <!-- Prefix for URLs that refer to the repository view -->
  <repository-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/ProcessCenter</repository-prefix>

  <servlet-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/teamworks</servlet-prefix>

  <!-- Prefix for URLs that refer to the web api -->
  <webapi-prefix merge="replace">https://server1.ibm.com:9447/webapi</webapi-prefix>
</authoring-environment>
```

- e. この手順の残りの部分の実行を続けない予定の場合は、デプロイメント・マネージャーを開始します。そうでない場合は、次のステップに進みます。
- f. 更新を保存します。管理コンソールで、「**完全同期**」をクリックし、この情報をすべてのノードに同期します。
- g. サーバーを再始動します。

2. Web サーバーを指すように Process Server と Process Center を構成するには、次の手順で行います。

- a. デプロイメント・マネージャーを停止します。
- b. 構成を更新します。
  - **V7.5.1.1 以降を実行中の場合:** 管理タスクを実行します。

1) 次に示す値を更新して、管理用タスクを実行します。サーバーの場合:

```
AdminTask.updateBPMConfig( [ "-nodeName", Node_Name, "-serverName", Server_Name,
"-appServerName", APPSERVER_URL, "-appServerPort", APPSERVER_PORT ] )
AdminConfig.save()
```

クラスターの場合:

```
AdminTask.updateBPMConfig( [ "-clusterName", Cluster_Name, "-appServerName",
YOUR_APPSERVER_URL, "-appServerPort", YOUR_APPSERVERPORT ] )
AdminConfig.save()
```

**注:** Web サーバーが存在する場合は、その Web サーバーの実際のホスト名とポートを使用して、Web サーバーのホスト名とポートを指すようにすべての値を変更します。HTTP のデフォルト・ポート (80) を使用する場合は、ポートの指定はオプションです。

- **V7.5.1.0 を実行中の場合:** Process Server クラスター・マシン上にある 100Local.xml ファイル内の接続値を編集します。

- Network Deployment の Process Server クラスター: `DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\clusters\ClusterName\process-center\config\system\100Local.xml`
- 次の場所の各 Process Server クラスター・メンバー: `DMGR-profile-root\config\cells\cell-name\nodes\node-name\servers\serverName\process-center\config\system\100Local.xml`

次の例を参照してください。

```
<images-prefix>http://w2k8-64bitp.austin.ibm.com:9080/teamworks</images-prefix>
<portal-prefix>http://w2k8-64bitp.austin.ibm.com:9080/portal</portal-prefix>
<deploy-snapshot-using-https>true</deploy-snapshot-using-https>
--><server-name>Process Server</server-name>
<server-description>Process Server Production Cluster</server-description>
<server-host>w2k8-64bitps1.austin.ibm.com</server-host>
<server-port>80</server-port>
<environment-type>Production</environment-type>
```

この例について、次に説明します。

```
<images-prefix>http://w2k8-64bitp.austin.ibm.com:9080/teamworks</images-prefix>
```

- これは、オーサリング環境でイメージを処理するためのプレフィックスです。

```
<portal-prefix>http://w2k8-64bitp.austin.ibm.com:9080/portal</portal-prefix>
```

- これは、Process Portal を参照する URL のためのプレフィックスです。

```
<server-host>w2k8-64bitps1.austin.ibm.com</server-host>
```

- これは、Process Server クラスターの Web サーバーのホスト名です。

```
<server-port>80</server-port>
```

- これは、Process Server の Web サーバーの http ポートです。https を使用する場合は、https ポートを指定してください。

- c. この手順の残りの部分の実行を続けない予定の場合は、デプロイメント・マネージャーを開始します。そうでない場合は、次のステップに進みます。
  - d. 管理コンソールからノード・エージェントを同期します。詳しくは、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで **syncNode** コマンドを参照してください。
3. Web サーバーで使用できるように、Process Server をオフライン・モードからオンライン・モードに変更します。
    - a. デプロイメント・マネージャーを停止します。
    - b. Process Server クラスター・マシン上で、認証別名に有効なユーザー名とパスワードが含まれていることを確認して、管理タスクを実行してください。
      - 1) 管理コンソールを開きます。
      - 2) 「**セキュリティ**」 > 「**グローバル・セキュリティ**」をクリックしてから、「**Java Authentication and Authorication Service**」を展開し、「**J2C 認証データ**」をクリックします。
      - 3) 以下の認証別名を検証し、必要に応じて変更します。
        - `<repository-server-user-auth-alias>BPMRuntimeServer_Auth_Alias</repository-server-user-auth-alias>`の下の 100custom.xml ファイルに構成される別名には、Process Center に対して認証するための有効なユーザー名とパスワードが含まれている必要があります。

- `<repository-server-designated-user-auth-alias>BPMAuthor_Auth_Alias</repository-server-designated-user-auth-alias>` の下の `100custom.xml` ファイルに構成される別名には、IBM Process Server での有効なユーザー名とパスワードが含まれている必要があります。これは、オンライン・デプロイメント用に IBM Process Center が使用します。

注: 認証別名の構成に変更を加えるためには、管理者ロールまたは構成ロールのメンバーである必要があります。

4) 次に示す値を更新して、管理用タスクを実行します。クラスターの場合:

- `repositoryServerURL`: `http://YOUR_APPSERVER_URL/ProcessCenter`
- `repositoryServerHeartbeat`: `10`
- `clusterName`: `YOUR_APPSERVER_URL`

```
AdminTask.updateBPMConfig( [ "-clusterName", Cluster_Name, "-repositoryServerURL",
"http://APPSEVER_URL/ProcessCenter", "-repositoryServerHeartbeat", "10" ] )
AdminConfig.save()
```

- c. この手順の残りの部分の実行を続けない予定の場合は、デプロイメント・マネージャーを開始します。そうでない場合は、次のステップに進みます。
- d. 管理コンソールでノード・エージェントを同期します。

ノード・エージェントの同期方法については、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで `syncNode` コマンドを参照してください。

4. HTTP over SSL または HTTP Secure (HTTPS) を使用するように、Process Center から Process Server への通信を設定します。

a. Process Server の SSL 証明書を Process Center にインポートします。

- 1) Process Center 管理コンソールで、「セキュリティ」 > 「SSL 証明書と鍵管理 (SSL certificate and key management)」 > 「エンドポイントのセキュリティ構成の管理 (Manage endpoint security configurations)」 > 「Click on any node」 > 「鍵ストアと証明書 (Key stores and certificates)」 > 「CellDefaultTrustStore」 > 「署名者証明書 (Signer certificates)」 > 「ポートから取得 (Retrieve from port)」をクリックします。

- 2) Process Server Web サーバーの別名、ホスト名、およびセキュア・ポートを入力します。デフォルトの IHS Web サーバー・セキュア・ポートは 443 です Web サーバーが存在しない場合、ホスト名およびポートの値は Process Center クラスター・メンバーのホスト名およびポートの値と同じです。

- 3) 「署名者情報の取得」をクリックして、「適用」および「保存」をクリックします。

- 4) クラスターを再始動します。

b. Process Center の SSL 証明書を Process Server にインポートします。

- 1) Process Server 管理コンソールで、「セキュリティ」 > 「SSL 証明書と鍵管理 (SSL certificate and key management)」 > 「エンドポイントのセキュリティ構成の管理 (Manage endpoint security configurations)」 > 任意のノードをクリック > 「鍵ストアと証明書 (Key stores and certificates)」 > 「CellDefaultTrustStore」 > 「署名者証明書 (Signer certificates)」 > 「ポートから取得 (Retrieve from port)」に移動します。

- 2) Process Server Web サーバーの別名、ホスト名、およびセキュア・ポートを入力します。デフォルトの IHS Web サーバー・セキュア・ポートは 443 です Web サーバーが存在しない場合、ホスト名およびポートの値は Process Center クラスター・メンバーのホスト名およびポートの値と同じです。

- 3) 「署名者情報の取得」をクリックして、「適用」および「保存」をクリックします。

- 4) クラスタを再始動します。
- c. 次に示す値を更新して、管理用タスクを実行します。クラスタの場合:
 

```
AdminTask.updateBPMConfig( [ "-clusterName", Cluster_Name, "-repositoryServerURL",
                              "https://APPSERVER_URL/ProcessCenter" ] )
AdminConfig.save()
```
- d. デプロイメント・マネージャーを始動します。
- e. クラスタを再始動します。

#### 関連タスク:

716 ページの『インストール後のパスワード変更』

IBM Business Process Manager のインストール時に指定したパスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

#### 関連情報:



WebSphere Application Server インフォメーション・センター

## IBM Business Process Manager 用の Oracle Real Application Cluster (RAC) の構成

Oracle Real Application Clusters (RAC) は Oracle データベースのオプションであり、複数のコンピューターをまとめて、単一システムとして動作するクラスタ・データベースにします。RAC データベースでは、個別のノードで実行される Oracle プロセスは、共有ディスク・ストレージの同じデータにアクセスします。

IBM Business Process Manager の初期インストールおよび構成時に、Oracle RAC をターゲット・データベースとして使用することはできません。構成時に、Oracle データベースの単一インスタンスの SID を指定する必要があります。Oracle データベースにアクセスするために自動的に生成され、サポートされる JDBC URL は、**jdbc:oracle:thin:@<hostname>:<port number>:<DBName>** です。Oracle RAC を使用するために、JDBC URL を事後構成ステップとして編集する必要があります。

以下の 2 つのシナリオが考えられます。

- スタンドアロン・プロファイルを使用する場合は、データベース名の値として SID を使用して、プロファイルを作成する必要があります。
- Network Deployment 環境をセットアップする場合は、SID を使用してプロファイルとクラスタを構成する必要があります。

IBM Business Process Manager では、JDBC URL は必ず、**jdbc:oracle:thin:@[HOST][:PORT]:SID** の形式で作成されます。この形式を次のいずれかに編集することにより、Oracle RAC を使用できます。

- `jdbc:oracle:thin:@//[HOST][:PORT]/SERVICE`

ここで、**SERVICE** は Oracle サービス名です。

注: この新しい構文は、Oracle 11g R2 で使用可能な SCAN 機能で使用できますが、SCAN 機能がない場合は使用できません。

- Oracle RAC の URL を指定するための一般的な形式

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=
(Load_Balance=on)
(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=host1)(PORT=1521))
(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=host2)(PORT=1521))
(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=service_name)))
```

Oracle RAC ノードのフェイルオーバーが発生すると、IBM Business Process Manager は処理を停止するため、場合によってはすべての IBM Business Process Manager ノードを再始動する必要があります。プロセス・リカバリー問題が発生した場合は、IBM Business Process Manager V7.5 の特定の状況におけるプロセス・リカバリーの問題を参照してください。

1. 関連 Oracle JDBC データ・ソースを定義するときに、Oracle URL として RAC URL を指定します。
  - a. 管理コンソールで、「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択します。
  - b. JDBC URL を指定して Oracle を使用しているすべてのデータ・ソースを編集して、上記のいずれかの形式を使用するようにします。

管理コンソールを使用したデータ・ソースの構成を参照してください。
2. 「認証別名の構成」ページを更新し、管理用タスクを実行して、Oracle RAC を使用するように URL を更新します。詳細については、認証別名の変更を参照してください。
3. Network Deployment 環境では、Process Center、Process Server、または Performance Data Warehouse クラスタ・メンバーが含まれるノードを同期化する必要があります。
  - a. 管理コンソールで、「システム管理」 > 「ノード」 をクリックします。
  - b. ノードをすべて選択して、「完全な再同期化」をクリックします。
  - c. クラスタとサーバーのすべてを停止し、再始動します。

## LDAP セキュリティー・プロバイダーの構成

IBM Business Process Manager での追加の Lightweight Directory Access Protocol セキュリティー・プロバイダーを使用するには、プロバイダーをフェデレートされたリポジトリに追加する必要があります。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、内部 IBM BPM セキュリティー・プロバイダーのみを含む単一の統合リポジトリで構成されています。あるいは、WebSphere フェデレーテッド・リポジトリで LDAP セキュリティー・プロバイダー (Microsoft Active Directory など) を構成することができます。

IBM Business Process Manager で LDAP セキュリティー・プロバイダーを構成するには、以下の手順を完了します。

1. tw\_user として WebSphere 管理コンソールにログオンします。tw\_user アカウントのデフォルトのパスワードは、tw\_user です。
2. 「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」をクリックします。
3. 「ユーザー・アカウント・リポジトリ」の下で、「使用可能なレルムの定義」 > 「フェデレーテッド・リポジトリ」をクリックします。
4. 「構成」をクリックします。
5. 「関連項目」の下で、「リポジトリの管理」をクリックします。
6. 「追加」をクリックし、追加したいプロバイダーのパラメーターを指定します。例えば、Microsoft Active Directory を追加するには、以下の例のような値を指定します。

表 106. プロバイダーを追加するためのパラメーター

パラメーター	値の例
リポジトリ ID	SALOMLDAP // change to suit
ディレクトリー・タイプ	Microsoft Windows Active Directory
1 次ホスト名	10.1.5.18
バインド識別名	cn=LDAP_USER,CN=Users,DC=COMPANYQA,DC=com
バインド・パスワード	pwsaaswp

7. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
8. 「基本項目をレルムに追加 (Add Base entry to Realm)」をクリックし、以下の例のような値を指定します。

表 107. 基本項目をレルムに追加するためのパラメーター

基本項目名	値の例
レルム内でこの項目のセットを一意的に識別する基本項目の識別名	cn=Users,DC=COMPANYQA,DC=com
このリポジトリ内の基本項目の識別名	cn=Users,DC=COMPANYQA,DC=com

9. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
10. 「グローバル・セキュリティー」ページで、「現行として設定 (Set as current)」をクリックし、次に「適用」をクリックします。
11. すべての IBM BPM サーバーをシャットダウンします。Network Deployment 環境の場合、クラスターを停止することによって、同じクラスターのメンバーであるすべてのサーバーを同時にシャットダウンすることができます。
12. IBM BPM 内部セキュリティー・プロバイダーと追加したばかりのセキュリティー・プロバイダーとの間に重複するユーザーが存在しないことを確認してください。重複するユーザーが存在する場合、IBM Business Process Manager 製品コンポーネントを実行したときにエラーが発生します。
13. すべての IBM BPM サーバーを始動します。Network Deployment 環境の場合、クラスターを開始することによって、クラスター内のすべてのサーバー (クラスター・メンバー) を 1 つのアクションで開始することができます。

ご使用のランタイム環境用にサーバー・クラスターを構成した場合、クラスター内のすべてのサーバーを停止し、再始動します。

#### 関連タスク:

『スタンドアロン構成用のユーザー・アカウントのセットアップ』

IBM Business Process Manager の内部セキュリティー・プロバイダーを使用して、ユーザーおよびグループの作成と保守を行うことができます。さらに、内部セキュリティー・プロバイダーを Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) などの外部セキュリティー・プロバイダーと結合することができます。

### スタンドアロン構成用のユーザー・アカウントのセットアップ

IBM Business Process Manager の内部セキュリティー・プロバイダーを使用して、ユーザーおよびグループの作成と保守を行うことができます。さらに、内部セキュリティー・プロバイダーを Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) などの外部セキュリティー・プロバイダーと結合することができます。

IBM Business Process Manager の内部セキュリティー・プロバイダーには、デフォルトのユーザーおよびグループがいくつか用意されています。内部セキュリティー・プロバイダーと外部プロバイダーを結合して使用すると、両方のプロバイダーのユーザーとグループが選択可能になります。

**重要:** IBM BPM のデフォルトの管理者アカウント `tw_admin` およびデフォルトの管理者グループ `tw_admins` は削除しないでください。これらのデフォルトのアカウントがないと、サーバーおよびユーザーを管理できません。 `tw_admin` アカウントのパスワードを変更するには、『デフォルトのユーザーおよびグループの管理』を参照してください。

IBM BPM での最善のセキュリティー管理方法は、グループを使用することです。例えば、IBM BPM への管理アクセス権限を付与するには、外部セキュリティー・プロバイダーの既存のユーザー・グループを

tw\_admins に追加します。tw\_admins は、メンバーがデフォルトで IBM BPM 製品コンポーネントへの管理アクセス権限を持つ IBM BPM グループです。次に、変更が必要な場合は、外部セキュリティ・プロバイダーに存在するグループの個々のユーザーを追加または削除することができます。この手法を用いると、外部プロバイダーで実行するセキュリティ保守において、IBM BPM で追加作業を行う必要がなくなります。

最初に IBM BPM サーバーを構成する際にスタンドアロン構成用にユーザー・アカウントをセットアップするには、以下のステップを実行します。

1. Process Admin Console にアクセスするために、Web ブラウザーで **http://[host\_name]:[port]/ProcessAdmin** にアクセスします。デフォルトの管理アカウント (tw\_admin) を使用してログオンします。デフォルトでは、パスワードはプロファイルの作成時に使用された管理パスワードに設定されます。
2. オプション: ユーザーが IBM BPM で必要とする各種タイプのユーザーおよびグループを作成します。
3. デフォルトの IBM BPM グループまたは作成したグループにメンバーを追加します。構成済みの任意の外部プロバイダー (LDAP など) からユーザーおよびグループを追加でき、また内部の IBM BPM のユーザーおよびグループを追加できます。
4. リポジトリへのアクセスが必要なユーザーおよびグループを追加し、適切なユーザーに管理権限を付与します。次に、各 Process App および Toolkit にアクセスできるユーザーを設定します。リポジトリへのアクセス権限を付与する最善の方法は、デフォルトのグループ tw\_authors にメンバーを追加することです。

#### 関連タスク:

714 ページの『LDAP セキュリティ・プロバイダーの構成』

IBM Business Process Manager での追加の Lightweight Directory Access Protocol セキュリティ・プロバイダーを使用するには、プロバイダーをフェデレートされたリポジトリに追加する必要があります。

## インストール後のパスワード変更

IBM Business Process Manager のインストール時に指定したパスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

内部セキュリティ・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

**tw\_admin** および **tw\_user** パスワードに加えて、Network Deployment 環境内のすぐに使用可能なパスワードもすべて変更することができます。

注: ご使用の環境で BPMAAdmin\_Auth\_Alias が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従う必要があります。

#### 関連タスク:

726 ページの『パスワードの暗号化』

IBM Business Process Manager 製品コンポーネントのインストール時には、通常、インストール済みファイル内のパスワードはデフォルトで暗号化されます。これらのパスワードを変更する必要がある場合は、IBM BPM EncryptPassword ユーティリティを使用して新規パスワードを暗号化できます。

706 ページの『Process Center への接続で Process Server が使用する設定のカスタマイズ』

IBM Business Process Manager をインストールして構成したら、Process Server をオフライン・サーバーから Process Center 接続サーバーに変更することができます (その逆も可能)。

#### スタンドアロン環境での `tw_admin` パスワードの変更:

IBM Business Process Manager のインストール時に指定した、スタンドアロン環境の `tw_admin` パスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

ご使用の環境で `BPMAdmin_Auth_Alias` が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従ってください。

**重要:** 内部セキュリティ・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

例えば、WebSphere Application Server Network Deployment 環境のデフォルト・リポジトリーであるファイル・ベース・リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用していた場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してユーザー・アカウントを変更します。

例えば、1 つ以上の LDAP リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用している場合は、LDAP ユーザー・インターフェースを使用してユーザー・アカウントを変更します。例えば、`tw_admin` が LDAP からのユーザーである場合は、LDAP でパスワードを変更する必要があります。

1. 管理アカウントを使用して、Process Admin Console にログオンします。管理アカウントには、製品のインストール時にユーザー名とパスワードが指定されています。
2. Process Admin Console で、`tw_admin` アカウントのパスワードを変更します。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
4. `BPMAdmin_Auth_Alias` パスワードを変更します。
  - a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」をクリックします。
  - b. 右側の「認証」の下で、「JAASConfiguration」 > 「J2C 認証データ」をクリックします。
  - c. `BPMAdmin_Auth_Alias` にナビゲートします。
  - d. `BPMAdmin_Auth_Alias` パスワードを変更します。
5. 以下のいずれかの方法で、`tw_admin` 管理ユーザー名に関連付けられたロールの `tw_admin` パスワードを変更します。
  - 「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM\_BPM\_Teamworks\_<node and server location>」 > 「ユーザー RunAs ロール」に移動します (例えば、「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM\_BPM\_Teamworks\_Node01\_Server01」 > 「ユーザー RunAs ロール」)。`tw_admin` 管理ユーザー名が関連付けられているロールのパスワードを変更し、変更を適用します。例えば、`twem` ロールと `twuser` ロールが `tw_admin` ユーザー名に関連付けられている場合は、これらのロールのパスワードを変更します。
  - `util%Security%bpmModifyMapRunAsRole.py` ユーティリティを実行して、システム・アプリケーションの管理ユーザーのパスワードを更新します。詳しくは、『システム・アプリケーションの RunAs ロールへのユーザー割り当ての定義』を参照してください。

6. WebSphere Application Server 管理コンソールからログアウトします。
7. サーバーを再始動します。

#### 関連情報:

 IBM BPM v7.5 でのデフォルトの管理パスワードの変更

#### スタンドアロン環境での `tw_user` パスワードの変更:

スタンドアロン環境で IBM Business Process Manager のインストール時に指定した `tw_user` パスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

ご使用の環境で `BPMAdmin_Auth_Alias` が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従う必要があります。

**重要:** 内部セキュリティー・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

例えば、WebSphere Application Server Network Deployment 環境のデフォルト・リポジトリーであるファイル・ベース・リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用していた場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してユーザー・アカウントを変更します。

例えば、1 つ以上の LDAP リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用している場合は、LDAP ユーザー・インターフェースを使用してユーザー・アカウントを変更します。例えば、`tw_user` が LDAP からのユーザーである場合は、LDAP でパスワードを変更する必要があります。

1. 管理アカウントを使用して、Process Admin Console にログオンします。管理アカウントには、製品のインストール時にユーザー名とパスワードが指定されています。
2. `tw_user` アカウントのパスワードを変更します。
  - a. Process Admin Console で、「ユーザー管理」 > 「ユーザー管理」をクリックします。
  - b. 「プロファイルの取得」フィールドに `tw_user` と入力し、「取得」をクリックします。
  - c. 「内部 IBM BPM ユーザー」セクションの `tw_user` をクリックします。
  - d. 「内部 IBM BPM ユーザーの詳細」セクションで、「パスワード」に新規パスワードを入力します。
  - e. 「更新」をクリックします。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
4. `BPMUser_Auth_Alias` パスワードを変更します。
  - a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「セキュリティー」 > 「グローバル・セキュリティー」をクリックします。
  - b. 右側の「認証」の下で、「JAASConfiguration」 > 「J2C 認証データ」をクリックします。
  - c. `BPMUser_Auth_Alias` パスワードを変更します。
5. 「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM\_BPM\_PerformanceDW\_<node and server location>」 > 「ユーザー RunAs ロール」に移動します (例えば、「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM\_BPM\_PerformanceDW\_Node01\_Server01」 > 「ユーザー RunAs ロール」)。

6. **tw\_user** ユーザー名が関連付けられているロールのパスワードを変更し、変更を適用します。例えば、**twem** ロールと **twuser** ロールが **tw\_user** ユーザー名に関連付けられている場合は、これらのロールのパスワードを変更します。
7. WebSphere Application Server 管理コンソールをログアウトします。

#### 関連情報:



IBM BPM v7.5 でのデフォルトの管理パスワードの変更

#### ND クラスタ環境での **tw\_admin** パスワードの変更:

IBM Business Process Manager のインストール時に指定した ND クラスタ環境の **tw\_admin** パスワードを変更するには、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してこのパスワードを変更します。

ご使用の環境で **BPMAdmin\_Auth\_Alias** が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従ってください。

**重要:** 内部セキュリティー・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

例えば、WebSphere Application Server Network Deployment 環境のデフォルト・リポジトリーであるファイル・ベース・リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用していた場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してユーザー・アカウントを変更します。

例えば、1 つ以上の LDAP リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用している場合は、LDAP ユーザー・インターフェースを使用してユーザー・アカウントを変更します。例えば **tw\_admin** が **NDCluster LDAP** で保守されているユーザーである場合は、**NDCluster LDAP** でパスワードを変更する必要があります。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
2. 「ユーザーおよびグループ」 > 「ユーザーの管理」にナビゲートし、**tw\_admin** ユーザー・アカウントを見つけます。
3. **tw\_admin** ユーザー・アカウントのパスワードを変更します。
4. **BPMAdmin\_Auth\_Alias** パスワードを変更します。
  - a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「セキュリティー」 > 「グローバル・セキュリティー」をクリックします。
  - b. 右側の「認証」の下で、「**JAASConfiguration**」 > 「**J2C 認証データ**」をクリックします。
  - c. **BPMAdmin\_Auth\_Alias** にナビゲートします。
  - d. **BPMAdmin\_Auth\_Alias** パスワードを変更します。
5. 以下のいずれかの方法で、**tw\_admin** 管理ユーザー名に関連付けられたロールの **tw\_admin** パスワードを変更します。
  - 「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「**IBM\_BPM\_Teamworks\_<node and server location>**」 > 「ユーザー **RunAs** ロール」に移動します (例えば、「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「**IBM\_BPM\_Teamworks\_Node01\_Server01**」 > 「ユーザー **RunAs** ロール」)。 **tw\_admin** 管理ユー

ザー名が関連付けられているロールのパスワードを変更し、変更を適用します。例えば、**twem** ロールと **twuser** ロールが **tw\_admin** ユーザー名に関連付けられている場合は、これらのロールのパスワードを変更します。

- **util¥Security¥bpmModifyMapRunAsRole.py** ユーティリティを実行して、システム・アプリケーションの管理ユーザーのパスワードを更新します。詳しくは、『システム・アプリケーションの RunAs ロールへのユーザー割り当ての定義』を参照してください。

**重要:** クラスター環境で **bpmModifyMapRunAsRole.py** ユーティリティを 2 回実行する必要があります。以下に例を示します。

```
wsadmin.bat -port port number -lang jython -user username -password admin -f
C:¥WAS_INSTALL_LOCATION¥util¥Security¥bpmModifyMapRunAsRole.py -usr username -pwd admin
-clusterName BPM.AppTarget -applicationName Teamworks
```

```
wsadmin.bat -port port number -lang jython -user username -password admin -f
C:¥WAS_INSTALL_LOCATION¥util¥Security¥bpmModifyMapRunAsRole.py -usr username -pwd admin
-clusterName BPM.Support -applicationName PerformanceDW
```

6. Network Deployment 環境では、Process Center、Process Server、または Performance Data Warehouse クラスター・メンバーが含まれるノードを同期化する必要があります。
  - a. 管理コンソールで、「システム管理」 > 「ノード」 をクリックします。
  - b. ノードをすべて選択して、「完全な再同期化」をクリックします。
  - c. クラスターとサーバーのすべてを停止し、再始動します。
7. クラスター・メンバーを再始動します。

#### 関連情報:



IBM BPM v7.5 でのデフォルトの管理パスワードの変更

#### ND クラスター環境での tw\_user パスワードの変更:

ND クラスター環境で IBM Business Process Manager のインストール時に指定した **tw\_user** パスワードを変更するには、Process Admin Console を使用してこのパスワードを変更し、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して対応する認証別名でのパスワードを変更します。

ご使用の環境で **BPMAdmin\_Auth\_Alias** が定義されていない場合は、おそらく IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 にアップグレードする前にプロファイルが作成されています。この場合は、IBM Business Process Manager バージョン 7.5.0 インフォメーション・センターに掲載されているパスワード変更プロセスに従う必要があります。

**重要:** 内部セキュリティー・プロバイダーを使用している場合は、Process Admin Console を使用してユーザー・アカウントを保守します。異なるタイプのユーザー・レジストリーを構成した場合は、そのユーザー・レジストリーのユーザー・インターフェースでユーザー・アカウントを保守する必要があります。

例えば、WebSphere Application Server Network Deployment 環境のデフォルト・リポジトリーであるファイル・ベース・リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用していた場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してユーザー・アカウントを変更します。

例えば、1 つ以上の LDAP リポジトリーを持つフェデレーテッド・リポジトリーを使用している場合は、LDAP ユーザー・インターフェースを使用してユーザー・アカウントを変更します。例えば **tw\_user** が **NDCluster LDAP** で保守されているユーザーである場合は、**NDCluster LDAP** でパスワードを変更する必要があります。

1. 管理アカウントを使用して、Process Admin Console にログオンします。 管理アカウントには、製品のインストール時にユーザー名とパスワードが指定されています。
2. **tw\_user** アカウントのパスワードを変更します。
  - a. Process Admin Console で、「ユーザー管理」 > 「ユーザー管理」をクリックします。
  - b. 「プロファイルの取得」フィールドに **tw\_user** と入力し、「取得」をクリックします。
  - c. 「内部 IBM BPM ユーザー」セクションの **tw\_user** をクリックします。
  - d. 「内部 IBM BPM ユーザーの詳細」セクションで、「パスワード」に新規パスワードを入力します。
  - e. 「更新」をクリックします。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
4. **BPMUser\_Auth\_Alias** パスワードを変更します。
  - a. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」をクリックします。
  - b. 右側の「認証」の下で、「JAASConfiguration」 > 「J2C 認証データ」をクリックします。
  - c. **BPMUser\_Auth\_Alias** パスワードを変更します。
5. 「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM\_BPM\_PerformanceDW\_<node and server location>」 > 「ユーザー RunAs ロール」に移動します (例えば、「エンタープライズ・アプリケーション」 > 「IBM\_BPM\_PerformanceDW\_Node01\_Server01」 > 「ユーザー RunAs ロール」)。
6. **tw\_user** ユーザー名が関連付けられているロールのパスワードを変更し、変更を適用します。例えば、**twem** ロールと **twuser** ロールが **tw\_user** ユーザー名に関連付けられている場合は、これらのロールのパスワードを変更します。
7. Network Deployment 環境では、Process Center、Process Server、または Performance Data Warehouse クラスタ・メンバーが含まれるノードを同期化する必要があります。
  - a. 管理コンソールで、「システム管理」 > 「ノード」 をクリックします。
  - b. ノードをすべて選択して、「完全な再同期化」をクリックします。
  - c. クラスタとサーバーのすべてを停止し、再始動します。
8. クラスタ・メンバーを再始動します。

#### 関連情報:

 [IBM BPM v7.5 でのデフォルトの管理パスワードの変更](#)

## Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パスワードとユーザー ID の変更

データベース構成が完了した後に、必要に応じてデータベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成することができます。

データベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成するには、管理コンソールを使用します。データベース・パスワードおよびユーザー ID を変更するには、以下の 3 つの処理を実行する必要があります。

- すべてのデータ・ソースの認証別名を更新する
- メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する
- 98database.xml ファイルで Process Server および Performance Data Warehouse のパスワードを手動で更新する

**重要:** 何らかの構成変更を行う前に、config フォルダをバックアップすることをお勧めします。config フォルダは、Deployment Manager の下の <Dmgr-profile>/config にあります。詳しくは WebSphere Application Server 管理者にお問い合わせください。

#### データ・ソース認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、データ・ソース認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。

データ・ソース認証別名を変更するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択します。

**注:** 「コンポーネント管理認証別名」および「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」に対して構成されている値を書き留めておいてください。

3. 必要なデータ・ソースを選択します。
4. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」を選択します。
5. ステップ 2 で書き留めた、適切な「コンポーネント管理認証別名」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
6. 「JAAS - J2C 認証データ」パネルに戻り、ステップ 2 で書き留めた「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
7. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。
- Network Deployment クラスターおよびサーバーを停止した後、別名を変更する前に、DMGR とすべてのノード・エージェントを始動する必要があります。

メッセージング・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」を選択します。
3. 各バスの認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。
  - a. 「バス」 > 「[Bus\_NAME]」 > 「メッセージング・エンジン」 > 「[MESSAGING\_ENGINE]」 > 「データ・ストア」を選択します。

**要確認:** データ・ストアでの「認証別名」の値を書き留めておいてください。

- b. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」をクリックします。
- c. ステップ a で書き留めた値を選択します。パスワードを編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
- d. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

#### 構成ファイル内のパスワードおよびユーザー名の更新:

データベース・パスワードを変更するには、いくつかの構成ファイルを更新する必要があります。

ユーザー名およびパスワード更新を始める前に、DMGR と各ノード・エージェントが稼働していることを確認してください。新規パスワードで 98Database.xml ファイルを更新したら、「完全同期」をクリックして、変更内容をすべてのノードに適用する必要があります。その後、ご使用の環境を再始動して、ご使用の Network Deployment 環境またはスタンドアロン環境で新規パスワードを確実にアクティブ化する必要があります。

IBM Process Center、IBM Process Server、および IBM Performance Data Warehouse では、それぞれのデータベース情報が 98Database.xml ファイルに保管されるため、このファイルを新規パスワードまたはユーザー ID で更新する必要があります。このファイルが存在するすべての場所については、このトピックに記載されている表を参照してください。

サンプルの 98Database.xml ファイルには、次のようなコード・セグメントが含まれています (これは例であり、セットアップに応じて異なる場合があります)。

```
<databases>
<default-database-name>default</default-database-name>
<database type="default">
  <driver>com.ibm.db2.jcc.DB2Driver</driver>
  <url>jdbc:db2://localhost:50000/BA8000_1</url>
  <user>bpmdb</user>
  <schema></schema>
  <encrypted-password>GFgs/fnJCC9RnNCHDH3kLA==:acGciJgBON8WTk0ZF/dS/A==</encrypted-password>
  <db-name>BA8000_1</db-name>
  <storage-group></storage-group>
</database>
</databases>
```

ユーザー ID を変更するには、`<user>new_userID</user>` のように、user タグに新規の値を追加します。

パスワードについては、暗号化ツールを使用して生成されたパスワード値を組み込んで、次に示す項目を更新する必要があります。「関連リンク」セクションの『パスワードの暗号化』で説明されている方法を使用してください。

```
<encrypted-password>7Yu5Kz3XaYL5aUjbWfISHg==:VyP9e8ytnTz6623hERR4lg==</encrypted-password>
```

表 1 に、スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 108. スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	Process Center  <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥process-center¥config¥system  パフォーマンス・データウェアハウス  <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥performance-data-warehouse¥config¥system
Process Server	Process Server  <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥process-server¥config¥system  パフォーマンス・データウェアハウス  <STANDALONE-PROFILE-DIR>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥servers¥<server name>¥performance-data-warehouse¥config¥system

表 2 に、Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 109. Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	<p><b>1 または 2 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Center</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-center%config%system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-center%config%system</b></p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</b></p>
	<p><b>3 または 4 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Center</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-center%config%system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-center%config%system</b></p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;SUPPORT-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</b></p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</b></p>

Process Server	<p><b>1 または 2 クラスター・トポロジ</b></p> <p>Process Server</p> <pre>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-server%config%system</pre> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-server%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <pre>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</pre> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p> <hr/> <p><b>3 または 4 クラスター・トポロジ</b></p> <p>Process Server</p> <pre>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-server%config%system</pre> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-server%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <pre>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;SUPPORT-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</pre> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p>
----------------	---

パスワードの暗号化

## パスワードの暗号化

IBM Business Process Manager 製品コンポーネントのインストール時には、通常、インストール済みファイル内のパスワードはデフォルトで暗号化されます。これらのパスワードを変更する必要がある場合は、IBM BPM EncryptPassword ユーティリティを使用して新規パスワードを暗号化できます。

パスワードを暗号化するには、以下のステップを実行します。

1. コマンド・プロンプトで `[IBM_BPM_home]/BPM/Lombardi/lib` ディレクトリーに移動します。
2. `java -cp utility.jar com.lombardisoftware.utility.EncryptPassword <password>` コマンドを実行します。ここで、`<password>` は暗号化するパスワードです。

例えば、次のコマンドを実行します。

```
java -cp utility.jar com.lombardisoftware.utility.EncryptPassword JohnDoe
```

結果は次のコードのようになります。

taVcmTLTWGkTvfavvu/7g==:sROM4ZbvqRDFYMobWXqvwg==

**重要:** 上記以外のディレクトリーからユーティリティーを実行する場合には、**utility.jar** を、**utility.jar** ファイルへの正確なパスで置き換えます。

- ユーティリティーが **ClassNotFoundException** 例外で失敗した場合は、ユーティリティーを再実行する前に、Java ホームを **[IBM\_BPM\_home]/AppServer/java/bin/java** ディレクトリーに設定します。

例:

```
Linux UNIX java -cp /opt/[IBM_BPM_home]/BPM/Lombardi/lib/utility.jar  
com.lombardisoftware.utility.EncryptPassword JohnDoe
```

```
Windows java -cp c:[IBM_BPM_home]\BPM\Lombardi\lib\utility.jar  
com.lombardisoftware.utility.EncryptPassword JohnDoe
```

- IBM BPM 構成ファイル (*PROFILE\_HOME*\config\cells\cell\_name\nodes\node\_name\servers\server\_name\process-center\config100Custom.xml など) 内の暗号化された既存のパスワードを置き換えます。

**制約事項:** 既に暗号化されているパスワードの暗号化解除に **EncryptPassword** ユーティリティーを使用することはできません。

#### 関連タスク:

716 ページの『インストール後のパスワード変更』

IBM Business Process Manager のインストール時に指定したパスワードを変更するには、**Process Admin Console** を使用してこのパスワードを変更し、**WebSphere Application Server** 管理コンソールを使用して、対応する認証別名でのパスワードを変更します。

## サンプルの手動インストール

**Network Deployment** 環境またはスタンドアロン・サーバー環境で拡張サンプルを手動でインポートできます。

プロファイルを使用する場合は、作成した **Process Center** プロファイルのログ・ファイルを確認できません。**importAdvancedSamples** タスク中に拡張サンプルが見つからなかったというエラーが示されています。これは予期されることであり、拡張サンプルを手動でインストールできます。

サンプルをインポートするには、**importAdvancedSamples** スクリプトを実行して、プロセス・サーバー・データベースに適切なデータを提供します。

以下のいずれかのオプションを選択して、**importAdvancedSamples** スクリプトを実行します。

- プロファイルを使用する場合は、**importAdvancedSamples** スクリプトを呼び出します。スクリプトは適切なパラメーター値を評価して、拡張サンプルをデータベースにインポートします。以下の例では、拡張サンプルをスタンドアロン・プロファイル・サーバー環境にインポートします。

```
Windows importAdvancedSamples.bat
```

```
Linux UNIX importAdvancedSamples.sh
```

- プロファイルを使用しない場合は、**importAdvancedSamples** スクリプトを呼び出すことができますが、適切なパラメーター値を指定する必要があります。以下の大小文字が区別されるパラメーターを使用できます。

#### profileName

デフォルト・プロファイルを使用しない場合は、プロファイル名を設定する必要があります。

### dbJDBCClasspath

データベース JDBC ドライバーがあるディレクトリーのロケーション。このパラメーターはオプションです。指定しなかった場合は、ロケーション `WAS_INSTALL_ROOT/jdbcdrivers` が使用されます。

### nodeName

ノード名パラメーターはオプションです。ただし、Network Deployment 環境では `serverName` パラメーターと共に指定する必要があります。

### serverName

サーバー名パラメーターはオプションです。ただし、Network Deployment 環境では `nodeName` パラメーターと共に指定する必要があります。

### clusterName

クラスター名の指定はオプションです。

**重要:** スペースが含まれたパス値を指定する場合は、引用符で囲む必要があります。

以下の例では、Network Deployment 環境のプロセス・センターに拡張サンプルをインポートします。

```
importAdvancedSamples -nodeName node01 -serverName server1
```

以下のサンプルがインポートされます (使用可能である場合)。

- advanced-hiring-sample.twx
- procurement-sample.twx

## ファースト・ステップ・コンソールの開始

IBM Business Process Manager Standard のインストール後に「ファースト・ステップ」コンソールを使用して、インストールの検証、「プロファイル管理ツール」の開始、製品資料へのアクセス、または個別のプロファイルに関連するサーバーや管理コンソールなどのエレメントに対する指示を行います。

汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。各コンソールのオプションは、インストールした機能と、各オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始または停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、製品資料へのアクセスなどがあります。

通常は、プロファイル用のバージョンを開始します。以下のセクションでは、「ファースト・ステップ」コンソールの開始手順を、そのバージョンおよびシステムで使用されているプラットフォームごとに詳しく説明します。

- 729 ページの『Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム上のプロファイル用のファースト・ステップ・コンソールの開始』
- 729 ページの『汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始』

**制約事項:** デフォルトのブラウザーとして Mozilla を使用し、そのインストール・ロケーションのパス名にスペースが含まれていると、ファースト・ステップ・コンソールが起動しない場合があります。この問題を解消するには、以下のいずれかのアクションを実行してください。

- Mozilla を、パス名にスペースを含まないロケーションにインストールする。
- レジストリー・キーを変更してスペースを削除する。
- 一時的なデフォルト・ブラウザーとして Internet Explorer を指定してから、Mozilla をデフォルト・ブラウザーに設定する。このアプローチでは、レジストリー・キーからスペースが自動的に除去されます。

## Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム上のプロファイル用のファースト・ステップ・コンソールの開始

**Linux** **UNIX** **Windows** 以下のステップを実行し、プロファイル用のファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します (*install\_root* は、IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルのインストール場所(*install\_root/profiles/profile\_name/*) を表します)。

- IBM Business Process Manager プロファイルの場合:

– **Linux** **UNIX** *profile\_root/firststeps/bpmStd*

– **Windows** *profile\_root%firststeps%bpmStd*

- WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの場合:

– **Linux** **UNIX** *profile\_root/firststeps/esb*

– **Windows** *profile\_root%firststeps%esb*

3. **firststeps** コマンドを実行して、コンソールを開始します。

- **Linux** **UNIX** *./firststeps.sh*

- **Windows** *firststeps.bat*

### ファースト・パス:

以下のいずれかのタスクを実行して、プロファイルに関連付けられているバージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始することもできます。

- プロファイルの作成または拡張処理の終了時に「プロファイル作成の完了」または「プロファイル拡張の完了」パネルの「ファースト・ステップ・コンソール」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける。
- **Windows** 「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM」 > 「BPM Standard 7.5」 > 「プロファイル」 > *profile\_name* > 「ファースト・ステップ」をクリックします。

## 汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始

以下のステップを実行し、汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します。

- **Linux** **UNIX** *install\_root/firststeps/bpmStd*

- **Windows** *install\_root%firststeps%bpmStd*

変数 *install\_root* は、Linux システム、UNIX システム、または Windows システム上の IBM Business Process Manager インストール済み環境のロケーションを表します。

3. 以下のいずれかのコマンドを実行して、コンソールを開始します。

- **Linux** **UNIX** *./firststeps.sh*

- **Windows** firststeps.bat

ファースト・パス:

**Windows** Windows プラットフォームで汎用バージョンのコンソールを開始することもできます。そのためには、「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM」 > 「BPM Standard 7.5」 > 「ファースト・ステップ」をクリックします。

